
東方奇人伝～三人の変人が幻想入り～

上海ニート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方奇人伝〜三人の変人が幻想入り〜

【Nコード】

N22010

【作者名】

上海二一ト

【あらすじ】

平凡に過ごす高校生達……その中でも変態に限りなく近い三人がいた。彼らは『通称：三バカ』高校の中でも群を抜く奇人変人だ。そんな彼らは夏休み初日から現代の博麗神社を見学する為に計画なして森へ突入。そこで偶然、落ちた井戸から幻想入りを果たしてしまった。変人と変態による数奇な運命をたどる少年たちのコミカルストーリーが今始まる！「さあ、始めよう！ロリータ狩りを！」「五月蠅いぞ、このペド野郎！」「本作品は下ネタ満載の上、字の分崩壊しております。主に台詞が多めとなっておりますのでそれが

生理的に受け付けない方はご遠慮ください。

変人達が幻想入り（前書き）

大変キャラ崩れが多い小説になっておりますので温かい目で見てくだ
さい。

それが生理的に不可能な人は止めた方が良いでしょう

変人達が幻想入り

他愛もない外の世界、それを拒むように存在する幻想の地

誰もかれもが入り乱れ……自由を欲する者こそ見つけることが出来ない樂園。

もし、もしもだ……踏み込む事が出来たなら汝は何を欲すだろうか？

b y 誰かの日記より

- - - - -

「嗚呼、暇だから博麗神社はくれいじんじやを探しに行こう！」

と少年が高々に宣言する。

彼の名は千里志々雄せんりししお…通称三バカの中で一番年下の高校一年。少しだけ長めな髪の毛を持っており稀に女の子と間違われる。ちなみに警察が憎い。理由、性別を間違われたから。愛称はシオである。

「ん？ いんじゃないの…暇だし」

だれ気味の雰囲気^{フレイム}が漏れ出しているやる気のないツンツン頭が目立つ。

この少年は三バカの中で年長の高校三年長沢誠輝^{ながさわまさき}。特に目立つ事も無くひっそりとしているが行動力は計り知れない。一度、徒歩で三つぐらい県を渡り歩いた。刀剣オタク。

「よし！ 映姫様に会いに逝こうぜ！！！！ついでにロリも発掘じゃ！！！！」

このちよいと社会的に撲滅される分類に入る目つきの悪い少年は三バカ^{みなづきひろき}の中間に位置する高校二年生の水無月弘樹。生粋のロリコンである。ミリタリーオタク……但し自分の好きな部類しか知らない。

三人は夏休みに入ったばかりでやることがない。宿題とか9月からが本番だよなとかいう人種である。

「で、どうするんだ？目星とか付いているのか？」

誠輝がシオに向かって如何にもだるそうに聞く。するとシオは影のある含み笑いを浮かべ……

「ないぜ！」

堂々と断言した。これだけ見るならただのハードボイルドである。

「……だろっな、弘樹……殺れ」

「ラジャ！二十六年式拳銃の性能を思い知れ！」

二十六年式拳銃とは、日本陸軍が1893年（明治26年）に制式とした国産回転式拳銃であり、日本で最初に無煙火薬を採用した拳銃でもある。詳しくはウィキペディアを参照してもらいたい。

不敵な笑みをこぼすシオに向かって弘樹は何の躊躇もなく引き金を引く。ダブルアクションなので問題なく顔面に専用のBB弾が炸裂。

「痛っ！？でも気持ちいい！！！」

「駄目だこいつ……速くなんとかしないと！！！」

余りに残念な反応に誠輝と弘樹は同時に突っ込むが当本人のシオは悦に入った顔で倒れている。

「じゃあない………適当に森で遭難すればよくねえか？」

「逆転の発想だな………よし、まずは食料としても幻想入りしてしまつたらという過程を作り荷造りだああああ！！！！待っているよ！俺のロリっ子たちよ！！！！テンション上げてきたああああ！！！！」

喧しい奇声を上げた弘樹が真っ先にその場から消えうせる。うんざりした誠輝はシオの意識を現世に戻し荷造りするように言付ける。

「あゝ、そういえば秘蔵のコレクションの中に真剣があつたな」

「何故あるし！？」

「まあ、祖父ちゃん家からちよいと拝借」

「うえ……ちょい悪だと！俺のキャラと被るぜ！」

「喧しい、ちょい悪というか明らかな盗難ものだぞ……自分で言うのもなんだがな」

上記の様に誠輝たちは会話し終えた後、一時解散した。

数分後、三人は再び同じ場所へと集まった。

「よし、先ずは言いたい事がある……弘樹、ポケットに何を入れてきた」

「勿論、生活質需品だ！ほら、ニーソにニーソにニーソだ！」

弘樹のスボンの中から色とりどりのニーソックスがあふれ出る。

「……必要ないか？」

「いや、古来よりニーソは……うんたらかんたら（以下略）」

永遠とニーソについての熱弁を開始する弘樹。呆れた誠輝はスルースキルを発動。

「はい、次……シオ、お前はまともだと……思っ
てない」

「何がだ？ハードボイルドだろ！」

「いや、幻想郷にはガイ○メモリーはいらんだろ」

「何を言っているんだ！幻想郷が俺を呼んでるんだぜ！」

「喧しい」

二人の点検を終えた誠輝はアホ共の荷物を確認していた。

荷物内容

弘樹

- ・ S & a m p ; W M 1 9 コンバットマグナム
- ・ 二十六年式拳銃
- ・ コルト・パイソン（四インチモデル）
- ・ コルト・シングルアクション・アーミー
- ・ 弾薬（というかBB弾）
- ・ ニーソがイッパイ、夢いっぱい

志々雄

- ・ガイ○メモリーfullset
- ・ハードボイルドな帽子（某探偵帽子）
- ・食料、飲料
- ・携帯
- ・18禁同人誌複数

「お前ら馬鹿だろ？」

「「いやいや、真面目だけど？」」

シオと弘樹は同時にリアクションを取る。動きが見事にシンクロしていたのは長年の付き合いがあるからだろう。

「全く、もう少し役立つ物を持ってこいよ」

「いや、お前も人の事言えないだろうが！」

「何だと！どこがだ言ってみろや！」

心外だとばかりに誠輝は弘樹に食ってかかる。

ちなみに誠輝の荷物はというと

誠輝

- ・ 虎徹（刀）
- ・ 青龍偃月刀（模造刀）
- ・ カラドボルグ（レプリカ）
- ・ 食料、飲料
- ・ 改造されたコート
- ・ 砥石
- ・ その他小武器、及び投擲武器

という殺傷物だったりする。

「ふつ、ちなみに虎徹だけは真剣だ。ジジイの秘蔵コレクションから頂いた物だ……それに俺は砥石を使う事が出来るぞ研ぎ師までとは言わないがそこそこ砥げる」

「逮捕！日本の平和の為に！」

「何で！？どうせなら弘樹を射殺した方が良くないか？人類の為に」

「俺の扱いが酷くないか？」

「「まあ、自業自得だな……このペド野郎！」」

「ペドじゃない、ロリコンだ！！ロリを舐めるなこの野郎ども！！やろうと思えばな援軍を全国から大量に呼べるんだぞ！！」

「そんなロリータ主義社会に俺たちが絶望した！！」

こんな愉快的コントをしつつも三人は適当な道を進み始め……見事にも一時間で遭難した。

「何て事だ……本気で遭難した」

「そうなんです……てか？」

「弘樹、ナンセンスなギャクだな……ハードボイルドポイント略してHBPが-20だな」

「何だよ、そのポイントは……」

弘樹達の簡略思考もだが誠輝は非常に山が厄介だと知っている。元々、山育ちである誠輝は兎も角、ニートまがいな生活をしている二人は絶対に死亡フラグしか立っていないと確認。

「よし、此处は安全確保と休める場所を」

「おつ、神社を発見!？」

「何っ!ロリ神社か!？」

「ちょ、お前ら待てや!!!」

そんな神社は存在しないと弘樹に教えたかったがそれより先に二人は目と鼻の先にある神社に向かって走って行った。

「畜生……」

面倒だと言いたげな誠輝は重い身体を引きずりながら志々雄と弘樹の後を追った。

「来たよ……来ましたよ!!!何か博麗神社に近い形だ!!!」

高らかに志々雄が叫ぶ。それに続いて弘樹が近くの井戸を探し当てる。

「ハードボイルドH B隊長!古ぼけた井戸を発見いたしました!」

「おお、良くやった。ロリペド二等兵!早速、検索だ!」

テンションがハイに達した二人を止めることなく誠輝はその辺をうろつろしていた。正直な話めんどくさかったからだ。

「確かに博麗神社に似た作りだな。てか、神社自体ぼやけて見えにくいかな」

もしも日が落ちるなら寢床を確保しないといけないという理由で誠輝は境内が使えるか拝見した。

結果、激しく動かなければ大丈夫だった。時折、床が軋むがそこまですんではいなかったらしく一晩ぐらいなら大丈夫だろうと推測を立てた。

「うおっ！？井戸が大破！」

井戸を調べていた弘樹の付近が陥没。

「待てゐ！させるか！ハードボイルドな俺は仲間を見捨てないぜ！」
手を伸ばして弘樹を掴む志々雄。

「何やってんだ……はあ、助けるのもめんどい」

見放して座り込む誠輝。

「「うわ！？落ちるってこれ！」」

無駄にシンクロ率が高い二人を差し置いて誠輝は井戸をガン見していた。型は古い方で所々が朽ちていた。中を覗き込むと真っ暗で何も見えなかった。

「もう駄目だ！……誠輝も道連れだ！」

そっつい、志々雄が空いている片手で誠輝の腕をつかむ。

「やめろ、H A N A S E !」

「「だが断る！」」

「こっいつ時だけ無駄なシンクロを見せてくれるなよ」

バキ

井戸が崩壊した音がした。

結果……

「「「バーオオオオオオオ」」」

三人とも仲良く井戸の中に落ちて逝った。

くぱあ

（んっ？今一瞬、何か変な感覚が……それより下は水か！）

誠輝はとっさに改造コートに入っている秘密ワイヤーを取りだす。
スパイ映画の影響で強度なワイヤーと鍵爪を組み合わせた物だ。

二本のワイヤーが空を切り裂き井戸の外まで到達する。

「よし！引つ掛かった、で無事か？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「もーまんだい
無問題」

「何故、中国語？」

何はともあれ誠輝たちは井戸から脱出。

問題という問題はなかった……一つの事を除いては

「あん？風景が変わってないか？さっきより見晴らしが良くなってきてやるし」

「あー、確かに……だが、ハードボイルドな俺は気にしない！」

「いや、気にしろよ。神社の方が古びた感じはあるが内装が明らかに誰かが住んでいると言わんばかりに生活している痕があるぞ」

「誰？アンタ達」

三人が井戸から脱出して右往左往していると後ろから声がかかった。振り返るとそこには白と赤の巫女服を着た少女が箒を持って立っていた。

腋の露出度が高いのは本人の趣味なのか作り手の思考なのかは分からないが中々クールビズである。

そして例の如く停止する誠輝、志々雄、弘樹。

「はっ、ちょっとすみません。話し合いをしたいんで少し時間をください」

「別に良いけど……貴方達は服装から見て外人よね？」

「そういう事になりますね」

誠輝が我に振り返り社交的な態度で少女をいなし固まっている二人を少し離れた所まで運ぶ。

「おい、幻想入りしてんじゃねえか！」

「マジかよ……本当に幻想郷が俺を呼んでいたのか！」

「よし、今すぐロリを探しに行ってくる」

「待て、まずは情報収集からだ……冷静に行くぞ、お前ら」

「「おう！」」

こうして誠輝、志々雄、弘樹は幻想入りを果たしたのだった。

変人達が幻想入り（後書き）

全てが崩壊している

b y 誠輝

幻想郷の中で一番のハードボイルドは俺DA！

b y 志々雄^{シオ}

ロリとニートにハマるこの頃の俺

b y ペド野郎

簡易プロフィール（前書き）

誠輝

「簡単な自己紹介だ。ちなみに東方キャラもあるが原作破壊（その原作をぶち殺す）が入っているかもしれないがそれが気に入らないなら見ない方がいい」

弘樹

「そうして読者が遠のいて行くのだろう」

志々雄（次回からシオ）

「そうして孤立していくのだろう」

上海二一ト

「不吉な事言わないでよ」

簡易プロフィール

ながさわまさき
長沢誠輝

【年齢】

十七歳

【特技】

居合切り、亀甲縛り、ツツコミ

【趣味】

SMプレイ、刀狩り（主にジジイから）、刃物を研ぐ事

【人より優れている所】

腕力及び脚力、刃物を振るう事

【性癖】

鬼畜

【適切な解説】

主に対人戦に向いている。が、別に剣道をやっている訳ではないので闘った事はない。ただ、シオを何度か模造刀でフルぼっこにした事がある。ジジイが子供のころより誠輝に刀剣の話しを長々と聞かせた結果が現在の駄目人間というか殺人者予備軍を作りだした。基本的にやる気がないが料理が好き（食べる専門で）でいかなる時でも食料を求める傾向が垣間見える。普段は優しい？が怒ると怖い。割とツツコミ役

みなづきひろき
水無月弘樹

【年齢】

十六歳

【特技】

少林寺（有段者）、射撃

【趣味】

ミリタリー、ロリータ関係

【人より優れている所】

格闘が秀でている、射撃が得意、ロリータに関しての知識と行動力が人間を超えた

【性癖】

ロリータ

【適切な解説】

格闘もでき中距離射撃も得意とする中間管理職型。対人戦では得意の少林寺拳法を使う。基本はぬらりくらりと一人歩きするタイプだが面倒見がいい半面を持つ。学力は余り期待できないが理数には強い。テンションが上がり過ぎると言語が乏しくなるのが勉強不足の表れなのかもしれない。逆にそれ以外なら何でも率先して取り組みやりとおすまで諦めない。何故かロリ形態の相手には無敵を誇る『対ロリモード』というスキルが発動し異常な程の身体能力と生命力を維持できる。これを通称：バーストモード（主に鼻血が）といい発動している間だけ鼻血が流れ続ける。ロリをゲットするか血が限界まで流れるかで解除される。根っからの対ロリ用兵器なのだ。

千里志々雄 せんりししお

【年齢】

十五歳

【特技】

ハードボイルド的発言、料理、どんなに痛めつけられても気絶しない事

【趣味】

萌え画検索、同人誌収集、ハードボイルドになる為の修行、痛みを快楽に結び付ける事

【人より優れている所】

料理（三ツ星シェフ）、我慢強さ

【性癖】

責められること（ドM）

【適切な解説】

常に人の盾になる趣向を持つ。知り合いからは大抵壁にされダメー
ジを受ける役目を背負っている。自分自身の性癖が危ういのでダメ
ージではなく回復していると見てとれる。幻想入りしたら先ずは最
初に輝夜に会いに行つて椅子にしてもらおうと考えている。常に周
りを見て統率者としての意味を果たそうとしている。料理が得意な
のはやらなければ殺られる場所で過ごしたから。人間適応能力が必
要不可欠。ハードボイルドな人物に憧れて自らもそんな存在になろ
うと日々努力（性癖の場面は省く）。

・東方projectオリジナル・

はくわいれいむ
博麗霊夢

【年齢】

十代後半〜二十代前半だと思われる

【能力】

空を飛ぶ程度の能力

【特技】

妖怪退治

【趣味】

縁側でお茶をすすする事

【人より優れている所】

霊力、体術、妖術

【性癖】

不明（腋じゃないかと作者は語る）

【適切な解説】

常に冷静で博麗の名に傷がつかない戦いっぷりをする巫女。日常ではほんのりとした感じを出しているがいざ、異変でも起きれば（但し、自分に害があるモノだけ）妖怪を退治に駆けつける。冷静に判

断を行い一人で戦うタイプである為に若干酷い印象がある。しかし、近年親しい間柄が増えた為に若干緩和している。何時もは神社の境内を掃除したり社内では昼寝をしたりしている。

簡易プロフィール（後書き）

霊夢の設定はwikiやニコニコ大百科から引用して作者が少々捻った感じになっております。

年齢については公式設定があると聞きますが良く分らないので曖昧にします。

その辺は御象像にお任せします。

誠輝とシオは談話でペド野郎は……ロリ探し？（前書き）

予想以上に食い付きがあつた為に爆走させる気満々です

誠輝とシオは談話でペド野郎は……ロリ探し？

誠輝 side

俺たちは幻想入りした経緯を東方 project の看板キャラである博麗霊夢に話し一晩泊めてもらう事になった。最初は男三人が止まるという事に霊夢は抵抗を持っていたがシオが料理上手な事と俺の賽銭を与えた事により態度が急変した。

ちなみに弘樹は危険人物だが自分が範囲外だと断定するや否や『まあいいわ』の一言で受け入れられた。

まああれだぞ？弘樹は確かにペドでニーソ好きでミリタリーオタクだが良い所もあるぞ……多分だが。

基本やるべき事はやるからな……後、性癖を除けば保育士に向いていると思う。

ただ、目つき悪いので子供が怖がるがな、但し夜に出会えば大人でも気絶するほどのレベル。

「シオ、どうだ出来たか？こっちは釜の用意は出来たぞ」

「おう、流石はベストオブ火の神……一級薪係の称号は伊達ではないな」

「何その有り難迷惑な称号……まあ、実際薪の扱いと火のおこし方は群を抜いて良かったのは認めるよ」

「おい、米が研げたぞ！」

「おつ、流石は雑用残飯係。仕事が速いな」

「それこそ、不名誉すぎるわ……！」

そんな会話をしながら俺たちは博麗神社の台所で夕飯を作っていた。

いや、霊夢さんには一晩泊めてもらうのだけど流石に夕飯は自分たちで作る事にしました。

ちなみに霊夢には俺が持ってきたカップラーメンを贈呈。現在、すすってらっしゃる。

でも、驚いたな。カップメンを渡した時に何も知らない霊夢がカップメンの容器に直接お湯をかけるというハプニングを起こしたのは……その後はちゃんと補足事項を教えどうにか解決。

「楽しそうね……ずず、アンタ達って仲良し三人組とかいう奴なの？ずず」

「ないない……どっちかと言うと悪友バカ三人組だな」

「そうそう……俺らは同じ地域で産まれて同じ学校で育って……同じモノに興味を持って女の子に関心意欲があつて」

「シオ、それぐらいにしろ。霊夢が引いている、全く……話すなら性癖の事ぐらいにしろよ」

「誠輝、アンタも常識人に見えて変態ね」

「ば、バカな！弘樹は兎も角、俺が変態だと！？あり得る！」

「あり得るんかい！！それと俺の扱いが酷過ぎるぞ、コラッ！！」

「「喧しい、このペド野郎！！！！」」

「ペドじゃない！ロリだ！」

「はあ、楽しそうで、ずず、何よりね。ずず、でも気をつけなさいよ、妖怪はあんまり人間には優しくないんだから……あつ、お変わり」

おいおい、霊夢さんよい。台詞途中にすする音が入りまくって真面目な話に聞こえない上にお代わりを要求されたらもう笑い話ですつて。

「お湯はあるから三分間だけ待ってやれ！」

急須でカップメンにお湯を注いでやると霊夢は少々ワクワクしながらカウントを始めていた。何か何時もはクールキャラに見えるので不覚にも萌えた。

「おい、ムスカがいるぞ！」

「目があ目があ……」

バカ二人が何かやっているがお構いなしに作業を続ける。

それから三十分後

「よしやああああ！！俺達特性【男による漢の為のオトコの娘料理】ロマンは背中で語れ！」が出来たぜ！！！！」

シオが大声で宣言。何を作ったのか今一理解できないので説明する。
ご飯をトマトベースで混ぜ込みその上に焼いた解き卵をかぶせる
代物……つまりオムライスだ。

てか、何故かシオがケチャップを持って来ていて助かった。

「美味しそうね……どうやって作るのこのえーと」

「オムライスね、シオが面倒な名前を付けるから霊夢が混乱したぞ」

「すまそ、これに関しては譲れないモノがあるのだからな」

「そんなプライド今すぐ霧の湖に捨てて来い」

「よし任せろ！！！！」

「何でそこで弘樹が出て行く！」

「だって自称最強な？がいるじゃん」

「あのペドが」

明るい食卓から弘樹は暗い夜道へと走り出し俺たちが止める間もなくその後ろ姿は消えって行った。

はい、ロリータペドフィリアコンプレックスさんがログアウトしました。

「迎えにいかないでいいの？夜道は妖怪の巣窟といってもいいのよ」

「いんじゃない？この辺りにいるのって雑魚の毛玉とルーミアぐらいだろ？」

「ええ、よく知ってるわね。外人人は何故か私たちの事について詳しいのよね」

「君たちは例外なく有名だからね」

「ふーん、まあいいけど弘樹を連れ戻しにいかないでいいのね？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

「ですよー弘樹は大丈夫だぜ。あいつは容姿が幼い敵に対しては無敵のスキルを発動するから」

そう弘樹はロリコン×ペド野郎だからなのか昔から幼女に対してだ
けめっぽう強い。

昔、合法ロリの格闘姉さんと弘樹が戦ったが圧勝した。

何故か鼻血を出しながら『俺に勝つなら後、三年は若くなつて来い』
と公式イラスト風に真面目な顔で宣言したが鼻血を吹きだしながら
カッコヨイが良く分らん台詞を吐いた事で俺の腹筋が崩壊した。

「じゃあ、これ貰っていい？」

「弘樹のオムライスか、良いんじゃない」

「そうだが、寧ろその方がそのオムライスも悦ぶ」

「OH、お前がいうと変な方向に聞こえるぞ、シオ」

「確かに……てか、アンタら直ぐに馴染んだわね」

「まあな、それが俺らの得意分野だからな」

「そうそう、他人の心に罪悪感も考えもなしに土足で踏み荒らしに
行くから俺ら」

シオよ、もうちょっとオブラートに包もうか。

そんなツツコミは放棄したかな。

正直、どうでもいい。

「あ、美味しい」

「一段と腕を上げたな、シオ」

「まあな、ハードボイルドたる者、料理ぐらいこなせなくて何がH
Bか！」

「熱いな……夏の気温の所為か？」

「多分、もっと身近にいる奴の所為だと私は思っただけど」

そんな会話をしながら俺たちは一夜を過ごした。

勿論、通常的な意味合いでだ。決して性的な意味ではない。

それから翌朝

「ふあ、遅くまで起き過ぎてちゃぶ台で寝ることになるとは思わなかった」

「zzzz」

「ぐう……変身だ、サ○クロン……ジョ○カー……マキシマ○ドラ
イブ」

二人とも良く寝ているな。さて、シオは変身しているから寝かせとくか……霊夢はこの露出度の高さは異常だな。

という訳で霊夢に近くにあった毛布をかけてやる。

「さあて……今日は人里に情報収集に出かけるか」

余談だが文々。新聞に『怪奇！霧の湖が真つ赤に染まる！』という題名が出ていたのだが、それが何を意味したのかは俺たちだけでは分かった。

誠輝とシオは談話でペド野郎は……ロリ探し？（後書き）

誠輝

「今日は絶好のウォーキング日和だ」

シオ

「ぐう……風〇が俺を呼んでいる」

弘樹

「ただいま留守にしております。御用の方はぴーとなった後にロリボイスで何か言ってください」

知らなかった……幼女がこんなにも強いなんて（前書き）

レビューが来て感激、コメントが来て感動、キャラ応募に投稿が来て発狂

【澄田 康美】さんに感謝！

『願望』

これからも読者の腹筋を壊したい

知らなかった……幼女がこんなにも強いなんて

誠輝 side

「貴方達はとって食べても良い人類？」

「くっ、まさか幻想入りした二日目からこんなシリアスシーンに出くわすとはな」

「そうだな、これは変身するしかないな」

「バカだな、夢なら寝てみるよ」

「違うぜ！俺はガイ○メモリをこのベルトに装着すると変身できるんだ！（テンション的な意味で）」

腰についている某変身ベルトを指す。

「だったらテンションあげてこの、西洋風幼女を討伐しろ！」

「無理DA！」

「帰れ！！！！塵に帰ってしまえ！」

俺たちの目の前にいるのは金髪で小柄な少女。赤いリボンと黒のワンピースの幼女……つまりだ、宵闇の妖怪ルーミアだ。

まさか、こんな事になるとは……こんな状況になるまでに逃げればよかった。

それに関しては時間を少し遡る必要がある。

- - - - -回想

「なあ、朝飯も食べた事だし……風○じゃない、人里に下りてみないか？」

「そうだな、俺は香霖堂にお金を両替してもらわないとな」

「道は分かるの？分からないなら連れて行ってあげましょうか？」

「うーん、有り難いが……道は自分たちの手で切り開きたいんだ」

「そうそう、それではなくてはハードボイルドは務まらないぜ！」

「そう、危ないと感じたら即座に逃げるのよ。妖怪は人間をとって食うのが当たり前だと思ってるんだから」

「分かってますぜ、お頭！」

「誰がお頭よ！！もう、いいから行って来なさい！」

こうして俺たちは人里（慧音がいる）に向かおうと思ったんだが……十中八九、遭難した訳だ。

そして……黒い球体と対面した。

「げっ、あれルーミアじゃないか？」

「ああ、弘樹が愛してやまないロリキャラの」

「確かにそうだが、実際は普通の人間ぐらい楽に抹殺する程度の実力があるぞ。確か、腕力は見た目以上と表記されていたな」

「どうする？逃げるのも策の内だと俺の師は言っていた」

「誰だよ、その師はよ」

「左 翔○郎だが？」

「架空人物だろうが……まあいい、その点は予想済みだ。それより逃げるぞ」

「人間の匂いだ、お腹すいてたから丁度いい」

「「やべえ、シクツた（ミスをしたという意味）！」」

――――回想終了

「さて、どうする？ルーミアが姿を現したて事は食事する気満々だぜ」

「そうだな、俺には後二つの変身を残してあるのだよ！」

「話を通じていない上にフオーザ様はお帰りください」

「どうするの？待ってあげてもいいけど速くしないと食べちゃうぞ」

「ふふ、宵闇の妖怪よ。シオだけは助けてくれ」

俺がそう提案するとシオが驚いた。

「なつ、誠輝！一体何を言っているんだ！俺たちは産まれは違えど死ぬ時は同じと誓った仲じゃないか！？」

「誰がそんな三国志バリの誓いを立てたよ。二人で逃げるのは無理だ、だったら誰かが囷になればいいだけさ。サクリファイスとは言った物だな」

「別にいいよ。お兄さん食べたらお腹いっぱいになると思うし……それに一人で絶望してくれた方が面白いしね」

何て残酷な告知をしてくれるんだよ、この妖怪は……しかし忘れてはいないか？俺たちはギャクをやり到此処『幻想郷』へ来たんじゃない、しかしルーミアやその他大勢の妖怪に食されに來た訳でもない。

「シオ、俺たちが幻想郷に来てやりたかった事を現実にする為に前は先に行け……俺は後から追いつく」

「お、お前て奴は！分かった、俺たちの願望『輝夜の椅子』になる為に俺は一足先に人里にいるから誠輝も直ぐに来るんだぞ！」

そう言ってシオはルーミアの横をすり抜けあつという間に姿が見れなくなった。

そして、俺はただ一つ言いたかった。

『それはお前の願望だろうが!!!』

「もしかしてお兄さんたち……俗にいう変態だったの？」

「ち、違うぞ！ルーミア！あいつは兎も角、俺は変態ではない！」

ぽと

あつ？ロープが落ちた。

「それロープだね？何でそんな物持っているの？」

「えっ？縛る為だろ？鞭とロープは生活必需品だろ」

「やっぱり変態だ!!!」

「ちげえよ！しかも、いつの間にかあれだけ緊迫した場面が壊れる！」

「お、襲われる」

「いや、襲わないからな!!!勘違いしたまま逃げようとするなああああ!!!!!!」

それから俺はルーミアの誤解を解く為に彼女を追いかけて回した。ハッキリ言ってこんな終わり方は嫌だ。

「はあはあ、やっと捕まえた」

「捕まった……」

俺はルーミアを捕まえる為に創意工夫を行いどうにか捕獲に成功。
俺の所持しているロープはワイヤーを何重にも絡ませた物でルーミアぐらいの妖怪なら千切る事何処るか解く事も出来ない。

という訳で亀甲縛りをしているのだが……中々えろ……げふんげふん、いつの間にか頭の中がペド野郎に洗脳されつつあったのか、俺は……ロリは範囲外……これ鉄則。

「いやゝ！人間に犯される！」

「ちょ、かなり危険なワードを飛ばすな！俺が死ぬ！主に社会的な意味で！」

じたばた動くルーミアの足と腕に更に縄で縛り猿ぐつわを噛ませる。

これで動く事も喋る事も出来まい！

「さてと……これからどう洗脳するか」

俺「変態の定義を覆すにはどうすればいい？やっぱり調教するべきか？煙草を押し付けたり蝋燭の蝋を垂らせたり……うーん、どうすればいいのかわからないな。」

「ああ……！此処にも変態が！」

「あんっ！誰が変態だ！このアルティメット？が！」

「誰が？よ！あたいは幻想郷で最強のチルノよ！」

「喧しい、それで最強が何の用だ。俺はルーミアをどう洗脳するかを考えているんだ」

「やっぱりあんたも昨日の変態と同じくロリコンね！」

ぶちっ

俺の額で何かが限界を超えてぶちきれた。

ロリコン＝ペド野郎＝弘樹と同レベルとインプットされている俺の脳内で俺がそれと同じと考えられる時点で間違いなのだ。これを分からさなければいけないのだよおおおお……！！

「だ、誰がああああロリコンでペド野郎で！！！！幼女しか愛せない論外鬼畜人格者だとおおお！！！！」

「えっ、そこまでは言ってない」

「喧しい！！！！貴様、脳と身体が幼女だから我慢していたが今のだけは許さん！撤回しろ！俺と弘樹が同じ人種だと！ふざけるのも体外にしやがれ！！！！」

「ひっ！だ、だって」

「だっても糞もねえわ！！！！てか、弘樹の野郎は何処に行った！！」

そこで少し俺は冷静さを取り戻す。此処で弘樹を呼んで比べてもらえば俺と弘樹の違いが分かるのではというナイスアイデアを思いついたのである。

ならば、やるしかないだろう。

「ああ！？ロリが裸で気絶してる！！！！」

傍から見れば大変、変態な叫びであるが山のやまびこ効果もあるだろうし……奴は絶対に来てくれる。俺はそう信じている。奴のロリに対しての情熱を……バカ正直な程強い欲求をな！

すると異様な雰囲気と共に奴はやって来た。

但し、地面から飛び出てきたがな。

「ブルアアアアアアア！！！！！」

「ば、バア力な！地面から飛び出てくるだとおおお！！！！誰も予想だにしない場所から登場とはよくやるな！」

「わああああ！！！！昨日の大変な変態だああああ」

よし、予想外な登場シーンだったがこれで俺がこいつと同じじゃない事ぐらいは証明できたな。

「うわあああ、変態が二人に増えた！！！！」

「嘘お！？これを見てもまだ俺を変態と申すか！どこで何を間違った俺！」

「あゝ、よく分らない……と思ったがルーミアが亀甲縛りで縛られている所を見ると一発で変態と認識されるぞ」

「そこか！？……くそお、敵を捕まえた時には亀甲縛りだと習った

のに何故駄目だった」

「それ何処の常識？」

「えっ？エロゲーから抜粋したんだが」

「アウトおおお……！それアウト……！」

「いまだ！ルーミアは返してもらおう！次会ったら倒してやるんだから！」

「ぎゃああああ、変態と認識されたまま逃げられたああ……！」

俺は泣いた。

久々に泣いた。

自分が変態である事に絶望しながら泣いた。

もういつそ変態でいいかと思いつながら泣いた。

するとそつと弘樹が手をさしのばした。

「ふつ、変態である事を卑下するな。それが本当の自分であるなら兎に角、突っ走れよ！限界までな！」

「弘樹……」

お前の終着点は明らかに刑務所だと思うよ。

「てか、お前と一緒にするな。まだ、俺は縛るのが好きな変人レベルだ。だが、お前は歩く犯罪者レベルだから」

「あれ？俺の扱い酷くない？」

「いや、打倒だろ。しかし、不味いな。次からはツツコミに磨きをかけるか……さっさと行くぞ」

「お前の切り替えの速さには驚かされるよ」

「喧しい、面倒な事を考えるのがだるいだけだ」

この後、無事に人里へ着きシオとの再会を果たした。

知らなかった……幼女がこんなにも強いなんて（後書き）

引き続き誠輝 side ですがある程度更新していく間に三人の主人公の視点が分岐していきます。

て言うか何なんだこの回は！自分でも予想外すぎる方向へ向いたぞ！

三人の心は何時でも一つ……な訳がない（前書き）

上海ニート

「やっと……やっとテストが明日で終わる。
この苦しみから解放されるんだね……」

誠輝

「で？明日の勉強は？」

上海ニート

「えっ？今日はモンハン3rdの体験版配布日だからそれ終わった
らね」

誠輝

「駄目人間が」

上海ニート

「喧しい……明日はテスト終了後のカラオケボックスにも行くから
ストレス発散するぞ！」

三人の心は何時でも一つ……な訳がない

Outside

誠輝、志々雄、弘樹の三人はどうか人里において合流を果たした。

そう、合流するまでは良かったが……彼らは一人一人の自尊心と欲望に忠実と言う良い意味でも悪い意味でも飛び抜けた性能を持っていた。

「俺、迷いの竹林に行ってくるわ！ぐーやの椅子になるんだ！」

「おい！？シオ、自ら死亡フラグを立てるな！！！！少しは落ちつけ……て、もう見えない」

眼下から走りさるシオを呆れ気味で監視しながら誠輝は深いため息をついた。

「はあ、全く欲望に忠実な奴だ。弘樹はああいう風に勝手な行動は……既にいねえ！！！！！！」

隣にいる筈の弘樹に目をやるが忽然とその姿は消えていた。

「あの野郎ども！！！！」

人里で誠輝は一人絶叫した。

するとそこへ人里の警邏けいらをしている男が歩いてきた。

「あー、その少年。さっき、君と似た服装の目つき悪い少年が『俺はロリの為に生きる』とか言って走って行ってしまったんだけど大丈夫なのかい？」

「あつ、態々すみません。大丈夫ですよ……きっとね（あの野郎、帰ってきたら処刑だな）」

突っ込みたい気持ちを押し殺し誠輝は報告してくれた男に感謝してその場を離れた。

「うーむ、人里に来たら先ずは慧音先生を探す所だが……先に香霖堂に行くか」

そういうとそそくさと誠輝は人里から魔法の森方面へと移動する為に近くの人たちに話を聞きながら歩き始めた。

- - - - -

迷いの竹林

それはある意味で隠れ蓑、月からの追手を遮る様にその竹林は人々や妖怪を惑わす。

そんな中、無謀な少年が一人竹林を爆走していた。

「近い！近いぞ！！永遠亭は近いぜ、会えるかどうかは知らないが輝夜に会う為に俺は走る………おっ、こんな所に落とし穴があああ（エコー）」

無様にも落とし穴にはまった志々雄は頭から穴へと落ちていく。

ドシャ

「痛くないぜ！寧ろ快感！！さてと此処からどう抜け出そうかな……此処はハードボイルド的にそして尚且つ赤い帽子の髭の様に三角飛びで抜けだすしかない！解決法が分かったならば早速実行だ！行くぞ、ライダー変身！とう！！！」

一号ポーズの後、志々雄は壁に向かってジャンプ。

「ウシャアアア、ごはっ！？」

そしてそのまま壁に顔からめり込むという摩訶不思議な結果を出した。

幻想郷では常識は投げ捨てる物だという……その点については志々雄を含む残り二名も常識と言つかモラルの範疇はんちゆうを飛び越えている気がする。

「むぐむぐむぐ（あっ、やべえ……抜けねえわ）」

一所懸命に頭を抜こうとしていたが自力では抜けない状況下にあった。

状況だけ見ていれば滑稽であるが惜しくも誰もいないのでツッコみどころか反応すらない。

「あー、誰がいる？いるなら返事をして欲しいんだけど？」

志々雄のハマった落とし穴の上から女性の声が聞こえた。

志々雄は直ぐにそれに反応（どうやら女性の声に過剰反応するようだ）

「むぐむぐ……むっ……！！（おーい……俺だ結婚してくれ……！！）」

内容は兎も角、まともに発言出来ていない。

というかまともな会話をするつもりがないらしい。

「おつ、生きてる。今助けるから待ってて」

直ぐに声の主が穴の中に降りてきた。時代錯誤と言われそうなもんぺと白いシャツという微妙なニュアンス同士が合体した服装の女性。

ふじわらのもっ
藤原妹紅だ。

彼女はこうやって何度か竹林を徘徊しながら人里に害をなす妖怪を退治しているのである。

「はあー、助かった。恩にきるぜ、藤原妹紅であってるよな」

「ああ、あってるけど……あんた一体なんでこんな所で器用にも頭から埋まってたのさ」

「簡単さ、穴から出ようとして頑張ったらこうなった」

簡潔な説明であるが要点を着いている所が恐ろしい。

「まあいいわ、あんたはこれから何処に行くの？見た所、外人みたいだから永遠亭かしら？」

「まあ、そんな所さ。ふつ、これは借りにしとくぜ……じゃあな、もこたん！」

「もこたん！？それより、そっちには悪戯兎が仕掛けた罠が……」

「ごはっ！？た、タライだと……激痛が全身を駆け抜けて一気に快感に変わった！」

「あんた、真正の変態だったのね。で、どうでもいいけど永遠亭に行くなら送るわよ？どうせ、今から輝夜と一戦交えようと思っただから」

「マジか！？それじゃあ、これも借りにしとくぜ……」
「あー！！！！
また、落とし穴か！！！」

志々雄は再び穴に落ちた……が、先ほどの落とし穴とはレベルがけた外れに違い、御丁寧に最下層には竹槍が幾重にも設置されていた。

「やばっ！？間に合うか！不死【火の鳥 - 鳳翼天翔 -】」

妹紅の放った弾幕が竹槍に降り注ぐ。幾らかは焼き払われるが志々雄は運悪く無事な竹槍の方へと落下。

幾らドMで痛みはご褒美ですの志々雄だが致命傷を受ければ死んでしまっだろう。

だが、此処で少しだけ変化が訪れていた。

「うおおおおお！！！！目覚める！！！！自分の中の僅かな力よ！！！！」

そう切っ掛けがあればいいのだ。それさえ、あれば幻想はただの人間にも力を与えるだろう。
ファンタズム

「ガイ○メモリ！ヒートメ○ル！！！！砕け散れええええ！！！！」

気合と共に志々雄が竹槍を素手で真っ二つに割る。

「なっ！？竹槍を手刀で両断……本当にアンタ人間？」

「風○代行、ハードボイルドの志々雄とは俺の事だ！」

「聞いてない。アンタ、会話する機能が脳についてないんじゃないの！」

「そんな事ないさ！さあ、永遠亭を目指そうか！！！」

「だから、私が先導するから……て、聞いてない！」

「うおおおおおおおお、あふれ出てくる！この痛みと高揚感！
東方はピンクに萌えている！！！！！」

「駄目だ……止められない。厄介な外来人が来たわね」

妹紅は既に諦めたばかりに脱力して異様なオーラを纏った志々雄
の後について行く事にした。

- - - - -

「うおおお、ロリマンセイ！！！」

「この変態！！！！雪符【ダイヤモンドブリザード】」

「効かぬな！！！」

迷いの竹林と離れた地域では一人の変態と氷の妖精がバトルしてい
たかどうか

-
-
-
-
-
-
-

「んっ？気のせいか……変態が吠えた様な気がしたが、まあいいか。
さてそろそろ着くぞ」

はたまたもう一人は有意義に目的地に向かっていたりする。

三人の心は何時でも一つ……な訳がない（後書き）

とりあえず、妹紅は原作では女性よりの喋り方をするのでそつちにしようかなと思っただけ……どうにも違和感が……だがあえて原作に行って見る！

それとEXルーミアについて色々と考えております。

完全な二次ですが問題はほぼないと思います。

設定状況でしたら新月の時のみ変身、しかも長い時間は無理との事

……

実力はレミリアより若干上らしいですね……知らなかった、幼女が此処まで進化するとは！

人の妄想と想像って凄いですね。

誠輝

「今日も幻想郷は平和だな（主に俺の周り）」

志々雄

「うおおおおお、傷つけられるたびに俺は何度でも立ち上がる！地面に倒れ伏すことなどないのだ！」

弘樹

「見える！見えるぞ！縞ぱんか！」

ロリコン始動、流れ出す血潮

弘樹 side

「はあはあ、不味いぜ。こいつは不味すぎる」

俺はチルノと対峙していた。だが、途中で鼻血を出し過ぎた為か戦闘不能になりつつある。

「あ、あたいの勝ちね！！もう、動けないよね！」

「くそお……もっと血があれば……誰かレバーをくれ！！！」

てか、チルノさんの能力の所為で手足が凍って痛覚麻痺ってんだけど？どうしようか、このままじゃ凍傷になりかねん！

「唸れ、情熱！俺の中の潜在能力よ！ロリを……ロリを倒す為の力をくれえええ！！！！！」

俺は絶叫した。神に祈る！俺にどうかチルノを倒す為の血液をくれ
！！！！

そして同時に俺は知っていた。世界が無常だという事を……

「がくつ……」

そこで俺は息絶えたように倒れ伏した。

ああ、大好きなロリの目の前で倒れるなんて……この俺のプライ
ドが赦す訳がない！それなのに足が動かない、筋肉に力を入れよう
としても力が抜けていく。

くそっ！！！！持ってくれよ！俺の身体ああああ！！！！

「うおおおおおおおおお……げげげ、うおおおおおお
お！！！！」

途中せきこんだが俺は叫んだ。己の無力さに打ちひしがれて……立

てよ、立ってくれよ!!!

「うわわ!?!何か怖い!?!」

一心不乱にチルノが逃げ出した。どうしたんだろうか?でも誰かの殺気に気付いて逃げだしたのか?だとしたら此処にかなり強い奴が来る筈だ。駄目だ、俺は此処で死んでしまうのか!?!

- - - - -

Outside

【魔法の森 入口】

「んっ?今何か、厨二病患者が叫んだ様な……気のせいかな、この頃ツッコミやり過ぎた所為か遠くのボケすら受信しそうで怖いぜ」

悠々と香霖堂を訪れた誠輝は店主に会う為に扉に手をかけていた所、弘樹の心の叫びにシンクロしていた。

- - - - -

再び【霧の湖】

「あら？珍しい、人間が倒れてますわ」

紅魔館で働くメイド長、十六夜咲夜いむろさくやは弘樹の死体（？）を見つけて疑問符を浮かべていた。

「まだ、息はありそうですね。この血の量から見ると……妖怪に襲われたというのが妥当かしら？」

主に鼻から流れたのだがうつ伏せになっている為か咲夜は気付かない。次の瞬間、時が凍結する。

「上手く行けば、回復は見込めそう……手当をしましょうか」

瀟洒な従者は貧血で倒れている弘樹を運び出した。

- - - - -

【紅魔館・深夜】

「ねえ、咲夜。例の外来人は起きたのかしら？」

「はい、先ほど目を覚ましました。どうやら貧血だったようです、レバーが欲しいと言っていました」

紅魔館の主、レミリア「スカーレットは困惑していた。」

従者である十六夜咲夜が拾ってきた外来人の運命が見えない事が主な原因だ。

「でも、奇妙ですね。お嬢様の能力が効かない外来人がいるという

のわ」

「ええ、だから気になるの。意識がはつきりしているなら連れて来なさい」

「はい、少々お待ちください」

次の瞬間、咲夜はレミリアの目の前から消えうせた。時間を止めたのだろつ、何時もの事なのでレミリアは特に驚く事も無く玉座と類似する赤い椅子に腰かけていた。

ほんの少しだけ時間が経過する。時間として経過させるなら五分ほどである。

「ただいま、戻りました。彼は水無月弘樹。突然、幻想郷に落とされた外来人だそうです」

「そう、咲夜：下がってなさい。この人間と話があるの」

「分かりました」

すると咲夜は例の如く消える。残ったのはレミリアと眠そうな弘樹だけだ。

「眠そうだけど質問をするわ。貴方はどんな能力を持っている」

「……俺の能力？俺は普通の人間だ、そんな特殊スキルなんて持っていない。持っているとするとするなら……」

「するなら？」

「アンタみたいな、幼い容姿の相手には強いという事だけだ、何故か身体能力が向上する」

「ふーん（それだけで私の能力を封殺できる筈が……一体どういう外人人よ）」

小さな蝙蝠の羽をはたかせレミリアは弘樹の前に降り立った。

だが、弘樹は動揺しない。それどころか腕組みをして挑発的な笑みを浮かべる。

「面白そうね。今から私と勝負してみない？簡単な事よ、弾幕勝負は無理だから肉体戦……ハンデに私に一撃でも攻撃を当てれば勝ちにしてあげるわ」

「それはどうも……さて、始まるに当たっては礼を……」

すると弘樹は腰を折り綺麗に一礼すると拳を交差させ武道の構えを取る。

「へえ、中々礼儀正しい、外来人ね。結構、無法者が多い訳じゃないのね」

「ジャック・クリスピン曰く『人生を有意義に過ごす一番の武器は礼儀だ』だそうだから、俺はそれにしたがうね。まあ、理性がある内はの話だな」

「面白い！ならば、それに習い私も礼儀を尽くそう。私の名はレミア・スカーレット、二つの名は『永遠に幼き赤い月』さあ、行くわよ！」

赤い闘気を迸らせ、レミアは戦闘態勢に入る。

「ならば、俺も正式に名乗ろう。我が名は水無月弘樹、二つの名は『ロリータブレイカー幼女完全封殺』さあ、踊れ……夜の王よ！」

こうして弘樹は一对一で対峙する事になった。

- - - - -

時間は戻って【香霖堂・昼】

「ほう、これはどうやって使うんだい？」

「ああ、それはスタンドですね。暗い時に手元を光らせる……このタイプはコンセントを差し込んでこのボタンを押すだけですけど……電氣は通じてないなら利用する事はできません」

「そうか……これが動いている所を見たかったんだが」

「あつ、これは……ソーラーパネルじゃないか……霖之助さん、こいつを使えば電氣は発電できますので後は電氣をためる媒体が必要ですね」

「なるほど、そういう機械は河童が得意だと聞いたのだが」

「じゃあ、明日辺りにでも頼みに行ってみたいので……きゅうりのお土産を頼みます」

「これらが使えるのならお安い御用さ」

誠輝は香霖堂の店主である森近霖之助と話が合い、色々な漂流物の使い方を説明していた。

更に言うなら条件付きで香霖堂の定員になっていた。

「ふう、俺は今……リア充を満喫しているのではないのか」

ロリコン始動、流れ出す血潮（後書き）

あれ？弘樹が……まともに……見えないね、うん、目の錯覚だ。

今回は志々雄の出番はなし、次回は弘樹によるレミアアのカリスマブレイクをお楽しみに

何故か誠輝はリア充を開始し始める。一人だけ平和だ……だが、その平和に隠されているアブノーマルな趣味は何時か爆発させようと思います。

誠輝

「俺、今輝いている！」

志々雄

「何処だ！輝夜は何処にいる！俺だ！輝夜、結婚してくれ！」

弘樹

「てめーの敗因はたった一つだぜ……たったひとつのシンプルな答えだ。てめーは俺を萌えらせた……！」

世界は呼んだ！このロリコンを！！（前書き）

あらすじ

弘樹がレミアと耐久戦闘。
誠輝は幻想郷でリア充。

現在、主人公たちに補正がかかっておりより真面目な主人公ぽくなっております。

絶対にシリアスを壊すのが私の作品ですので少々お待ちください

世界は呼んだ！このロリコンを！！

「うおおおお！！！！」

「甘いわ！」

弘樹の鋭い突きがレミリアを襲うが小柄な体格を生かしたフットワークで交わされてしまう。

「ちっ、簡単には当たってくれないて事か！だからこそ、面白い！」

「中々やるじゃない」

異様なほどにくらいついてくる弘樹をレミリアは少しながらも感心しながら闘っていた。

人間は弱い種族である。主に一部の力を持っていない部類に入る者は捕食者に狩られるだけの立場である。

弘樹もそんな立場の人間なのだが……今回ばかりは優位に立てていた。

「ほっ、はっ、シャアアアア！！！！」

「遅い！隙だらけだわ！」

「ぐはっ！？」

カウンターを喰らった弘樹は面白いほどに吹き飛び、何度か地面にバウンドした後、壁にぶつかり停止する。

「ふはははは、やってくれるぜ！流石は上級妖怪だ！手加減されているのに戦闘不能まで追い込まれかけたぜ！」

「頭から凄い量の血が吹き出てるわよ？」

「痛いけど我慢は大事！」

頭から噴水のように出血する弘樹、最早戦闘不能でも可笑しくないだろうが彼は立っていた。

「俺は幻想郷のロリ達と戯れる為に膝をつく訳にはいかない！！！」

「動機が不純すぎる！！！」

「やる気だ！様はやる気と根性で乗り切る！まずはお前を倒してから俺は更なる高みを目指す！」

「そう！やってみなさい。そこまで言うのなら少し本気を出させて

貰うわ！【神槍 スピア・ザ・グングニル】」

レミリアの手に赤い槍が出現する。魔力で作ridされたそれは具体化をはじめ深紅の神槍となる。

「お得意の槍か……だが、俺は拳とこの愛銃でやってやるぜ！」

「たかが玩具の銃で吸血鬼を倒せると思うな！」

「どうだろうな！レミリア、アンタは今…世にも恐ろしいスイッチを押しちまったんだよ……！」

「ふん、それなら見せてみなさいよ！その恐ろしい物を……！」

「良いだろう……！見せてやる……！完全解放！【ロリータバースト】」

ブシュッ

弘樹の鼻からおびただしいぐらいの鼻血が噴き出した。

説明しよう、【ロリータバースト】とは…

弘樹の中にある少女もとい幼女に対しての情熱がアドレナリンを分

泌させ、身体の疲れを一時的な無くし更にマジカル幼女パワーで弘樹の戦闘能力が非常に上がるのだ。

流れる鼻血は忠誠心の証というメイド長もいるが彼は違う。

流れ出すのはただ自らの欲望を抑える為の枷だ。

この枷が外れる時、神すら脅かす存在となるだろう、勿論ロリ容姿限定で

「出血が増えただけじゃない！行くわよ！！！」

「ふんっ、遅いな。恐ろしいほどに鈍い……止まって見えるぞ吸血鬼！」

「ば、馬鹿な！私がただの人間に後れを取ったというの！」

「そっつこった。喰らっつけや！」

弘樹はレミアアのグングニルを回避すると中距離地帯から自分が改造したコルト・シングルアクション・アーミーが火を吹く。このシングルアクション・アーミーは観賞用に弘樹が買った現物であり薬莢に火薬を込めれば実物として使える。

が、弘樹はあえてそれをせずプラスチック弾を使用している。

「ぐっ、こんな物で倒れはしないわ！」

「そんな事は想定済みだ。喰らえ！」

「ぐふっ！？さつきとは比べ物にならない威力……」

「まだまだ！！早撃ちには自信があるぜ！」

トリガーを引いたままハンマーを何度も下ろす弘樹。その度にプラスチック弾頭が跳弾となりレミリアに襲いかかる。

弾が切れたので薬莖を全て排出し弘樹はリボルバーを下段に構えると銃弾を用意しながら叫ぶ。

「はははは！！俺のリロードはレヴオリューションだ！！！」

「くっ（見余った。ただの外来人だと思ってたけどまさかこれほどの力を持っていたなんて）」

「倒される準備はすんだか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」

軽い挑発、当の本人は真面目に言っているが鼻血が垂れ流れており示しがつかない。

「舐めるな人間！」

次の瞬間、赤い閃光がレミリアの腕から放たれた。

- - - - -

【紅魔館・エントランス】

「本当に此処まで赤いとはな。しかし、此処までタイミングがバツトな展開とかがありかい？」

「お嬢様は現在、水無月様と戦闘中故に貴方にはお帰り頂きたいのです」

「そももいかないのよ。あれは少々危険な人種でな……ストッパーがいるのよ（あいつ、おぜう様に発情してなければいいが）」

「ならば、力づくでも……と言う事になりますか？（やはり、あの外来人……かなりの力の持ち主ね）」

「めんどくせえ……（だが、幻想郷の平和の為に弘樹を止めないとな）」

誠輝はやる気のない瞳のまま、腰のカラドボルグを引き抜く。勿論、レプリカなので刃引きが施されている。

対してメイド長の咲夜さんは銀のナイフを幾つか持ち出し構える。

「やれやれ……だるい」

「お疲れの様ですので帰るのをオススメしますが？」

「そうしたいがペド野郎を回収する必要があるんでね」

「そうですね……では、些か残念ですが退場してもらいます」

繰り出されるナイフと弾幕、誠輝はそれらを十分に観察し出した。銀のナイフと弾幕……避けられない程の密度ではない為、誠輝はナイフを弾きながら弾幕を交わす。

「全く、幻想入り二日目からガチバトルとか……めんどくせえ」

「お嬢様が危ないのは分かりました。故に直ぐに決着をつけさせていただきます【奇術 エターナルミーク】」

高速の弾幕とナイフの嵐が誠輝に襲いかかる。密度、速度、威力共に普通の人間には耐えられないだろう。しかし、誠輝の身体にも変化が起き始めていた。

「ふーん、速いな（可笑しいな？俺の動体視力がいいのは知ってた

が……此処まで良かったか？」

「全弾……避けられた？どうやら、貴方も『規格外の外来人』の
様で」

「規格外？ああ、弘樹の事が、あいつと一緒にしてもらっては困
るぜ。奴の方が俺より上だ（全く、あの変態と俺を同列に扱うなよ）」

「そうですか、貴重な情報をどうも（やはりですわ、お嬢様が危
ない！）」

何故か色々と会話が噛み合ってそれで噛みあってない様子が見て取
れる。

「まあいい、俺はあいつを止める為に」

「私はお嬢様を止める為に」

「俺（私）は闘う……！！！！」

世界は呼んだ！このロリコンを！！（後書き）

可笑しいな？ギャグ路線で書くつもりが何故かガチ展開に？

まあ、何処かでシリアスを崩せばいいか

竹林サバイバル／紅魔館ラッシュ（前書き）

あらすじ

弘樹がバースト状態でカオスな世界が発生

誠輝がツッコミ代行として紅魔館に潜入

今回のタグ

『変態の変態による変態の為の行為』

『ハリセンは必須』

『レミリアさんそれ死亡フラグ！』

『鈴仙涙目』

『容赦ねえな』

何となくで章の最初にタグを設置！

竹林サバイバル／紅魔館ラッシュ

O u t s i d e

【永遠亭・付近（昼）】

「また妹紅かしら？なんだか今日は竹林が騒がしいけど」

騒がしい程の竹林。普段はシンと静まりかえっている為に永遠亭の妖怪兎 鈴仙・優曇華院・イナバは師匠である八意 永琳に駆り出されていた。

「何かしら……凄く、熱い何かを感じる。それと酷いぐらいに乱れた波長……」

自慢の耳をぴんと立てた鈴仙は何か近づいてくるのを察知し警戒態勢を心がける。

「ホオオアアアアア！！！！！」

そこに竹林の竹を素手で一刀両断しながら志々雄が現れる。

「ひっ！？何か凄く怪しい人が叫びながら近づいてくる！！！！」

余りのインパクトがある珍入者に鈴仙は脅え気味に一步どころか五メートルほど後ずさる。

ちなみに妹紅は志々雄のやや後ろであきれ顔で着いてきている。

「此处だ！！俺の就着地点！！！！永遠亭！！！！！！！！」

「よく分らないけど敵……だと思っ！精神を狂わせてあげる！波符
マインドシェイカー
【赤眼催眠】」

「むっ、あれは妖怪兎の……鈴仙か！俺に精神攻撃をかました所で効かないぜ！俺はハードボイルドだからな！！！！」

「どっちを向いて宣言してるのよ！永遠亭の妖怪兎はあっち」

見事に鈴仙の居る方向と真逆の方を向いて宣言する志々雄。

「あるえ？見事に策にハマったのか！？」

「ああ！？もうこの人誰か止めてくれ！！！」

「無駄だ！！俺の情熱の炎は決して止まる事を知らない！！！」

相変わらず明後日の方向を見ている志々雄だが何を思ったのか地面に頭を打ち付ける。

ガスガスガスガス

ヘッドバットを続ける志々雄。何十回か頭を打ちつけた後にハッキリと鈴仙の居る場所を睨みつけた。

「ふははは、よしやあ！感覚が戻ったぜ！もう、能力を使わせる暇など与えん！！！」

「きゃっ！？速い！だったら弾幕で」

「逝くぜ！ルナ、トリガー！！！！マキシマムドライブ！！！！トリガーフルバースト」

突如、志々雄の腕から黄色と青の弾幕が放たれる。ランダムな動きでとてつもなく避けにくい弾幕が鈴仙を襲う。

「人間が弾幕を放った！一体、どうなってるのよ！！！」

「弾幕を放つ人間が赤白と黒白以外に居たのか……これは予想以上に驚いたわ」

「まだまだ！！！！もつとだ！もつと熱くなれよ！！！」

少数だった弾幕が更に数を増やし無数となる。規則変化が激しく変幻自在に動くその軌道を読めなくなった鈴仙はあえなく着弾。

「はわぁ！！！」

「あつ、うどんげが永遠亭の屋根に突き刺さった……青と白のストライブか」

「どうでもいいんだけど……これだけ騒ぎを起こせば出てくるんじゃないの？あんたの会いたい人物……と、やっぱり出てきたわね、輝夜」

妹紅が天を仰ぐ、そこには十二単を着こんだ髪の長い女性 蓬莱山 輝夜である。薄く微笑を浮かべた輝夜は妹紅が何時もと同じ様に殺しに来たのだと勘違いし彼女に向かって弾幕を放つ。

それを撃ち落とすように妹紅は弾幕を放とうとすると目の前に志々

雄が庇うように飛び出す。

「あんた！弾幕が……」

「うごっ！？……こいつはいいや、ぐーやの弾幕の威力が俺の力になる」

「誰？私の弾幕を生身で受けても傷一つ着かない人間がいるなんて初めてだわ」

志々雄には輝夜の弾幕は被弾したのだが当の本人は全くというほどの無傷だった。

「俺は特別性さ、輝夜！貴方にいたい事が一つだけある！」

「何よ、蓬萊の薬が欲しいているのならお断り……」

「俺を貴方様の椅子にしてください！！！！！」

志々雄の叫びが鎮まり返った竹林に響いた。

- - - - -

【紅魔館・謁見の間（深夜）】

「ふう、危なかった。投擲できるのは知っていたが至近距離は流石に無理かと思つたが案外いけた」

土煙のたつた広間で弘樹は視界が悪いまま立ちつくしていた。頭からの一時的な出血もなくなった為に今は鼻血だけが出続けている。

「さてと……早々に終わらせなければ時間がない。さて……レミリアは……とっ!？」

「くつ、避けられた！反応速度と言いその剛腕といい何もかも桁違いな強さね」

「うわぁ、鋭い爪だな。俺のＴシャツがボロボロだ」

弘樹は今まで着ていた服を見下ろす。無残に引き裂かれたシャツは赤く染まっており弘樹の流した血を吸って重くなっていた。

「もういないか……ぼいっとこれで更に動きやすくなった」

「まだ、あれ以上動く気？冗談じゃないわ、弾幕ごっこだったら分
からなかったけど今の状況じゃあ速さは互角かそれ以上、腕力も似
たり寄ったり……そんな人間が存在するなんて初めてよ」

「じゃあ、俺がレミリアの初めてか」

ジーンズ一枚の弘樹が笑って見せる。付属品としてヒップホルスタ
ーとレッグホルスターにある拳銃に手を触れたまま弘樹が構える。

「なんだか良い方が卑猥な気がする」

「気のせいじゃねえ？それより、もし俺が勝ったら何か貰うぜ？古
来より勝者は敗者から戦利品を頂く物だ」

「そうね、私が勝ったら貴方の血を貰うわ」

「そうだな……俺は勝った時に考える」

次の瞬間、レミリアは跳ねた。一直線に弘樹の懐へ、勿論殺す気は
ない。適当に打撃を与えれば気絶してくれるだろうとレミリアは思
っていた。だが、その決断が間違だった。

「こう来るだろうなと思ってたら結構普通に来たな……何て言うんだっけ、そうだ。jackpot!!!」

「あう!?こ、これを予想していたというの!」

レミリアはもろに弘樹のSAAから放たれたプラスチック弾を幾らか着弾し僅かにのけぞる。

すかさず弘樹は拳打を叩きこむ。それを小さな腕で防御するレミリア。

「ロリの身体に直接触れることによって俺の第二の能力が覚醒する!!!!!!【ロリバースト】」

説明しよう【ロリバースト】とは

簡単にいうとロリータバーストの次段階。鼻血の量が極端に増える代わり第一段階よりも強化された肉体を得ることに成功する。

こいつは既にロリータの為なら人間を捨てている。

「がはっ!?更に……力が増した。でも、たかが人間にいいようにはさせない!【神槍 スピア・ザ・グングニル】喰らいなさい!紅き神槍を!!!!!!」

「さっきよりもでかい！魔力を凝縮させたか！」

最初のグングニルより太い槍が形成されると同時にレミリアの下から離れる。先ほどのとは比べ物にならないぐらいの速さでグングニルは飛翔する。

そして……爆音と共に辺りが吹き飛ばされる。

「これで私の勝ちかしら？びつくりしたわ、本気ではないにしろ人間の分際で夜の眷属である私を此処まで追い詰めるなんて……貴方は誇っていいのよ」

一息つくとレミリアは地べたに尻もちをついた。体力的に限界といった所だ、グングニルを放つのに大量の魔力を凝縮した為のリバウンドである。

「はぁ、疲れた。咲夜にでも紅茶を頼みましょう。それとあの外来人の手当……嘘でしょ？」

「嘘？何で嘘と思う、人間じゃなくても耐えがたい現実を直視すると絶望するみたいだな」

彼は立っていた。レミリアより離れた場所に堂々とジョジョ立ちで…

「そう、絶望がお前のゴールだ」

「くっ、もう一度……グングニル！」

「さっきので魔力を大量に消費した……君のグングニルなど、速さが足りない！」

投げつけられたグングニルを弘樹はいとも簡単に掴んだ。赤い槍は弘樹に刺さることなく右手に収まっていた。

「ふう、偉人は色々と言葉を残していく。だから、俺も決め台詞を言っておきたい……見切った……！」

「嘘……」

「そうだ、これを返そう！」

「えっ？」

掴んでいたグングニルを弘樹は容赦なく投げつけた。爆音と共にレミリアの小さな姿態が宙を舞う。吸血鬼であるレミリアに対しては生半可な攻撃では届かない、だが……自分で作ったものであれば別である。

「チェックメイトだ……お嬢様」

「認めたくないけど……私の負けね」

倒れ伏すレミリアは悔しそうにそう言った。

「で、物は相談だが勝ったのだから戦利品を頂きたい」

「そうね、そういう取引だからね。それで何が欲しいの？」

「君の衣服が欲しい」

「服？ああ、観賞用という奴ね。外人人にはこの服が貴重らしいけど……まあいいわ、後でスペアを咲夜に……てっ！？何で服を脱がそうしてるのよ……！！」

「あん？今着ている服が欲しい……理解できたか？OK？」

「NO！何で今着ているのなのよ……！！」

慌てて退こうとするがダメージが思ったより深く動けないレミリア。

「俺、思っんだ。体温が残っている服こそ至高の戦利品だと……という訳ではぎ取りじゃあああああ……！！」

「いやあああああ！……さきゅや、辱められるううう！……！」

完全にブレイクしたおぜう様の絶叫が紅魔館全土に木霊した。

そんな時だった。

「「待て！このペド野郎！」」

「おのれ！何奴か！我が至高の趣味を愚弄する輩わ！」

二つの銀色の閃光が弘樹を討つ。ナイフが弘樹の頭部に突き刺さり幾重かに重なった鋼の板が顔面を強打し、弘樹を三回転半させて地面に顔面から着地させる。

「ふぎや……我が青春に一片の悔いなし……」

「危なかった、もう少しで弱い幼女がペドの毒牙にかかる所だった」

「ええ、本当に危なかったです。誠輝様、この恩は何時か返します」

「別にいいのにそれじゃあ、変態は消えた所で握手でも」

「はい、喜んで」

そうして何故か頭にナイフの剣山を作った誠輝と両頬を物理的に真っ赤に張らせた咲夜がお互いに握手をした。

「うゝ 一体何があつてそんな顔になつてるの？しゃくや、それとこっちの人は誰？」

「うっ（ぶしゅー）お嬢様、こちらは危険な人物がいると報告に来てくださった誠輝様です」

「こんばんわ、まさかこれが役に立つとは思わなかった」

誠輝は手に持っている複数の板が重なり付け根を縛つてある鋼の道具……『ハリセン』をマジマジと眺めながらため息をついた。

竹林サバイバル／紅魔館ラッシュ（後書き）

テンションが可笑しい皆さま、それは何時も通りだからよしとする。

誠輝

「ハリセンは世界を救う……てか、何故に鋼鉄製？」

志々雄

「遂に念願の椅子に……！」

弘樹

「ジャック・クリスピン曰く『死んでいるみたいに生きていたくない』つまり、己の欲望に忠実であれだろ？えっ？違う？」

次回

志々雄椅子になる！

誠輝と咲夜の戦闘状況について

の二本立てでお送りします！

次回もまた見てね！

昼夜の狭間で決戦（前書き）

あらすじ

弘樹、制裁を喰らう、レミアアカリスマブレイク

誠輝の頭は剣山、咲夜の顔がはれてる、志々雄椅子宣言

今回のタグ

『伝説の椅子男』

『伝説のハリセン』

『伝説のシオダム』

『伝説級にスルーされるうどんげ』

昼夜の狭間で決戦

【永遠亭・入口（昼）】

「永琳、終ったわよ」

「あら？お早い、お帰りでしたね」

永遠亭の薬師 やしろえいりん 八意永琳は姫の速い帰還を驚きを隠さず表現した。

「ええ、それより面白い外来人を見つけたわ」

「外来人……この頃、落ちついたと思ったらまたですか？」

「そう邪険しないの！今回の外来人は何と！私の椅子になりに来たらしいわ！」

「はっ？姫様、それは真正の変態でわ？」

疑問も御尤もだ。今の説明だけ聞けばただの変態を連れてきただけと思われて当然だからだ。それ以前に間違っていないのが悲しい現実。

「最初は私もそうかと思ったんだけど……掃除洗濯から永琳の実験にも手伝ってくれるていうのよ！」

「姫様、今すぐその方を歓迎しましょう」

あっさり陥落する永琳。それでいいのか月の頭脳よ。

「でしょ！しかも弾幕も打てるから厄介な妖怪も対峙してくるし警護兼雑用として雇ってみようかと思うのよ」

「ええ、お給料は自給750円程度でいいでしょう」

「そうね、労働の義務には賃金は当然よね。さて、外の人間だからゲームの対戦相手にもなりそうだし暇がつぶせるわね」

「それに使った事のない薬品も試せますしね」

「フフフフフ」

永遠亭に不気味な笑い声の二重奏が響いた。実際問題、幻想郷の住人も差ほど三人の外来人と変わらない変人ぶりであった。

「そついう事で呼んで見たわ。シオ、入って来なさい」

「はい、姫様。どうも、千里志々雄です。愛称はシオで……主に姫様の椅子になる為に幻想郷に来ました。勿論、雑用もこなしてみます！」

「結構普通の子ね。途中だけ可笑しな部分があったけど問題はないわね……いいわ、とりあえずは研修期間として炊事、洗濯、実験の被害し……じゃなかった、手伝いをしてもらうのでそのつもりでお願い」

「任せてください！姫様の為ならなんでもやっつのけますよ！妖怪だろうが神だろうが俺を止めることは出来ないぜ！」

危険な単語が一瞬でかけた永琳は兎も角、志々雄の頭上に黒い影が

……

ひゅーがしゃん、ばしゃん

「ぐぼっ！？き、気持ちいい！じゃない、誰だ！金タライに水を入れたまま落としてくるのわ！俺じゃなかったら死んでたぞ！」

「ウシシシシ、簡単に引っ掛かったウサ。私は因幡てゐ宜しく」

「なんだ、ただの悪戯兎か……」

「またなの、てゐ。全く、ごめんなさいね。この子は悪戯に関しては悪意の塊なの許してあげてね」

「全く許せる根拠がないがあえて赦す！可愛い正義！」

『考えてみるよ、Hとエロは一見卑猥な言葉に聞こえるが、合わせるとHEROになるんだぜ！つまり性欲こそが正義何だ！』と志々雄は後日語る。

「輝夜！今日こそ貴女を殺してあげるわ！」

「妹紅……そう言えばいたわね。いいわ、シオ…後は任せたから適当にしてて」

「ラジャ！姫様、御武運を！」

「任せなさい！その期待にこたえてあげるから！」

と言って輝夜は妹紅と一緒に外へと飛び立った。直ぐに見えなくなった二人は恐らく永遠亭から遠く離れた場所で戦っているのだろう。少しだけ弾幕の色彩が竹林を照らす。

「うん？兎だね、なにに？お師匠様、何でか分からないけど低級妖怪が集まってこちらに攻めてこようとしてるみたい」

「あら？そうなの、丁度いいわ。シオ、その妖怪たちを撃退して来なさい」

「任せてください！初任務か……俺をどれだけ満足させてくれるやら」

そういつと志々雄は永遠亭から飛び出て行った。ちなみに鈴仙は永遠亭の屋根辺りで突き刺さったままである。

「中々の数がいるな。だが、このハードボイルドな俺に不可能な事は無い！」

この男、無茶ぶりにして最強。自慢のソフト帽を片手に妖怪の群れを眺める。

「ふふふ、これが俺の見せ場だな。これに勝てばぐーやは俺を椅子にしてくれる筈だ！よし、妖怪ども……かかって来いよ」

「ム、人間ダ。食ッテシマオウ」

「俺を食べるだ？それは姫様だけの特権だぜ！」

無論、性的な意味で

「さて始めよう。貴様らを倒すのは俺の役目……さあ、お前たちの罪を数えろ！」

「今更数エラレルカ！！！」

「ノリがいい奴らだ」

そんなこんなで死闘が始まった。先制を取ったのは勿論、志々雄。

「伝説のおお俺の右手が真っ赤に燃える！輝夜の椅子になると雄たけび叫ぶ！I l o v e K A G U Y A！！！！ぐーやフィンガ！！！！！！！！」

謎の台詞と共に弾幕を発射する志々雄。それを見た妖怪たちは慄く。普通の人間は弾幕を放つ事ができない処か妖怪と戦う勇氣もない。それが彼らの常識であった。だが、この男千里志々雄はあっさりとそれを破壊。まさに幻想郷では常識にとらわれないという言葉を実行した。

「さっきの弾幕着弾で俺の身体はheat overしてるんだよ！お前らどんな死にかたがいい？」

「人間如キガ…」

「だが、答えは聞いていない！」

「グアアアアアア」

妖怪消失。残り少々となった。

- - - - -

【紅魔館・玄関ホール（深夜）】

鋼のハリセンを持った少年、誠輝は瀟洒なメイド長から放たれる銀のナイフを交わしつつ考えていた。

誠輝がハリセンを所持している理由は一つ……霖之助から貰ったからだ。どうやら、誠輝が突っ込み担当と知り丁度いい武器があるといい渡された。

本人曰く『このハリセンはツツコミと呼ばれる種族が装備する事で何倍もの力を得ることが出来るんだ』だそうだ。正解はツツコミの

マイナー装備なのだが。

（咲夜は確か時間を操れる筈……だったら早めに終わらせないと不味い。下手に使われてD.O.Oみたいな攻撃をされたら俺は死ぬだろうな）

「戦闘能力もその武器も強いですわね。一体、貴方は何者ですか？」

「答えは簡単、世界の平和を守る何かさ（一度言ってみたかった。まあ、後悔はしていない）」

「ならば、私は悪でいい。お嬢様をお守りする為なら何だってして見せますわ！」

「その覚悟よろし！ だったら俺はあんたの主人も救って見せる！」

誠輝は銀のナイフをハリセンで弾き、咲夜に接近。殺られる前に殺れ戦法である。が、これは少々間違えであった。

「隙ありますわ！」

「ごはっ！？ そういえば……近接戦闘においてもこの人は強かったな」

「ええ、私は格闘も得意……貴方に私が倒せますか？」

「言ってくれる……隙が出来たのは俺だけじゃないぜ！」

「なっ！？」

蹴りつけられたがそれを気にせず誠輝は直ぐに次の行動に移った。
ハリセンを構え左右にスイングする。

「往復ビンタ！」

「ぐはっ！？」

「ピッ○も絶賛な威力だな」

今度は誠輝が咲夜を吹き飛ばす。だが、そこで時間が停止した。

「悔りましたわ。正直、反撃が来るとは予想外でした。でも、これで終わり……」

多数のナイフを止まっている誠輝に向かって投げ寄越す。

まさに絶体絶命、DIOがジ○ジ○に向かって投げたナイフの群れ

ぐらい理不尽な攻撃である。

止まった時が動き出す。

「不味った！唸れ、切り裂け俺のハリセン！！！」

誠輝は一心不乱にハリセンを回転させる。リ○クの回転切りを連想させる一撃は咲夜の放ったナイフを吹き飛ばす。上空高く上がったナイフは無残にも標的に飛ばされ宙を舞う。

「ま、まさか…あの数のナイフを弾くなんて」

「ははは、このぐらい夜食前だぜ！」

余裕の笑みを浮かべる誠輝。状況は一変した、咲夜の持つナイフは無限ではない。投げ終わった物を回収して使っている故に全弾放った上に軽く放心状態の咲夜には攻撃を返す術がない。

ただ、忘れてはいけない。ナイフは真上にあがったという事を……

ガスガスガスガス

「ぎゃあああああああ！！！！滅茶苦茶刺さった！油断してたらガスガ刺さったあああ！！！！」

「くすっ」

誠輝は血の雨を降らしその光景を見た咲夜は薄く笑う。

「ええい！もうこのまま突撃だ！あのペド野郎を止める為に！」

「あら？お嬢様を助けにいらっしやったんですか？くすっ」

「まあな、あの馬鹿を止めに来たのは確かだ」

「それなら戦う必要はありませんね。では、直ぐにでも御案内します……うふふ」

どうにか笑いを堪える咲夜。先ほどまでの戦いなどなかったように場は和んだ。ぶっちゃけ、噴水のように血を流す誠輝は不気味。

「もういつそ笑ってくれ！」

「そうはいきませんわ。お客様を笑うなんて……うふふ、出来ませんわ」

「めっちゃわらっとる！もういい、行くぞ！」

「はい、分かりました。こちらでございます」

こうして誠輝たちは結果的にレミリアを救った事になる。

昼夜の狭間で決戦（後書き）

誠輝

「血まみれ……いい加減に笑うのをやめてください咲夜さん」

志々雄

「見せてみる！妖怪軍の性能とやらを！」

弘樹

「見せ場がない……」

次回

10月23日（土）更新予定

昼間の誠輝の行動編

霊夢の憂鬱編

の二本でどうぞでしょ！

平和な昼下がり……だと？（前書き）

あらすじ

紅魔館へ赴いた弘樹は欲望のままに行動永遠に幼き月であるレミリア・スカーレットを討伐。

その後、紅魔館の新主として君臨、幻想郷のロリータ達をさらにさらいまくり『ロリコン王』と二つの名を与えられた。

一方、志々雄は女神輝夜から与えられた力『月の痛み』により『ドM・ザ・ホーン』に変身した。

その力で月に襲いかかる組織『USC』と戦う事に……

誠輝

「こんな酷いあらすじ認めるかああああ……！！！！！！」

嘘です、本当はこちら

あらすじ

誠輝Ⅱ 剣山

志々雄Ⅱ 椅子兼雑用 & a m p ・実験台

タグ

『あらすじからぶつちやけた』

『平和とは崩れ去る物』

『楽園の巫女の苦勞』

『覚醒する調教師』

『デラックスデコクラッシャー 慧音』

平和な昼下がり……だと？

【香霖堂・内部（昼）】

太陽が真上に位置する時間、誠輝は香霖堂で店主の霖之助と商品の使い方について話し合っていた。結果、非売品が増えたのは当然の末路である。

「助かるよ。大抵の外の物の使い方が分かった」

「いえいえ、暇つぶしにはもってこいですから」

「そう言って貰えると助かる……それで条件の方だけど」

「確か……『今日の働きを見て住み込みで雇えるかどうかを判断する』でしたよね？」

「ああ、そうだ。色々と溜まっていた仕事があつてね……霊夢のツケとか魔理沙のツケとか人里に届けモノとか巫女と魔法使いのツケとか」

この店主、大分巫女と魔法使いにツケを出しているらしく額に指を添えて唸っている。

出来れば払ってやって欲しい次第であります。

「直訳すると人里への届けモノと霊夢と黒白の魔法使いにツケの支払いを急かせと？」

「まあそういう事……どうせ、霊夢と魔理沙はツケを払ってくれないだろうから運が良ければ徴収してく来てくれないか？それと人里の慧音という人物にこれを渡してくれ」

四角形の箱の中に細長い白い棒が入っている。主に学校で目にすることが多い代物だ。

「……………チヨーク？」

「そうだよ。チヨークという代物さ、中々手に入らない物でね……入り次第支給してくれと要望が合ったんで丁度いいかなって」

「そうですか。じゃあ、直ぐに行つて来ます………そうだ、帰りに河童の所に行つて例の事も聞いてきますわ」

「そうかい？それは有り難いけどあの山はよそ者を簡単には登らせてはくれない」

その返答は既に知っていると誠輝は内心想いながらも適当に弁解をしておく。

「大丈夫ですよ、その件に関しては手を打ちます」

「そうか、だったら河童用にきゅうりを用意しよう」

「助かります」

こうして誠輝は香霖堂から一番近い人里へチョークを届けに行くことから仕事を始めた。

【人里】

「先ずは寺子屋だったな。さて、香霖堂に有った物の中で使えそうな物は買つて来たけど……」

誠輝は現在持っている現金を幻想郷で使えるようにした。

それと同時に妖怪に出会っても大丈夫なように使えるモノを買っておいたのだ。

購入した物

- ・ 鞭
- ・ 縄
- ・ 蝋燭
- ・ オイルライター
- ・ 鋼のハリセン

どうみても趣味が先行しているのは明らかだった。

ちなみにハリセンは霖之助のサービスで頂いた。

「さて、行くか。あつ、すみません、慧音さんの所在地は何処か分かりますか？」

通りすがりのターバンの様な物を頭に巻いているおっさんに誠輝は話をかけた。

「んっ？坊主、慧音先生の所へ行きたいのか。なら、丁度行く所だ…連れて行ってやるよ」

「それはありがとうございます」

「それと……質問があんだがよ……腰に下げている鞭と縄は何だ？」

「趣味です」

「なら仕方ねえな」

「ですよ〜」

年齢にして四十代と想定できる無精ひげを生やした親父と言つべきその人物は、着物の様な和服を着ておりどこぞの金銭に汚い警官の様にガニ股で下駄を履き慣らしている。

「じゃあ行くか！慧音先生が俺を待っている……！」

「ラジャ！」

何故か走り出す親父の後を誠輝も何か面白いイベントが起こりそうだと走ってついて行く。この少年、誠輝にとって一番の敵は『暇である事』である。

故に面白い事や刺激的な事には首を出す性分なのだが……今回はかなりは少々見余っていたのかもしれない。

【寺子屋・数分後】

誠輝 side

俺は謎のおっさんを追って慧音がいる寺子屋に到着した。

だが、そこで起こったのは惨劇でしかない。

横たわる親父、ぴくりとも動かない所を見ると完全に沈黙している。

そして俺の眼下には振り下ろそうとされる慧音の頭……つまり頭突きの待機状態な訳だ……

「ふんっ！」

「ぐあっ!?!」

沈黙……俺は余りの痛みに何も考えられなくなった……どうしてこ
うなったかと言うと少々時間を遡る必要がある。

- - - - -

【数分前の寺子屋】

「慧音先生！！今日も来たぜ！」

「また、K殿か……まさかと思うがまた暴漢ばりの助兵衛を發揮し
に来たのではあるまいな？」

「そのまさかだああああ」

ルオンも真っ青なジャンピング飛び付きでKと呼ばれた好色親父は
慧音に飛びかかった。

が、あっさりと交わされた拳句……

「折檻！」

「ぐぼっ！」

お得意の頭突きで撃沈。嗚呼、また……命と言つ儚い花が散った。

「むっ、君は……」

「あつ、俺は……」

「貴様は文々。新聞で取り上げられていた変態三人組の一人！」

「可笑しい可笑しい……色々と情報が可笑しい」

笑うしかなかったさ。興奮している慧音はどうやら子供たちを守る事を最優先したのか…俺の肩を掴む。

そして…

- - - - -

【寺子屋・今に至る】

「……沈黙が俺のゴールか」

「ふう、危なかった。これで懲りただろう？そこで寝ている店主みたいな大人になるんじゃないぞ」

危ないのはあんたの頭だろうが！？（勿論、二重の意味で）

くそつ、硬いし勘違いしまくってるし……てか、これ怒っていいよね？

俺何にもしてないもの、ただ香霖堂からチョークを運んできただけなのに何故にこんな扱いをされなければいけないんだよ！

「……………」

無言でロープを握り、目標に向かって突撃する。

「なっ！？」

「驚くといい。怒りの有頂天を超えた俺の秘儀！怒髪 瞬殺縛進」

あっという間に慧音を縛り上げる。亀甲縛り故に魅力的なダイナマイトツインマキシマムウンテンが俺の理性を吹き飛ばす……されど自重する。

「決まった……俺の厨二病が幻想郷で通じた」

「な、ななななんだこの縛り方わ！」

「おやおや……知らないのですか？これは身体の線を出やすくさせる縛り方なのですよ」

「い、今すぐ解くんだ！」

「却下……てか、俺は怒っている。理不尽にも行き成り、頭突きを喰らい変態呼ばわりされる……悲しいな。ただ、俺は香霖堂からチヨークを寺子屋に持つてくるといいう仕事を貰っていただけに」

「も、もしかして私はまたやってしまったのか？」

どうせそうだろうと思ったけどやはり勘違いMax状態であつたか。アルティメット紳士な俺がいつ変態になったよ！何時も心にDSの誓いを持っているだけじゃないか。後、ロープと鞭は生活必需品でしかない普通の学生だぞ？

「まあいい……俺は怒っている。さあ、見せてやろう……怒らせてはいけない人種の怒りを買ってしまった人物の末路を」

「ま、待つてくれ！謝るから先ずはロープを……」

だが、その時の俺は既にキレていたので紳士的ではなかった。

「君に発言権は無い……此処から先はR指定だ。さあ、此処から始まるのは本当の調教だ……」

「ま、待て！本当に悪かった！だからその鞭と蠟燭をしまつて……」

そこから覚えているのは快樂だけだった。

慧音さんも一つ学んだだろう……触らぬ神にたたりなし……てね

- - - - -

【博麗神社】

o u t s i d e

「死ぬ……」

博麗の巫女は呟いた。

金銭面的に危険が迫っていたのである。

前回の誠輝の賽銭で少々溜まった生活費で贅沢をしようとしたのがそもその間違いだった。

そう、彼女は金を使いすぎた……結果、死の一步直前。

「本当にヤバいわね。あの三人も返ってくる気配はないし……流石に適当な依頼でも受けてお金を稼がないと餓死する」

弱弱しく霊夢は立ち上がると境内から鳥居まで移動した。

そこで一時休憩……飛べいいのだがそこまで思慮が追いつかない様だ。

「あれ？霊夢が死にかけている」

「あつ、誠輝が見えるわね。幻覚かしら？」

「幻覚であつてたまるか！俺は目の前に存在してるわ！」

「……お団子？」

「あつ、これね。親切な人からもらったんだ」

悪意を込めた笑みが一瞬だけ浮かび上がる誠輝。現在、DS状態である。

「出来れば……分けてもらいたいんだけど」

「うん、いいけど俺の願いを聞いてくれるならね」

「お願い？」

「香霖堂のツケを払ってね」

黒い笑みを浮かべた悪魔が見えた……そう博麗の巫女は後日語る。

次回へ続く

平和な昼下がり……だと？（後書き）

今回登場した親父は『澄田 康美』さんが案を出してくれたキャラクターです。

どうぞ、皆さまも自分の考えた人物を使ってほしいという要望がありましたら作者の活動報告【東方奇人伝〜三人の変人が幻想入り〜】に従って報告してください。

作者が気に入ればレギュラー入りする可能性もあります。

何やら上から目線になって来た様な？

まあ、兎に角軽い気持ちでどうぞ！

誠輝

「くくく、嗚呼いいね。本当に人を陥れるのわ」

志々雄

「ぐーや最高！」

弘樹

「誰か俺に……ロリをください」

次回に続きます。

誠輝の日常編（？）をどうぞよろしく

10月25日(月)
更新予定

天狗と人修羅のオニゴツコ（前書き）

あらずじ

誠輝、暴れまくり

謎の親父K<<<<越えられない壁<<<<慧音の頭

霊夢餓死寸前

タグ

『今日の夕食は……焼き鳥だね』

『射命丸逃げて!』

『逃がさない……君を狩るまで』

『裁かれろ、己の愚かさと共に』

『愚かでいいじゃない』

天狗と人修羅のオニゴツコ

【博麗神社】

昼下がり、俺は博麗の巫女にツケを急かしに来た。簡単にいえば取り立て屋に近いな。

「無理よ…今でも餓死しそうなのに」

「じゃあ、身体で返してもらうか」

「嫌な予感がするんだけど」

霊夢が嫌そうな顔をこちらに向ける。まあ、この巫女は勘が無駄に鋭いからな。

「簡単にいえば、妖怪の山の河童の所まで連れて行ってほしいだけさ。そうしたら団子を全部あげるよ」

「本当にそれだけ？何かアンタの場合、まだ有りそうな気がするんだけど」

「正解……はいこれ……今日中にどうぞ」

「……妖怪の討伐依頼ね。量が冗談じゃないくらい多いわね」

「これをこなして香霖堂のツケを払ってね」

「うつ……この人でなし」

「なんともどうぞ……あくまで取り立て屋ですから」

さて、とりあえずは団子を食わせて気力回復した後に妖怪の山に連れて行ってもらいますか。

「まあ無条件降伏ね。はい、これ食べたら妖怪の山ね」

「背に腹変えられないわね……丁度、お金がなかった事だしまあいいわ」

団子の包みを手渡すと霊夢は高速の速さで団子を吸収していく。流石だ、餓死直前となるとこれほどまでにも人は速く食べ物を摂取できるのか。

その刹那、とんでもないスピードで何かが横を通り過ぎた。

「よっと、到着だぜ。あれ？霊夢がいない……可笑しいな？何時もなら境内で昼寝してるのに」

黒いつばの広い帽子、黒と白のエプロンドレス、極めつけには箒とブロンドの髪の毛。100%で魔理沙だ。幻想郷二位の速さを持つ彼女はやはり堂々と博麗神社に突っ込んでくるらしい。

「また、魔理沙ね。こっちよ、こっちにいるわ」

「んっ？おお、そっちだったのか。あれ？見かけない……いや、知ってるな……確か新しく来た外来人の三人の内の一人か」

「ああ、こういう風に伝わっているか知らないが俺は此処に昨日来たばかりの外来人長沢誠輝だ。宜しく、それと同時に黒白の魔法使い……霧雨魔理沙でいいな？」

「有ってるぜ。私もいつの間にか有名になってたんだな」

「有名さ、香霖堂のツケを払わない……二人組の一人だろ？」

「ぐっ……香霖の差し金か。言っとくが払える物は持ってないぜ」

「だと思った。だから、お前にも身体で払って貰う」

すると何故か魔理沙は顔を真っ赤に染めた。

「ま、まさか……この新聞の通りにお前は変態だったのか！」

「ちょっと向こうまで逝こうか？大丈夫だ、直ぐに冥界まで招待してやる」

「危険な顔つきで刀を構えるな！悪かったぜ、それは兎も角、これを見る！真実を提供していると自称する文々。新聞だ！」

「んっ？何……今日の日付か」

文々。新聞

【号外】

『新たなる外来人に注目！』

この幻想郷にまた新たなる外来人が襲来した。氷の妖精チルノ、宵闇の妖怪ルーミアの二人に効いた所、どうもその三人は『ロリは俺の嫁！』『俺は輝夜の椅子になる為に此処に来た！』等の変態宣言を行っていた模様。被害者であるルーミアはこう語る。『あれは人間業じゃなかった。いつの間にか縛られていて鞭と縄が生活必需品とか言ってたのだ』とそして氷の妖精は『行き成り現れたと思ったらあたいの服をはぎ取ろうとしたんだっ！！！！やっつけてやろう

と思ったけど……まあ、あれね。中々やるじゃない、でも次は負けない！勝ったと思ったたら大違いよ！」と永遠と負け惜しみを語る。

以上の説明を聞いてこれは幻想郷初めての変態と言う人種による騒動が起きると予測できる。なので幻想郷の住民の皆さまは戸締りをしっかりと閉めた後に警戒しながら日常を過すとよいでしょう。

文々。新聞

著者：射命丸 文

「……………射命丸」

「どうした？顔色が悪い……………ひっ！？」

「誠輝の顔つきが阿修羅の様になってるわね。これは血の海が降りそうね。魔理沙、何かあったら止めに入るわよ」

「本気か！この外来人、かなり怖いぜ！私でも此処まで鬼に近い様な人間は見た事ないぜ」

「それも運命さだめよ。諦めなさい」

「射命丸コロス、ヌツコロス……………霊夢、今日は焼き鳥だね」

「私は遠慮しておくわ」

射命丸め、このような狼藉…… 覚悟しておけ、ふはははははは

s i d e o u t

- - - - -

射命丸 s i d e

えゝ、皆さん。清く、正しく、射命丸です。

本日はお日柄もよく、絶好の取材日和だと思っていたんですが……

「逃がさんぞ、貴様は俺の怒りに火をつけた。魔理沙、死ぬ気で追いつけ！逃がさない…… 君を狩るまで」

「合点だ！何時までも二番手の私じゃないぜ！」

「嗚呼、なんでこんな面倒な事に巻き込まれたのかしら？」

鬼の形相で私を追って来る外来人（恐らく特集に載せた三人の内の一人）と黒白の魔法使いに赤白の巫女が追いかけて来るんですよ。

ですが、そんな簡単に捕まる私ではありません！

「魔理沙！マスパを使い、前は俺が微調整する」

「任せろ！【恋符 マスタースパーク】」

えっ？スペルカードを後ろに展開……えっ、速度が上がった……！！

「言っただろう……逃がさない」と

「幻想郷最速は返上させて貰うぜ！」

「はあ…体当たりかます前に撃ち落とすわよ【霊符 夢想封印】」

あやや！？巫女の放った弾幕と加速する外来人たちが……

ぴちゅーん

- - - - -

o u t s i d e

射命丸 文は窮地に達していた。霊夢の弾幕＋魔理沙の加速タックルを両方受けた為に全身疲労で最早動く事もままならない。

それに追い打ちをかけるように誠輝は射命丸の前に立つ。

「さあ、祈りをすませろ。教育してやる……貴様がどれだけ愚かな

行いをしたかを分からせてやる」

「あやや……どうやら、新聞が気に入らなかったようだ」

「当り前だ！あんな内容を晒されたんだ、それで正気を保てるか！」

「ですが……かしねんぼう花果子念報の新聞でも取り上げられていますよ？」

「はたてか……… 奴も俺が料理してやる。奴の居場所を吐けば焼き鳥は勘弁してやる」

「勿論です！ですから、この縛り方を止めて欲しいのですが」

「だが断る！お前を自由にすれば逃げる可能性が高い」

「信用がありませんね」

射命丸は勿論、亀甲縛りで地面に横たわっている。

「さて、射命丸は後々弁解の取材を取らせるとして……はたては抹消だな」

「穏やかじゃないぜ」

「気にするな……俺を怒らせたのは失敗だったと思わせるだけだ」

「未恐ろしい外来人もいたモノね」

「まあな」

この後、妖怪の屋まではたての悲鳴が木霊したのはいつまでもない。

【妖怪の山々河童が居そうな川】

「にとり〜出て来い！きゅうりをやるぞ！外の技術を教えてやる！」

叫びながら誠輝は拾った木の棒を加工して作った釣り竿にきゅうりを結び付けて釣りをしていた。霊夢は依頼があるので帰って行つたが魔理沙は面白い外来人だという理由で付いてきている。射命丸は取材を受けて新聞をせっせと作成している。

「きゅうり！技術！！！」

「おっ、かかった。俺は外来人の長沢誠輝だ。折り入って頼みがあ

る」

「んっ？外来人か、私は河城にとり……機械が好きな河童さ」

「知ってる。だから、こそ……電気を溜めることが出来るモノを作
ってほしい」

「おお！それは面白そうな提案だね。いいよ、腕によりをかけて作
ってあげる……その代わりだけど」

「ああ、外の技術をお前に教えるでいいな。機械系統にはそこまで
詳しくないが教えられるだけ教えてやるよ」

にとりはきゅうりを加えたまま親指を立てる。誠輝もそれに乗じて
グッジョブとサインを送る。

「んで……これからどうするんだ？」

「そうだな、香霖堂に帰るか……それよりツケ払えよ」

「ぐっ、払えるモノが増えたらな」

「それじゃ、私は帰って作品を作りたいから行くね。何時でも来な
よ、変態でも朋友だよ！」

「にとりきさまもか……！」

すぐさま居なくなってしまった川に向かって全力で叫ぶこの頃の誠輝。ストレスがたまっているみたいだ。適度にストレスを発散させるのは人生のコツである。

この後、何の因果か紅魔館に行く羽目になり弘樹をハリセンで撃退した事でストレスを発散したとかしないとか…

天狗と人修羅のオニゴツコ（後書き）

誠輝

「俺が輝くのは日常編だけだ」

志々雄

「俺達二人は異変だけか？」

弘樹

「おい、お前も戦えよ、年長者だろ」

誠輝

「だるい、めんどい、昼寝したい」

志々雄・弘樹

「駄目人間だ！！」

【お詫び・訂正】

話を纏める為にハリセンを誠輝は前回の章から持っている事にしました。編集が少々加えられているのでそこら辺は考慮していただきます。

香霖堂で買って荷物リストに鋼のハリセンを追加しました。お手数掛けます。

次回

10月27日（水）あたりに更新します

次回予告

紅魔館へ現れる謎の影……それを解決する為に再び三人は結成される……ギャグと変態度数を両手いっぱいを持った三人が赤い館で月夜を踊る！

次回もよろしくたのみます！

誠輝・志々雄・弘樹

「「君のハートにチェックイン！！！！」」

誠輝

「古い上にウザいなこれ」

妹様？…………俺帰っていいですか？（前書き）

あらすじ

誠輝無双…前日編終了

やっと戻って来る現在

タグ

『竹林でブルアアアア！！！！』

『ハードボイルドの結晶は強靱、無敵、最強』

『輝夜は大胆不敵』

『妹無双』

『パチュリーは喘息に入ってすぐ離脱』

妹様？……俺帰っていいですか？

【迷いの竹林（昼）】

Outside

「うおおおおお！！サイクロン、ジョーカー！！！！」

被弾に被弾を繰り返した志々雄は能力なのか良く分らないが肉体がどんどん強化されて言った。それも、輝夜などの上位の存在からの攻撃で低級妖怪など比ではないぐらいの強さを持っていた。

ゲシゲシゲシ

「右パンチ！
AB！ロケット頭突きじゃああああ！！！！」

「ギャアアアアアア」

昼間の密林に低級妖怪どもの断末魔が響き渡る。

「行け！俺のハードボイルドの結晶！」

志々雄は愛用しているソフト帽を手裏剣の様に投擲。

「ガアアアアアア」

何体かの可愛そうな雑魚がソフト帽により切断される。此处にソフト帽最強伝説が更新された。

そして何故か当然の様に志々雄の頭に戻って来る辺りがハードボイ

ルドの化身なのだろう。

「今日の俺は紳士的だ……良かったなお前ら……一瞬で冥界入りだ
ああああ！！！！ジエノサイドプレイバアアアアアアアア！！！！」

弾幕が乱射され辺り一面が地獄絵図と化した。

「粗方片付いたな。竹林の地形まで帰ってしまった気がするけどいいよね！」

気にしない気にしないと志々雄はムーンウォークで帰って行った。

- - - - -

【永遠亭】

「終わりました。全滅させて来ましたよ！」

「速いわね……もしかして弾幕使えたの？」

「勿論でございます、姫様」

「へえ……中々やるわね貴方。気に行つたわ！この輝夜の家来壱に任命するわ！」

「はっはは、有りがたき幸せ」

と帰って早々テンションが高い人たち。それを見ている永琳の目は子供を見守る母親の様に温かった。

「さて、此処から本題ね。シオ、深夜に紅魔館に行って吸血鬼の妹と一戦交えて来なさい！」

「それは私めの実力を測るテストでございましょうか？」

「そう言った所ね。シオの実力だつたらやれるわ！自信を持ちなさい！それと深夜になるまで永琳の研究の手伝いをしてきなさい！」

「ヤー！（了解）」

こうして志々雄は時間を潰していく。

- - - - -

【紅魔館（深夜）】

「ふう、弘樹を止めたが……だるいな。このまま寝たら死ぬかな？」

「確実にぼっくり逝きますわ。治療をするのでこちらへ……」

ドドオオオン、ムドオオオオン

爆発音と妙な呪詛が聞こえた。明らかに後者は存在しない何者かによる妨害だと思われるので無視してもいい。

「っ！？こういうパターンは何度かあるわね！フランね、この頃大人しいと思ったらまた暴れ出したのかしら！」

「妹様ですか、誠輝様、弘樹様を連れてお逃げください。此处から先は紅魔館の問題です」

「ん？ああ、そうだな。どうみても瀕死の俺じゃあ足手まといだな」

直ぐに非難する為に誠輝は弘樹を探しに振り向くとそこには悪魔がいた。いや、紅魔館にはいない部類の悪魔だ。

「妹様だとおおおおお！！！！俺が倒してやるわアアアアアア
！！！！！！」

効果音にすると『ゴゴゴゴゴゴ』といった雰囲気醸し出した弘樹が某DMCの主人公如く倒れた状態から脚力だけを使って起き上がる。恐るべきロリータに対する執着心。

「あゝ、こいつ沈めないと帰れそうもないな。て、言っている間に……来たか」

「パチユリー様、もう無理です。お嬢様と合流したのは良いですが此処に妹様が入るまでもう時間がありません！」

「分かってるわ。レミィ、頼めるかしら？」

「頼むも何も私の妹よ。姉がお仕置きしないで誰が正すのよ」

「お嬢様、外来人のお二方を逃がす時間がありません。サポートに徹してもらうか、パチュリー様の援護をしてもらうのが妥当かと」

「出来れば巻き込みたくなかったのよね。でも、仕方ないわ……私の妹はかなり過激だから死なない様に注意するのね」

直後、大広間の巨大な扉が粉々に吹き飛ぶ。直ぐに小柄な少女が顔を出した。七色の水晶の様なモノが付いた羽、赤のワンピースに金糸のサイドテール。レミリアとは違った邪気のない笑顔で笑うと可愛いと思うのだが今は三日月型に湾曲する笑みが恐怖を増大させるだけだった。

「あはは、こんなに遊び相手がいるなんて楽しみだな」

狂気に染まった瞳で少女は呟く。片手には歪に曲がりくねった杖の様なモノを所持している。

「フラン、貴女には地下で大人しくしているようにと言っていたわよね？」

「お姉さま、今日は楽しいタノシイ……夜二ナリソウネ」

「おいしい、話がかみ合ってねえええ!!!」

「これは……妹様と遊んであげないと満足してくれそうにもありませんね」

「任せろ、俺のロリバーストなら一定時間ならフランの身体能力を上回る攻撃が出来る」

「それは知っているが……血は足りるのか、ちなみに何度発動したよ」

自信満々に豪語する弘樹に誠輝は素朴なツツコミを入れてみる。

「大丈夫だ、今日は三回しか使っていない!」

「駄目だこりゃ。誰かこいつに輸血プリーズ」

「確か倉庫に人間の血がありましたか……何型ですか？」

「俺はA型だ」

「でしたら直ぐにお持ちします。点滴用の針もご用意しますので」

「弘樹が復活するまでの間、誠輝……前衛を務めれる?」

「無理」

「即答された！あっさりと拒絶された！！て、会話の途中で下がるなああ！！！」

あっさりと会話を遮断し交代する誠輝。根っからのめんどくさがり屋なので自分が必要とと思っている事以外行わないのがこの少年の特徴。

「……………弘樹とはえらい違いね？」

「当たり前だ。吸血鬼に俺が勝てると思うか？」

「それもそうね。弘樹は人類をやめた感じがするモノ」

「ですよねゝ、さて妹ちゃんが来ますぜ。俺は後ろに下がって援護するから後よろしく」

「薄情者ゝ！！」

誠輝はレミリアの泣き言を華麗にスルーした後、パチュリーの横に待機。

弘樹はいつの間にか帰って来た咲夜に点滴を差されている。小悪魔は最初から戦力外通知……パチュリーの喘息が出ないか心配そうに

見守っている。

「サア、遊ビマシヨウ！」

「やるしかない様ね。もうヤケクソよ！一人でフランを止めるんだから！！！」【神槍 スピア・ザ・グングニル】

「オ姉様が遊ンデクレルノ？私モ行クヨ！【禁忌 レーヴァーティン】」

二人の姉妹が激突し合う最中、誠輝はパチュリーと小悪魔から現状の情報を取得していた。

「こんばんわ、外来人の長沢誠輝だ。そこで血液補充中なのが弘樹だ。そっちはパチュリーと小悪魔でいいな？」

「ええ、あつてる……ガハッ！？」

「パチュリー様ああああ」

ぱたりと倒れ伏すパチュリー、情報取得失敗。

「俺一人で援護しろと言うのか？馬鹿も休み休み言えっの」

「点滴が終わったら俺が出るそれまでこれを使うんだ」

「コルトパイソンか……銃は使い慣れてないが……接近戦を挑むよりましか。てか、効かない？」

「安心しろ。ガスブローバツクだ」

「うん、寧ろその台詞の何処に安心して良い部分があるか言ってみろや……！」

「非合法改造を施しているからガラスも貫ける」

「さて、110…あ、圏外か」

携帯が通じていないので誠輝は通報を諦め、銃を握る。装弾数は六発。

「後、これを……」

「聞いていいか？」

「なんだ？レミリアが危ないんだ早くしてくれ」

「何故に真面目な顔をして二ーソを二着渡す」

「死んでもそれをあの姉妹に履いて貰うんだ！萌えの未来はお前にかかっている！」

「アハハハハ、任せろ！！！！（ツツコミを放棄しました）」

ツツコミを完全に放置した誠輝は二ーソを片手に定位置へ戻る。

「ぐはっ！？悔しいけど強い」

「オ姉様、モット遊ボウヨ……モット楽シマセテヨ！！！！」【禁弾スターボウブレイク】

「がっ！マズイ、弾幕が激しすぎる！！」

七色の矢の弾幕を回避しつつレミアが悪態をつく。隙を疑っては弾幕を繰り出すが弘樹との戦いで消耗している為か思う様に身体を動かせていない。

「劣勢か……無理だな。諦めるか……」

「まだだ！もう少し、耐えろ！後、どれくらいかかる！」

「もう五分ほど……誠輝さま、此处を任せてもよろしいでしょうか？」

「ああ、戦うより馬鹿を見ていた方が気が楽だ」

「では……お氣をつけて」

「その台詞をハリセンで打ち返すよ」

一呼吸おいた後、咲夜は瞬時に消えうせレミリアとフランの戦闘に入って行く。二人と死人（？）＋秘書は何もできないまま見守った。

「なあ、今氣付いたんだが？」

「ん、なんだペド？」

「呼び方が段々雑になってない？まあ、それより……俺達、何でこんなシリアス紛いな場面に直面してるんだ？」

「確かに……ここ等で誰かがボケてくれると俺がツツコミを入れるのにな」

「……後、一人いるじゃないか！」

「シオか！あいつは恐らく永遠亭で椅子から奴隷に進化している筈だろう」

「それ退化ああ！！！」

とコントをしている間にもレミリア＋咲夜VSフランの戦闘はフラン側に有利に働いていた。

「弱イナゝソノ程度ナノ？【禁忌 クランベリートラップ】」

「もう、魔力がないわ」

「お嬢様も妹様も私がお守りします（ですが、私も霊力が微々たるものしか……どうすれば）」

遅い来る弾幕の嵐を駆け抜け抜けフランが特攻してくる。あくまでスペルカードは囷のようだ。

「咲夜……捕マエツタ」

「きゃあああ」

「咲夜!？」

フランの一撃がメイド長を紅魔館の壁まで吹き飛ばす。だが、ダメージを受けたのにも関わらず咲夜がスペルカードを宣言していた。

「【奇術 エターナルミーク】ですわ……お嬢様、妹様……お力添え出来なくてすみません」

弾幕を放つと同時に倒れ伏す咲夜。

「咲夜モヤツテクレルジャナイ……チョット痛カッタカナ？」

「外来人二名、逃げなさい!」

「yes、sir」

「お前に誇りは無いのか!目の前の少女をほっというて逃げる事が出来るのか!?!」

「俺は逃げる。お前をおいてでもな」

「えっ？マジでおいて行かれた！！！」

さっさと壊れた扉から離脱する誠輝。神速と呼ばれるほど逃げ脚が速い。

「アハハハ、人数が減っちゃッタ……モウオシマイニシヨウ……ツマンナイシ【禁弾 カタディオプトリック】」

「補給が足りないが……今度こそ持てよ！俺の身体ああ！！！！！」

弘樹がレミリアの前に出てSAAを乱射する。小玉の弾幕は消し去ることが出来たが大玉までは消しきれない。巨大な弾幕が迫りくる。

「その弾幕ちょっと待ったあ！！！！フランを倒すのは俺だぜ！！！！」

パリン

紅魔館、大広間の窓ガラスを割って一人の少年が現れた。

「飛べない豚はただの豚だ……とあるが……飛べても所詮豚は豚だ
ああああ！！！！そして、俺参上！！！！」

「「前振りの意味が分からない！！！！」」

突如現れた志々雄はレミリア、弘樹、小悪魔にツツコミを入れられたが気にもせずフ란の弾幕に直撃する。

「ふはははははは……効かないぜ……！……寧ろ、心地よいぐらいだあ
ああ……！」

妹様？…………俺帰っていいですか？（後書き）

誠輝

「ふう、シリアスは苦手だ」

志々雄

「俺が来たからには全ての弾幕は俺の物！！」

弘樹

「血液足りません！」

次回予告

突如参戦する志々雄、それに伴い離脱する誠輝。三人が揃わなければ真価を発揮できない状況……………満身創痍なレミア……………倒れ伏す咲夜……………デオチ過ぎるパチュリー……………役に立たない小悪魔……………彼らはこの状況を乗り越えることが出来るのか！！

10月29日（金）

更新予定

それでも僕はシリ阿斯を認めない！（前書き）

あらすじ

誠輝

「さらば！」

弘樹、血が足りぬうう

志々雄、絶好調なり！！！！

タグ

『HEROは遅れってやってくる』

『使えない吸血鬼』

『動けない大図書館』

『糖分は大切』

それでも僕はシリアスを認めない！

「アー、マタ増エタ。貴方ハ…私ヲ楽シマセテクレル？」

「いいだろう！君を倒して輝夜への愛を誓う！！！」

「半日会わない間に何があっただ！」

フランの弾幕を受けてなお傷付く事のない男…否、漢 千里志々雄
は紅魔館へ降り立った。

「ふははははは、俺は輝夜の椅子になったんだ！ちなみに時給750円で雇ってもらった。幻想郷のお金に変えると……一か月300円ぐらいか、この地では発行不可になった紙幣…一円札とか百円札とかあるからな」

「結構、待遇がいいだと！現代日本での俺の給料より高い！！！」

給料についての講義の声をあげる弘樹だが、今はそれどころではな

い。仮にも『悪魔の妹』とであるフランドール・スカーレットとの『遊び』の最中である。直訳すると…

「余所見シテルト…壊レチャウヨ【QED 495年の波紋】」

「守ってやる！！レミリアや咲夜さん……妹様を含めた紅魔館の皆を……！」

「あれ？俺の存在がシオの脳内からすつぽりと抜け落ちてない？」

「お前は大丈夫だ！ロリの攻撃じゃ死にはしない！よっていないと同義として扱う」

「それ苛め！空気と扱うと言っていると同じ意味だから……！」

フ란の放つ弾幕を志々雄が身体を張ってガード。流石、ハードボイルド……女性限定で守りまくる。宣言通り、弘樹に関しては完全に放置。

「防御に徹してばかりじゃ、勝てん。弘樹、レミリア……打開策を考えてくれ！」

「俺は頭脳専門じゃねえ！レミリアはどうだ？」

「ちょっと待って……面白い運命が見えそうなの……これは、誰だかわからないけどこの状況を打破できる人物が来るわ」

「マジか！！それは何時頃だ？直ぐなのか？それとももう少し後か？」

弘樹が弾幕を華麗に避けながらレミリアに質問を浴びせる。

「分からない……凄く近いようで遠い……でも、完全に今の状況を覆すことが出来る指導者のな人物が現れるわ」

「よし！おぜう様の言うとおりなら勝機を見いだせる！それまで耐えるぞ弘樹！」

「おうともよう！俺のリロードはエクステンションバーストだああああ……！！！」

気合と共にSAAから大玉の弾幕を発射する弘樹。この男はテンションに身を任せると人間域を通り越すようだ。

「何か出たし……！！！！」

「よく分らないけど……貴方達がまともな人間じゃないて事はよく理解できたわ」

呆れかえるレミリアは兎も角、フランは弾幕を放つ人間が出現した事に笑みを浮かべた。

「アハハハハ、そっちのお兄さんは私の弾幕を何度受けても倒れないしそっちの銃を持っているお兄さんも弾幕を撃てる……私モ本気で逝クヨ！！」【禁忌　フォーオブアカインド】」

即座にフランが四人に分身する。多数の方向からの攻撃を志々雄は防ぐだけの素早さを取得していない為に状況が若干厄介になった。倒れて二つ名の通り『動かない大図書館』というか動けない、動く気ない、もうリタイア。そのそばで必死に看病している小悪魔、この場では圧倒的に不利。

「くっ、流石に多方向からの攻撃じゃあ、お前が持たない！私も残り少ない魔力を使って」

「やめとけよ。此処は俺に任せておけ、俺はハードボイルドの志々雄だぜ？男に二言はねえ……一度宣言したならことんやってやるまでよ！！！見せてやるぜ！これがハードボイルドの真骨頂だ！！！サイクロンジョーカーエクストリーム！！！！！」

志々雄も弘樹に負けじと巨大な弾幕を発生させる。四人に増えたフランも弾幕を乱射する。此処まで来ると紅魔館の耐久率が気にかかる。

「志々雄！？カッコいい事言っているのは分かるが！俺も守れええ！……ぎゃあああ……と何か言っている間にまた被弾した！」

「やっぱり人間じゃ出力不足よ！私も参加するわ！」

「「喧しい！！魔力が空っぽで役に立たない吸血鬼は部屋の隅で体育座りでもしてなさい！！！」」

「うわああん！！！！二人が苛めるうゝ！！！！」

凄いい勢いでれみりやは咲夜が倒れている場所まで走って行った。

「ふう、演技とはいえ幼女をのしるのは心が痛む」

「誠輝なら本心から良いそうだがな！」

「ですよ〜、だがあいつ何処に行ったやら。俺たちは三人で行動してる事が多かったからな〜おっと、あぶねえ」

「「「上手ク避ケルネ！！！！ダツタラコレハドウ？」」」」

同時四方向からの攻撃、志々雄は兎も角、パチュリーと小悪魔が危ない。

「させるかよおおおお！！！！」

弘樹と志々雄が叫ぶ。そして、志々雄はパチュリーを弘樹は小悪魔の襟首を掴んで猫を持ちあげる如く扱い……

「飛べ！！！平和の為に！」

「きゃああああ！！！」

「むきゅ」

飛んで行く二人、丁度レミリアの居る辺りに激突する。『いたいよう、うう』とか聞こえた気がするが気のせいだろう。

「うおおおおお！！！！プリズムブレイク！！！！」

身体全体から高濃度の弾幕を排出する志々雄。今まで溜めていた力を一気に解放する為に肉体強化が徐々に弱まって行く。

「『『『当タラナイヨ、残念デシタ』』』」

四人のフランが狂気に満ちた笑みを浮かべる。だが、志々雄はソフト帽の下から笑みを見せた。

「それはどうかな？弘樹！！！」

「OK、視界良好……我が弾丸は鋼の閃光……闇を切り裂く礎となれ！！！！唸れええ俺の厨二病！！！」

片腕を土台にしSAAの標準を定め、一体のフランに向かって特大の弾幕をプレゼントする。狙いはぶれることなく分身であるフランに着弾し一体が消失した。

「やるな……」

「まあな……伊達に酔狂で銃を弄ってないぜ」

パンとハイタッチを決める二人。残り三人のフランは志々雄より弘樹を危険視した為にそちらへ視線が向く。

しかし、それがフランの誤った選択だった。

此処に居ない筈の誰かが居る事に気付かなかった…否、誰も気付かなかった。その男はただ、そこに佇んでいるが居ない様にも見える。

直後、フランの分身に向かって何かが放たれる。弾幕ではない、細長い棒の様な鉄の塊、その末端からは勢いよく炎が噴出している。

ドガン

「ギャアアアアア……」

分身がそれに直撃し消える。

「命中……残り妹様二体だな」

「「才前八！！逃ゲタ外来人！！！」」

「逃げた外来人？誰の事だ、俺はやり過ぎた遊びをする悪い子にお仕置きをしにきた……『サデイスティック13』だ、コノヤロー」

サングラスをかけ、肩に筒状の近代兵器をしょった男は宣言する。

「さてと……二人ともまだ行けるか？そろそろお開きだ。俺は眠いんだよ、しかも定期的に糖分を取らないと死んじゃうからな」

「それは糖尿病という奴では？」

「こまけえ事はいいんだよ」

志々雄のツツコミを見事に無視して『サデイスティック13』は近代兵器…ロケットランチャーに追加の弾を補給する。

「よっしゃ、一丁暴れるぞ！行くぞ！野郎ども！！！」

「おっしゃああ！！！！来たぜエエ！！！！【ロリバースト】」

「任せろよ！ハードボイルドの名に恥じない様な戦い方を見せてやる」

こうして終結した三人……まだまだ長い夜は続く。

それでも僕はシリ阿斯を認めない！（後書き）

サド助

「ロケランは香霖堂から支給されたのを美鈴に預けてたのさ」

志々雄

「ガード強化+の俺に防げないものなどない！」

弘樹

「ふはははは！……血液は足りずとも戦うさ！……そこに幼女がいるのならな！」

次回予告

遂に三人がそろった。紅魔館に壮大な被害（物理的な意味）を巻き起こす遊びが始まる。強大な力を持つ『悪魔の妹』フランに対して人間の常識を捨て去った三人はどう戦うのか！

次回、『紅魔館には申し訳ないが倒壊させてもらおう！』

また見てくれよな！

次回更新予定

10月31日（日）

紅魔館には申し訳ないが倒壊させてもらおう！（前書き）

あらすじ

三人集結！見よ！紅魔館が崩れていくぞ！

紅魔館残り耐久率65%

フランは残り二体。

タグ

『紅魔館「助けてください！」』

『殺し愛……覚えていますか？』

『いいぞ！もつとやれ！！！』

『紅魔館は代償になったんだ』

『弹幕は愛としれ！』

『レミリアは犠牲になったのだ』

紅魔館には申し訳ないが倒壊させてもらう！

「いいか、聞くんだお前ら……妹様は強い。正直な話お前らじゃ倒せないし俺でも不可能だ。だから、俺ら三人の力でどうにか戦う事が出来る筈だ、勝とうと思うな様は満足させればいいんだ」

「そうか、レミリアが能力で言っていたのは誠輝の事か。確かに年長だから無駄に生きてるから知恵は俺らよりあるからな」

「失礼な奴らだな。ほれ、こいつを弘樹にくれやる、後、リボルバーは返す」

「おつ、悪いな。で、俺にプレゼントか？出来れば、女の子ロリータから貰いたかった」

「冗談はいい。こいつは弾幕を撃てる銃だ。今、お前が無理やり使っているそいつは、使いすぎると破損する恐れがあるからこっちに变えとけ」

「了解」

弘樹は誠輝から手渡された自動拳銃を片手に残る二体のフランを見つめる。見ているだけではどちらが本物かなどは不明だが弘樹には自然と本物がどちらか分かった。

「俺の第三能力発動！【ローリンサーチ】」

「なんだ、邪気眼か」

「違うわ！？純粋な意味で正体を見破る眼力だ！」

「フランのスリーサイズは？」

「上から、 、 、 だ」

「よし処刑だ！十字架に張り付けたまま、火あぶりだ！」

「何その中世代当たりの魔女狩りみたいな処刑方法！？」

説明しよう、弘樹の第三能力【ローリンサーチ】とは幼女限定で対象のありとあらゆる外面を調べる事が出来る超強力眼力なのだ。スリーサイズはおるか、外見で本物か偽物か等一瞬で分かってしまうという幼女にだけ特化された能力なのである。

「よっしゃ！？三人揃えば文殊の知恵と言うだろ、問題ない！」

「揃えばじゃなく、寄ればな……全く、ドMとロリコンと俺がそろった所で勝利するのは不可能に近い。仕方がない、戦争には犠牲はつき物だ……」

「つまり、俺らの中の誰かに罠を任せて残りは妹様を満足できる攻撃をするということか？」

「間違っではないが、あってもいない。俺が犠牲として選んだのは人じゃない」

「じゃあ、紅魔館の連中を使うのか？流石に忍びないぜ」

志々雄は納得いかんと嫌な顔を見せるが誠輝は清々しいぐらい良い笑顔で宣言した。

「妖怪でも魔女でもない。というか、生き物のじゃない……俺が言いたいのは紅魔館を犠牲にすると聞いたかったんだ」

「はっ？紅魔館を犠牲に……どういう事？」

「てか、それいいのか？家を犠牲にされたレミリア達がホームレスになって……いや、ホームレスになって段ボールを被って寝るレミリアを想像して萌えた！これは、これであり！俺は賛成だ！」

「……………ありなのか？まあ、可愛いとは思うが」

「「よっしゃあああああ……！！名付けて『紅魔館ミラクル犠牲作戦』だあああ……！！」」

「何処にミラクル要素があるんだよ！！てか、人聞きの悪い言い方を……もっとシンプルに『紅魔館破壊』で良いだろうが」

「そっちの方が物騒よ！！何してるかと思ったら館の主をほっといて破壊工作を立てるってどうなのよ！」

「ちっ」

「舌打ちされた！！！」

レミリアの登場に不機嫌になる誠輝。面倒な事が嫌いな誠輝は、今の状況でレミリアに出てきてもらっては困るのだ。今の今まで上空にいるフランは二体になったことで初めて外来人三人を危険視したのか近づいて来ない。

「で、なんで前線で戦ってたお前が此処に？そして、シオがいるし」

「今さらだな、俺は姫様に試練を貰ったんだ。紅魔館の誰でもいいから勝負して来いってな！」

「ふーん、大方レミリアは弘樹との戦闘続きで魔力が切れて二人に罵声を浴びせられてカリスマブレイクでもしていたんだろ？」

「うつ！？な、なんでそんなに的確に予想が出来るのよ！」

「勘」

ハッキリと自信を持った証言。博麗の巫女ばりの直感である。

「勘かよ……で、打開策はあるんだよな？」

「勿論だ、弘樹。貴様はシオと二人でフラン本体を叩け、その間にもう一体を俺とレミリア（防御壁）が倒す」

「ねえ！？今、私の名前にかぶせて何か失礼な事を思わなかった！かなり負担になるんだけど……！」

「「「喧しい、お前の意見は聞いてない……！」」」

「わぁーん……！三人が三人でわたしをいじめるううう」

軽くレミリアを苛めた後、三人は誠輝の作戦によって二手に分かれる。本体の攻撃を受けても大丈夫な二人と分身を撃破する組だ。

「さて、行くぞ……シオ！」

「ハードボイルドの力を幻想郷に知らしめてやるぜ！サイクロン、ジョーカー……！」

弘樹の【ローリンサーチ】により本体に接触する二人。

「アハハ、ヨクコツチガ本物ダツテ分力ツタネ？デモ、分力ツタ所デドウニモナラナイヨ！！！」

「さてな、どうだろね！フランドール！！！！俺がお前を倒して持ち帰る！！これは宣言するぜ」

「わあ、痛いよお……此処に酷いぐらいにペドがいる」

「ロリ以外欲情できません！」

「「こいつ（コノ人ハ）は本物だあ（ダヨ）！！！」」

最終的にはフランにもツツコミを受けた弘樹。君の少女に対しての情熱は幻想郷だけではなく全世界へ伝わるだろう。この殺り合いを通して弘樹が強者として覚醒していく……そんな運命がレミリアには見えたそうだ。

「さて、あつちはあつちで仲良くしているようだが……分身ぐらいなら余裕だろ？」

「えっ？何で私の方向を見ながら喋るんだ！」

「姉だろ、逝け」

「他人事だと思っ てええ！！！！」

涙目になったレミリアが弾幕を放つ。誠輝はその後ろで近代兵器口ケットランチャーをリロードしていた。

「才姉様、ソノグライノ弾幕ジャア満足デキナイヨ！！！！」【禁弾過去を刻む時計】」

「これぐらいなら何とでもなるのよ！舐めないでよね！！！」

恐るべき速さで弾幕をかくぐるレミリア。人はこの状況下においての一定以上の身体能力向上をやケクソと呼称する。

「ヤケクソ、万々歳だな。さて、レミリアが引きつけている内に……」

ロケットランチャーのスコープ部分を覗き込む。そこには二人の姉妹がとても遊んでるとは言えない雰囲気醸し出しながら戦闘を行っている。このままではレミリアも巻き添えになる可能性が高い。

人道的に考えれば妖怪であろうと味方に向かって攻撃を放つなどし

ないのが当たり前だ。

「ああ……面倒だな。レミリア、撃つぞ！ファイヤアアアア」

「えっ！？ちょ、ちょっと待っ……」

ピチューン

こうして黒こげの吸血鬼が一体出来上がったそう。

「こっちは終わったぞ！」

「なら、援護してくれ」

「あれ？レミリアは何処だ」

「ああ、あいつは自らを盾にして俺を守ってくれたんだ」

「そうか、じゃあレミリアの分まで俺たちが頑張ろうぜ！シオ、誠輝に対しての弾幕だけを防いで俺たちは防御にサポートするぞ！」

「おう！ルナ、トリガー！！！！！」

志々雄の動きが変化する。小規模の弾幕を湾曲した撃ち方に代わり、軌跡を描きフランの弾幕と一緒に消失する。

「面白イネ、私と遊んだ人間は直ぐに壊れちゃうのに貴方達は違う……だから、もっと楽しませてね！！！」【禁忌 レーヴァテイン】

狂気の薄れた笑みを浮かべたフランが炎の剣を振りかざす。巨大な熱量と共に全てが蒸発する……だが、例外が幾つかあった。志々雄と弘樹の存在だ……この兩名は、簡単には倒れない、膝をつく事を知らない。DM、ロリ根性故に……倒れないのだ。何があっても倒れる事がない不屈の闘志（性欲的な意味で）を嫌な方向から創り上げる二人の防御は熱く、硬く、崩れない城壁と化した。

「おい、妹様から楽しませてねだよ」

「ああ、言いたい事は理解したぜ！つまり……勝って、ニーソ履かせて、脱がせという事だな……！」

「違うわぁ……！最初の二つは許せるとしても最後はoverゾーン突撃どころか大気圏外射出されとるわ……！」

「弘樹は何時もの事だからいんじゃないの？それより俺はぐーやに言われた事を実行するまでよ！おおおおおお……！燃え上がれ、ハードボイルド魂……！」

レーヴァテインに向かって志々雄が腕を突き出す、それに乗じて誠輝は弾を装填。弘樹は炎の剣へと渡された銃……モゼルC96を掲げる。ブルームハンド（リップ）を握り、引き金を引く。

「紅魔館……ごめん……！弾幕はパワーだと誰かが言っていたあああああ……！！！！！！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオ

極太のレーザー状の弾幕がレーヴァテインの刃先を砕き紅魔館の壁を薙ぎ抜く。

「WRYYYYYYYYYYYY!!!!」

「うわっ！？弘樹が最高にハイって奴だア！になっ
てるんだけどよ」

「気にすんな、何時もの発作だ」

「なら仕方ない！」

ただ今、紅魔館の耐久率34%

このままでは紅魔館の存続にかかわるようだが我々が三人の奇人どもは全くと言うほどに容赦ない。

「凄い！？魔理沙みたいだ！」

「凄いのは弘樹だけじゃないぜ！ふんっ！」

「うそ……私、思いつき振ったのに……止められた！」

「よし、シオ。お前は人間じゃない！HEROだ！」

「永遠亭が俺を呼んでるZE……！」

レーヴァテインを身体全体で受け止める志々雄。内心、熱いのだろうがこんな場面なのでアドレナリンが大量に放出されており痛みどころか疲れがない。

「さて、お開きだ。シオ、掴んだままでいろ！弘樹撃て！おしゃあ、ファイヤアアア……！」

シュボーン

金属の筒から炎をあげて鉄の塊が飛び出す。

「それは痛いから壊しちゃおうつと！きゅ……として……えっ？」

「それは問屋が許さないね。うん、俺せつかちだから、既に五発撃つてるから、そして弘樹！」

「オウともよう！！！！ロリの戸惑う姿は世界一！！！！」

ミサイルを破壊しようとしたフランだが多方向からの攻撃に注意をひきつけられ……

ノ、ト、ト、ト、ト、ト

着弾

「ん、ちよつと痛かったかな。お洋服も汚れちゃったし……」

「んっ？衣服が傷付いた程度か……じゃあ、次はスティングーミサイルを打ち込む」

「【ローリンサーチ】派生版……ロリアイズ……ぬぬっ！？フラ

ン讓の衣服の耐久率が43%まで低下！！！いいぞ、もっとやれ！
！！やわ肌を見る機会に近いぞ！！！！」

「うわぁ、すげえペドペドしい」

「何その新種の単語……」

通常ミサイルではフランには余り威力がなく衣服を多少焦がしただけとなったが代わりに弘樹のテンションがオーバーした。

「ふう、フランドール＝スカーレット。そろそろ、終わりにしないか？俺たちは今から最強の攻撃を君に向かって撃つ。だから、君も最強の一撃で迎え撃ってくれ」

「うん、分かった！後ね、フランでいいよ、お兄さんたちは面白いね」

邪気のない屈託な笑顔で笑うフラン。その笑顔に一同にやける。

「くぁわいくねえええかあああああ！！！！」「」

「？」

叫んだ三人の行動が良く分らずフランはきよんとする。この三人、性癖は違えども原点は萌え……つまり人類は萌えで繋がっている。

「よし、行くぞ……笑顔の為に！」

「きやふううう、フランさんの為に！」

「ラジャ！ハードボイルドらしいやり方で決める……輝夜の為に！」

「じゃあ、行くよ!!!」【禁忌 禁じられた遊び】

三人が各々の武器を構え、フランが大量の十字弾幕を放つ。

「『三位一体……！』外来人最強究極奥義【バルス】……！！！！！」

「……………」

叫んだ後、三人は呟く。

「『紅魔館、粉碎 玉碎 大喝采！！』フハハハハハハ」

- - - - -

慧音 side

ちょっとした事を報告する。

私は夢でも見ているのではないかと愕然とした。

紅魔館当たりで一つの大きな炎の柱が立っているのを深夜見かけたからだ。

これは、一体どういう事なのか……追及が必要だな。

それにしても……あのSMとかいうのは……癖になりそうだ……で、違う！？断じて、ちょっと良かったなと思った訳ではない！！！！

はっ！？私は一体誰に弁解しているんだ？疲れているのか……もう休もう、あの騒ぎだ…どうせ、天狗が新聞に書くだろう。それを見てから事の真相を調べるのも遅くはない筈だ。

-
-
-
-
-
-
-

o u t s i d e

【誰かのメモ】

外来人三人が幻想入りを果たして約一日と半日……紅魔館倒壊。

現状で彼らを止める事が出来るのは……数少ない最強妖怪たちぐら
いだ。

さて、どうなるやら。

- - - - -

こうして、幻想郷にある赤い屋敷は一日と経たずに崩壊したという
……そこにいた人物がどうなったのかはまだ誰も知らない。

紅魔館には申し訳ないが倒壊させてもらう！（後書き）

誠輝

「……………まいったな」

志々雄

「やりすぎた……………」

弘樹

「目があ目があ……！！」

次回予告

紅魔館が吹き飛び、全員の意識も吹き飛ぶ。

さて、次回は紅魔館粉碎後のお話です。

日常partと称する奴です。ちなみにフランのスリーサイズはご自分の判断に任せますので……………私は、70、50、62ぐらいかと想定

ご報告

この小説のPVが15000を超えたら、主人公たちの個別個別の短編を作成しようと思ってます。

よければそっちの方もどうぞ。

次回更新

11月2日(火)

紅魔館がオワタしたのは、俺たちの所為か？いいや、違うね！（前書き）

あらすじ

紅魔館

「ぐああああ、後は……………任せたぞ」

レミリア

「私の館がああ……！」

誠輝

「紅魔館は大切な物を守る為に砕け散ったんだ」

志々雄

「そうさ、有難う！紅魔館！また会う日まで……！」

弘樹

「倒したのは俺たちだな」

誠輝・志々雄

「知らないしーらない……！」

弘樹

「酷過ぎるwww」

紅魔館一同、ホームレス。

どうやら、図書館は生き残る。

タグ

『ホームレス吸血鬼と愉快な仲間達』

『禁句【危険！歳に触れるな】』

『安心と安全の問題ない』

『ソウルフレンド 誠輝 + ゆうかりん』

『希少で奇妙な派生妖怪』

『悲しき妖怪の末路』

紅魔館がオワタしたのは、俺たちの所為か？いいや、違うね！

Out side

- - - - -

【人里（昼）】

「なあ、あれから三日だな」

「そうだな……で、シオはどうしてるんだ？」

「ああ、あいつなら永遠亭でぐーやの椅子やってるぽいよ……椅子
なのに弘樹より時給高いな」

「何だろう……必死でアルバイトしていた頃の自分が情けない……
悔しいのお悔しいのお」

あれから三日、誠輝たちは崩壊した紅魔館のおかげで負傷した。

現在、誠輝は頭に包帯を巻いて、左腕にはギブスを装着している。

ちなみに弘樹は、顔全体が隠れる程の量の包帯に全身を覆い尽くす

ほどの包帯で……所謂、ミイラ男状態だ。こうなった経緯は弘樹の性癖にある。

咲夜が治療すると申し出たが、フランも負けじと治療をすると断言。誠輝は嫌な予感がして咲夜に頼み込んだ、弘樹はいうまでもなく……結果的にこうなった。

「その馬鹿二人！！！！いつまで休んでる気！！！！さっさと来なさい！！」

「レミリア、アンタね……あれ見て、休んでいるように見える？私には負傷して動けないにしか見えないわよ」

前方には赤白の巫女と小さな吸血鬼が各一名ずついる。誠輝たちは、現在人里の茶屋でゆっくりしていた。

「はいよ……重い腰を上げますが、弘樹さん」

「そうですね……誠輝さん、老体には響きますねえ」

「「あんた等若いでしょうが！！！！」」

ボケをかましていると霊夢とレミリアにツツコミを入れられた二人。

「やれやれ…シニアギャクが通じないのか」

「あれだな、二人ともシニアだかららじゃねええ……」

「神霊【夢想封印】」

「神槍【スピア・ザ・グングニル】」

「ぎゃああああああ！！！！」

「ああ、ご臨終だな。さて、歳の事は弘樹の存在と共にゴミ箱へシ
ュートして、これから買い出しだったな」

と、誠輝は瀕死から死亡に変わったミイラをほっというて立ち上がる。
身体の節々が痛む所為か若干、顔をゆがめる。

「ふふん やっぱり人間は弱いわね、私たち妖怪はすぐに直る身体
だから便利だわ」

「そう？………ていつ！」

「みゃあああああ！！！」

霊夢のチョップがレミリアの脳天を直撃。無様に地べたを転がりまわるレミリア、その額からは赤い雫が滴り落ちている。

「はは、簡単には再生できまい。俺が撃ったミサイルは対吸血鬼用の材料が含まれていて出血を止まらなくする」

「それを……私たち姉妹に躊躇なく撃つお前は鬼畜か！」

「畜生道とかけて鬼畜と解く……」

「何よ行き成り………というか何？」

「その心は？」

「えっ？霊夢？？？」

「敵殲滅まで、どんな手段を持ってしても殺る！」

「上手くないから！！人の道外れ過ぎ！こんな人間見たの初めてだわ」

「されど、世界は回る………と言う事だな、誠輝」

「「「うわっ！？いつの間にか復活してる！！」」」

黒い包帯（黒こげ）の包帯を全身に巻きつけた弘樹が復帰した。

「さて、紅魔館組と路頭に迷って三日か……」

「あれは、驚いたわよ。まさか、ボロボロのレミリア達と誠輝と弘樹が帰ってくるんだもの」

「だったら、博麗神社に住ませろよな」

「絶対にお断り。あんな大所帯を家で養える訳がないじゃない！」

「まあ……やっと、再起したからな。しかし、命の恩人をほっぽり出すのはどうかと思うがね……そこそこどうなのよ、楽園の巫女さんよ」

「うつ！？確かにあれは助かったけど……それとこれとは別問題よ！」

分が悪いので強引に会話を終了させる金欠巫女。されど、見捨てはしないのが彼女なりの優しさなのかもしれない、ただし家には泊めてもらえないが。

「まあいいや、自給自足も悪くない」

「そうだな、家でも作るか？」

「ログハウスか……ジジイが昔造ってたな……入室と同時に崩壊したが」

「欠陥住宅は造ってくれるなよ」

「なあ、幻想郷に来たんだからさ。俺たちの家でも造らねえか？ 勿論、個別個別で」

何となく提案してみる誠輝。内心、ホームレスは嫌なので仕方なく造るか的な感じである。

「面白そうだな！ よし！ バルの塔でも建設するか！」

「何故、それをチョイスしたかは知らんが完全に造り終えるまでには明らかに人間寿命が終わるぞ」

「大丈夫だ、問題ない！」

意気揚々と歩いて行く弘樹、傷の痛みは何処へやら。

「まあいいか、シオにもこの事は言っとくとして……レミリア何故にそこで俺を睨む」

「お前たちが壊した紅魔館の代わりに住む場所がないというのに貴様らだけ安息地を造るとはどういう事だ……！」

「レミリア五月蠅いわよ。いい加減にしないと……誠輝が吹き飛ばすわよ」

「俺かよ！？まあ、間違っではない」

「そこは否定してほしかった！あれを二度も喰らうのはごめんだからね！」

この頃、色々とブレイクし続けるおぜう様。彼女にカリスマが戻る日は何時なのか！

乞うご期待！

「じゃあ、弘樹ん所に住むがいい」

「嫌よ！？何されるかわからないじゃない！」

「大丈夫だ、他の従者や妹やらは俺がどうにか仮物件を探しとく」

「嫌アアアア！！私の心配をして！」

「だが、断る！」

「断るなあああ！！！」

「あら？紅魔館の吸血鬼が人間と遊んでるなんて珍しいわね」

さつさと居なくなった弘樹と霊夢の代わりに声がかかる。新緑色の
頭髮にチェック柄の服装、日傘を差す彼女 風見 幽香である。

「……………フラワーマスターか」

「何？そんなに睨んでも遊んではあげられないわよ。それと……………そ
この人間に少し質問いいかしら？」

「俺っすか？別に構いませんが」

幽香は、日傘をたたみ近づいてくる。

「貴方……………今、この吸血鬼を弄ってたけどどうして？」

「そこに弄り倒せるモノがあるから」

「ふーん、じゃあ次ね。好きな花はあるかしら？」

「アサガオかな……小学生の時に種から育てたのを鮮明に覚えてる。あれは、苦勞した」

「なるほど……貴方とは良いお友達になれそうね」

そう言うとなんやら面白モノを見つけた子供の様な笑みを浮かべる幽香。それに対して誠輝は歪な笑みを浮かべる。

「ええ、そうですね。長沢誠輝です……くくく」

「風見幽香よ、何時か太陽の畑に向日葵でも見にいっちゃい。歓迎はするわ……ふふふ」

「何この二人尋常じゃないぐらい怖い！？咲夜あ！助けて咲夜あ！！！」

その頃、弘樹は…

「可愛い子はいねえがぁ？」

「出たわね！妖怪・ペドはげ！幼女ばかり狙うその悪行を許さないわ！」

「わく、巫女さんカッコいい！」

「行け！我らが同胞！！！！」

何故か寺子屋の前で軽いお芝居を展開していた。

【妖怪・ペドはげ】

なまはげの派生系……子供をさらいすぎてロリコンに目覚めてしまったなまはげの末路。

「まさか、適当に頼んだ芝居が此処まで人気が出るとは……外来人とは凄いものだな」

一人納得する慧音先生であった。

紅魔館がオワタしたのは、俺たちの所為か？いいや、違うね！（後書き）

誠輝

「心と心が通じ合う！ソウルリンク！」

志々雄

「俺は輝夜の椅子だ！それ以上でもそれ以下でもない！」

弘樹

「可愛い子はいねえがぁ！……あれ？何か気にいった、よし……俺は妖怪ロリはげになる！」

霊夢・早苗

「「妖怪退治！……！」」

弘樹

「ぐああああ……俺を倒した所で第二第三の俺が……がく」

次回予告

人里は何時も平和です。嘘じゃないよ！

さて、永遠亭の志々雄はこの休日はどうやって過しているのか……

次回更新

11月4日（木）

永遠亭ライフ！（前書き）

あらすじ

日常編？

妖怪と人間が繋がり合う日（趣味的な意味で）

元に戻る事のないカリスマ

妖怪紳士（笑）

タグ

『これが本当の札無双』

『哀れだぜ、鈴仙』

『逃げて！ドランクストア』

『永琳先生の投薬実験室（第一回目）』

『改造されたDM』

『超人類SISIO Mr.2』

永遠亭ライフ！

【永遠亭（昼）】

「スキあり！！！」

「何のこれしき！！！」

「そこおおお！！！」

「うおおおおお！！！！！」

永遠亭内部、志々雄は輝夜と燃え上がる様な接戦を見せていた。

主に百人一首で…

「はあはあ、言い勝負だったわ。さあ、数を数えなさい！！！」

「よしっ！1枚、2枚……」

「私も……1枚、2枚、3枚……」

結果……

「1枚足りないいいい！！！！」

「また勝ったわね。32対0で圧勝」

「嗚呼、姫様に勝てる気がしません」

輝夜圧勝。志々雄は、32度目の膝をつく。

「旧世代の遊びは、飽きてきたし……そうね、モンンでもしまし
ようー！」

「ういっす。さて、どうぞ」

「ええ、よいっしょと」

「step onto……！」

手なれた仕草で即座に椅子になる志々雄。もはや、板についたし
か言いようがない。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「あれえ？もしかして、俺一落ちするの慣れてきた？」

「落ちるのに慣れてどうすんのよ……まあ、倒したからいいけど」

「いやはや……面目ないです」

三時間後、志々雄は輝夜の遊び相手として頑張っていた。勿論、椅子としてもだ。

体制的には両肘、両膝を地面につけて輝夜がバランスを崩さないように調節している。

ハードボイルドだけあって女性への気遣いは忘れない、ぞう……や
っている事が変態的であってもだ！

「シオ、居るかしら？あら、手が震えているわよ」

「だが、俺は倒れない！姫様を落とすなど言語道断！！この腕が砕
けようが魂砕けるまで背負って見せます！！！」

「えらく、男らしい台詞だけど……まあ、現状の格好で言われても
なんだかなあて感じね」

「それより、何か用なの永琳」

永琳は、志々雄の様子を見て最初は驚いていたが此処、三日ほど住
み込みで働いた結果……慣れたのである。ちなみにこの二日の間に
鈴仙はどうか救助された。実に屋根に刺さって一日半ほどスルー
されていたのである。

その為に今は自室に引きこもって自分の影の薄さと永琳達からの扱
いについて自問自答中だそうだ。

「輝夜、少しの間…シオを借りるわよ」

「そうね……新しいPC買ってくれたら……ちょ、永琳待った!？
流石に死なないけど弓を向けないで!」

「一度、頭冷やしてね?」

「こ、殺される!…死なないけど殺される!…」

笑顔で弓を放つ永琳。このままでは、輝夜の頭に命中し18禁ばりのグロ画像が展開されてしまうだろう。

だが、この愚行をこの男は許さない!

「ぬおおおおお!…!!真剣白刃取り!…」

「あっ……」

ザク

「ぎゃああ!…!!ミスったああ!…!!でも、気持ちヨス!」

「出血してるわよ、でも助かったわ」

「いえいえ、姫様を助けるのが俺のmy Dreamですから」

「はあ、どうでもいいから来なさい」

「はあい!!--」

「いつてらしゃい」

こうして、志々雄は額に矢を突き刺したまま永琳について行った結果、何時も通りに突っ込んできた妹紅に不死身かと勘違いされたのはまた別の話である。

「さあ、今日はこれを服用してもらおうよ」

「えらくたくさんありますね。これは……何故にドクロマーク付きなのか、これは……緑色？何て死亡フラグ？」

「大丈夫よ……きつとね」

永琳に案内された志々雄は、テーブルの上にある尋常じゃないほど

の薬品類に目を丸くした。

「うん、俺……姫様の椅子に慣れたから死んでもいいわ！男なら一氣にやるべし！！己の道を自分で切り開く！！頂きます！！！」

適当にテーブルの薬品を一気飲み。見事な死亡フラグ……

「じはっ！？」

ドカーン

一つ目、何故か爆発した。

「あら？失敗ね、調合ミスかしら？それとも出来そうもない材料を使ったのが原因かしら？」

「確実に後者ですね」

そう言って志々雄は、別の容器に入っている液状の薬品を飲み干す。

二つ目、何故か涙が止まらなくなった。

「涙の数だけ強くなれるよ、俺最強じゃん」

「そうね、玉ねぎを入れすぎた様ね」

「材料に玉ねぎ……前衛的だ」

で、次…

三つ目、眼球が光り出した。

「目からフラッシュ……これで敵の命中率を随時下げられるぜ！
！！」

「電球を入れすぎたかしら？」

「わお…流石、天才。考え方が俺たちとは別次元にあり過ぎる！」

四つ目、アフロになった。

「爆破　ズラ！爆破　ズラ！」

「火薬の煮込み過ぎかしら？」

「もう、気にしないぜえ！俺は全力で薬を頂く！」

五つ目、体力が回復した。

「普通だ！ここにきて普通だ！」

「嵐の前の静けさ……」

「怖い事言わないで！」

六つ目、何故か小町がこっちにむかって手を振っていた（志々雄談）

「危なかった……三途の川に近い場所にいた」

「臨死体験とは貴重なね。その体験を生かして次へ進みなさい」

「綺麗にまとめているけど……原因は貴女です！」

七つ目、ラッキーセブンなんてものはあり得ない。

何故か、全身から血が噴き出した。

「……………（返事がないただのドM野郎のようだ）」

「……………。心肺停止、午後二時三十五分……死亡っ」と

こうして、志々雄は軽く死んだ。

だが、簡単に終わる筈もない。

何故なら、天才薬師がいるからさ！

「さて、ヒーローに憧れているみたいだから……何処かの特撮みたいに改造してあげましょう」

カンカン、ガシャン、キュイイイイン、ピンポーン、はい、どなた？ああ、それなら……

- - - - -

五時間後…

「はっ！？俺は、何処で何をしてハードボイルドになった！」

「はいはい、それは言いとして身体の調子はどう？」

「えっ？……何故にドリルが右腕に……」

「ドリルはロマンね。天元突破しなさい」

志々雄は右手の相棒に視線を向ける。鉄製の螺旋掘削機が光を浴びて光沢を放つ。

「あつ、普通に取れた。しかも、実は玩具か」

「あつ？ばれたか、何となくおちゃめ心よ」

「八意だけに？」

「誰が上手い事を言えと？てか、あんまり上手くないわよ」

志々雄は自分の身体に違和感を感じていた。普段よりも五感が鋭い、遠くの音や現視力では見える筈もない棚の中にある薬品名すら読めた。それに身体が軽い、何かが充実している。

「一体：俺に何が」

「簡単よ、貴方は生まれ変わったのよ！超人類 S I S I O M r .
2に！！！！」

「カッコよすぎる！！ネーミングは兎も角、改造人間になったのか！変身は出来るんですか！」

「それは無理。代わりに物質に合わせて振動を送ることが出来るわ」

「それって……原子分解できるんじゃない？」

「勿論、ア ター能力みたいね」

「ラディカルグットスピードで走りたい！」

こうして、誠輝たちが平和（？）を過している間に志々雄は人の道を踏み外しまくった拳句の果てに色々を超えた存在へと昇華した。

「俺は……ハードボイルドになるんだあああ……!!」

月夜の晩に一人の男が叫ぶ。

その名は、『超人類S I S I O M r . 2』

恐るべき、ドM能力と精神力をかけ合わせ、更に肉体改造を施された事によって妖怪すら超えた存在となった。

そして、一番驚くべき所は、改造当事者のネーミングセンスであった。

永遠亭ライフ！（後書き）

誠輝

「次回は、家を作る！」

弘樹

「レミリアと同棲したい！」

志々雄

「ファイナルフュージョン！！！」

次回予告

何だかんだで平和な日々を送りだす三人。

だが、平和は突如破壊される。

次回、地底に謎の影が！

次回更新

11月5日、11月6日のどちらか！

地底とか暗過ぎ・・・えっ？家の物件が地底？（前書き）

あらすじ

改造される志々雄

仮面ライダーSISIO

空気鬼

タグ

『紳士は決して碎けない！』

『進化したツツコミ』

『削除された何か』

『意外と天然たらし』

『このツンデレに俺の人生を…』

『ツンデレに心打たれるDS』

『紳士VS変態紳士』

地底とか暗過ぎ・・・えっ？家の物件が地底？

弘樹 side

「という訳で住居を建てれる土地を探している。慧音先生、何処かにいい物件があるか知らないか？」

「行き成り、来てそれか……」

という訳で俺たちは寺子屋こと幼女の防衛基地にいる。誠輝は、素晴らしい提案してくれた、そう…家を建てればそこに同棲できる可能性が発生するという事だ…素晴らしい、実に甘美な提案だ。

これで、迷子^{レミリア}の子供などを保護できる！

「すまない、その件に関しては微妙な所だ。今の人里は、人口が増えていて、あつ…勿論、君たち外来人が増えたせいではない。子供

に恵まれている家族や長生きする老人というのが増えてきていてな。人里の土地に開いている場所がないんだ」

そう答える慧音先生。

御尤もな意見だ。だが、俺たちの反応は違う。

そう、根本的に違うのだよ先生！！！！

「あゝ、人里内部だけではないんだけどな。なあ、誠輝」

「そうだな、俺たちは別に外でもいいんだが。一応、森の一部を使って家を作成するからには許可が必要かと思った」

「おお、意外と礼儀正しいな。まあ、天狗の新聞は余り当てにならないのは知っていたが……チルノやルーミアに証言を聞いた結果の判断だったか……」

何故か微妙な視線で誠輝を見る慧音先生、その視線を面白いモノを見つけた子供の様な目線で見返す誠輝。一体何が二人の間であったのだろうか？

「さて、俺は出来れば地底入口付近がいんだけど」

「ふむ、あそこは誰も近づかないんでな。自然バランスを崩さない程度なら木材の生産を赦そう」

「有難うございます。で、弘樹はどうすんだ？」

「んっ？俺か、俺は……魔法の森でいい気がしてきた」

「何で？」

「迷子の子供や遭難している人々を助ける為さ！」

「本心は？」

「幼女が迷い込まないかな……！」

すると、誠輝は器用に片手でロケットランチャーを構え……

「見敵必殺！削除削除削除おおお……！」

「ぎゃあああああああ……！！！」

この後、俺の悲鳴が何度も人里の中に響き渡った。

- - - - -

o u t s i d e

誠輝と霊夢は、地底入口付近にいた。

だが、意外と殺伐とした状態。つまり、低級妖怪に囲まれているのだ。

「意外と居たわね。本当にこんな所に家を造るつもり？」

「まあね、此处なら旧都にも行けるから何かと便利なんだよね。でも、先ずは香霖堂までいけるようにならないといけないがね」

「そうね、先ずはこれをどうにかしてからにしましょう!」

「そうだな!」

同時に散開する二人。霊夢は得意の霊力を駆使した弾幕を放つ、被弾した妖怪はあえなく吹き飛んでいく。

同じく誠輝は、左手がギブス故に右手だけを使って青龍偃月刀を振り回している。遠心力を使い上手く操る為に殆ど腕の力はいらず、腕力がメインとなる為差ほど問題はない。

「これで、終わりよ!【霊符 夢想封印】」

「吠えよ、青龍ウ!!!」

霊夢の夢想封印と誠輝の某ゲームキャラばりの乱舞で会えなく消し飛ぶ妖怪の群れ。

「ふう、片付いたな。さてと、場所はこの辺りでいいとして……木材は、どうするかだ。俺は建築業をやっている訳じゃないし林業も得意ではないし……その辺は、人里の職人に任せるとして」

「そうね、萃香にでも頼む？あいつなら問題なく家ぐらい一日で造るわよ？」

「あゝ、そういえば、そうだね。よし！萃香に頼もう！」

「それに確か、萃香は今旧都に行ってるみたいだし……あんたもついでに連れて行ってあげるわ」

「マジすか！霊夢のそういう所、俺好きだぜ」

「はあ、馬鹿な事言っでないでさっさと行くわよ！」

「へい、ボス！」

- - - - -

「赤白の巫女が男を連れてきたのね、妬ましい」

「冗談は、その発言だけにしとかなないと退治するわよ、主に誠輝がね！」

「俺に全て回せば何でもかんでも解決すると思うなよ！」

地底入口、水橋パルスィと霊夢たちは言い争っていた。

現在、地底では謎の妖怪が出没し混雑しているそうだ。その原因は主に旧都での妖怪騒動らしい。

「さて、行かせて貰うわ。さあ、行くわよ誠輝」

「ハイよ、でも出来れば一緒に飛んで欲しい」

「嫌よ、なんで私が」

「私を無視するなんて、妬ましい」

「もう、パルスィ！君しかいない！！！助けて！この地底をウオーキングするとか正気の沙汰じゃねえ！お願いだ！他に頼れる奴が居ないんだ！」

「……………」

「あれ？どつたのパルスィさん？」

さっきまで『妬ましい』と朗読していたパルスィの動きが停止して誠輝を驚いた目つきで見つめる。

「私だけが……頼り？」

「そうさ！君しかない！君にしか頼めないんだ！」

「はぁ、急いでるんだけど？」

「喧しい！誰のせいでパルスィに迷惑かけてると思ってる！この駄巫女！」

「アンタ、いい度胸してるじゃない！けが人だからって手加減はしないわ！」

「……私にしか頼めない。君しかない……はじめて言われたかも」

一色即発の霊夢と誠輝を余所にパルスィは、一人自問自答。

この人間は、私を必要だと言った。毛嫌いされて、地底に追いやられた私を必要だと言ってくれた。

不思議と悪い気分じゃないパルスィ……で、当の本人はというと

「オラアアア！！！！必殺『ハリセン』ツッコミ！」

「弾幕を弾く、鉄製のハリセンねえ。ちょっとばかしずるくない？」

「人間は、武器を持ってこそ真価を発揮する！力がないなら、武器を取れ！ツッコミが効かないならアイテム使え！てな、所さ！」

「めんどくさいわね！【博麗アミュレット】」

「うわ！？ズルイ！横暴だ！だが、スネーク直伝！足元に向けて口ケランアタック！（A長押し）」

と、まあ愉快的な攻防戦を繰り広げていた。

「いいわ、その飛べない人間は私が連れて行ってあげる。別にあなたの為じゃないんだからね！私が、旧都の知り合いに会いたくな

っただけなんだからね!」

「このツンデレの優しさに俺の心が泣いた!」

「めんどくさいわね。さ、行きましょ。萃香にも用があるんだしいでい異変解決よ!」

そうして、誠輝たちは地底を進む。

その頃、弘樹は…

- - - - -

「何度でも蘇るさあ!!!」

「ちっ!このロリコン野郎が!」

「何だと!ロリコンで何が悪い!この心に灯る熱いパトスは誰にも止められないぜ!」

人里の入り口付近で、殴り合う二人の男。

片方は、言うまでもなく我らが変態紳士こと水無月弘樹。

もう片方は、黒の混ざった茶髪を短く切りそろえた青年。

名を大空^{おおぞら}強^{つよし}と言う。

彼は、幻想郷でうつすらと人気（主に子供）を誇る面倒見の良い好青年だ。

此処までに発展するのには、少々時を遡る必要があった。

次回へ続く。

地底とか暗過ぎ・・・えっ？家の物件が地底？（後書き）

初めに、すみません。

学校の課題をやっていたので更新が遅れました。

最後に出てきた『大空 強』はユーザー【澄田 康美】さんが造ってくれたキャラクターです。

誠輝

「あれ？フラグ立てた？」

弘樹

「爆発ズラ！爆破ズラ！萃香は何処だ！ツルペタYOUJO!!!」

志々雄

「姫様以外に興味なし！」

次回予告

何気にパルスイを引きいれた誠輝一行は、どうにか地霊殿へと辿り着く。……そこで彼らが見たモノは、怪人ペドXと謎のHERO体質の青年だった！一体、怪人の正体は誰なのか！更にそれと戦う彼は誰なのか！

次回更新

11月8日か?日

紳士VS心の底から少女を愛す男（前書き）

あらすじ

パルスィが支援装備な誠輝

何もしない様で何もしない巫女

紳士が現れた、ロリコンも応戦

タグ

『謎の感動』

『紳士による決闘』

『真の悪魔が覚醒』

『ロリコンは紳士を憎む』

『紳士は悪を憎む』

『小説の趣旨が変わった章』

『真なる漢たちの闘い』

紳士VS心の底から少女を愛す男

それは、数分前の出来事だった。

誠輝は、弘樹に地底付近に家を作る為にという理由で霊夢を借り、弘樹と一時的に別れた。

「で、レミリア……どうするんだ？」

「どうするも何も、咲夜が動けないんじや私が動くしかないわ。はあ、あんたらが弾幕ごっこを超えた戦いを行ってくれたから紅魔館が大破する様な出来ごとになったんじやない」

現在、咲夜さんを含める紅魔館メンバーは、治療の為に博麗神社で休んでいる。咲夜は、軽傷で済んだのでパチュリーやフランを重点的に世話をしている。つまり、レミリアの命令でついて来ていない。

「まあな、その節はすまないと思ってはいる。が、謝罪した所で紅魔館は戻ってこないしな……ま、大工にでも頼んでみるか」

「そうね、妹も暴れた事だし……賃金は4当分でどうかしら」

「いんじゃないか？誠輝が納得すれば」

「うつ、痛い所を突くわね。あの男が納得するかどうかが問題よね」

紅魔館を立て直す為に色々と試行錯誤しているレミアだが、一向に纏まる気配がない。このままだと弘樹の家の方が先に立ってしまった同棲フラグが立ってしまうだろう。

「はあ、前途多難ね。あら？あれは何かしら……氷精と妖怪たち？」

「なにっ！？ロリの宝庫だと！誰だ！あいつは！」

前方でチルノ、ルーミア、リグル、ミスティアの四名と戯れている（弘樹にはそう見える）青年が一人いた。

「ほらほら、危ないぞ。そこは、この間雨が降って腐ってるんだ。こつちを歩きなよ」

「はい、にしても今日はいい天気だね、空にいい」

緑髪のリグルはそういうとにこやかに笑う。そして、弘樹は黒い感情があふれ出す。

「危ない！、ミステリア！」

「わっ！？」

そう言っで、大工が落とした板を片手で止める青年、大空 強。

「ありがとう、空にいさん」

「それより怪我はないかい？」

「ないわよ」

「なら良かった」

笑顔になるミステリアを見て、ほほ笑む強。きらつと白い歯が魅力的だ。

ついでに補足すると、今の仕草に弘樹の血管が切れた。

「何あれ、何あれ……むかつくぐらい見せつけてくれるじゃないか」

「いや、あれ、単に助けただけの面倒見のいい兄みたい存在なん

じゃ？」

「それが、余計に俺を腹立たせる！ああいうキャラが一番嫌いなんじゃないああ！！！」

「うわっ！？誠輝以上に目つきが悪い分、霸王どころか私のスカーレットデビルの称号を返上したくなるほど悪魔っぽい！」

周囲の地面に小規模なクレーターを造る弘樹。人の憎しみは、何かを色々と超越させる。

「嗚呼、神は奴を殺せと私に命じた！」

「神が人間を殺せっていうのならば、一番先に目をつけられるのはあんたよ！」

「否、我が神……【ロリ神】様を言いなさった……『ぶっちゃけ、ロリータ守る為ならなんでもやってよくね？』てな」

「その似非神を今すぐ私の下に連れて来い！！神槍で昇天させてやる！」

「残念、神は今……自宅でロリータを守るために日夜、ネットサーフィンでロリ画像を採取した後、そのサイトを削除している」

「意味は分からないけど、そいつがどれだけ駄目な奴かは270%

ぐらい伝わった！！！」

そう、弘樹が敬愛する神【ゴットオブロリコン】は、夏休みなので自宅警備員状態だ。

「ん？あれは、吸血鬼とガラの悪い少年だな。何か、やらなきゃいけない気がするんだが？」

「あつ！？あれは、あたいを襲って来た変態だ！」

「何っ！？あれが、射命丸の文々。新聞に載っていた変人三人組の外来人か！ならば、子供たちに被害が出る前に叩く！」

紳士もとい強は、地面を蹴る。縮地方による大幅な接近術、常人であれば見切るところか気付く事の出来ないほどの完成度だが……

「そっちから、来てくれたか。嬉しいね、これで俺も増分にてめえを殺れる！」

「この接近に気付いた！武術を使えるのか！」

弘樹は、接近して来た強に向かって腕を薙ぐ。勿論、強もそれを難なくかわす。

「ふう、新聞で変人と聞いたからただの学生か何かかと思ったからこそ動けるみたいだな」

「俺は強くなった。幻想郷に来て知った事だ…外の世界よりスムーズに身体が動く……不思議だな」

「成程、お前は魔の力に慣れたんだな」

「魔の力？魔力とかそんなもんか？」

「そうさ、恐らくだがお前は魔法の森とか魔力の瘴気が強い場所に行ったりしていないか？」

「そついえば……成程、だから弾幕が撃てるようになったのか」

腰のホルスターからモーゼルを引き抜く。

「弾幕ごつことは言わん！せめて正々堂々と貴様を倒し、俺は自分の道を行く！」

「ならば！俺は、お前を止める為に全力でお相手をしよう！まずは、

場所を変えよう……」

「そうだな……なら、その森の奥でいいな。あそこならだれにも邪魔されず決闘が出来そうだ」

「ああ」

すると、二人は同時に駆け出し人里から急速に離れていく。後に残ったのはバカルテットと哀れな吸血鬼だけだった。

「ねえ、アンタ達、この幻想郷であんなに熱い奴らいたんだ」

「あつ、紅魔館の……レミリア・スカーレット。確かに空にいと互角にあそこまで張り合う人はいないよね。確か拾った本に書いてあったんだけど『HEROは、悪役がいて初めてHEROになる!』て……てことは、空にいいにも天敵?が出来たから万事解決て所じゃないのかな?」

リグルは、昔に拾った本の記述を必死に思い出しうる覚えで説明。

「そうなの……なんだか心配ね。ちょっと、着いて行こうかしら?」

「私たちは遠慮するわ。なんたつてあの空にいさんですもの……
…森の木々が三十本は折れると思うから」

「……規格外の外来人が多いわね。もう、これが異変でしょ？」

「さあ、分からないのだ」

「まあいいわ、兎に角私は行くわ」

「ちよつとまったあ……あの変態の所に行くなら、えーと……こ
ういつのをマッサージて言っただけ？」

「はっ？」

突拍子のない発言に一瞬脳内がフリーズするレミリア。だが、長年
一緒にいるリグルやミステア、ルーミアには分かった。

「チルノ、それ違うから。メッセージっていいんだと思います」

「ああ、寺子屋にまだまだ通う必要があるわね」

「う、うるさい、それよりあたいからメッセージよ！負けて悔し
かったらもう一度弾幕勝負だ！て伝えといて！」

「はいはい、めんどくさいけどついでに……（というか、何気に遊
び相手としてならやってけるんじゃないかしら弘樹の奴）」

- - - - -

【魔法の森 地底入口】

彼らは地底近くにいた。理由は簡単、此处には滅多に人間が訪れない為に絶好の場所だと思ったからだ。

「勝負は簡単だ。どちらかが気絶するまで……かけるモノは己の生き様だ！」

「分かった。受けて立つよ、さあ見せてあげよう……俺の『拳骨で沈める程度の能力』を！」

「お前の能力は、拳か……俺の能力は不明……あえて言うなら『口リータを愛し抜く程度の能力』だ！」

「それ能力違うから！」

「ナイスツツコミ」

「乗せられた！」

それが合図に弘樹が動く。持っているモーターで弾幕を乱射する。

「くっ、弾幕が厚い！だが、俺の拳で通り抜ける！」

「弾幕を素手で落とした……だと」

弘樹が放つ高速の弾幕を強は、恐るべきスピードで撃ち落としていく。正確には、弾幕を拳で沈めているのだ。沈めるとは、いわば腕力による強制的な物理ダメージだと思われる事が多いが、強はそれを含めて重力を足している。

つまり、拳の重圧で物質に超重力を上乗せ、更に腕力でねじ伏せる。

それが、大空 強の能力だ。

「ロリコンは、沈め！」

「させるかよおおおおお！！！！！」

腕をクロスして攻撃を防ごうとする弘樹と己の正義を身に宿し敵を

殲滅せんと拳を振るう強。

彼らの戦いはまだ始まったばかりだ。

で、レミリアはというと……

「なにこれ……もしかして、夏が暑いのはこいつらみたいなのがいるから？」

こっそりと近場の木陰で待機していたかどうか。

まだまだ続く

紳士VS心の底から少女を愛す男（後書き）

誠輝

「あれえ？これ何てバトル漫画？」

弘樹

「嗚呼！憎い、好青年が…本当の紳士がああ！！！」

志々雄

「やべえ、弘樹が悪魔に」

パルスィ

「凄い嫉妬ね。ちなみに私は一切彼に関与してないわ」

次回予告

変態紳士、地霊に舞い落ちる。

誠輝、覚醒の兆し

志々雄、闇夜を切り裂く金色の馬となれ！

次回更新

恐らく

11月11日、12日のどちらか

地底は広いな、大きいなあ・・・ただだと良かった（前書き）

あらすじ

暴走ロリコンVS肉体派紳士

陰でこっそりレミリア

タグ

『テンションが上がるBGMと同時に読んでください』

『伝説のお！俺の拳が真っ赤に燃える！』

『これが俺の自慢の拳だああ！！！！』

『空気が読めていない様で読んでいる金色の馬』

『俺がガンダムだ！！！！』

『禁句【ナイチチジャアナイヨ、ビニユウダヨ】』

地底は広いな、大きいなあ・・・ただだと良かった

「沈め！」

「ぐおおおおお！！！！！」

強大な重力を受けながら弘樹は、立っていた。

攻撃を受けた途端にこれだ、拳という概念に集中する分、威力は絶大。普通の人間（？）である弘樹にはやや耐えがたい力である。

しかし、弘樹は立っていた。

沈むことなく、周りの地面が衝撃によって次々と陥没していく中で彼は立っていたのだ。

「それがお前の拳か！だったら、俺も武器を使わず答えてやる。俺の正義とお前の正義：どちらが正しいか勝負だ！」

「いいとも！俺は、負ける為にはいけない。子供たちの未来の為に……俺は、負けない！」

その言葉と共に更に更に重圧が増す、レミリアの攻撃を耐え抜いた弘樹の身体でさえ悲鳴を上げる。全身に針を突き刺される様な痛みが弘樹の痛覚を刺激するがそれも構わず弘樹は、立ち続ける。

「何故倒れないんだ？武道を習っていたとしても俺の能力で強化された拳を受けたなら普通倒れるだろうに」

「ははっ、負けられねえよ。レミリアが見ている前で醜態をさらす訳はいかないんでな」

「ん？あの少女は、お前と一緒にいた…」

そこで強は、初めてレミリアが木の陰から気配を隠して事の成り行きを見守っている事に気付く。

当の本人は、びくつと身体を震わせてあり得ないモノを見た様な顔つきで弘樹を見ていた。

「うそっ……完全に気配を消していたのに何故気付けた？」

「ローリンセンサーにいつも簡単に掛かりました。無駄な労力有難

うございました」

「ええ……あんだ、本当に幼い子に関しては、異常な程に反応するわね」

微妙に慣れてしまったレミリアだった。何故か、そんな自分を思い起こすと心の中で涙した。

外来人に良いように吹き飛ばされ、罵倒され、妹に負け、家を失った。

最早、同情以外の心情がない。

「成程、新聞で紅魔館が倒壊したと聞いていたが……君が被害者で彼が加害者か、ならば本気で行くしかないな！」

「更に威力が強化された！くそつ、レミリアが脱いでくれればまだ力が出る気がする！」

「脱ぐかあああ……！」

「馬鹿野郎！裸とは、この世に生を受けた瞬間の姿で神聖な格好なんだぞ！」

「知るかあああ……！」

「この不埒なスケベが……！」

「圧力が増した……だと？何を間違えたんだ俺は！」

「全部だろうが……！！！」

コントは兎も角、弘樹の身体は限界を超えようとしていた。脚は軋み、腕は痙攣し始める。所々からギシギシと嫌な音が聞こえる。ちなみに一番の加害者は、現在地底を目指して浮遊している。

「このままでは、拉致が開かなそうだな」

そついうと打撃の反動で宙に投げだされる強、そして器用に空中で一回転して着地を決める。勿論、その時は無意識の内に華麗な笑みを浮かべ、白い歯が輝かしい。

（正直、助かった。拳で勝負しようにも俺は、ロリになら勝てるが男相手だとロリータバーストを使えな……待てよ、ロリならそこにいるじゃないか！）

弘樹は、閃いた。ロリータバーストは、幼女相手にしか効かない。だが、第二能力ならどうだ。

「レミリア、協力してくれ！こいつを倒すにはお前の力が必要だ！」

「脱がないわよ！」

「違う、それは追々として……」

「するなあ！！！」

「何故か、おいてけぼりな俺」

キャラが濃い弘樹が居る為に半空気と化しそうな肉体派紳士。

（何故か、レミリアの警戒が強い。ならば、秘策で行くか！）

弘樹は、一つの方法を思いつく。直ぐにそれを行動に移した。

「レミリアー！」

「何よー！」

「お前の胸は、幻想一無いに等しい！！！！！！」

辺りが静寂に支配される。

ここで整理してほしい、レミリアは500年以上生きている。それで、あの体格、そしてすつかすかのまな板。これは、生きていれば多少気になるだろう。

普段のレミリアなら、ツツコミの一つや二つでスルー出来ただろう。しかし、ストレス（主に紅魔館関係）が溜まりにたまっていたこの幼女の堪忍袋の緒が切れた。

つまり、ストレスバースト、臨界点突破。

「殺ス!!!!!!!!!!」

「かかったな！」

「まさか、何かの策か！」

一直線に弘樹の向かうレミリア。が、それを予想していた弘樹はその場を動かず上体だけを動かし一撃を回避し、胸元のリボンを抜く。

そして、肩口を即座に露出させ……

「鎖骨ゲット！……！」

「えっ！？何時の間に……！」

悦に入った弘樹の鼻から勢いよく血が吹き出る。歓喜の嵐である。

しかし、そこで弘樹にも予想だにしない出来事が起こった。

「ふみゅ！」

「……はっ？」

レミリアが驚いた拍子に足を滑らせこける。その先には、弘樹。

結果、弘樹にレミリアが抱き着く格好となった。

「……………神よ、感謝します」

弘樹の潜在能力に隠されていた第三の能力が発動した。

【悟り】……通称、小五口リ。全ての常識から解放され彼のモノに最狂の力を与える境地である。

「あ、あの………本当に弘樹？」

「勿論だ、私は進化したのだ」

「一人称から最早、誰！」

純白のオーラを体中から放出する弘樹の鼻からは、鼻血は出ておらず何かを得た様な眼をしていた。

「さあ、始めよう。聖戦を！」

「ヤバいな。俺の直感がこいつは、ヤバいと警鐘をならしてる」

弘樹は、拳を握り、高々に構える。

「俺の右手が真っ赤に萌えるううう！！幼女を栄光の道へと導けと轟き叫ぶうううう！！！！！！究極破壊のこの力ああ！！！！！！」

弘樹の右手へオーラが集束する。まるで炎の様に腕にまとわりつく。

「くっ、だが俺も負けられん！」

危惧した強が、己の拳を硬く握り、子供たちの未来の為に力を解放した。

「ゴットオオオオオロリイイイイフィンガアアアアア！！！！！！！！！！」

「これが俺の自慢の拳だああ！！！！！！」

互いの意思と覚悟が爆発する……

と思われた瞬間

「その勝負待ったあああ！！！！！！」

一同は、そちらに目を向ける。

そして、啞然とする。

そこには、金色^{こんじき}の粒子を翼の様に広げたヘブン状態のハードボイルドが飛翔していた。

「あつ、動きが止まったわ。流石シオね、簡単に事を納めるなんて」

「俺がガンダムだああああ！！！！」

そしてその背中に乗っている永遠亭の姫君。

その時、破壊に破壊を重ねた地面が倒壊した。

「何故に俺だけピンポイントで落ちるんだアアアアア！……！！！」

「はーなーせー！！！！服を掴むな！落ちるウウウウ」

若干二名が崩れた穴からダストシュート。

「これは……助けに行った方がいいのか？」

「あつ、あんたも外来人ね。此処から先は、私たちに任せなさい」

「あ、ああ」

戸惑う強だが、正直これ以上は深入りしないほうがいいと決断し四人が残っている人里へ引き返した。

「シオ、どう？」

「弘樹とレミリアが落ちた場所ですか？……俺の直感からすると地底だと思います」

「そう、確かそこで何かとんでもないモノが起ころうとしてるのよね？」

「ええ、ゆかりんの言う事が本当ならそうだと思います」

残された金色の馬とその上に跨った輝夜は神妙な顔つきで空を仰いだ。

- - - - -

【地底・旧都】

その頃……

「萃香……あんた」

「……………」

霊夢は、一人の鬼と対決していた。二本の角を頭から左右に生やす背格好からして小学生ぐらいにしか見えない幼女。伊吹 萃香である。

だが、明らかに違いが見て取れた。

黒い、そうまるでシルエツトの様に真つ黒なのだ。黒い萃香、赤い目が霊夢、誠輝、パルスィを見つめている。

「ぐう…………洒落にならんぞこれは」

「大丈夫?…………これは一体なんなのよ!」

霊夢の背後で誠輝は、呻いていた。身体が崩壊するような感覚、何かに乗っ取られる様な現象と共に意識が刈り取られそうになるがどうにか堪える。

こちらも普段と違う場所がある。

誠輝のツンツン髪から生えている細く長い角、らせん状にそれはそそり立っていた。

地底は広いな、大きいなあ・・・だけだと良かった（後書き）

誠輝

「……病院行かなきゃ、角が生えるなんて病気に違いない」

S I S I O

「俺がガンダムだああ！！！」

弘樹

「悟りに至った俺は何時もと違うぞ」

次回予告

進化した三人、黒い萃香、動き始める異変。

この先、幻想郷を覆う黒い影……

はたして、日常は戻って来るのか？

立ちあがる時が来た……さあ、逝け！三人の猛者よ！

次回更新

11月15日だと思う。

補足

章システムがついていたので改変してみました。

どうでしょうか？何か問題があれば、報告してください。

異変を解決に行くぞ！おやつは一人300円まで！（前書き）

あらすじ

弘樹、天地開闢：悟りの境地に至る。

志々雄、俺は馬だあああああ！！！！

誠輝、謎の病気？

タグ

『痛みより糖分』

『角は簡単に折れた』

『心のしつこさ』

『豆大福>越えられない壁>>>>>>与えられる力』

『君に拒否権はない』

『DSは問答無用』

異変を解決に行くぞ！おやつは一人300円まで！

誠輝 side

【地底・旧都】

俺たちは、前半何事もなく進んだ。途中でキスメが降って来て霊夢の脳天に直撃したのはうけた。

そして、後半……とんでもなく面倒な出来事に遭遇。

簡単に言い表わすと

- ・黒い萃香来た！
- ・何か邪氣的な物出したら俺に角が生えた。
- ・何故か以上に強い敵

以上だ。

「ぐう……洒落にならんぞこれは」

「大丈夫？……これは一体なんなのよ！」

痛みで頭が可笑しくなりそうだ。正直、無理だ。無理だ……無理だ。
糖分くれ、そろそろ糖分が切れてイライラする。

「パルスィ、何処からか糖分補給できる物ない？出来れば、甘露が
いい」

「なんで今！？」

「糖分があればこの角どうにか出来そう」

「うそお！？……でも、緊急時だしね。分かったわ、探してみる」

そう言っ走って行くパルスィ。うーむ、イイ子やないか。誰かと
違って人をほっぽり出さないからな、もしか妖怪の方が俺にとって
理解があるのだろうか？

「嫌な物がまとわりついてるわね。誠輝も瘴気を直に浴びたから変な事になってるし、しょうがないわね」

しびしびと霊夢は、お祓い棒を構える。前々から思っていたんだがあれ折れないのかな？木の強度などたかが知れている。

「あぐっ！？…………ヤバス、頭痛が痛いと言いたくなりそうだ」

「結構余裕じゃないアンタ？」

「そつともいう…………てっ！？後ろ！！！」

「きゃあ！！！」

他人にツッコミを入れている間に黒い萃香（以下クロちゃん）は容赦なく拳打の嵐を霊夢に叩き込んだ。あれ？もしかして今のでKOですか？だったら、俺がヤバいんじゃない？

「あたた、今のは殺す気でしょ。巫女は、もっと大事に扱いなさい」

「よかった。生きてたか、やられていたら無縁塚に放り込む所だっ

たぜ」

「一応、巫女なのよ？もっと丁重に扱えないのかしら？……て、また！？」

ツツコミ入れては、吹っ飛んで行く霊夢。正直何がしたいやら、頭痛が痛いぜ。

「しかし、このままではジリ貧だな。攻撃しようにも片手しか使えないうえに変な状態だしな……諦めるか」

速くも闘うのを放棄する俺。状態異常Maxなんでやる気値がガンガン下がってます。てか、俺はどこぞの主人公の様に『こんな傷など痛みの内に入るかぁ！』とか言って強敵に立ち向かえるほど出来た人間ではない。

寧ろ、逃げます。

「あゝ、もう！折角、夏だから新調した服がボロボロよ……またツケが多くなる」

「てか、ツケんなよ！現金払えよ！」

「無理、お金ない」

「あつ、後ろ」

「三度目の正直とは、いかないわよ！」

するりとクロちゃんの攻撃を回避する霊夢。おお、流石……と言いたいところだが、クロちゃんが凄い密度の弾幕を形成して……

「……………」

「ちょっと！？避けられない弾幕なんてルール違反よ！」

「いや、ルールとか壊す為にあるみたいな雰囲気出してるから」

言うまでもなくピチューンとか聞こえて霊夢が見えなくなる。早急に復活してもらわないとこっちにとばっちりが……訂正、もう来た。霊夢に当たらなかった弾幕がこっちへと向かって来る。

「モンハン式ダイブエスケープ!!!!」

某狩りゲームの主人公キャラ如くダッシュした後、地面にダイビングをします。

「……………」

「だんまりか、さて……普通じゃないのは分かってるが、流石に一人じゃ無理だぜ。普通に死んじゃまう」

それでも黙ったまま無表情で俺を見据えるクロちゃん。うむ、ムリゲー感が伝わって来るな。

『力が欲しいか?』

「はっ? 誰か発言した?」

周りを見ても霊夢は、復帰中でパルスイは買い物に出かけて帰って来てない。目の前の無口なクロちゃん様は依然黙ったまま。

『汝、力を欲すか？』

「まさかと思うけど……心の声とかそんな厨二設定か。まさか、厨二病だとは知っていたが現実になんかこうなるとは思わなかったな」

恐らく心の声に耳を貸してみる。クロちゃんは何故か動かないので安全です。

『力が欲しいか？欲しければ、やっても構わんぞ』

「口調がむかつくんでいりません」

当然拒否、RPGの主人公みたいにすんなり力が入ったら苦労しないっての。しかもさ、ロープレの主人公とかさ簡単にこう言うのに応じるけどな、こういうのに限って代償とかがかなり重いんだよな。

『汝の身体を寄越せば、力を与えてやろう』

「やっぱりそういう魂胆か！だれがやるか！」

ほらな、大抵の奴が封印された魔物とかだから。一気に力を手に入れようものなら絶対的に何か犠牲なるんだよな、俺は絶対にこういうのはいらん。ぶっちゃけ豆大福以下だな。

『汝の身体を寄越せば、力を与えてやろう』

「リピートだと！？……なんか、選択肢まで見えてきたんだけど俺の身体どうなってんのさ」

選択肢 力を貰いますか？

・はい
・いいえ

勿論、いいえで…

『汝の身体を寄越せば、力を与えてやろう』

「あれ？無限ループの予感がする」

選択肢 力を貰いますか？

・はい

・いいえ

いいえ、連打！

このループを五回ほど続けた。

『汝の身体を寄越せば、力を与えてやろう』

「もういいわ！いい加減に諦めろ！」

選択肢 力を貰え

・はい

・ハエス

「命令系になっているうえに選択肢に拒否権がねええ！……！」

「何やってんの？頭痛は治ったのかしら」

絶叫しているとパルスィが戻って来た。手には、何か入ってそうな紙袋があった。

「はい、よくわかんなかったから豆大福にしてみた」

「旧都に豆大福あるんだ。それより、有難う。早速、いただきます！」

むっ、皮は崩れぬ程度に柔らかくしかも餡あんがしつこい甘さを出していない！うまいぞおおおお！！！！

「来た！これなら、変な幻聴とかクロちゃんとかも倒せそうだ！」

「豆大福一つで全てかが解決する人間は初めて見たわよ」

「気にしたら負けだ。さてと……ぶっちゃけこの角、邪魔！」

ポキリと案外簡単に折れた角。あつ、普通に折れるんだ。

痛くもないし万事解決だな。

『ぎゃあああああ、我が力の源があああ』

うん、一人だけ絶叫しているが問題ない。寧ろ、角を折ってから体調が良くなった気がする、身体が軽いし腕も……骨折が治っているだ！

動かすことが出来なかった腕が動く動く……すげえ、角を折っただけなのに凄い効き目だ。

『ぎゃあああ、体中が痛い！』

あつ、そっちに行ったのか。

段々と声も聞こえなくなっていく（というか、ガン無視）。よし、ウザイ声も聞こえなくなつて糖分も補給出来たし結果オーライ！

「で、あれどうしようか？」

「ねえ、その角……強い妖力を感じるんだけど、貴方何者？」

「俺は普通の人間だ。この角……なんか、雷纏ってんだけど」

ふとブレイクした角を二本手に持つてみると電気がスパークした。
あ、これ使えるわ。

「ふう、行くぜ！」

角を剣の代わりに二本持つ、そのままクロちゃんに突っ込む。

「……………」

「あっさりかわされた！そして、鳩尾……ぐお！？」

「ちょ、全然だめじゃない」

クロちゃんが追撃を仕掛けようとして瞬間、パルスィの弾幕支援で
どうにか回避。鬼のパンチをボディに食らいました。泣きそうです、
この歳で泣きそうです。

「あ、もう無理。俺帰る」

「速い！？何のために此処まで来たのよ」

「あつ、そうだ。萃香を探しに来たんだった……でも目の前にいる奴若干違うんだよな……」

「萃香に会ったことがあるの？」

「ないよ」

きつぱりといい放つと呆れた顔された。まあ、普通そうだろうな。でも、何となくこいつは本物じゃないと分かる。弘樹みたいなローリンセンサーではないがこいつは違う。根本的に何もかもが違う。

「さて、遠距離から攻撃するかなああ！！！！」

「援護するわ！」

パルスィの弾幕と近代兵器を総動員させた攻撃。周りの景色が明らかに変わって行く、地形が崩れ旧都の建物が変形していく。

芸術は破壊と見つけたり！

「流石に此処までやれば……………」

「無傷ね」

ええ、アレだけの火力で吹き飛ばしたと言っのにクロちゃんは煤すら着いてない。てか、黒くて分からないがな。

やっぱりさっきの変な声の力貰っておけばよかったと今更後悔。

『我の力が必要か？』

「うわっ！？無駄にいいタイミングで出てきた！」

「何が出てきたの？」

「幻聴だ、力をくれるとかどうとか誘惑してくるんだよ。しかも粘着質だ」

「厄介ね、貴方に憑いている何かね」

「うわっ、面倒な物を飼ってるな俺」

てか、勝手に住み着いてんなら家賃払えよ！そうだ……良い事思いついた。

「いいだろう、力を寄越せ」

『ならば、身体を寄越すがいい』

「断る！寧ろ、お前が俺に憑いているなら逆に宿主に対価を支払うべきだろうが！」

『成程、確かにそうだが。我は、お前が死のうとも他の人間に移る、つまり別に我が手を貸さずとも他の人間を誘惑すればいい』

「……へえ、舐められたものだ」

カチンと来たよ？人様の身体に勝手住み着いてこの態度、気に食わないね。むかつく、腹が立つ、こいつどうしてくれようか……そういえば、昔洋画で自分に憑いている霊の力を使える方法があったな。

確か、精神を集中して……何か見える、あれが奴か。

自分の中に他の何かがある事が何となくだが分かる。ほうほう、余

裕かましているこの野郎を思いつきり酷使してやるわ。

『むっ、人間の分際で我に干渉するか……なにっ！？力を吸収されるだど！』

「人間舐めたらそこでお終いだ。いいか、いつの時代も化け物退治の主役は人間なんだよ！」

掴んだ……後は、ごっそり頂くだけだ！

「うおおおおおおおおお！！！！寄越せえええ！！！！」

「くっ、何この妖力！！」

- - - - -

弘樹 side

【地底・何処か】

「はっ！？何かすげえ夢見た」

「やっと起きたわね。全く……なんで私の服を掴むのか」

「つい出来心で」

「やっちゃったぜとおどけて見せる俺だが、レミリアの冷たい視線を貰っただけだった。何処で間違えた？」

「それより、私に近い……いいえ、フラン以上の妖力を感じるのよ……」

「へえ、何か空気がぴりぴりすると思ったらそう言う事か」

「この数日で波長を感じることぐらいなら出来るようになったらしい。」

ははは、既に人間超えたな俺！

「まあいいわ、何か面白い事が行われてるみたいよ、行ってみましよう」

「yes、マイマスター」

異変を解決に行くぞ！おやつは一人300円まで！（後書き）

誠輝

「はははは！！奴の滑稽な面を見たか！様は奪えばいいんだよ！」

弘樹

「レミリアと二人っきり」

志々雄

「俺は進化した！」

次回予告

力を無理やり強奪する誠輝、黒い萃香とはいったい何者なのか。

弘樹がレミリアと巡る地底旅行

志々雄がどうやら地底に到着する模様。

次回更新

文化祭が始まるので落ちついたら更新します。

隙あらば更新するので少々お待ちを

シリアスは深まるばかり、だが・・・何時でもブレイク出来るんだぜ？（前書き

あらすじ

Y O K O S E Y O Depart

二人でランランるう！

タグ

『グロテスク注意』

『大会参加人員は皆、奇人変人』

『何度でも蘇る黒』

『姫さま！違います！萃香は割る為にあるのです！』

『萃香割り大会！』

『レミリアが弘樹の思考に汚染された日』

シリアスは深まるばかり、だが・・・何時でもブレイク出来るんだぜ？

志々雄 side

地底入口、私こと輝夜様の永遠の馬『志々雄』でありますが・・・
・厄介な敵に道をふさがれています。

「シオ！面倒な敵が現れたわ」

「大丈夫ですよ、姫様！俺が、砕く！」

俺の目の前に現れたのは、黒い萃香だ。弘樹が好きなツルペタ幼女だ、何となくで分子分解した岩を再構築して鉄拳（文字通り鉄で纏った拳）を叩きつけた所・・・

文字通り、萃香の頭が西瓜の様に割れたのだ。

「す、スプラッタアア！！！」

「シオ、落ちつきなさい。こういう時こそ、冷静になるのよ！さあ、タイムマシンを探しましょう！」

「姫様が一番落ちついてください！」

ん？よく見たら、血が出てない。それに砕けた頭が再構築されていく。

最初は、萃香の能力かと思ったがどこことなしに微妙に違うことが分かる。

再生する時の霧の様な物から禍々しい気配が感じられる。

「姫様、どうやら我らが敵は、死なないようだ」

「そうね、かと言って不死ではないわ。死なないのではなくて、生きてないのよ」

うん、流石姫様だ。俺には到底理解できない事をサラッといっ

ださる。生きているのに死なない……てどうなのさ。

「その顔を見ると分かってないみたいだから簡潔に説明するわ。一言で表すと『生き物と無機物の間の存在』という事よ」

「おお、さっぱり分らない！」

「……………」

姫様、何故に馬鹿を見る様な目で俺を見るんですか？そんな目で見たられた日にゃ、僕はもう僕はああ！！

「何か込み上げてキター……………！！！！！」

「まあいいわ、その力で西瓜割りならぬ、萃香割りでもして来なさい！再生速度が落ちてきたら私が弾幕で滅してあげるわ！」

「了解！^{ラジャ}姫様の命令、この志々雄！命を削ってでも果たします！」

「……………」

無言を貫く、黒い萃香に拳打を叩きこむ。だが、あっさりと受け止められた。が、この程度で私が止まると思ったら大間違いだあ！姫様直々のご命令！死んでも達成させてやるわ！

「ホアチャアア！！！」

拳を掴まれているからと言って無防備ではない。そのまま強化された跳び膝蹴りをおみまいする。黒萃香の顔面に衝突した膝蹴りにより頭部が粉碎する。だが、姫様の推測通り直ぐに再生する。

「ホイサア！」

強化された肉体を存分に使いカラテチョップ！子供達には見せられない様な映像が俺の眼下に晒される。うん、また再生したね。どれだけ再生すればいいんだろうか？

「バ口オオオオオ！！！」

サイドホーン（角）を掴んでブレイクキックをかます、先生！幾ら晒せばこの子は、倒れるんですか！全く、これだと俺がSだと誤解されてしまう。

「俺は、Mだああああ！！！！！！！！」

「それは、堂々と宣伝する事なのかしら？」

- - - - -

霊夢 side

っ！？

身体の所々が痛いわね、まさか誠輝に気を取られてしくじるとは思わなかったわ。あの人は、危険ね…何時も誰でもその人物の心を動かす。

一種の才能だけど変な風に使用してるから逆にその人物の人格を狂わせているとも取れるかもしれないわね。

その例がレミリアね。何故か、紅魔館が壊れて以来微妙に幼くなってる。何て言ったっけ？カリスマブレイク？

「うおおおおおおおおお！！！！寄越せえええ！！！！」

「くっ、何この妖力！！」

気付くとバカでかい妖力を引き出そうとする誠輝がいた。小規模なクレーターが生じ、周りの障害物を吹き飛ばす。

まずいわね。なんだか知らないけど、あの力は多用すると問題になりそうな感じがする。

「はあ……はあ……こいつはいい。適当に引きずり出してみたんだが、結構いい感じじゃないか」

「……………」

余波が収まると同時に黒い萃香が、誠輝に襲いかかる。誠輝は、その接近に気付いてない！

「間に合って！霊符【夢想封印】」

私の弾幕が誠輝と黒い萃香の間に着弾し一帯が土煙に包まれる。

その刹那

「……………」

「なっ！？この土煙の中でなんで場所が分かるのよ！」

気付けば、目の前に拳に高濃度の火力を込めた黒い萃香がいた。でも、このぐらいなら予想の範疇よ。

「それは痛いから要らないわよ 夢符【封魔陣】」

封魔陣の効果で動きを止められる黒い萃香。ふう、後は……この訳の分からない状況を終わらせれば一旦休憩できそうね。先ずは、この黒いのは萃香じゃない………だったら本物の萃香を探す必要があるそうね。全く、手間をかけさせないでほしいわね。

「原因は叩き潰す………だろ？」

ぐしゃ

嫌な音と共に黒い萃香の頭部、胸部、腕、脚が粉々にちぎれた。

「アンタ…正気じゃないみたいね」

「そうか？少々、テンションが高いだけだぜ？」

おどけて見せるツンツン髪の少年は、何時もとは違い危ない色の光を瞳に宿していた。雰囲気も一変して妙な妖力が肉眼で直視出来る程に濃く彼の身体から流出している。

「……面倒だけど、その力は封印させて貰うわよ。その力は、危険だわ。貴方にも幻想郷にも………封魔針！」

「おっと、簡単に封じられると思ったかよ！『我は、体現する。世界の破滅と混沌の再来を』」

「何かに憑かれてるわね。野放しにしたら危険ね、アンタを倒すわ……少々強引な形になるけど勘弁してよね」

「ぬかせ！やれるものならやってみろ！『我は、憎む。世界の醜さと美しさを』」

博麗の巫女と呪われた少年が地底をバックに闘いを始めるころ…

- - - - -

o u t s i d e

誠輝と霊夢の戦闘を遠くから観察していたレミリアと弘樹は、完全に出て行く機会を失っていた。

「どつするのよ、これじゃあ出るに出れないわ」

「簡単な話だ。誠輝か霊夢のどちらかがピンチになったら出ていけばいい。そっちの方がカッコいいだろ！」

「成程、なんか横入れみたいであんまり進んでやるのは嫌だけど…
…確かにカッコいいわ！」

所々、レミリアは弘樹の思考に汚染されつつあった。

シリアスは深まるばかり、だが・・・何時でもブレイク出来るんだぜ？（後書き

誠輝

「現在、思考が汚染されており会話不可」

志々雄

「割って割りまくる！」

弘樹

「汚染？違うね、これが真実なのだ！」

次回予告

力を手にいれし者、力におぼれる末路を歩むのか

その友人は、力を手にした者を救おうと懸命に抗う

が、絶対的な力には逆らえぬ、未来は変えられないのか

次回、巫女は巫女である為に…

志々雄

「えっ？なにこのガチシリアス予告」

弘樹

「どうやら、作者の病気が進行したようだ」

誠輝

「全て…壊すんだ」

霊夢

「させないわ！私は、博麗の巫女！危険と感じたモノは全て退治する……それが知人でも同じよ！」

レミリア

「霊夢……それが貴女が選んだ道なのね」

志々雄・弘樹

「あれ？俺達おいてかれてる？」

次回からの更新

一週間の内の火曜、木曜、土曜に定期更新しようと思ってます

巫女が巫女である為に・・・

パルスィ side

いたたつ、あの人間・・・凄まじい力を引き出したみたいね。

妖力が具現化するほどの力・・・ね。何処かで感じた事があるように懐かしい・・・何なのかしらこの感覚。

「はあ……はあ……こいつはいい。適当に引きずり出してみたんだが、結構いい感じじゃないか」

満身創痍と言う所ね、無防備もいい所じゃない。

「……………」

あれは、黒い萃香！？あの人間、気付いてない。しょうがないわね、

此処は私が…

「間に合って！霊符【夢想封印】」

多色の球体が、あの人間と黒い萃香の間に炸裂する。妬ましい…誰にも平等に接する事が出来る巫女が妬ましく思えるわね。

……あつ！？こ、今度は本当に厄介な事になったわよ、うっかり能力をあの人間に使ってしまった……これ、私の責任かしら？

……本当に妬ましい。さっさと倒して正気に戻してあげましょう。

- - - - -

霊夢 side

「これならどうだ！」

高温の炎を纏う拳を放つ誠輝。基準とされてるのは、人間の身体だから……そんな無茶な使い方したら壊れるわよね。

「無駄よ、当たらないわ！博麗アミュレット！」

誠輝の一撃を交わし、追尾性能に優れたお札を投げつける。無論、近距離での攻撃だけあって簡単に被弾してくれる。

「同じく、無駄だ。この力は災害を操る事に特化した力だ…故に周りに突起した岩を出現させるなんて芸当も出来るんだ」

被弾した様でしてなかったらしく、地面から生えた岩が札を邪魔して攻撃が通っていない様子。まあ、危険な力なのだからこのくらいは、当然ね。

「便利ね、災害を操れるなら力を調整して畑に雨でも降らせたらど

う？」

「ははは、災害と言ったろ。こいつは、そういう力なんだよ！」

「風？まさか、此処で暴風でも起こそうとも思ってる訳！」

そのまさかだった、誠輝の周りに風の渦が生じる。これは、思ったより厄介な力ね……うかうかしてたらやられるわね。でも、博麗の巫女を舐めないで欲しいわね。

「潔く封印されなさい！神技【八方鬼縛陣】」

「ぐっ！？クロちゃんの時よりも強力な結界か！」

「さて、さっさと止めを……」

その時、嫌な予感がした。主に背後で何かが投擲されそうな気がした……逃げろが勝ちね。

即座にその場を離れ、誠輝の様子を見る。

「何故、退避……ちっ！？あれは、ペド野郎とレミリアか！！」

舌打ちをつく誠輝、どうやら正解の様ね。はあ、折角の止めだと言
うのに邪魔するなんて……後できつくお灸を添える必要がありそう
ね。

- - - - -

o u t s i d e

「1、2の3で行くわよ」

「了解だ！見せてやろう、私とレミリアの最狂コンボをな！」

「何故か、誤りがある気がするんだけど」

「気にはかけない！さあ、行こう！」

誠輝たちより100m前後離れた場所で弘樹は、レミリアの片腕に
乗るというシユールな格好となっていた。理由は、レミリア達の力

ツコよく登場する方法として弘樹がレミリアのスペルと同時に登場すれば格好がつくのではと思案し行動に移したのだ。

「じゃあ行くわ、1、2…」

レミリアの手に魔力の塊が出現しそれは赤い神槍となる。その上に乗った弘樹は、拳を構え白いオーラを腕に纏わせる。

「3!!!!」

掛け声と同時に神槍が投擲される、音速を超えるのではないかと思える速度に弘樹はものともせず拳を硬く握る。そして、動くことのできない誠輝に向かって……

「ファイナルロリータバスタアアアアアア!!!!!!!!!!」

「ちょ、ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!」

謎のオーラと赤い神槍が誠輝を死ぬんじゃないかと思うほどの威力で遠方まで吹き飛ばした。地底に一つの星が輝いた。

それを見ていた霊夢は、溜息をつき札を構える。

「邪魔をするなんて教育が必要ね」

「ちょ、霊夢さん、怖いっす！！！」

「問答無用よ！その小さい吸血鬼も逃げるな！！！」

「ひっ！？」

「レミリア、逃げるんだ！！！！俺にかまわず、ぎゃあああああ
あ」

その台詞は、最後までレミリアに伝わることなく夢想封印により封殺される。同時にレミリアは、自分の相方が鬼巫女にボロボロにされていく様を帽子を押さえて震えて脅えることしかできなかったという。

その様子を見ていたパルスィは、駄目だこいつらは何とかしなければという表情をしながらも吹き飛ばされた誠輝を探すことを優先した。

「あつちは……勇儀のいる地域だったわね。運が良ければ、拾われるかもね」

と呟き地底の空を飛ぶのであった。

巫女が巫女である為に・・・（後書き）

誠輝

「はっ！？俺は、何を！」

弘樹

「全ては、悪が悪いのさ。その悪は、我がロリータパワーが成敗した！」

志々雄

「あつ、霊夢が弘樹に向かって陰陽玉を……」

ピチューン

霊夢

「さて、次回はどうなるやら楽しみね」

次回予告

吹き飛ばされた誠輝は、運よく星熊 勇儀に助けられる

一方、志々雄は黒い萃香を追って地底の地霊殿へ

弘樹は、早くも墓に入る事に……無論、夜の王も例外ではない

次回更新

木曜ですね

THE・萃香・HAZARD（前書き）

あらすじ

星になった命よ

鬼畜巫女の覚醒！

タグ

『萃香ハザード』

『要望があつたので志々雄を何時もより多く出しております！』

『黒い萃香大量生産』

『何この超展開！』

『今度は、地霊殿が危ない！』

『お酒は二十歳から』

『お酒は、極度に飲むと身体を害する可能性が高いのでゆっくりと飲みましょう』

THE・萃香・HAZARD

o u t s i d e

志々雄と輝夜は困っていた。

正式には、進めなくて困っていた。

もっと簡単に言い表わすと迷っていた。

「いや、よくよく考えたら俺達、地底初めてですよね」

「そうね……私とした事が迂闊だったわ」

地底の一角、彼らは迷い適当に開けた場所で休憩を行っていた。

「むっ、志々雄サーチに反応が」

「センサーも付いてるのね。永琳たら一体どんな改造を施したのかしら？」

「とりあえず、再構成とDMですね」

「一か所だけ最初から付属されている天性能力が混ざってるわよ」

「それよりも姫様。あちらから妖怪の気配が……恐らく地霊殿かと」

志々雄は、薄暗い地下の一点を凝視しながら立ちあがる。

そして、自分が使えている姫に手を伸ばす。

「さあ、行きましょう」

「そうね、スキマ妖怪の依頼もあるし行きましょうか」

輝夜が立ちあがると同時に志々雄が四つん這いになる。何の抵抗もなく志々雄に座る輝夜。

「さあ、行くわよー!」

「何時でもOKです!!!!!!イヤアアハアアア!!!!!!」

地底に金色の閃光が高く上がった星と共に出来たのはこの直後の出来事だった。

「で、着いたのだけど……」

「様子が変ですね。中には……誰もいませんよ？」

「こわっ！？何かよく分らないけど怖い！！」

志々雄は、初めて地霊殿を見たが異質な雰囲気が漂っている事か手取る様に分かった。これも永琳先生による改造手術の賜物なのかもしれない。

「一応、入ってみますか？俺は、準備バツチリですぜ！」

「そうね、入ってみなければ事態も変わらない。さあ、先導するのよシオ！」

「アイサ！サイクロン！ジョーカアアア！！」

バリバリテンションをあげ、志々雄は地霊殿の扉を蹴り開ける。

そう、開けてしまったのだ。

「……………」

「……………やつちやつたぜ」

「流石にこの数はまずいわ」

地霊殿の入口付近には、エントランスを埋め尽くすほどの黒い萃香があふれていた。

扉を勢いよく開けた所為か、全員が全員志々雄たちの方を見つめている。

「は、はははは……さようなら」

「そ、そうね」

パタンと扉を閉める志々雄。急遽、地霊殿から離れて作戦会議を行う事になったようだ。

「姫様ああ！！！！流石に無理ですってあの量は可笑しい！！」

「分かってるわ！確かにあれは、どうにもできないわ。一体一体の実力は大したことないようだけど……間違っても甘く見ては駄目よ。あれは、一応鬼の影なのだから」

「影？あれって影なんですか？確かに黒かったからなあ……で、これは誰かの能力ですか？」

「あら、中々鋭いのね。そうね、能力……とは断定できないけどこれほどの量の影を使える住人を私は知らない。でも、影の能力を持っているのなら知ってるわ。志々雄が来る前に因幡達に混ざってた子が居てね……永琳の薬の所為でうさ耳が出来たのよ……それで家出したの」

少々、寂しげな表情を浮かべる輝夜。志々雄は誰が居たのか知らないのきょんとするしかなかった。

「なんだか知らないけど……そいつドンマイ！お前の後任は俺が務める！」

「じゃあ、その域で一人であれを全滅してみなさい！」

さらりと酷い輝夜。

「逝つて来ます……！！」

再度、突入。勿論、黒萃香達の視線が集中する。

だが、志々雄は脅えない。寧ろ、逆境に立たされて燃えている。

自分が認めた主人の為に戦うと言うシチュエーションに燃え上がっていた。

「来いよ！全員、相手になってやるぜ！ハアアアアアア……！！」

志々雄の全身から金色のオーラが溢れだす。その金色のオーラを扱える者を人は、こう呼んだ。

【マスターSISIO】

「東方は、赤く燃えているうううう！！！！！！！！」

最凶の薬師【八意 永琳】は、志々雄に月の技術を用いて一つの機能を付属した。

それは、何かの思念をエネルギーに変える機能。

つまり、志々雄は己の信念をエネルギーに変え、弾幕として打ち出せるようになったのである。

「俺の中に宿る、ドM、エロス、M、姫様への忠誠心よ！今こそ、吼えろおおお！！！！！！」

敵意を完治した黒い萃香全員が片手に巨大な弾幕を密集させる。

「遅い！そんな、速さじゃ俺には叶わんぞおおおお！！！！！！我は、退かぬ！媚びぬ！顧みぬ！！！！」

かめめ波の要領で志々雄は手を前に突き出す。それと同時に膨れ

上がったエネルギーが志々雄から放たれる。

黄金色の極太レーザーが地霊殿を貫いた。

「ふう……はあはあ、はは……俺、中々やるだろ」

志々雄は、落ちていたソフト帽をかぶり直し、ただ一言台詞を吐いた。

「てめえらは、強かったぜ。但し、並みの中ではな」

ニヒルな笑みを浮かべた志々雄は、喜々として姫様の下へと急いだ。

- - - - -

【旧都の何処か】

どうしてこうなった。

一人の少年は、そう呟いた。

頭にはうさ耳、全身真っ黒な服装。

まるで忍者の様に覆面で顔を隠していた。

「……徐々に外来人の三人が人からかけ離れていく………早急に事を進めないと大変な事になりそうだ」

すると少年の足もとで影が揺らぐ、次の瞬間には液状の影へ少年は落ちて行った。

- - - - -

【旧都・居住区】

どうしてこうなった。

同じ事を呟いている少年が此処にもいた。

彼の名は、長沢誠輝。

先ほど、パルスィの能力から解放され事態が余り整理されていない状態で星熊 勇儀と飲み比べをする事になっていた。

「さあ、勝負だ！死ぬまで吞め！！！」

一本角が生えた彼女は、既に出来上がっているのかテンションがバカに高い。

それに誘われるようにして誠輝の杯に酒が注がれる。

「はあ、まあしょうがないな」

そして、誠輝はただ一言叫んだ。

「飲酒は、二十歳になってからだかなあああああ……！！！！！！」

そういつて、杯に継がれた酒を飲みほした。

- - - - -

【地底の何処か】

荒れ果てた地で巫女は一人立っていた。

その横には頭から地面に突き刺さっている宏樹と頭部に大きなたんこぶを作っている吸血鬼が倒れていた。

「はあ、アンタ達の所為で誠輝を見失ったじゃない。全く、これは巫女の仕事よ、邪魔をしないで……次はもっと酷いわよ」

いいたい事だけ言つとさつさと霊夢は、地底の空へ飛び立った。

THE・萃香・HAZARD（後書き）

誠輝

「もう飲めません……」

志々雄

「これが、スーパードM天子を超えたスーパードM人4だああ!!」

弘樹

「俺……守れなかった。畜生、もっと力が欲しいです!!!」

次回予告

さてさて、物語は急展開を見せる。

志々雄は、地霊殿へ招待されるが、同時に守り抜く筈の主君を見失う。

誠輝は、飲み会に参加……理性の崩落して大変な事に

弘樹は、もう一度立ちあがる

次回更新

恐らく土曜

酒とロリとドMと・・・（前書き）

あらすじ

一筋の閃光が地霊殿を揺らす

影の異能者出現

酒を飲んでも飲まれるな

犬神家！

タグ

『立ちあがるロリコン』

『怒りを身に纏うドM』

『酒に酔うドS』

『己と戦う二人が同じ感情を持つ』

『ドM ハードボイルド』

『ツッコミ役は何かを悟った』

『醤油万能説』

『すれ違うテンション』

酒とロリとDMと・・・

弘樹 side

長い夢を見ていた気がした。

何かが手に入らなくて、がむしゃらに突っ走って……大切な物を取りこぼしたことに気付かず走り去った。

そんな夢を見た。

段々、怒りがわいてくる。

身勝手に走って、大事な物を失った事にすら気付かない自分に……

無くす事しかできなくなった自分に……

俺は、守るよ……幼女たちを……この手でな!!!!

-
-
-
-
-
-
-
-
-

レミリア side

「っ、靈夢の奴、思いっきりやったわね。こんなことなら咲夜を呼べばよかったわ」

愚痴を言いながら立ちあがるとそこには依然、紅魔館で誠輝と咲夜のツツコミにより頭から突っ込んだ状態の弘樹がいた。

あれ？可笑しいわね、微かだけど運命が見える。

確か弘樹には能力が干渉できなかった筈なのに……面白そうだわ、少しだけ見てみようかしら？

見える……断片的に見える。

何処だか分からない森、何時かは分からない時間、何かと対峙する弘樹。

はあ、これだけじゃ何が何だか分からないわね。

「駄目ね……これ以上は見えない。しかし、私の能力が効かない人間って変な奴よね」

私は、埋まっている弘樹の足を指で突いてみると『ピクッ』と反応したので生きているとみた。

「さあ、弘樹を起こして他の奴らと合流しないとね」

コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ
コ

その時、地響きが辺りを揺らす。

何！？地底で地震？また、あの天人の仕業かしら？

「おれ復活……！！！！」

「うわっ！？変なオーラが増えた……」

地震の中心点は、弘樹だった。

白いオーラを更に増量させて完全復活してみたい。

「さあ！レミリア、カリスマを探しに行くぞ！！！！！」

「えっ！？ちょ、手を掴まな……で（エコー）」

私と同じ速度ぐらいあるのではと疑問にもてる程の勢いで私は、弘樹に連れられてあてもなく走り出した。

- - - - -

o u t s i d e

「姫様、やっつけてきましたよ」

「あら、速いわね。凄い爆音だったわね、確か、前にも紅魔館壊したのよね？」

「えっ？あれは、誠輝が近代兵器を大量に使用したのが原因だと思

いますけど」

「そんな兵器がなんで幻想郷に？……まさか、てゐ辺りが悪戯で持ち出したんじゃない……」

ふとそんな事を考える輝夜。だが、直ぐに考える事をやめる。

「流石にないわわよね。そんなことしたら幻想郷で戦争が起きそうなものね」

「そうですね、てゐも流石にそれは無いと思いますよ」

「そうよね」

「あはは」

「うふふ」

二人は、ひとしきり笑った後に表情を暗くして…

「実は、夜中にてゐが古くなった古代兵器を捨てるって言って筒状の何かを持って行くのを見てました」

「月の技術じゃないからいいかと思って黙認したわ」

僅かの沈黙。二人は、決意した。

「永琳（先生）には、内緒の方向でいきましょう！」「」

主従の気持ちが伝わった瞬間であった。

「美しい主従関係ですね」

「お、お前は！」

「あら、地底の館の主じゃない」

そこにいたのは、薄水色の服の左胸部に特徴的な目玉が付属されている少女。

古明地 さとりである。

「要件ですか？簡単ですよ、その人にお礼がしたいのです」

「ん？俺の事？」

「はい、貴方は地霊殿からあの影の集団を抜ってくれました。まあ、多少地霊殿にもダメージはありましたがね」

「は、はは……いやゝ力加減が出来なくてね、そこところはすまなかった」

「いえ、それですんだのですか安いモノです」

どうぞとさとりは、館に二人を案内する。

「まあ行つて見てもいいかもしれないわ。この地底の情報が聞けるかもしれないのだから」

「そうですね、サクツと異変を解決しましょう!」

「輝夜さん! 後ろです!」

突如焦った、さとりが弾幕を輝夜の後ろに発射する。

しかし、それは闇の中に吞まれ消えて行く。

同時に輝夜の身体も闇の中へと引きずり込まれる。

「これは……あの子とは違う?……シオ、ちょっと先に黒幕に挨拶してくるわ。貴方まで落ちる必要はないわ」

「姫様!？」

手を伸ばす志々雄だが、輝夜はあえてそれを取らずに影へ落ちて行く。

「……………何故だ」

(この志々雄という人の感情が痛いほどに伝わって来る。大事な人を護れなかった悲しみと自分に対しての怒り…………それが一つの感情となり一気に溢れだしそう)

「…………見つけてやる、絶対に見つけるからな輝夜」

硬く拳を握り、自慢のソフト帽を脱ぎ棄て原子へ還す。

そして、素粒子となったソフト帽は志々雄の腕にもう一度帰ってくる。

但し、重量級の火器として

【ガンブレード】

主に銃身がブレードとなっており銃と剣の動作を同時に行う事が出来る火器だ。

志々雄が造り出したそれは、変形ギミックを取りこんでいるモノであつた。

自分自身をエネルギータンクとして使用できる武器。

「これで、邪魔な障害は破壊する。見せてやるぜ、ハードボイルドの神髄をな」

志々雄は、武装を片腕で抱え地霊殿へ向かう。

己の主を救うために…

- - - - -

【旧都・居住区】

「うめええええ！！！醤油すげえええええ」

「だろ！？アンタ分かる口だね！」

弘樹と志々雄が己の意思を新たにしている頃、誠輝は旧都の鬼達と醤油の万能説について語っていた。

醤油は、肉にかけても野菜にかけても上手い。

多種多様で、万能である調味料。

「これが、日本が生んだ…最強の調味料だあああ！！！！野郎ども！醤油は、凄いぞおおおお」

『おおおおおお！！！！！！！！！！』

「何やってんのよ、醤油？」

「ん？霊夢か、醤油つてすげえな。米にも合うし肉にも合う……日本が生んだ最高級調味料だな」

「とりあえず、封印」

「いてっ!？」

霊夢は、問答無用に札を右腕に巻きつける。

札は、誠輝に触れた瞬間に発光し腕に文字を焼き付けた後に消える。

「これで、一応は封印出来たわ。帰ったら本格的に封印するから神社に来なさい」

「はいよ、じゃあ……霊夢も飲むか？」

「おっ、赤白じゃないか飲んでいきなよ!」

「はぁ、少しだけよ? 鬼と酒盛りなんて死ぬようなものよ?」

「えっ? そうなのか、俺はてっきり幻想郷の住人はアレぐらい飲むのかと」

誠輝は、後ろに転がっている樽を指さす。

計13個

「……二人であれだけ飲んだわけ?」

「「まあね!」「」

霊夢は、鬼並みに酒に強い誠輝を宴会の時の重要人物にインプットしたのは言うまでもない。

酒とロリとDMと・・・（後書き）

誠輝

「酒を飲んでも飲まれるな」

志々雄

「待つてろよ、必ず助ける！」

弘樹

「俺は、もう負けねえ！どんな存在よりも強くなり幼女たちを護る！」

次回予告

決意を新たにした二人は、地底に巢食う現況を討ち滅ぼす為に立ちあがる。

誠輝は、宴会に備えて酒の飲み比べを開始

霊夢は、独自で異変を解決に向かう。

次回更新

火曜日だと！

黒幕は、見つけ次第死刑！！（前書き）

あらすじ

覚醒せしハードボイルド

走り出すロリコン

醤油伝説！

タグ

『華麗なる死亡フラグ』

『諜報部員パルスィ』

『残酷なる人間性』

『シリアス粉碎なんてお手の物』

黒幕は、見つけ次第死刑！！

o u t s i d e

「やっと見つけたわ。色々と地底の情報を集めていたら遅くなったわ……全く妬ましい」

「おお、パルスイカ！何処行ってたんだ？心配したぞ」

「何処かに行つたのは貴方の方なのだけど？」

「そうだったか？あんまり覚えてないんだよなあ」

旧都の居住区で派手に酒盛りをしていた所をパルスイカが発見した頃には、霊夢と誠輝は移動準備が出来ていた。そろそろだと霊夢が切り上げ誠輝は、名残惜しそうに用意を始めたのである。

吹き飛ばされた最中にどうにか自分の武器だけは確保した誠輝は、背中に青龍刀、腰にカラドボルグと虎徹。

何時でも出撃できますという雰囲気が漂う中……何故か片手には醤油瓶が握られていた。

「何で醤油なのよ、どうせ割れるんだから置いて行きなさい」

「えゝ、だって便利だぞコレ」

「醤油は何にでもあうからな！」

「勇儀は黙ってて話がややこしくなる」

駄々をこねる誠輝。明らかに酔っている。

少し補足しよう、人類だけではなく妖怪もだが誰にでも変態性という物は少なからずある。だが、普段は理性と言う頑丈な扉によって心の奥深くに封印されているというのが妥当だろうか。

誠輝もその一人だ。だが、酒に酔う事で陽気になる誠輝は、運がいいのか悪いのか理性の留め金が外れかかっていた。

「しょうがないわね、それじゃあ行くわよ」

「少佐、メンドクサイであります！」

「誰が少佐よ！めんどくさいのは分かるけど、これも人里や幻想郷の脅威になる者を被う為に……て、何してんのよ！？」

「ん？見ての通り、刀の様子を見ているのだが？」

「何で今！それより、その刀真剣ね」

誠輝が持つ真剣『虎徹』に目を着けた霊夢は、若干危険視しながら様子をうかがう。

「そうだな、この刀は俺が本気の時しか抜かない……それに何となくだが感じ取れたんだ、志々雄が怒ってる……こいつは本気だな」
刀を鞘に納める、途端誠輝のゆるみきつた顔が真剣な表情へと一変した。

「アンタ、意思の疎通でも出来るの？」

「いいや、ただ……何となくだが分かるんだよ。これも付き合いが長い所為かな」

「あながち間違ってわないわ」

するとパルスイが背後から賛成意見を出す。パルスイは、誠輝を探

すついでに色々な所から情報を探った為に志々雄の状況や弘樹の居場所を大体特定できるほどの情報を得ていた。

「どういう事よ?」

「見てきたんだけど、女の子似の男の子の目の前で永遠亭の御姫様がかどわかされたわ」

「……なるほど、シオが切れる訳か。そりゃ、目の間で何もできなければ自分にも相手にも腹が立つ訳だ……今回は、俺は行かなくてもよさそうだな」

「いかないの?」

「ああ、俺は面倒事が大の苦手なんだよ」

そっけなく返した誠輝は、その場に寝転がる。本気で面倒くさそうに地面をゴロゴロ回っている。

「はあ、どうでもいいけど私は先に行くわよ。じゃあね、あっ言うておくけど邪魔だけはしない様に」

「あいよ」

直ぐに飛んで行く霊夢。数秒経っただけで姿が見えなくなった。転がった誠輝と立ったまま何かに失望したようなパルスィ、そしてまだひたすら飲んでいる勇儀だけが残った。

「友達を助けにいかないの？何だかんだで目つきが悪い人間は、あつちの子の所に向かつてるわ……完全に偶然だけだね」

「そうか……そういえば、誰かが言ってたな『この世に偶然は無い、あるのは必然だけ』……なら、これも必然ってわけか？」

後半、パルスィに聞こえない様な小声で自分の封印された右腕を見つめる誠輝。それから、三人は無言で動きを見せない。

「妬ましいわね……人間は、そうやって裏切るのね」

「さあな……俺は、面倒が嫌いなだけで裏切り者じゃない」

「そう？貴方は、そうやって逃げてるようにも見えるけど？」

その言葉を聞いた瞬間、誠輝は状態を起こしすつと立ちあがる。何処か苛立っている。

「おっと……それ以上は、無しだ。聞き捨てならないからな、知っ

ているか？この世で一番残虐なのは人間だ……何よりも人の心身と
もに傷をつける。しかも、それを喜々として楽しむ奴らもいるんだ」

「それは、貴方の事なの？」

「そうだな、俺もその最悪な部類に入る人間だ。一度、覚えた快感
を忘れられずに呼吸をするかのように繰り返す……俺は残酷なのだ
ろっな」

「そう？私には、貴方が普通の人間に見えるわよ……寧ろ、優しい
分類に所属してもいんじゃない？」

誠輝は、呆氣にとられた。まさに開いた口が塞がらない状態。

「自分の残虐性を認めてるなら改善の余地はあるわ。ただ、闇雲に
切ったりしてない分マシよ」

「俺が……優しいね……くく、あはははは。マジでウケルわ！
何だか、機嫌が良くなってきた……パルスィ、シオの所まで案内よ
ろしく」

「あら？面倒じゃなかったの？」

「今は、それどころじゃなさそうだ……幻想郷を楽しむのも一興だ
と思わないか？」

「そうね、じゃあ捕まって」

「あいよ……あ、そうだ。死地に向かうならこれを言わないと」

誠輝は、一呼吸置いて

「俺、この異変解決が終わったらプロポーズするんだ」

「はっ？え、ええええええええええ！！？」

パルスィの反応を見て、まるで何かから解放されたように誠輝は、
晴れやかな笑顔を浮かべた。

- - - - -

【地霊殿・入口】

「遂に此处に来た……地霊殿」

「あゝうるさい！なんなのよ一体！」

「なんだ、馬鹿か」

「行き成り、バカって言われた！バカって言った方がバカなのよ！」

「その殺し文句は子供の喧嘩レベルよ」

そう、出てきたのはさとりではなくさとりのペットの一員である霊鳥路 空である。

「うるせえのはお前だよ！！！俺は、お前みたいなバインボインには興味ねえんだよおおお！！！！しかも、馬鹿キヤラはチルノと被ってんだろぅがあああ！！！！」

「うるさい！！！！バカバカいうな！」

血の涙を流しながら弘樹は、敵意をむき出しにしてモーゼルを抜き放った。

「ロリ以外は、いらん！判決……死刑！！！」

「えっ！？登場して間もないのに容姿が幼くないという理由で迎撃するの！」

レミリアが止めようとする頃には弾幕が辺りを埋めていた。

黒幕は、見つけ次第死刑！！（後書き）

誠輝

「人は、皆残酷だ。だから、平然としていられる」

志々雄

「取り返すまではギャグは封印だな」

弘樹

「ロリ以外は絶対に認めぬ！」

次回予告

何か大変な事になって来たこの頃、三人の明日は一体どうちだ！

誠輝

「最早、予告ですらねえ」

次回更新

恐らく、隙あらば連続投稿でもするかもしれません

これが俺の本気だああ！！！！（前書き）

あらすじ・牛筋！

- ・ぬるぬるいこうぜ！
- ・反逆の弘樹！

備考

お久しぶりです。

なんだかテストに根詰め過ぎてスランプ状態になりました。

全てにやる気が起きない……

そうだ！こんな時には、散歩に出かけよう！

フラン

「そして、誰もいなくなるのか」

霊夢

「あれ以来、作者が帰ってきませんでした」

タグ

『作者失踪（嘘）』

『脳内会議を没頭させたくあわいさ』

『人の妄想力は人類を破壊する』

『ロリコン王 神』

『ハードボイルド精神』

「これが俺の本気だああ！！！！」

「爆符【メガフレア】」

炸裂する超火力のスペルカード。高熱を放つ弾幕の隙間を通り過ぎ、弘樹はモーゼルを構える。

「スペルカードがないから不利だが、こちらとて火力負けしねえよ！疑似マスタースパーク！！！！」

直進する光線が、お空の弾幕を削り取りながら直進する。

「ぬぬぬ……中々やるわね。アンタも火力はあるみたいね！私よりは劣ってるけど」

「余裕発言とな、まあいい。直ぐにアツと驚かせてやるぜ！」

「ふふん！出来るモノならやってみなさいよ！」

悠然と空中を飛ぶお空。弘樹は、地上より弾幕を射出するが徐々に

威力も落ちて行く。

（まずいな、第三形態が保っていらなくなったな。仕方ないが、さくつとでかいのかまして逃げるか。で、その後はジャッククリスピン曰く、やったら逃げろだったな）

「いまだ！核熱【ニュークリアエクスカーシオン】」

「うぎぎぎ、俺としたことが先手を取られた」

めまぐるしい程の弾幕が辺りを焦がす。その中で弘樹は、不思議な感覚を覚えていた。

可笑しい、弾幕の動きが……全て読める

弘樹は、自分の目の前の状況を冷静に分析し場の空気を完全に把握しつつあった。

「うそっ！？当たらない！それどころか、かすりもしないなんて……うぐぐ」

「は、ははは……だから言っただろう！アッと驚かせてやるってね！」

自分にも分からない事が起こっている筈なのだが精いっぱいの理性で平静を保とうとするが、明らかに失敗だ。しかし、運がいいのかお空はそれを読み取るほどの注意力が欠けていた。

「やれやれだぜ、さて……そろそろ終幕と行こう！レミリアが待ってるぜ……てあれ？何処行つた？おーい！レミリアアアアアアアアア……！――飴玉上げるから出ておいでエエ……！！」

周りを見渡すがレミリアの姿がない。

「飴玉！？私に頂戴！！！！」

「うお……まさかのこっちが反応しやがった。しかし、お前に上げる物など」

先ほどの敵意は何処へやら、お空は気付けば弘樹の目の前にスタンバっていた。

「うにゆゝくれないの？」

「ば、馬鹿な！？上目遣いが……素晴らしいだと！」

お空は本当に悲しそうに涙を溜めた瞳で弘樹を眺める。

この時、弘樹の脳内で国際会議が行われた。

- - - - -

【弘樹の脳内】

弘樹 A

「裁判長おおおお！！このくあわいさと脳年齢は身体に比例してないと思われます！これは、我が心理【幼女を護る】に匹敵する危険度があります！」

弘樹 B

「待て、冷静に考えな。彼女は、精神は幼くとても素直だ。しかし、我が心理たる【つるぺた】に違反している。これをどう対処するべき何だ A よ」

弘樹 A

「た、確かに……だがしかし！彼女のくあわいさは異常だ！これは、愛しロリに匹敵する！」

弘樹 C

「Oh、確かにソウデスネ。しかし、ドチラの意見も素晴らしく有効……これは、裁判長に真意をゆだねるしかないのね」

弘樹 B

「確かに。ならば、この問題の白黒を脳内会議最高責任者である我が神に問おうではないか」

弘樹 A

「おつし！？裁判長おおおどちらの意見が正しいかご健闘を！」

神弘樹

「おほん、よからう。今から、『お空は、我が領域に入ってもよいとするか』どうかを審議する……両者、己の意見を出し合っが良い」

弘樹 A

「俺からだ！？体格とは別りした幼女精神！？純粹？萌えええ！！！！」

弘樹 B

「次は、俺だな。？体格が範囲外？宿敵？萌えええ！！！！」

弘樹 C

「何だかんだで萌えるんデスネ」

神弘樹

「うーむ、確かに彼女は口リの範疇を超えた……くあわいさは幼女にも負けておらぬが……やはり体格が決定的かのう」

弘樹 A

「くつ、やはり可愛さだけでは勝てないと言うのか！」

弘樹 C

「裁判長、例のアレを使用すれば肉体など意味をもちません」

神弘樹

「まさか……アレか、しかしアレは我が精神を危険にさらす神の領域の産物……全国各地に散らばる神の称号を持つロリコンにしか使えぬというアレのことじゃな」

弘樹B

「まさか……解放眼か」

弘樹A

「た、確かにアレなら行ける！」

弘樹C

「裁判長、ご決断を」

神弘樹

「……………」

弘樹A

「裁判長オオオオオオオオ！俺は、死んだように生きたくないんです！どうか、この力ケを成功させるための力を与えてください！」

弘樹B

「裁判長、それなら我が意見も覆せます。どうか、許可を」

弘樹C

「さあ、決めてください」

神弘樹

「…………… よろしい、ならば神への挑戦じゃ！解放眼、コードRORI発動！これは、一世一代の力ケじゃああああ！！！！」

弘樹・全員

「「裁判長おおおおお！……！」」

- - - - -

【地霊殿前】

「コードRORI発動許可！……！……うおおおおお！……高まれ、煩惱！活性化せよ我が妄想！……！」

「うにゅ！？何、この凄まじいほどの圧力！」

弘樹が燃え上がる。否、弘樹の周りに固有空間が出現する。

全てを少女の為に捧げると誓った男は、覚醒した……人類の到達で
きない域を超える為に……

「解放眼！完全覚醒！！緊急発令レベルred！！！！【ロリータ
ransfer トランスファー】」

説明しよう、ロリータtransferとは

- ・ 人類の妄想力を最大限まで活性化させる最強究極奥義
- ・ それは、見るモノ全て（女性限定）をロリーにするという神のみぞ使えりと伝承される禁忌

- ・ ただし、強力かつ強固な自己暗示な為に失敗は精神崩壊を意味する

「見えるぞ、お空の身長が縮まり、胸がつるぺたへ！！！！神だ、神の領域を俺は踏み越えたんだ」

そつと弘樹は、清々しいほどの笑みでお空に飴玉を手渡す。

「えっ、くれるの？ありがとう！」

「ふ、いいときさ。これからも、その純粋さを忘れずにな」

「ん？よく分らないけど分かったわ！」

飴玉を口の中でコロコロ転がすお空を見ながら弘樹は、天を仰いだ。

我が神よ！私は、貴方が位置する場所まで到達できたのでしょうか？いえ、これで貴方様と同じスタートに立てた……だから、私は貴方を抜いて先の領域に進みます。

そう心に誓い、満足げに笑うのだった。

「なあ、レミリア。あれ、何やってんだろう？」

「私に聞かないでよ」

「よく見えないけど悦に入ってたみたい」

と第三者となった何名かがその状況を影からこそこそと覗いていた。

- - - - -

【灼熱地獄】

「此処か、この最下層に黒幕はいるんだな、さとり」

「ええ、そうです。私は生憎、戦う事は不得意なので……」

「まあいいわよ、どうせ博麗の巫女の仕事なんだし……さて、私は飛んで行くけどシオは？」

「俺は、走って行く。この身体が教えてくれる……姫様を助ける為にお前は生まれ変わったのだと……」

志々雄は、腕に抱える重火器を眺めてこれから進むであろう地獄を見渡した。

見つめる先は、全て炎、炎、炎、炎。全てが火の海であり全てが灼熱の領域。

普通の人間なら一溜まりもない。しかし、志々雄は怯むことなく歩を進めた。

「お氣をつけて行ってください」

「任せろ、靈夢は先に行くのか？もしも、姫様を見つけたら俺が行くまで待っていてくれと伝えてくれ」

「ええ、分かったわ。でも、一言いわせてもらうけど……邪魔だけはしないでよね」

「分かってる。お前は、博麗の巫女……相手が誰であろうとも邪魔するなら叩きのめす……だろう？」

「そうよ……だから、出来れば敵に回したくないの」

「ああ、後から行く……氣をつけろ」

「ええ、貴方もね」

そう言つて靈夢は、身体を浮遊させこの炎だけの世界に旅立った。

それを追う様に志々雄も走り出す。この熱氣が志々雄の身体をじりじりと痛みつけ、その痛みが志々雄の力となる。

「絶対に取り戻す、さあ黒幕野郎……覚悟はできてるだろうな」

誰もいない地獄に問いかけながら志々雄は一心不乱に走り出した。

これが俺の本気だああ！！！！（後書き）

誠輝

「うむ、中々話が読めん……というか付いていけない俺」

弘樹

「神よ、私は貴方について近づいた」

志々雄

「己の誇りを胸に刻みつけ歩を進める……それが俺の生き様だ！」

次回予告

力を込めて立ち迎え、さすれば自然と言葉は力となりゆる

友を救いたければどんな状況でも諦めるな、さすれば力は付いてくる

次回更新

不定期、すみませんね……テストが始まるんです

応募

はい、ちよいと困った事が起こりました。

簡単に言つと誠輝のブレイク仕方が迷走しています。

初段階ではドS一直線でよかった気もしますが……何せ色々といベントが詰まつてる訳で中々ブレイク出来ないんです。

ですから、誰か誠輝ブレイクネタの参考になることを考えて貰いたいんです！

主要要素はこれです。

・ドS

・紫、幽々子が大好き

・甘いモノが好き、甘いモノを無下にするものには襲いかかる

・幽霊が怖い（幽々子、妖夢はなどの東方キャラは別）

ちなみに意地があるので主には怖がったりしません

例

「いや、あれだよ……怖くないよ？な、なんだよその目は！絶対に怖くないんだからな！」

とまあこんな感じ

誰か……簡単なネタを……出来ればメッセージで……

頼みます。

なんかスランプなんで中々うまいのが書けないんですね

それでは、長文失礼ノシ

少女と糖分は偉大だと誰かが言っていた（前書き）

あらすじ

- ・ 神の域に達した弘樹
- ・ 走れ志々雄！その足の赴くままに！
- ・ 置いてけぼりの何名か

タグ

- 『 絶妙なる伏線＋死亡フラグ 』
- 『 火だるま 』
- 『 決戦前から死亡フラグ 』
- 『 ボルケーノガチロリペドフィリア 』
- 『 どっせい！！！！ 』

幼女と糖分は偉大だと誰かが言っていた

弘樹 side

「で、この状況をどう対処する気だぺドリこん」

「最早、俺の名前の面影すらないな」

俺がお空との対決で神の領域に達した後に誠輝たちと合流し地霊殿へと侵入したのだが……

「どうでしょうか？ 志々雄さんや博麗の巫女が向かった様に貴方達も向かってくれませんか？」

目の前にいるどこぞの園児が来ていそうな制服を身にまとっている幼女は、古明地 さとりだ。握手もしてもらったことだし俺はいいのだがどうやら灼熱地獄と聞いて誠輝が猛反対した。

理由は簡単だ。

誠輝は、極端な暑さにめっばう弱いのだよ！

寒さにはかなりの耐性がある代わりに暑さに極端に弱い……まるでジャックフ ストを連想させる。

「俺は熱い場所が苦手なんだ……………行かないぞ」

「そうですか……………それはとても残念です。異変を解決してくれば地底にある名店舗の甘露を差し上げようと思っていましたのに」

帰ろうと歩みを進めていた誠輝の動きが面白いぐらいに一時停止する。さとりはしてやったりとした表情を浮かべ追い打ちをかけた。

「本当に残念です。前金としてお団子を用意していたんですが……………無駄になりましたね」

「よし、引き受けた！団子は貰う！異変は完全と言うまでに完璧に解決してやる！！！」

華麗にトリプルアクセルを決めた誠輝は、先ほどまでとは打って変わりと握手をしている。さりげなく、握手できるあの図太さが羨ましい気がするんだが……………まあいいか。

「よし！下僕一の弘樹いくぞ！」

「誰が下僕か！」

「まあしょうがないわね。どうせ飛べないんだろっからついて行くわ」

「行つてらっしゃい」

「お氣をつけて」

俺たちは、お空とさとりに見送られ地霊殿の下にあるという灼熱地獄への扉に辿り着いた。

「ここから俺らの地獄めぐりが始まる訳か」

「嫌な言い方だな。事実だが仕方ないけどさ」

しかし、出入り口なのだが……少々でかすぎるわ。最初見たときには地獄門かと思ったよ。流石に嫌だぜ……地獄に落ちるのだけは

……

「はは、弘樹は死んだら地獄行きじゃないのか？ちよつどいい予行練習だな」

「なんの！？」

「勿論、地獄の門をくぐるためのさ」

「今考えまいとしていたことをあつさりと友人からぶっちゃけられた！」

「ははは…… 案外、マジで墮ちるかもな」

「嫌だああ！！！」

この時のやり取りが、まさか…… あんな悲惨な事件につながるなんてこの時の俺達には予想すらできなかった。

「さて、コントは一通り終わった事だし…………マジで行くぞ」

「おう、じゃあ開けるぞ」

「いいわよ」

「何時でも来なさい」

俺は、自らの手を巨大な押しあける。その先には……

「おおおおおおお」

炎が猛烈な勢いで襲いかかって来たという現実を突き付けられた。

まあ、当然如く引火する俺。しかも、ド　フでありがちな頭だけを対象とした引火だ。

神よ、アンタ俺の事嫌いだろ！

「あちちちちち！……！！！」

「うおっ！？弘樹の頭がボルケーノ！」

「ちょっと！？引火してるじゃない！水……はないわね。布ではたきなさい！」

俺を見かねた誠輝とパルスィが消火活動に当たる。その間、俺は転がりまわるうううう。

正直、この選択肢は間違えたと思っている。

「ぎゃああああ、転がってたら身体に引火したあああ……！」

「うわっ、これが本当の火だるまか」

「上手い事言っている場合じゃない！全く妬ましいわ」

熱い！熱い！マジで熱いつて……！尋常じゃない暑さだから！これ、あれだよ！世界　天とかでよく見かけるパプニング集並みだから！間違った選択を選んできましたようだ。全身から火の手が上がる。

とりあえず、数秒ほどで俺に纏わりついていた炎がかき消される。

しかし、代償として…

「ぶふっ！？すげえな、本格的なアフロだ」

「くっ、目立つわね……妬ましい」

誠輝は兎も角、パルスィは妬ましがる場所を間違っていると思うよ？

「さて、それより行こうぜ……弘樹が扉を開けてくれたおかげで
炎の威力が弱まったからな」

「何であんなに激しく俺の時だけ燃え上がるんだよ。最早、誰かの
仕組んだ陰謀としかとれない」

「あれはな、バックドラフト現象だろうな。というかそれに近い現象。
密封された空間で炎を点火し一部に穴をあけると炎はたちまち
外の酸素を燃やし始め、一気に燃え上がるって所だ」

どこその眼鏡の博士の様に誠輝は解説する。何気に豆知識だけが多
い奴だ、昔から勉強は駄目だと言いつつも無駄に豆知識だけが先行

している。これでは、豆知識が本知識で一般教育が豆知識だな。

まっ、俺も学力いい訳じゃないから人様の事は言えないが。

「さっ、行くぞ！団子の為に異変を解決する！」

「えっ！？さとの為とかじゃないのか！」

「はあ？何で俺が人様の為に戦わにやなんのだ。良いか、世界は糖分と萌えと金で回っているんだぞ」

「その解釈は激しく間違っていると思うわ……にしても……紅魔館の主は喋らないわね？合流してから一言ぐらいしか喋ってないわ」

そう言えばそうだ。何時もなら、色んな所にツツコミを入れてくれるおぜう様だが……何故か、腕組みをしながら何かを考えている。

あれか？何か複雑な未来が見えたとかそんな感じだろうか？

それよりも何故か違和感がぬぐえない。

何が違うとかいうのは分からないが何か身をしている様な気がする。

「おい、弘樹。ぼーとしてたら置いて行くぞ？」

「げっ！？何気に置いて行くなよ！」

まあいいか、分からないなら分からないなりに何かあるしな。

さて、異変に関わるのは初めてなものな……何か緊張してきた。

こういう時にはロリを数えればいいとロリ神様は言っていたな。

幼女が一人、幼女が二人、幼女が三人……

- - - - -

誠輝 side

はあ、正直……後悔している。

団子の為とはいえ……こんな熱い場所に来るんじゃないかった。

どのくらい熱いかというと厚着でコタツに入っただまサウナに放り込まれた感覚だ。

はは、冬では魔性のアイテムとして恐れられたコタツもこういう使い方をすればただの拷問道具だな……今度シオに試してみるか。

「熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い」

「五月蠅いわね、さっきからそればかりじゃない」

「鍛え方が足りない所為だな、さあ一緒に少林寺拳法を習おうじゃないか！」

「断る、暑苦しい格闘技は面倒だ。どうせなら極真空手がいい」

「おい、それは明らかに相手の急所に攻撃する事を前提に考えるだろ」

「当り前じゃないか？極真はいいぞ、敵の弱点も攻撃し放題だ。ふふふ」

そんな感じで俺たちは、というか俺と弘樹は飛べるパルスィとレミアにぶら下がっている状態で飛行中だ。霊夢は、先に行ったらしいからどうせ一番乗りはあいつだな……シオは走って行くだろうな

……ハードボイルド道つてめんどくさいな。

「あん？あれ、シオじゃねえか？」

「何処だ？……あ、確かにシオだな……何か弾幕ごっこしてないか？」

「あれは、弾幕ごっこというか……本気じゃない？」

前方の地獄を脳内にメモリーしていたらシオを見つけた。どうやら、萃香と戦っている見える。黒くないな……オリジナルか。

だったら何故戦っている。今回の黒幕は萃香と言う事か？

いや、待てよ。萃香は確か能力は密と疎を操る程度の能力だったな。

此処に来るまでに何度か交戦したが再生する時に禍々しい雰囲気纏っていたし……まあ、思いつきりブツ飛ばせばいいか。

この力を酷使すれば人間でも鬼と同等の力を発揮できそうだしな。

- - - - -

志々雄 side

くそっ、まさか此処まで苦戦するとは……今の気分を英語で表わすとH A L L E Y！である。

早く、輝夜を救わなければ、永琳にも頼まれたし姫様とも約束した。

俺は、もう二度と約束を違えたりしない。

あの時に誓った。あの人の様にハードボイルドになるんだってな。

「ちっ、馬鹿力が！」

「人間風情が鬼に勝てるでも思った？ だったら滑稽だね」

小柄な萃香は、何やら厨二的な邪気に支配されているらしく何か背後に隠みたいな黒い物体が見える。

あれをブツ飛ばしてしまえば終わりというのは自分でも分かっている。

だが、鬼の力＋霧状になったり軽快なフットワークで責められると流石に苦戦を強いられる。

「ちっ、新調した武器の性能を見せてやるさ。ガンブレード『shooting mode』」

「変形？そんな武器でどうするのさ？銃器の類じゃ私を捉える事は出来ないよ！」

と言ってまた霧散する萃香の身体。

S i t！かなりまずい。あれをやられると弾幕もノーカウントになっちゃう。

「だが、諦めん！俺の溢れる愛情と痛みを力にする欲望を乗せて弾幕を放つぜ！」

「無駄無駄無駄！！！」

「がつ！？後ろか」

背後から車に衝突された様な衝撃を感じた。そのまま俺は地面を転がりながら回避行動をと直ぐに体制を整える。

「そんなもんかい？もつと善戦してくれるんじゃないのかと思ったけど……大したことなくったね」

実力は明らか、何百年何千年を生き抜いてきた鬼と本当の戦いというものを知らないただの一般高校生（魔改造済み）がマジで闘えば実力の差などいっばつで分かる。

レミリアの時は、弾幕ごつこというルールがあったしフランの時も勝負がつく前に紅魔館が崩れた。

今回はそうはいきそうもないな。

さて、死ぬのか……俺は……まあ、一度ぼっくりは逝ったがな。

「さて止めを……」

「どっせい！ー！」

「げふっ！？」

萃香が止めを刺そうと動き出した瞬間、何故か誠輝が上空から飛来

しドロップキックをかました。勢いが勢いだった為に萃香は情けない声を出しながらスリーバウンドぐらいして地面に沈んだ。

「おまつ！？世界の宝、幼女に何て事を！」

「うるせえ、何か人間風情がどうとかって聞こえたからむかついただけだ」

「いやいや、お前ら何してんのよ？」

目の前に立っていたのは凄く見覚えがあるメンツだったのだ。

しかし、何故に弘樹はアフロなんだろうな？大胆なイメチェンか何かだろうか？

幼女と糖分は偉大だと誰かが言っていた（後書き）

誠輝

「どっせい！」

弘樹

「世界の宝は幼女だ！」

志々雄

「啞然」

次回予告

三人が再び揃う時、奇跡が起こる。

絶対的な力を持つ鬼と三人組が激突！

次回更新

火曜、木曜、土曜

が基本です。

備考

お久しぶりです。テスト週間があった所為で二週間弱更新ができませんでした。

これからは復帰していくつもりです。

では、また次回！

頭で考えて卑怯で倒せ！（前書き）

- ・どっせい！！！！
- ・瀕死の危機を回避！
- ・アフロヒーロー！

タグ

- 『鬼畜策士』
- 『アフロは妖精』
- 『シャイニングアフロ』
- 『卑怯で何が悪い！』
- 『外道戦隊 グレテンジャイ！』

頭で考えて卑怯で倒せ！

o u t s i d e

「はは、この幼女をとつちめてさつさと霊夢の所に行くぞ」

「分かったよ、とつつぁん」

「何がなんだで俺たちは揃うんだな」

再び揃った三人。それぞれの言葉を吐きながら目の前にいる萃香へと注目が集まる。

「何か見えるな。俺にはおぼろげにしか見えんが」

「そうなのか？誠輝は靈感がないからなあ……俺には見えるぜ！萃香さんの後ろに見える悪党がよ！俺の中の何かが確信させる、奴は処断しなければならぬとな」

「弘樹がいつも以上に輝いているな。暑さで頭と頭髪をやられたからか？」

霊力や魔力を宿している志々雄や弘樹には萃香の背後に蠢く黒い影が見えている。

しかし、誠輝は靈感という物がない為うつすらとしか見えならしい。

それでもうつすらと見えるのは誠輝の中にある何かが出てきているからである。

「あたた、やってくれるじゃない。不意打ちとは卑怯だね」

萃香が起き上がり軽口をたたく。どうやら、大したダメージにはなっていないようだ。仮にも鬼である所以なのか外部には傷一つ付いていない。

「はっ！卑怯？卑怯で何が悪い！人はな、弱いんだよ！だから色々と作戦を無い脳みそで考えてんだよ！」

「そうなの？じゃあ、その作戦とやらを全部ぶち壊してあんた等を食ってやるよ。おとぎ話でもあるようにね、鬼は人間をさらって食

べるのさ！」

瞬間、萃香の足もとに亀裂が走る。刹那、萃香の姿が三人の眼下から消えうせる。

そして……

「がはっ！？……っ、やってくれる。改造された身体でなかったら死んでたぜ」

「まず一人……次はその目つきの悪い奴だ」

ダメージが大きすぎる所為か中々立ちあがってこれない志々雄。

「俺！？どうする、ロリっ子に狙われるとか正直、嬉しい気がするんだが」

「黙れ、ペド野郎！流石に身体能力をフルに活用されると厄介だ！機動力を削る作戦に出る」

誠輝は、弘樹に耳打ちをする。

「了解、その間にお前はとうするんだ？」

「糖分接取及び小休憩だ」

「おいしい！！人が戦っている最中に休憩とかするなっあああ」

「黙れ、お前らの様に不思議なパワーに守られてない一般人は俺だけだ。しかも敵は鬼幼女だ……お前なら出来る。自信を持つんだ！」

「……………わかった。やってみる、なあにロリなら任せろ！」

いつの間にか話がすり変わっていたが弘樹は気付かないまま萃香と対峙する。

そして誠輝は、戦線離脱。その後、やっと来たパルスィとレミリアの所でさとりにもった団子を食していた。

「遅かったな。もう、始まってるぜ」

「いや、始まってるぜじゃないわよ……貴方戦わないの？」

「……………俺、普通の一般人だから」

「普通の人間は角を生やしたりしないわよ、はい」

パルスィは、細長い棒を二本誠輝に手渡す。それは、謎の暴走があった時に誠輝がノリで折ってしまった何かの角であった。

ゴタゴタで何処かへ行ってしまったがどうやらパルスィが回収していた模様。

「…………ま、使わないけどな。雷を帯びているからなあ…………そう
だ、帰ったら霖之助にでも渡してマジックアイテムでも造ってもら
おうっと」

「いや、だから戦わないの？人の話を聞かない所も妬ましい」

「ふう、弘樹は陽動。先ずは志々雄が復活するのを待つだけだ。今
回の戦闘において萃香を倒せるのは弘樹じゃない、志々雄だ」

不思議に思うパルスィは首をかしげている。それに気付いた誠輝は
補足説明を入れる。

「弘樹は、俺らの中でも外面的には究極のシャイニングガチロリペ
ドフィリアだ。だが、実際の所は全ての幼女に手加減をしている。
それが、本人の意思とは関係なくな。つまり、生粋のロリコンで事
だ…………だから、弘樹じゃ萃香は倒せないってわけだ」

「大事にしているものを壊すことはできない……そう言う事ね。で、どうしてそれえあそこに倒れている人間が倒せる鍵なの？」

「それは簡単だ」

誠輝は、二本目の団子をほおばりだす。団子をよく噛みしめてから説明を続ける。ついでに包み紙を丸めて志々雄に投げつける。

「上手い！団子はやはり三色かみたらしだな！……と、話がそれたな。趣味的に変態性を最大限に活用できるのがシオだ。あいつは生粋のDMだ。故に鉄壁の防御を誇り、永遠亭の薬師のおかげで何故かハイパーすげえ人造人間になっているらしい。だから、奴にかける……攻撃を受けながら力を溜めさせ、一気に解放すれば萃香に取り憑いている奴も取れるだろう」

「なるほど、で……私たちは、何をすればいい？」

「あん？ああ、別に何も……強いて言うなら霊夢を追ってほしい。それと所々に目印を着けてほしいな」

あっけらかんと答える誠輝に慌てて反論する。

「ちょっと待って？貴方達を運べる役が居なくなるじゃない」

「どうせ、負傷が一人増えてもう一人追加人数があるんだ……レミリアとパルスイじゃ運べない。だから、先に行って情報を得ていて欲しい。情報は力になり得る……レミリアもいいな？」

「……そうね、それでいいわ」

素直にそう頷くとレミリアは黒い翼をはためかせ上空へと飛び立った。

「……妬ましいわね。本当に……じゃあ行くけど……死んでは駄目よ?。」

「あいよ、誰も死なせる訳ないでしょ……策士舐めんな」

「そうね、自然と安心できるわ」

その言葉を最後に飛び立つパルスイ。

(……見えそうで見えんな。あのチラリズムが素晴らしいのかもしれんな)

自分の変態性だけは決して他人に明かさないちゃっかりした策士もいたものだ。

「ぎゃはあ!？」

「おつ、弘樹か。見ない内にボロボロな顔面になってんな」

転がって来た物体は弘樹だった。勿論、誠輝の予想通りボロボロ。

「よくよく考えたら、俺はロリを本気で殴れない!」

「うん、知ってる。まさに計画通り!」

「悪魔! 外道! 鬼畜!」

「最高の褒め言葉だよ」

弘樹の文句を華麗に回避し誠輝は再度耳打ち。

すると『えっマジでやるの?』的な表情を見せる。

「大丈夫だ。お前は既に失う物などない筈だ、さあこのこれやるから」

誠輝は、弘樹のアフロに何かをしのばせる。

「分かった、文化祭のつもりでやるぜ」

弘樹は再び萃香の前へと立つ。しかし先ほどとは威圧感が違い本能的に萃香は身構える。

「はあい 私がアフロ妖精よおおおお！……！！（裏声）」

その言葉を合図に弘樹のアフロが光り輝く。

弘樹が光る！アフロも光る！場の空気も凍る！

「すげえ、もう弘樹が直視できねえわ」

「ああ、俺も何故か前がにじんで見えないんだ……畜生！悲しみの徒手空拳！」

「えっ！？ごふっ！」

呆氣にとられていた萃香は安易に弘樹の押し出しを喰らいある地点まで押し出される。

「くっ、意味が分からな過ぎて混乱したけど大したこと……」

最後まで萃香の言葉は続かなかった。萃香が着地した直後、地面が大爆発を起こす。土砂や溶岩が同時に噴き出し萃香を一瞬で覆い隠したのだ。

「はは、シオ起きていいぜ。作戦成功だ」

「おっ、マジか。包み紙を開いてみたら『対戦車地雷を相手に悟られない様に尚且つ俺に分かる場所に設置しろ』だなんて書いてあるんだからな、びっくりしたぜ」

「あはは、何か失った気がする。だが、なんだか清々しい気分だ」

起き上がった志々雄、何故か晴れ晴れとした表情をしながら目が死んでいる弘樹、どや顔で歪な笑みを浮かべる誠輝。

「ま、卑怯上等だな」

「差し詰め、卑怯戦隊グレテンジャイだな」

「あはは、今ならperl　ナぐらい呼び出せそうだ」

頭で考えて卑怯で倒せ！（後書き）

誠輝

「卑怯が勝つ！」

志々雄

「対戦車地雷最強だな」

弘樹

「ペ ソナあああ！！！！」

次回予告

萃香は正気に戻るのか！三人の試練はまだ始まったばかり

次回更新

何時も通り火曜、木曜、土曜

外道戦記！卑怯は必殺技なり（前書き）

あらずじ

・アフロフラッシュ！

・外道戦隊

・卑怯こそ最強

タグ

『今回は真面目な戦闘描写が含まれております』

『ギャクがない……だと？』

『弘樹〃ギャグ』

外道戦記！卑怯は必殺技なり

対戦車爆弾が破裂し地形を利用した攻撃に転じた誠輝たちだったが
相手が少々悪かったらしく効き目は薄かったらしい。

「殺る気満々だね。いいよ、最後まで相手してあげる……死ぬまで
ね」

殺意に満ちた瞳をぎらつかせ萃香は、再び立ちあがる。しかし、地
形ダメージは無いに等しいとは言え、人工的に造られた近代兵器の
威力は鬼にも通用するらしく衣装や肌に焼け焦げた部分や血がにじ
んでいる個所がある。

「さて、萃香は……あのぐらいじゃくたばらんか。てか、黒いのが
更に活性化した気がするんだけどよ」

「いや、違うんじゃないか？寧ろ、外れかけてるのが正解だろ」

「俺は、既に人の道から足を踏み外した」

一人を除いて萃香を冷静に観察する。萃香の背後にまるで寄生虫の様に貼りつく黒い影は一層迫力を増したが外へ向かって身体の一部が離れつつある所からダメージは確実にたまっていると推測。

ふと、志々雄が顔をあげ、ブレードを特化した様な形の銃器を構える。

「スペルカードでもあれば、どうにか技を使えるんだが……無いモノをねだつても仕方ないな。よし、全員武器を持て！1、2、3で総攻撃を仕掛けて叩くぞ！」

「了解、リーダーシップ発動してるな。俺は、まとめ役には向いてないからな……まあ、頼むぜ」

「わわわ、忘れ物ゝ俺の忘れものゝ」

「おい、いい加減に忘却するか記憶を破棄するかして戻って来い」

「誠輝、それ同じ意味だから」

放心状態の弘樹は兎も角、二人は一斉に武器を取る。

誠輝は、背中に担いでいた青龍刀のレプリカを下段に構え突進。

志々雄は、刀身の部分を突き出した格好での追撃。

「うらあああああ！！！！」

「いいね！愚かだけどその愚直さこそが人間って物だよ！」

激突する三人。先ずは、選抜として誠輝が切りかかる。

長い薙刀の様な形状をしている青龍刀を縦に振りかざす、体重の乗った良い攻撃だ。

しかし、幾ら誠輝が通常一般よりも力が強いといえども相手は、数千年の歴史を持つ鬼。

軽くないなされ弾かれる。

「ちつ、流石は最強の力を持つ鬼だ。人間の力じゃ付いていけないぜ」

「人間風情が力で鬼に打ち勝とうなんて千年は早いね！」

「確かに力なら無理かもしれないが、これならどうだ！」

勢いよく刀身を突き出す志々雄。同じく萃香の片腕により止められる。

「連携はまずまずだね。だけど、圧倒的な力の差に勝てる技なんてないね！」

「そうかな？俺の武器は、二段式だぜ」

途端に銃身が淡く発光する。金色のオーラが刀身を駆け巡り銃身へと送られる。

そして、志々雄の先ほどまでに溜めていたエネルギーが凝縮し吐きだされようとしていた。

「成程、剣だけと弾幕を撃つこともできる万能武器。だが、甘い！私の能力を忘れたか！」

「甘いのはお前だ」

「また、君か。いい加減に力の差をわきまえろ」

萃香の目線の先には青龍刀を全力で薙ぎに来る誠輝が見えた。

人間が鬼に勝てる筈がない。

その定義が萃香に余裕を与えていた。しかし、逆に取ればそれが油断にもつながる。

危険に瀕した生物ほど驚くべき行動をとる。

それが猫に襲われている鼠だろうと…

「ほいつと、当ててやらねえ」

「何？自ら武器を捨てた」

「シオ！！」

「あいよ、砕けろ！」

志々雄が開いている片手で誠輝の青龍刀を掴む、瞬間…一メートルを余裕に超えていたそれは粉々に砕け、萃香の頭部から顔へと降りかかる。

「ぐっ！？目くらましか！」

「そうだよ！喰らっつけ！」

腰に帯剣していたカラドボルグの模造刀を抜き放ち誠輝は、今度こそ全力で萃香を叩きつける。

遠心力と勢いが合わさった一撃は、小柄な萃香をよろめかせるには十分の威力だった。

そして、志々雄の銃剣が吼える。

「穿て！ギャラクシカノン！」

見事に命中する光線。瞬時に萃香は光の中へと消えて行く。

弾幕が収まる頃には、二人の少年が立っているだけだった。

「はは、やったな」

「そうだな、これで姫様の所へ行ける筈……で、弘樹はまだ放心か」

「だろうな、まあいいか」

「いいんかい！」

適当にツッコミを入れながら志々雄は、一息つく為に近場の岩に腰かける。

直後、真横を何が通り抜けた。

同時に目の前にいた筈の友人が消えた。

否、遠方にある岩石に叩きつけられ、崩れ落ちていた。

「な、なに!？」

「いやゝ今のは危なかった。余裕はもつ物だけど油断はいけないよ」

片手に瓢箪 ひょうたん 型の容器を持った鬼がニヤニヤと笑みを浮かべそこに立っていた。

外道戦記！卑怯は必殺技なり（後書き）

誠輝

「戦闘不能」

弘樹

「行動不能」

志々雄

「バ力な……」

次回予告

「力無き者に道は見えない」

そう爺から聞かされた。

「何かを目指したいなら一つの物の為に熱くなれ」

そうあの人は夕陽をバックに教えてくれた

「何が何でも捨て置くな。それは、お前にとって必要なものかもしれないのだから」

そう小さな彼女は容姿に似合わぬ物言いで俺を導いた。

次回更新

土曜！

備考

何故か真面目な回になりました。

ギャグを入れるタイミングは色々と考え中です。

うむ、シリアスとギャグの混合がこれ程難しいとはな

では次回までノシ

世の中で一番やってはいけない事てなんだ？（前書き）

あらすじ

- ・絶対的『力』は鬼の特権
- ・一人、精神世界から帰還せず
- ・絶体絶命という状況

タグ

『祝30話！』

『団子 起動スイッチ』

『神は言った。食べ物大切に』

世の中で一番やってはいけない事てなんだ？

志々雄 side

今、起こった事をありのまま話すぜ！

俺は、誠輝の横に座った筈だった。しかし、次の瞬間誠輝は離れた岩山の残骸に撃ちつけられていた。

何が起こったのか分からねえと思うが俺も何が起こったか分からなかった。

催眠術とか弾幕だとそんなちゃんもんじゃないやねえ、もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ。

……………単に萃香のパワーで強化された伊吹瓢で攻撃してきたのだろ
う。しかし、こうもあっさり俺たちの全力を交わされるとはいい線
は言った気がしたがどうやらギリギリの所で霧状化したらしい。

「……………非常にまずいな。エネルギーが不十分、ペースメーカーを失う……………最悪な状況じゃないか」

「そうだね、絶望というのはきつとこういう事を指すんだろうね……………じゃあ、もう終わりにしようじゃないか」

空気中の何かが萃香の上空に集まっている気配がする。この子の能力は、密度を操る程度の能力ならば……………もしか、密度を高めているのか。

「そろそろ飽きた。終わらせよう、全て……………ね」

「簡単に終わるかよ。さて、いい加減に起きろ！」

サディステックな笑みを浮かべる萃香。さて、この状況下で最優先行動はただ一つ、今だ眠れる獅子を奮い起こすことだ。

と言う訳で回し蹴りを一つ。派手に吹き飛び、起き上がる弘樹。

「ぐべっ！？……………はっ、此处は新天地か！それとも桃源郷か！」

「どっちでもない、地獄へようこそ」

「NO!断じてNO!」

精神的に異世界トリップしていた弘樹がどうやら今の蹴りで再召喚されたようだ。

「いいか、よく聞け。誠輝がやられた、俺とお前で萃香を呪縛から解き放つ……OK?」

「な、なんだと!? 誠輝がやられた!」

「ちょっと待て、カタカナ変換しなかったか?」

「つい、やってしまった。でも後悔はしていないし反省の色も見せるつもりは無い!」

「そうか、まあいいか。現状で萃香を打破するには誠輝が必要不可欠、軍師の居ない俺らなど烏合の衆な様なものだ」

密度を溜めるのに萃香は若干、時間を取られる為か作戦タイムを貰えた。

手短に弘樹に作戦を話す。

作戦の概要はこうだ。漢による男たちの作戦！

タイトル『鬼畜軍師誠輝を起こすには！』

一、糖分を用意しましょう

二、誠輝の前に捧げます

三、復活の呪文『てめえの糖分は俺が貰った！』を唱えます

四、死亡フラグと共に誠輝復活！

「以上だ、さあ逝って来るんだ！」

「以上だ……じゃねえ！異常の間違えだ！流石にこれをやると俺が殺られるわ！」

俺のパーフェクトな作戦に反論を唱える。バカな！何処に不備があったというのだ！」

「全部だよ！後、地味に声に出てるからな！」

「ぬう、仕方ない。烏合の衆の実力を見せつけてやるんだ！」

しょうがないので再度突撃を図る。が…………

「完成、鬼火【超高密度燐禍術】」

超高熱の弾幕が辺り一帯を支配する。

俺の中で警告がなる。これは…………死んだ。

「起きて行き成り大ピンチだ！何とかしないと！」

「なんとかって…………壁か！あれならいけるはずだ。超高熱だろうと防げる壁が！」

直後、俺は直感で周りの地面を粒子へと変換後に分子を結合させる。

二人を囲う様にドーム状のフィルターが形成される。

光沢のある淡い金属色のドーム、そう元素番号78、原子記号Pt
プラチナ
……そう白金だ。

一応、これは強い耐食性と耐熱性を持つ金属、確か融点が1700
から上あたりだったな。

「おお、すげえ！？金属の防御壁だ！」

「これで何とか保てる筈……だったんだけどな？」

「あら、忘れたのか？私の能力は密度を操る……よって金属を加工
した代物なんて密度を薄くすれば簡単に崩壊する」

そうだった……よりも寄って相性が悪そうだ。

仕方ない、此处は全力を持って避ける！

「絶対に回避するぞ！」

「当たれば即蒸発……殺伐し過ぎだろ！ええい！ままよ！苦し紛れ
の弾幕発射！」

弘樹が独特のフォルムを持つ銃を構えてレーザー状の弾幕を乱射す

る。萃香は、それをひよいひよい避ける。

まあ、弘樹は紳士だからな……容姿が幼い女の子には手加減済んだが……いや、俺もハードボイルドとして女性に対して優しく接する必要があるから手加減はしてるさ……本当だぞ！

「ははは、中々やるね。面白かったよ、博麗の巫女ほどじゃないにしろ頑張ったほうだ……それじゃあ、地獄に落ちたらまた会おうじゃないか……ん？」

台詞が遮られる。どうやら萃香は何かを踏んでしまったようだ。あれ……もしかして……いや、俺の勘違いだ。可笑しいからな、物理法則的に……何処かで覚えのある包みが萃香の足もとにある……俺の記憶が正しければ誠輝が後生大事そうに持っていた団子の包みだった気がする。

「あばばばばば、ヤバい！緊急事態だエマーゼンシー！！！」

「どうした志々雄！落ちつけ！ハードボイルドは何処に行った！」

「あれを見る！萃香の足もとにある糖分の詰まった袋を！」

「ヤバス、ヤバス。セカイガオワリマス」

何故、ヤバいかというのは俺ら二人しか知らない。よって当事者である萃香は怪訝な顔つきで俺たちを見ている。うん、恐らくそろそろ……

「あらら、血の気が引いてるね。どうしたんだい？さっきまでの威勢は何処へ……て、まだ生きてたんだ。人間にしては丈夫だね」

「……………えるんだ」

萃香の目の前、丁度弾幕が放出されている危険地域を誠輝が歩いている。まるで生氣のない顔つき、出血している為かとめどなくあふれ出る赤い水。そして……幽鬼のように弾幕を超えて行く誠輝。

何を呟いているか分からないが……とてつもなく危険だ……主に萃香が。

「何だい？聞きとれない」

「聞こえるんだ……」

「聞こえる？一体何の話をしてるんだ？もしかして頭を打ってパ―にでもなったのかな？」

そしてまた一言……

「聞こえるんだ……踏みつぶされた糖分たちの嘆きの声が……」

………どうやら、異世界トリップしていたのは弘樹だけじゃなかった。

「そう……痛いよ、痛いよってね………ネエ、一度壊レデミルカ？」

誠輝は壊れた笑みを浮かべる………撤回、凄く怖い魔物が覚醒しなされた。

下手なホラー映画より何倍も怖い！

覚醒なされた糖分の戦士が！

世の中で一番やってはいけない事てなんだ？（後書き）

誠輝

「ケケケケケケケ」

弘樹

「バツグた！」

志々雄

「駄目だ、手に負えない」

次回予告

なす術もなく殺られる筈だった志々雄たち、しかし謎の声を聞いた糖分の戦士が再度立ちあがる。しかし、その表情には何時のもし冷静さはなかった。

そして、団子達の弔い合戦が始まろうとしていた

次回更新

火曜

これは、踏まれて傷付いた物たちの分だぁ！！！（前書き）

あらすじ

- ・ 弘樹復帰
- ・ 団子が死んだ！
- ・ 怒れる魔人が覚醒

タグ

- 『 団子の弔い合戦 』
- 『 団子は戦友 』
- 『 常識人？捨てたね 』
- 『 情緒不安定 』
- 『 何かにフレてしまった人格者ども 』
- 『 SKTA（スタイリッシュ携帯叩き割りアクション） 』

これは、踏まれて傷付いた物たちの分だぁぁ！！！！

誠輝 side

団子…… お前たちの犠牲は忘れない。

俺はお前たちが居たからこそ戦えた。だから、お前たちを無下にしたあの萃香に取り憑いている謎の糞野郎を分断させ生皮を剥ぎ、武器と言う武器でズタズタにしてやる。

さあ、まずは鬼口リが邪魔だな。策は出来ている、奴らは俺たちの打撃や弾幕は軽くないなすことが出来るが近代兵器に対しては必ずしも霧状になっている。つまり、鬼にも対応してきているのだ……現代科学は、近代兵器によるフルスロットで意識を奪い、ゴミ虫を焼却してやるわ！

「サア、終わらせようか！」

コートの中に手をつ突っ込むとあった！俺が長年に渡ってくすね続け

てきたジジイの一品『手裏剣』『クナイ』『ナイフ』と三種類の投擲武器。

ハハハハハハハハハハ、黒い感情があふれ出る。フハハハハハハハハハハハハ、今の俺を止められる奴等幻想郷には二人程しかないわ！

「ココココココ、殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス！！！！」

「こえよ！？どんだけ化け物じみた言語使ってんの！」

「駄目だ、覚醒した糖分の戦士を止めるには清らかな乙女と甘味類の甘いモノが居る」

「どんな設定！前半だったらユニコーンにでも使えそうな手だけだね！？明らかに後半は趣味丸出しじゃないか！」

何か後ろで何処かで見た様なアフロとシオが雑談を繰り広げているが気にしない。

「あはは、人間でもやめたのかい。どうでもいいけどそんなちんけな武器じゃ鬼を傷つけることなんてできないよ」

「そつかそつか、お前はイタブラレイノカ。ケケケケケケ、ぶち殺ス」

「もう人間の言語じゃない」

誰かが後ろで殺人鬼か何かかと言っているのが聞こえるがどうでもいいわ、潰す潰す、押しつぶす。マジ殺す、マジかるデストロイぐらいの勢いでマジコロするわ！！！！

「ヒヤハハハハハハ、死んでこいや！！！！」

いざ投擲でござる！まずは小手調べ、ナイフ三本を投げつける。勿論、さっきゆんじやないから一々隙をみて拾う必要があるそうだけどね

「無駄無駄無駄！！！！」

「D O様ですかコノヤロー！」

ナイフ三本ともいとも簡単に撃ち落とし御丁寧に破壊までしてくれるとは、ヒヒヒヒ……fullもっこにしてやんよ！

中距離から離れず、距離を詰められない位置を維持しながらまた一本、更に一本と消費が激しくなる投擲武器たち……正直、回収しようがありません！全部綺麗に砕かれました！俺のコレクション破壊、ワロスワロス！！！！

「うわ、何か可笑しな戦いになってるな」

「どうしようも無いさ、俺の頭みたいに……見ろよ、まだ光るんだぜ」

「発光アフロ……後光が見える！」

何か置いてけぼりの二人が残念な男だらけの雑談会してるけど気にしないぜ

にしてもやるなこの鬼ツ子、鬼は人間よりも強いし妖怪の中でもトップクラスの實力持ちてのは知ってたんだけどね。アハアハハアアアアアアアア！！勝機も正気ありませんってか？

「喰らえ！SKTA！」

二本のクナイをタイミングを外してシュート。そのうち、一本は…

「地形を利用した反射か、中々いい考えだが見え透いた攻撃だ」

「しまった〜何て言えばいいんですかい？本命はこっちなのさ」

「何時の間に近距離まで！」

簡単な話なのですよ、クナイに注意をひきつけただけの話ですサア。と言う訳で愛刀の『虎徹』ちゃんの出番でございます。

一気に腰に帯剣してあつた虎徹を引き抜く、白刃の閃光がこの灼熱地獄に体现され、そして…

「そんな物喰らうものか！」

「言つたろうが、本命はお前じゃない！狙いは一つ、後ろでこそこそしてる影野郎！貴様D A」

萃香からはがれかけていたその隙間を一刀両断。ふい、切れた。真つ二つに切れました。萃香は、影の離脱によりその場に倒れ伏した。うん、これ以後はフルぼっこにしたいところですが……何やら、逃げ出そうとしてます。さあ、此処でシンキングタイム。

・散々、鬼畜並みの暴動を起こした糞野郎が逃げようとしています貴方はどうしますか？

答えは、簡単！チルノでも分かるよ！

残ってる二人も使つて集団リンチです！

「おい、ボーっとするな！逃げようとしてやがるぞ！」

「お、おう！弘樹行こうぜ！！！」

「アイサ！良くも少女に寄生してくれたものだ、おかげで萃香さんを傷つける所だったではないか！………なんだかイライラしてきたぜ。少女を傷つけ、なおも自らの罪を認めようとせず、に敵に背を向ける………武士道何処るかモラルもへったくれもないじゃないかああああ！！！！俺は怒ったぞおおおお！！！！！」

「おや？弘樹の様子が……」

発光アフロであった弘樹の髪の毛が見るうちに正常な髪型に戻り、謎の不思議パワー（ロリコンが持つ謎の力）が立ち上り白いオーラーを発現させている。

そして、髪の毛が逆立ち……瞳孔が開き……

「おおおおおお！！！！赦さんぞ貴様ああああ！！！！！」

謎のパワーに満ち溢れた超人（超変人ともいう）からいつもの五倍ぐらいの衝撃波が噴き出し、辺りに深いクレーターを作る。

おめでとう！アフロは、ゴットオブ弘樹に進化した！

「お前は、スーパーサイ 人か！！！」

「おー怖い怖い」

シオがツッコミを入れてくれるが俺は茶化だけです！

と、あれ？目の前の空間が開いた？あれえ？何か誰かの手と同時に

.....

「みたらし団子キターーー！！！！」

男は黙ってみたらし団子！と何処かの親父が言っていた。それよりも糖分を主成分とする私としては頂かなければ！

いただきますーうまつ！？疲れが癒えるぜ！……………あれ？なんだか、眠いんだ……パトラ……

o u t s i d e

「眠い……」

「おい、俺たちが目を離れたときに何かあったのか？」

「てめえはゆるさねえ、お前は俺を怒らせた……そうさ、だから逃げるな……」

萃香から切り離された影は、寄生する主を無くした所為かすぐさま逃げようとしていた所、弘樹にキャプチャーされる。

「捕まえたぞ、シオ！フルバーストで決めるぞ！」

「任せろ、女性を救うのもハードボイルドの務めだからな！」

「あら、これが今回の騒動の原因ですか？何だかちんけな生き物ですわ」

「で、うお！？何時の間に後ろにいなさったんですか、メイド長！」

突如、背後からの声に二人は思いつきり驚く。後ろから灼熱地獄だというのにメイド服を着こなした紅魔館のメイド長十六夜咲夜が現れた。

と、余りの驚きに弘樹は掴んでいた手の力を弱めた。

「あっ！？逃げやがった！！！」

「咲夜さん、ごによごによ」

「そうなんですか？外の人たちは妙な事をするのですね」

影が逃げ出したのにも動じず志々雄は咲夜に耳打ちをする。

そして、黒い獣の様な影に変貌した影は更に加速するだが……

「此処は通す訳にはいきませんわ」

瞬間的に咲夜が獣の前に現れる。本能的に脅威を感じ取った影だが何もかもが遅かった。

「さて、これでチェックメイトだな」

「我、ロリータ神の代弁者なり、我が神にたてつく愚者を一片のか
けらも残さず葬り去るのが我が使命……」

「終わりですわ、お嬢様に追い付かねばなりませんので御機嫌よう」

そして三人は、声を合わせて言い放つ。

「「「お前の罪を数えろ！！！」」」

各々の武器を取り出し、次の言葉を紡ぐ。

「「「と言いたところだが、お前には数える暇も与えない！！！」」」

無慈悲な声と共に三方向から弾幕が発生する。

ナイフと共に無数の弾幕がモーゼルから放たれる武神如き一撃が己
のエネルギーを最大活用した全力が合わさる様に影へと一斉に降り
かかり……そして

強大な爆発により全てを無に帰した。

ちなみに志々雄による咲夜への決め台詞贈呈は弾幕を打つ際にハー
ドボイルドな名言をとばす瀟洒なメイドを育成する事になるうとは
誰しも予想だになかった。

「いてて、あん？血だらけじゃねえか！……くそ、全然記憶がねえ……志々雄が萃香を吹き飛ばして……そこから突然意識が飛んで……ああ、何かもやもやする」

と三人より離れた所で目を覚ました少年は二日酔いの親父の様に頭を抱え立ちあがるのであった。

これは、踏まれて傷付いた物たちの分だぁ……！（後書き）

誠輝

「SKTAはすげえ」

弘樹

「我、口りを護りし盾なり、故に悪を滅せし剣ともなりつる」

志々雄

「fullburst pで全て吹き飛ばしてやったぜ！」

次回予告

萃香を救う事が出来た四人。

霊夢たちを追うべく疾走する、その先に洗われるは黒幕と思しき二名。

さあ、いよいよ地霊殿編クライマックス

次回更新

木曜日！

補足

誠輝が使った『SKTA』は友人が前にイライラした時に生み出した技で親の携帯を逆パカしたそうです。

地獄の薔薇、残念の影（前書き）

あらすじ

- ・糖分の戦士の発狂
- ・ハードボイルドなメイド長が増員
- ・鬼っ子救出

タグ

『ナルシスト大爆発』

『ストーリー構成：きもい89%、真面目っぽい2%その他？%』

『お前は切ってはいけない物を切ってしまった』

『グロテスク注意』

地獄の薔薇、残念の影

【灼熱地獄・最深部】

「流石に此処まで来ると熱いわね」

「大丈夫かしら、鬼相手に人間が勝てるかしら……」

霊夢とパルスイは、異変を起こしていると言われる主犯格がいる場所に先に辿り着いていた。

地獄の最深部は、岩石と赤い川で構築されており人間が歩いていける場所などなかった。

三人を連れて来なくて正解だと霊夢は密かに思っていた。誠輝、志々雄、弘樹は『特殊な』体質を持った外来人だが流石に溶岩の川に落とされば即死どころか気付いたら裁判所にいた…なんて話になる可能性が高いからである。

「いいのよ、そこまで長い時間過した訳じゃないけど……何となくだけど無事に生きてる……そんな感じがするのよ。特に誠輝なんて簡単に死なないわよ」

「そうね、あの人間は驚くべき生存可能性を持ってる気がするもの。」

本当に……妬ましいわ」

ほくそ笑む霊夢は懷から札を取り出し前方へと投げつける。札の弾幕が滞空し少し離れた所ではじけ飛ぶ。

「何時まで隠れているつもり？姿は見えなくても気配は消しきれないわ」

同時にパルスィも同時に一か所を凝視する。すると霊夢の弾幕がはじけた場所の空間が歪む、そこから長髪の青年が現れる。整った容姿に長身、碧眼に金糸。完璧と言ったほどに誰もが振り返るだろう美形。

「おやおや、わたしの美しさがあふれ出ていましたか……」

長ったらしい前髪をかきあげ、青年は手鏡を取り出し自分の顔を見つめる。

そして……

「嗚呼、今日もわたしは美しい」

と悦に入った表情を浮かべる。

ナルシズムに完全に取り込まれている青年は一息ついて手鏡を戻す。
この動作までの使用時間約1分30秒である。

「何この変態……背筋が寒くなるんだけど」

「どれほど自分に自信があるのよ……妬ましいわ」

女性二人は啞然を通り越して引いている。某三人の大まかな変態性を見せられた為に若干なりとも変人という種族に耐性はあったようだがこれは生理的に受け付けない。

「はぁ、惚れ惚れする……」

「で、アンタ何者よ！」

再び想いに老け出す青年を急かすように霊夢は質問をぶつける。此処に来るまでの怨霊などを退ける為に何度か戦闘を行った為にストレスがたまっているのかイライラしている。

「わたしは……ドッペルゲンガーのナルキッソス……人呼んで『美のナルキッソス』さ……!」

自らを宣言する青年。何故か、上着を脱いで上半身を露出する。息が荒いことから非常に興奮状態である。

「気色悪い 霊符【夢想封印】」

そこへ博麗の巫女の間答無用の弾幕が展開され、もれなく全弾命中することになる。

更にパルスイの弾幕がナルキッソスを襲う。

「妬ましい 嫉妬【緑色の目をした見えない怪物】」

「あばばばばば……!」

集中砲火を受けるナルキッソスは呆気なく撃沈する。

が、それだけではやはり沈まなかった。

「くふっ、やるね……あれだよ、わたしを本気にさせたのはライブルである堕天使以来だよ。あれだよ、わたしは寛大だから今謝るな

「見なかった事にしてもいいんだ」

細身のナルキッソスは、ボロボロの服装になりながらも空中で滞空している。強気が弱きかよく分らない発言をしているが両足がガクガクと震えている。

だが、ナルキッソスの願望どおりに攻撃は止まなかった。

寧ろ、イライラしていた霊夢の弾幕が更なる鬼畜さを誇る物となっていた。

「私はイライラしているのよ。あんたにかまってる暇なんてないの
夢符【退魔符乱舞】」

「ぎよばばばばばー！！嗚呼、出血するわたしも絵になる……」

吹き飛ばされながらも手鏡を離さないナルシズム根性は素晴らしい。出来れば、別の所にこの才能を向けてほしいモノである。

「なんぞこれ……」

「なんぞって言われても……悦に入っただまま吹き飛ばされている変態がいる」

この情景を霊夢たちの背後から見ていた志々雄は、思わず呟く。その呟きに誠輝が事実を突き付ける。

現実には小説より奇なり。

「そうしかいえないね……いや、地獄にもまだ面白い奴がいるんだね」

「面白いというよりも変種に入るわ」

「何とも言えない状況だというのは分かった。とりあえず、レミリアがいないぞ」

「お嬢様……一体いずこへ」

萃香、咲夜、弘樹は志々雄により造られた足場の上でくつろいでいた。

「あんた達、無事だったのね。それに萃香……アンタが操られる何て珍しいじゃない」

嫌味な視線と共に横目で会話する霊夢。萃香は苦虫をつぶしたような顔でそっぽを向く。

「あれじゃん、あれは…… 巧みな罠だったよ。まさか、あんな罠を張り巡らされている何てね」

状況をややむやにしようとしているのが見え見えである。更に目が泳いでいるので後ろめたさがMaxなのは誰にでも手に取る様に分かった。

「で、萃香を操っていたのはアンタよね？どうやってやったかは知らないけど鬼を操るだけの力を持ってそうには見えただけ」

ナルシストの胸倉をつかんで絞り上げる霊夢。傍から見れば、鬼畜巫女によるカツアゲである。

「ごふっ、はは…… 簡単さお嬢さん。その鬼っ子の精神の黒を増幅させて暴走させたのさ…… 美しい作戦だった…… 誰もが持つ闇を増幅させ操作不可能にさせる…… ならば分かるでしょう？」

「暴走させた精神は己の欲望のみを欲して暴挙にでる…… 最悪なやり口ね」

冷たい目線でナルキッソスを睨みつける霊夢。何であれ人や妖怪の精神を操る様な好意は外道だと彼女は感じている。

「これは手厳しい。ですが、その鬼っ子はお酒を献上する代わりに実験に協力してくれるかと聞いたら即答でOKを貰いましたが？」

ナルキツソスの言葉に全員が全員萃香の方に視線を向ける。当の本人は視線から逃げるように横を向きながら口笛を吹いている。

一同の心は一つになった

『嗚呼、この異変が解決しだいこの鬼には説教が必要だな』

その時、全員の身体に寒気のようなものが襲った。霊夢、萃香、咲夜、パルスイの四人ですらこの熱い地獄の中で布の一枚で北極に放り出されたような感覚が襲った。

確実なる殺意。

霊夢、咲夜が手に自らの獲物を持ち背後を振り向く。

同時に萃香とパルスイは、誠輝達を囲う様に警戒。

「……レミリア？」

「お嬢様……ご無事だったのですか？」

「ええ……大丈夫よ」

レミリア・スカーレットは抑揚のない声で呟く。異質と言えるその感覚を霊夢と咲夜は感じ取っていた。目の前にいるのはレミリア張本人、だが博麗の巫女と瀟洒なメイドの第六感は獣の様に暴れていた。

「博麗の巫女……」

「っ！？……アンタ、レミリアじゃないわね」

「貴様は此处で死ね」

「霊夢！！！！」

誰かが叫んだ。しかし時は戻ることを許さなかった。

貫いたのだ、博麗の巫女の腹部を吸血鬼の腕が……幻想郷では有り得ない状況、決して犯してはいけないルールが破られようとしていた。

萃香をはじめとした幻想の住人はそれが何であれ怒りをあらわにしようとした瞬間。

レミリアの手に刃物が突き刺さった。

咲夜が持つ銀のナイフではなく黒金のクナイ。痛みの所為が一瞬怯むレミリア。

更に追い打ちがかかる。

無数の銃弾が一点に集中され、細く白い腕を嫌な音と共に千切る。

そして……一直線上の光線がまるでそこにいた物が最初から無かったように消し去った。

「おい……」

「お前は……」

「……誰だ？」

そして三人の人間の声が聞こえた。その声に何時ものような面白いものを求める楽観的な感情は無くただただ……黒い感情を押し込んだようなかすれた声だった。

地獄の薔薇、残念の影（後書き）

誠輝

「……」

志々雄

「……」

弘樹

「……」

次回予告

激化する異変、再び三人の心が同じ道をたどる時、幻想を動かす力を持つ。

次回更新

恐らく、土曜、日曜のどちらか

補足事項

昨日は更新できず、すみません。

なぜか、親が勝手に自動車学校の入校届を出しており自動車学校に行き、疲れ果てたのに徹夜でモンハンをしてしまい。

ほぼ、一日寝る形となりました。

そのリバウンドで動けませんでした。

誠にすみません…

トリガーハッピーな三人（前書き）

あらすじ

- ・ナルシスト散る
- ・霊夢刺される
- ・激怒を通り越した何か

タグ

- 『銃器使用时には精神安定剤を推奨』
- 『大胆なスペルカードルール無視』
- 『雷鳴（笑）の閃光』

トリガーハッピーな三人

「そうか、人間してはお前らは直感がいい方だ……いや、違うな。
此処にいる奴らは私の『普通』が通じない程の兵の様だ」
ツワモノ

「そんな事どうでもいいんだよ。お前は、レミリアじゃねえ……ちなみにレミリアは霊夢の事を『博麗の巫女』って呼ばねええ」

「弘樹、ちなみに付け足すと霊夢の事を『博麗の巫女』と呼ぶ奴は居ない筈だぞ。『赤白の巫女』となら呼ぶらしいがな」

誠輝と弘樹がレミリア(?)といがみ合う。その後ろで志々雄が手当たり次第に周りの岩石を分解し始める。同時にイメージによる武器の創成を始めていた。

「パルスィは、霊夢の退去を任せる。どうにか止血なんやらかんやらやってくれ……ほら、止血剤と包帯だ」

パルスィに抱えられた霊夢はいぶかしげな顔をしながらそれらを誠輝から受け取る。

「どうでもいいけど……なんで応急手当が出来るのに自分にしなかったの?」

「それは、確かに気になるわね」

霊夢とパルスィに疑問を抱かれた誠輝は一言。

「べ、別に忘れていた訳じゃないんだからね！……ごめん、なんかごめん」

様は忘れていたらしい。あきれ果てる霊夢とパルスィは早急に治療を施す為に造られた足場で作業を行い始めた。

「で、アンタは誰だ？レミリアじゃないのは分かっている……正体を現しやがれ」

弘樹は威嚇するようにモーゼルの銃口をレミリアにそっくりな何かに向ける。

「そうか……我とした事が簡単なミスを犯したようだ。それならば、この『姿』は意味を無くす……お望み通り正体を見せてやろう」

突如、レミリア（？）が黒く変色する。真っ黒に染まったそれはただのシルエットに見えるがその形さえ崩れる。

次にそこに立っていたのは…

「ふむつ、完全に变化出来た筈だがな……ナルキッソスの能力ではこれが限界か……まあよろう」

カラスの様な黒い羽と天使の様な白い羽を一對に羽ばたかせた男だった。鋭い眼光と威圧的な雰囲気はただの人間である三人にも只者ではない事ぐらい分かった。

「……白と黒の羽……墮天使か」

「へえ、絶滅したんじゃないかと思ったんだけど……現代にいたんだ」

謎の男は『無かった腕』を振り上げ聞きとれない声で何かを唱え出した。

「……弘樹、お前は戦えるか？」

「勿論だ。寧ろ、誠輝の方が重傷だろ？今回ばかりは休んでたらどうだ？何時も途中で『面倒くさい』とか言っただけで帰るだろお前」

「今回は、糖分の為に戦っている。敵前逃亡などできるか！」

額から流れてくる血を手でぬぐいながらサムズアップ。直後、時間を止めて移動した咲夜さんによる当て身で昏倒。瀟洒なメイドは今日もパーフェクトな働きをしてくれた。

「さて、これで誠輝様は休憩に入ってくれました。行きましょう、志々雄様は現在何かを造っていらっしゃるので弘樹様……参りましようか？」

「お、おう（休憩じゃなくて強制退去というんじゃないだろうか？）」

志々雄の横に白目をむいた誠輝を横たわらせた咲夜は、銀のナイフを取り出し瞬時に飛び出す。何かを詠唱していた男には、何があったか分からなかっただろう。咲夜は時を止めた状態でナイフを敵の周りに配置し時間を進めた。

故に敵の男から見るに突然創生されたようにナイフが自分の周囲を囲んでいると錯覚すらさせた。

「よし、久しぶりに俺のリロードを見せてやる。俺のリロードはextensionburstだ！！！！」

実弾をシングルアクションアーミーに装弾する弘樹。驚くべき速さで弾丸を装転していく。

「ぬんっ！？この程度のナイフでどうこうなるとでも思ったかのか？墮天使の力を見せてやろう！『雷鳴の閃光』」

咲夜のナイフを翼で撃ち落とし謎の呪文を完成させる。大気から生じるスパークが上空から雷となり落ちようとしていた。

標的は、咲夜。男はそう指定して魔法を放った。

幾度もこの雷で敵を屠って来たと自負してもいいほどに命中精度と威力は申し分ない。

が、今回ばかりは『規格外』だった。

「ぐあああああああ！！！！！！」

相手に落ちる筈だった雷光は、予想を遥かにこえる大気圏外射出で男に命中。あえなく全身を焼かれる。

「あれ？なんぞ？自分の雷で自爆してるぞ……バカで」

「志々雄様と同じ様な体質なのでしょうか？」

疑問を浮かべる咲夜と弘樹。

すると志々雄がニヒルな笑みを浮かべしてやったりとガッツポーズをとった。

隣にいた弘樹は志々雄が何かしていた事は知っていたが何をしていたかは知らない。

「何かしたのか？あいつ黒こげで今にも『こんがり焼けました』でvoiceがなりそうだぞ」

「簡単だ。雷を発生させるに当たっては空気や場の条件が必要だ…突然、環境が変化したのだから永琳特性のレーダーで感知した後避雷針をあいつの足もとに放り投げてやったのさ……魔法にも適応できる奴をね」

「流石シオだ！人が出来ない事を平然とやってのける！そこにしびれう！懂れるう！！次からサイボーグシオちゃんと呼んでやる」

「それ何てサイボーグク　ちゃん？」

危なげな会話をしながら敵の動向を見守る志々雄。上空へと旅立った咲夜は止めとばかりにナイフを男に突きたてる。

「ぐはっ！？」

堕天使だけに堕ちて行く男、しかしもう片方のナルキッソスが溶岩

に落ちる前にキャッチする。

「はははあ！私のライバルがこんな所で死んでもらっては困りますよ！」

「あー、そういえば何か居たな」

あつさりと忘れられているナルキッソスの存在。が、更に追い打ちがかかる。

「巫女が死ねば、博麗大結界は無くなり幻想は常識と言う名の波に吞まれて幻想ではなくなる。覚悟は出来たかい？」

怒気のオーラを纏った鬼が目の前に浮かんでいた。ナルキッソスの真上にはいつの間にか灼熱の火球が配備されており萃香の意思で何時でも動かせた。

そして当然如く火球は直下で落ちる。

悲鳴も上げることなく二人組は火炎に焼かれ溶岩の海へと流れていった。

「ふう、まだ殺り足りないけど此处は霊夢の傷の具合が心配だからね」

「そうね、お嬢様の安否も気になるし……今のところ重傷者一名と軽傷者一名ね」

「私の出番がないなんて妬ましいわ……それに軽傷者一名は貴女が仕留めたんじゃないの？」

霊夢を志々雄の付近まで連れて看病していたパルスィはじと目で咲夜と萃香を睨んでいた。

「休んでいる暇なんてないらしい。どうやらまだ終わりじゃなさそうだぜ」

志々雄が一人周りの溶岩を眺めながら銃器を構える。何が言いたいのか分からない弘樹は警戒している志々雄に問いかけた。

「どうした？流石に溶岩に落ちたら死ぬだろう……て、何故に無言で俺に銃器を渡すんだ……これMP5じゃねえか！特殊部隊御用達……軽く死屍累々が出来るぞ」

「シオの言う通りよ。まだ、奴らの魔力が消えていないわ……」

ある程度回復したのか霊夢が横腹を抑えながら立ち上がる。傷の所為か表情は苦痛にゆがんでいる。

「くっ、私とした事が不意を疲れるなんて。誠輝を起こしなさい……
…一氣に全員で畳みかけるわよ」

靈夢の提案で誠輝を起こすことになったのだが……

「どうやって起こす？糖分類は無いし……白目だな怖っ!？」

「そうね、同じ様な衝撃を与えるとかな？蹴ったら起きるでしょ」

あっさりと危険性が高い方法を考え付く靈夢。直後、誠輝の脇腹に鋭い蹴りが入る。

問答無用が代名詞の鬼畜巫女は負傷していても大丈夫らしい。

「げほっ!？はっ!？あれ……こまっちゃんわ？此処は地獄か……
確か俺は彼岸にいた筈じゃあ？」

どうにか誠輝が復帰。何事もなく志々雄は誠輝にAK-47を手渡す。

「えっ？なに？戦争でもしろと？」

「いいや？ハッピートリガーだ……奴らを全員吹き飛ばしてやろうぜ！誰に喧嘩を売ったのか分からせてやろう」

「そうだな、レミリアの所在も知りたい事だ……ボロボロにしてやるか」

「ツツコミ切れない……まあいいか、とりあえず……kill you
うすればいいわけだ」

そして手負いの誠輝は立ち上がる。弘樹はマガジンの残弾を確かめ、標準を合わせる。志々雄は、ガンブレードを背負い周りの気配を感じする。

そうして彼らの快進撃が始まるうとしていた。

トリガーハッピーな三人（後書き）

誠輝

「打ちまくれば当たるさ」

弘樹

「さて、殺意もいいが……遊び心も忘れない」

志々雄

「野郎ども！女性に手をあげた愚かな同性を狩りつくすぞ！」

誠輝・弘樹

「「おゝ！！！」」

次回予告

近代兵器片手に墮天使を圧倒できるのか……

次回更新

諸事情により更新が滞ります。

恐らく来年には更新できると思いますのでそれまで待機！

来年もまた会いましょう！

吼えるロリコン！少女の為に！！！（前書き）

あらずじ

・萃香ツヨイ！

・黒幕灼熱の河にドボン

・よしならばクリーク（戦争）だ！

タグ

『立ち上がれ！気高く舞え！運命を受けた戦士よ！』

『不思議なパワーの名は【ロリータ】』

『高性能な堕天使の羽』

【挨拶】

明けましておめでとうございます。

上海二トの作品を観覧してくださってくださる皆様、今年は色々
と忙しくなる年になるでしょうが更新を怠る事のないように努力し
ますので応援の方をお願い致します。

さて、堅苦しいのはこのへんで……

今年も張り切って行きます！

大丈夫です失踪はしませんので！

ちなみに質問ですが、チョコチョコ小説内で【質問コーナー】みたいなものを配備している作者さんがいますが私もそのような物を配置した方がよろしいでしょうか？

暇な方は感想をください！

吼えるロリコン！幼女の為に！！！！

【??? side】

赤々と流れ出す灼熱の河の中で彼らは耐え抜いていた。

人間では到底達する事も出来ない領域…… 1300 の世界。

堕ちた者は帰る事は出来ない永劫に…… 悪徳に身を委ねた者こそ力を得るのだから。

堕ちた者が幻想郷へ侵入するなんて面白い事をしてくれるじゃない。

良いわよ、遊んであげますわ。

- - - - -

【弘樹 side】

うむ、非常にレミリアの動向が気になる。瀟洒なメイド長である咲夜も多少なりとも動揺を見せている……と言っても他人に分からないぐらいの反応だな。

シオと霊夢は、『まだ終わってない』と言っているが今の所は俺には分らない。

……無事でいてくれればいいが、まあ夜の王で名乗ってるだけに簡単には死なないだろうし妖怪だから致命傷を受けない限りは再生するだろう。

「おおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

「な、なんだ！？」

「ちっ、目覚めが悪いつてのにえらくテンションの高い敵さんが復活したようだな」

「来るわよ！」

唸るような怒号に一瞬何が起こったのか分からなくなったが直ぐに頭をクールにする。マグマに落ちて行った墮天使野郎が復活したのだと理解できた。

先の戦いでシオが仕掛けた避雷針でダメージを受けた奴だが体中を高温の熱で焼かれた所為かもう何が何だか分からない。簡単にいえば冷えた溶岩の塊が人型を保ってるて所だな。

「ふんっ！……我とした事が不意を疲れた様だな。さて、地上のマグマ程度では我を倒せない事は分かったな」

「なにっ！？あいつの身体の傷が治って行くだと！」

俺は叫んだ。いや、叫ばずにはいられないさ。なんたって傷が高速回復していくんだぜ！真っ黒だった肌は元の白色に戻り服すらも再生されている。

おいしい、明らかにラスボス級じゃん！

「流石は墮天使だな。マグマが風呂か？でたらめだな」

誠輝が悪態を吐く。まあ俺も同じ思い出し分かるが……霊夢や幻想郷チームは苦悶の表情を浮かべている。まあそつだよな……流石にこの高性能回復術はチートくせえ！

「そつだ！意表を突いた事を評して我が名を教えてやろう！我が名は『ベリアル』！虚偽と詐術の貴公子よお！！！」

「そんな事どうだっていいのよ！幻想郷の存続にかかわるような異変を起こすならば調伏させてもらっわ！」

霊夢が札を投擲する。飛来する退魔符は一直線上にベリアルと名乗

った美男子（リア充死ねばいい）に向かって飛んでいく。やはりと言うべきだが……モノクロの羽により弾かれる。

墮天使様の羽はあれですか？鋼鉄よりも固く羽毛よりも柔らかい物質ですか？ああ？あれですか、墮天使の手作り羽毛布団は一セットで19800円ですか、こちら！

「ベリアル……確かソロモン72柱の魔王だったかな？」

誠輝がさらりと豆知識を披露。おかげで俺の中の士気がつくど下がりしました。

「はあ！？魔王って行き成りラスボスじゃん！勝てる気しねえ！！！！」

やけになってMP5の引き金を引く。マガジンの中に入っている弾薬が大量に排出されていく。

まあ、結果は当然如く羽で弾かれる。うぜえ！！！！

「最初から全開で行くわ！空虚【インフレーションスクウェア】」

ベリアルを囲う様に出現する幾重にも存在する銀のナイフ。螺旋を描き襲撃するナイフだがいとも簡単に翼から生じる風圧により吹き飛ばす。

嗚呼、あの墮天使は扇風機として一家に一台欲しいぐらいだな。

なんて行ってもいられないのでとりあえずMP5とモーゼルによる弾幕攻撃を開催するが奴に届く気配が全くない。

「くくくつ、やはり人間や妖怪では正攻法での攻撃はこの程度なのか。先ほどの吸血鬼といいこの辺りのレベルでは満足できないな」

「ちつ、下賤な輩がお嬢様を何処へやった！」

弾幕では防がれるのを理解したのか痺れを切らした咲夜が接近戦でベリアルに奇襲をかける。

「人間の腕力で我は傷一つ付かない！無駄なのだよ、無駄あ！！！」

「何あれ、悪役笑いはリアルでやるしD O様ばりの無駄発言はするし……やる気でねえ」

「やる気とか言ってる暇はない。あいつは赦しちやいけない、この腕が千切れようともしゃら傷付こうとも膝をつく事だけは許されない！うおおおおおおお！！！！！！」

やる気のない誠輝は兎も角、主君を取り返すために燃え上がって

るシオは素晴らしいぐらいにハードボイルドだ。

「背後がガラ空きだああ！！！！萃鬼【天手力男投げ】」

「ぬぐう、これが鬼の力か！素晴らしい！！！」

萃香の怒涛の攻めで吹き飛ばされる。すげえ威力だな、俺達あれと戦ってたのか。よく生きてたな、よし帰ったら自分を褒めないとな。

マグアに落ちる前に空中で受け身を取るベリアル。くそ、イケメンは何をやっても絵になるというのか！

「くははははは、面白いぞ！先ほどの吸血鬼とは違い鬼は格別な腕力を持つようだ。ふう、そうだ……お嬢様がどうか言っていたな……あれは我が止めを刺してやった」

意気揚々と笑う男の言葉が……疑わしい言葉が俺の心を刺激した。

何だと？レミリアを殺した？

自然と拳を握っていた。震えていた、この感情を俺は知っている。

「でたらめをほざくな！お前ごときにお嬢様が後れを取る筈がない！」

「そうだな、普通ならそうだろう。だが、その男の姿を真似て接近したら簡単に隙を見せてくれたぞ……あれは滑稽な最後だったな」

俺を指してベリアルは笑う。面白可笑しく笑う。

なんでお前がレミリアを嘲笑う。何故、お前が生きていてレミリアが傷付かないといけない。何故だ、何故こつも俺の目の前で幼い容姿をした存在が息絶えて行くのだ！！！！

「おおおおががががががががががあああああああああ
あ！！！！！！！！」

「弘樹！？ちつ、頭に完全に血が上ってやがる！」

発狂した。世界が真っ黒に染まるような感覚が俺を襲う。

世界が戦えと叫ぶ。目の前の堕天使を葬り去れと冷淡に笑う。

気付けば俺の身体を中心に黒いオーラが螺旋状に天を焦がしていた。

そこでとある会話を思い出す。此処に来る前に地上で天敵と戦った時の言葉。

『「俺は強くなった。幻想郷に来て知った事だ…外の世界よりスムーズに身体が動く……不思議だな」

「成程、お前は魔の力に慣れたんだな」

「魔の力？魔力とかそんなもんか？」

「そうさ、恐らくだがお前は魔法の森とか魔力の瘴気が強い場所に行ったりしていないか？」

「そつえば……成程、だから弾幕が撃てるようになったのか」

成程、これが俺の身体の中に溜まっていた魔力と言う事か。

レミリアが死んだという言葉は奴の妄言の可能性もある。

それ以上に動けなくなるほどのダメージを負ったという事だ。

「弘樹、落ちつけ……くつ、無駄に力が強い」

「これは……濃度が高い魔力だ！畜生、前に進めねえ」

周りに悪友が居るがどうやら魔力の波に揉まれて近寄れない様だ。
他の奴らも俺の変異を目のあたりにした所為か驚きを隠せない。

嗚呼、これは神がロリータを守るためにくれた加護なのかもしれない。
い。

ならば名付けよう！

これが……俺の四段階だ！……！！

「バーステッドロリブレイカーアアアア……！！！」

周囲の魔力が解放される……目標はただ一人、ベリアルてめえだ！
！！

吼えるロリコン！幼女の為に！！！（後書き）

誠輝

「心が折れそうだ……ツツコミが出来ない」

志々雄

「これがツツコミ封じのシリアス展開」

弘樹

「心と拳は一つ、さあ……殺られる準備は出来たか？」

次回予告

ロリコン王覚醒！堕天使ベリアルを撃破するか！

次回更新

木曜日になると思います。

激闘！魔王VS幻想郷（前書き）

あらすじ

- ・星になりそうな勢い
- ・ロリコンは世界の為に戦う（嘘）
- ・世界で一番ロリが好きだ！

タグ

- 『幻想の強さ』
- 『才能の無駄遣い』
- 『こんがり焼けました！』
- 『たった一人の犠牲』

激闘！魔王VS幻想郷

【After side）堕天使】

ふむっ、人間の男……あれほどの魔力を持っていたか。人間は、愚かで脆弱な集まりだと思っっているが稀にだがこ奴の様な『異常』な力を持って生まれてくる人間が居る。

だが、このベリアル……簡単には負けてやる訳にはいけないのだよ。

奴らが使うのは下等武器……私の羽を貫通すらできない弱卒な武器の類だ。それに比べれば、我が翼と神力は衰えることを知らない。

そうだ……一本一本骨を折り、その痛みで泣きわめく様を嘲笑ってやろう。

それが良い。所詮……人間はたかが知れている。

「死ね、糞野郎！！世界の果てで消えろ！忘却の深淵に至って消えろ！！！」

むっ、銃器を一切使わず近距離での体術を駆使する気か？この男は魔力を持った事が無い筈だ……のにも関わらずに飛行までやってのけるとはな……しかし愚かだな、真っ直ぐ過ぎるのだ。感情に身を任せれば動きが単純化して見極めやすい。

だから、人の心を狂わせる為に我が得意とする話術で挑発する。

さすれば、どんなに屈強な戦士でも隙だらけ……まるで狙ってくださいと言わんばかりに荒が出来る。

こいつも同じだな。その女と同じく。

「時符【プライベートスクウェア】」

眼前の女が消える。否、高速で動いているようにも見える。残像がちらほら目に入る。……人間は此処までの力を手に入れることが出来たのか？だが、無駄だ……投擲武器など我には当たらん。

珍しい、我が魔界でのんびりしている内に世界は変わったらしい。

「くくつ、世界は変わったのだな。我が地上にいた時の人間はこれ程の力を持たなかった」

ナイフが飛び交う中、無謀にもこの男は我に食ってかかって来る。

「うるせえよ！今度こそ、地獄の底の最下層まで送ってやるから感謝しやがれ！」

羅刹如き拳。魔力により最大限まで強化された一撃。受けるだけで骨どころか腕一本が犠牲になった。だが、構わぬ……直ぐに生え変わる。

「弘樹！傷口を焼け！そいつの再生は細胞が焼かれたり凍らされれば復活は出来ない筈だ！」

「おし！轟けよ！俺のバーニングソウル……！」

「ふははは、バカめ！マグマの温度に耐えきる我が人間如きの火で焼かれる訳が……はあ！？」

腕に走る激痛で不意をつかれ可笑しな悲鳴を上げてしまった。何だ、一体何が……ば、馬鹿な！信じられん、我の腕が再生しないだと！

「バカはお前の様だな！糞堕天使！！堕ちろ！！！」

焼け焦げた片腕を凝視した。確かにそこには再生前に焼かれた跡がある。バカな……人間が扱える火で我が負傷したと言うのか！断じて認めん……認めんぞおおお！！！！

- - - - -
【After side）霊夢】

「バカはお前の様だな！糞堕天使！！堕ちろ！！！」

弘樹が怒声を上げながらベリアルと称した堕天使に拳を叩きつける。人間の威力をとくに越していた弘樹の腕力から生み出されるパワーはベリアルをシオが形成した足場を貫通する程の勢いがあった。

「何よあれ……ただの外來人が怒り狂っただけであれだけの力を出せるの？可笑しいわよ」

「ああ、それは俺も思っただが……そろそろ気付いてるんだろ霊夢」

誠輝が水橋の妖怪に抱きかかえられる形で私と同じ位置まで上がって来る。何気にこの誠輝という少年はどんな人物とでも仲良く出来そうな気がする。やはりペースを崩す趣向を持っているからだろうと私は思う。

「気付いてる……か、そうね。アンタは自身は分からないけど弘樹とシオは……能力持ちよ。まあ、よく見てみないと分からないけどね。それは兎も角、このバカバカしいのを退治してからよ」

「まあな、パルスィ。頼めるか？」

「ふん、白々しいわね。どうせ、断つても駄目なんですよ？」

「まあな、俺は問答無用の男スパイダーマツ！？ごはっ……霊夢何故に殴る……しかも起床当時に痛んだ場所を」

「何となくよ」

ふう、なんだか知らないけどイラッとしたからぶち殴ってやったわ。

此処までお気楽な性格だとペースが崩されるわね。

「さて……と全力で行くわよ？ 応急処置じゃ全力で力を出すとやばいらしいから……成るべく短期戦で終わらせる」

「分かってる。だが一応いうが弾幕は使えない俺にどうしろと？」

「水橋の妖怪、その男を落としなさい今すぐに」

「おお、怖い怖い」

しらつと負の情報を公開する誠輝。この人、マグマの中に落としても怒られないわよね？ そう言えば、唯一弾幕が出せない奴だったわね……どうやってレミリアを倒したのかしら？

「その為にさっきあの男からそれを貰ったんでしょ……おかげで重量が増えて運ぶのが大変なのよ、妬ましい」

すると水橋の妖怪は誠輝の持つ持ち物を憎々しそうに睨んでいた。
何……この筒？

「ああ、まあな。霊夢、こいつはRPG-7って言われている武器だ。破壊力はシオの折り紙つきだ」

「どんな武器なのよ？ つか使えるの？」

「殺傷力は抜群、弘樹に何度か試したが火薬量次第で瀕死までに止める」

「大丈夫そうじゃないんだけど……まあいいわ、あの邪魔な羽をむしった後に大技でやるわよ……萃香！もう一度、威力の高いスペルを用意していて……誠輝がベリアルの羽をどうにかするんですって！」

「えっ！？ちょ！？」

「おお、そうかい！中々、勇気のある人間だね。私も本気で行くぞ……！」

慌てふためく誠輝。偶には振り舞わされる側になるがいいわ。

「赤白の巫女……この人間をどうすればいいの？」

「簡単よ、またどうせ出てくるバカに向かって思いっきり投げればいいのよ」

「よくねえ！？寧ろ死ぬわ！」

「分かったわ、全力で投げて見せる」

「分かつちやったよ！！！！一番分かつちやいけない事を了承してるよ！！」

- - - - -
【志々雄 side】

あー、何か上では楽しそうな雑談でもしているのか？いや、お前ら戦えよと言いたい対象人物が弘樹に再度マグマシユートされているから無理なんだがな。

「ぬう、許さんぞ。一度目の過ちを二度も繰り返す羽目になるとは……我が神力により滅ぼして……」

また上がって来た。

「てめえが滅べ！」

ベリアルは真つ赤に焼けただれた右腕を抑えながら悪態をつくが速攻で弘樹の膝蹴りで顔面を強打されふらつく。

「続いて！くたばれ！！！」

「うはっ！？」

おお、鋭いかかと落とした。それも顔面にどんだけ顔を乱打してるんだ？気のせいかな、レミリアを傷つけられた怒りが動かしっているのは見てとれるが一割ほど『リア充爆発しろ』みたいな気配が感じられるんだが？

「これで……止めだ……！」

『ごきや』つと嫌な音が再度ベリアル顔面から聞こえる。かかと落としからの連続攻撃『ネリチャギ』だな。ここぞとばかりに才能を無駄遣いしている気がするが気のせいだろう。

「さて……止めを刺して姫様を救う……狙い撃つ！」

ガンブレイドを小脇にはさみ標準を奴の顔面に合わせる。鼻血とか色々入り混じった顔が見ていて居たたまれない気がしたが……悪いな、これは戦争なんだ……リア充大爆発しろ……！！

「あああああああ……！！！！！」

「うおっ！？誠輝が剛速球のように飛んで逝き……ベリアル顔面にヘッドアタックをかました……だと？」

横から何かが通り過ぎたと思ったら誠輝だった。彼はベリアル顔

面に衝突した後に2回転ぐらいした後に顔面から足場に着地。天に尻を向ける様な形でぶっ倒れている。

「ふ、ふふふ……あの糞巫女……帰ったら調教してやる……まずはてめえだ」

「ぐっ、無駄だ。多少の傷なら再生できる」

ふらふらとしているベリアル。恐らく、弘樹と誠輝の攻撃のおかげで脳震盪のうしんどうを起こしているんだろうな。

「喧しい。俺は今新たなミッションを受理した……過去の産物黙って消えろ！弘樹、用意しろ！他の奴も行くぞ！リア充………フ
アイナルアトミックバスターしろ……！」

誠輝に与えたRPG-7が墮天使に向かって撃ち抜かれる……誠輝、至近距離のロケランはやばいって……まあいいか……おかげで遠距離攻撃を無効化していた翼が使えない状況になってるし、俺も全力で攻撃するとするか。

誠輝の攻撃を合図に一同からの弾幕が放たれた。

「いい加減に倒れなさい！神技【八方龍殺陣】」

「お嬢様を迎えに行くので御退場お願いします！光速【C・リコシユ】」

「ブツつぶれなよ！鬼符【ミッシングパワー】」

「嫉妬【ジェラシーボンバー】……貴方に恨みはないけれど討つ理由ならいくらでも作れるわ……妬ましい」

「これは……お前が傷つけたレミリアの分だああああ……！！！！！！
【full burst bastard】」

「やれやれ、俺も行くぜ！カッコよく散りな！【ネルファトウレンスブレイズ】」

幾重にも重なる弾幕が墮天使を駆逐していく。周りにいるモノを例外なく吹き飛ばしていく様は、ぞつとするぜ……

「ぐああああああああ……！！！！！！！！！！」

「ちょ、てめえら！俺が居るのを忘れるな……ぎゃあああああああああ……！！！！！！！！！！」

何気に誠輝が巻き込まれてるな。

うん、強く生きてくれよ！……死亡確率89%と計算で出たが気に

しない。

激闘！魔王VS幻想郷（後書き）

誠輝

「死ぬ……」

弘樹

「仇は討つ……そしてレミリアも助けだす」

志々雄

「すまない、助けることが出来なかった」

次回更新

土曜ですね

次回予告

・遂に地霊殿編終わりか！

三位一体とは何とも言えぬな【前編】（前書き）

あらずじ

・サドンアタック！

・驚愕のリンチ

・誠輝「俺がこんな所で…」

タグ

『決して仮面のヒーローではない』

『多数の空気がいるが気にしない』

『暴れ狂うナルシスト』

『出才子御苦労さまです！』

三位一体とは何とも言えぬな【前編】

【out side】

「ぐああああああああ」

ベリアルは焼かれていた。幻想の住人が使う万物より生み出す【弾幕】と呼ばれる未知の力にその身を蹂躪されていた。

だがこの時、霊夢たちは相手の力を読み間違えていた。普段彼女らは【スペルカード】と呼ばれる拘束具で力の発言を抑えている状態なのだ。

つまり、常時力を抑えている。

全員の弾幕により制圧されそうになるがベリアルは神力の力を応用し身体の表面に膜の様なものを貼っていた。丁寧な事に膜が弾幕により破損すれば自動的に膜が張り直されるという自動再生能力付き。

「ぎゃあああああああ！！！！てめら、ぶつ殺す！！」

誠輝は焼かれていた。鬼畜巫女とパルシイの計略により投擲後、見事ベリアル^{ベリアル}の翼の盾を無力化したのにも関わらずその場の全員から攻撃を受けていた。何とも不憫な少年。

つまり、犬死に近い状態である。

この危機的な状況を打破する為にある人物が動いた。

幻想郷を誰よりも愛し結界に対する知識についてもエキスパート。神出鬼没の幻想の賢者。

「はい、一名救出」

「えっ！？ちょ、おおおおお」

足もとに現れた空間のひずみに落ちて行く誠輝。

そして、すぐさま志々雄の横にある足場に落とされた。

何が起こったか今一、把握できない誠輝は目を何度か開ける閉めるを繰り返して現実味が着かないまま納得。

「この転移に似た様な能力は……八雲紫……！」

刹那、近場の空間が裂け『スキマ』が現れる。ブロンドの髪を長々しく垂らした紫色が尊重された複雑な模様を象った服装をする女性が顔を出す。外見からは全くと分らない年季の様な妖力が誠輝には感じられた。『八雲紫』：幻想郷を覆う博麗大結界を管理、調整している大役を任されている大妖怪。普段はどこにいるかは確認されておらずこうした幻想郷に対しての異変が現れた時のみ行動する。

「正解、そんな貴方にちょっとしたプレゼント」

真横の空間から幻想郷の賢者である紫より一枚の札が贈呈される。無地で何も無い紙、しかし自然と普通の用紙とは違う気がする誠輝は思う。

直後、激しかった弾幕が止みベリアルがボロボロになった身体を氣遣いながら距離を取る。立派な白黒の翼は見るも無残にボロボロの様に悲惨な事になっていた。身体の方も初期の方で使われていた回復能力も劣化したらしく何時まで経っても傷が塞がる傾向が現れない。

「はあはあ……我とした事が……幻想の住人の力量を測り間違えたか」

「ちっ、生きてやがったか！もう一度……ぐあ、頭が……割れるように痛い」

もう一度、弾幕を叩きつけようと魔力をかき集めた弘樹は力を失い崩れ落ちる。額を抑え足場にどうにか着地する事に成功した。

「それはそうよ。貴方方人間には魔力を生み出す魔力回路がない。それに妖力や霊力などの特殊な力を持って生まれた訳がない人間が容量オーバーの魔力を使った……結果身体に負担がかかった事でしょうね」

紫は弘樹に一枚札を手渡すと同時に志々雄にも同じ札を渡す。三人に札が行き渡る。誠輝、弘樹、志々雄は直感で理解する『これはスperlカードの基ではないのか？』とそして推測が真に変わる。

「分かってると思うけどそれは私たちが使うスperlカードの基、貴方達の才能……上手く使いなさい」

「ちよつと！紫、それスperlカードの基よね……これ以上『規格外の外来人』を更に格上げする気！」

「しょうがないじゃない、あの墮天使は神が使う神力を使える……あれは厄介よ？あの天使は、地獄の底の様な地で生き延びた……それ故に魔王と呼称される……ただでは帰ってくれないわ」

苦虫を口の中で潰したような顔つきになる霊夢。紫は三人の方を向くと微笑を浮かべる。

「と言う訳だから……外の世界から来た貴方達にかけるわ。神力を使い果たすか戦闘不能にしてくれればいいわ……勿論、異変が片付いたら色々とお礼はするわよ」

怪訝な顔つきなる弘樹と志々雄。『頼みごとの範囲越えてます』と二人は主張したかったが、一足先に誠輝が……

「了解いたしました。ならば、全勢力を持ってベリアルを完全粉砕いたします」

「ちょっと待て！霊夢たちがあれだけ打ち込んで倒せなかった奴を俺らが倒せ……いてっ!？」

志々雄の主張を誠輝が目にもとまらぬ速さで弁慶の泣き所を下段蹴りをおみまいして沈黙させる。地味にこの痛みが志々雄の力となるのは言うまでもない。

「あいつを抹殺するのは大賛成だ！さあ、殺……ぐぼっ！？」

弘樹が拳を握り再びリアルを打倒せんと銃器を握った所に誠輝は背後に周り……腹部を両手でしっかりと固定しそのまま一気に真後ろへと持ちあげる。

ジャーマンスープレックスが綺麗に決まる。

「いだだだ、おま……死ぬ」

「落ちつけ冷静さを欠くな。今のお前は溜めていた魔力を全消費した……お前は『某RPGで初期に店で買えるひきの棒と皮盾を装備して魔王に突撃』している様なものだぞ！」

打撃を受けた弘樹は、誠輝の話なんか聞いている暇がなかった。

「と……言っ訳で作戦タイム貰っていいですか？」

「ふふ、良いわよ。但しあまり時間は稼げないから気をつけて……
結界【光と闇の網目】」

紫がスペルを宣言し戦線へと下っていく。それを見送った誠輝は直ぐに作戦会議を開いた。勿論、スペルカードを何にするかだ。

「弘樹、シオ……どうする？」

「そうだな、俺ら単体では全く歯が立たなそうだが？」

「くっ、認めたくないものだ……弱者とはこும்空しいとは……
と言う訳で合体がいいです！」

「合体？……成程、確かにドラゴ ボールとかフュー ヨンとかや
って最強になつたもんな！」

「それでいこう！俺たちのソウルを見せてやるうぜ！」

「それでいいんだな。ならば……願うだけだ」

三人は同時にスペルカードの基に願をかける。すると真っ白だった
紙が変化する。誠輝は【緑】弘樹は【黒】志々雄は【金】の色が付
属され文字が書き込まれる。

こうして初めてスペルカードと呼べる物となつたのだ。

三者は互いの顔を見合わせにやりと笑うとスペルを宣言した。

「乱れ狂う風の如き烈風！風符【絶風翔破】」

決して『サイクン』などとは叫んでいない。

「暴れ狂う必殺の一撃！殺符【撃破滅殺】」

もう一度言うが決して『ジョー！』などとは叫んでいない。

「統治する輝きの真価！輝符【金剛大成】

しつこいようだが決して『エクストーム』などとは叫んでいない。

「『合符【三位一体】』」

スペルが輝き、三人の影が一つに重なる。暴風が駆け抜け影が舞う。そして輝きが全てを照らす時一人の人物が舞台上がる。

鋭い目つき、ハリネズミの様な髪型、少し男性としては長めの髪の毛。三人の特徴的な部位を全て導入した様な青年。深紅の赤い瞳に白髪のような白銀の頭髮は地獄の底でスポットライトを当たられたように輝いた。

装飾品の多い紅のコートや喪を服した様な上下の服は本人たちの趣味に違いない。

「俺は……誠輝でも弘樹でもましてや志々雄でもない！羅刹へと拳を掲げ天へ吼える修羅だああああ！！！」

刹那、その場から消えうせる青年。弾幕が展開されているのもお構いなしに硬く握った拳で魔王を目指す。グレイズ音が一気に響くが気にならない。

「なんだと！この密度の攻撃の中をかすっただけで通り抜けた！まずい、殺られる！」

「いいからとつとと失せろ！塵へ還れ！！！！！」

握り拳が遂にベリアルに届く……

「私はやっぱり美しくならなければならないのだあああああ！
！」

「あつ」

全員が同時に言葉を漏らす。今頃、マグマの中から復帰したナルキ
ツソス……は、運悪くというかタイミングが悪いというか運命の悪
戯か三人が融合した青年の拳の前に瞬時に移動して来た訳で……

「漢は黙って……ぶん殴れえ！！！！必殺！超電磁ナツクル！！！」

電磁パルスを纏った拳がナルシストを天へと打ち上げる。ナルキッソスは、地獄の空へと消えて行ったとさ……

【後半へ続く】

三位一体とは何とも言えぬな【前編】（後書き）

青年

「合体した俺たちの名前を大募集したいと思います！！！！！！暇な時に気軽にコメントしてね！！！！！！メッセージでもいいぜ！！！！」

上海二一ト

「べ、別に名前が思いつかなかった訳じゃないんだからね！」

青年

「キモイ、消え失せろ！超電磁ナツクル！！！！」

上海二一ト

「もるすあ！！！！」

次回予告

合体した我らがヒーローは一体どちらへ向かって逝くのか！

次回更新

基本は火曜となっておりますがテンションが高ければ明日か明後日には……

三位一体とは何とも言えぬな【後編】（前書き）

あらずじ

- ・放課後？ぼっこぼっこtime
- ・出オチビューティホォー
- ・合体！

タゲ

『異変は終わりを告げている』

『神は言っている……ここで攻撃をやめるべきじゃないと』

『三神（変態神）の力』

『ジヨジヨネタ入ります』

三位一体とは何とも言えぬな【後編】

【out side】

昔からこんな例えがある、一本の矢は簡単に折れてしまいが三本が合わされば中々折れる事は無いと……そう、変態紳士達は今現在がその状態なのである。

各自が持ち合わせる才能と意外性、変態性をかけ合わせる……この方程式により無限の可能性が解き放たれたのだ。

「ふんっ、雑魚が邪魔に……」

「ぐっ（助かった、ナルキッソスの奴がいなければ我は殺られていたかもしれない）」

対峙する二人の影。周囲に張り巡らされる弾幕は、堕天使の動きを停止させ退路をふさぐ。三人は、ただただ強く拳を握りしめベリアルを睨みつける。

「まあいい、次はてめえを倒す。お前は、俺たちの逆鱗に触れた。龍の僅か一枚だけあると言われる逆さの鱗に触れば怒りを受ける事ぐらい知ってるよな！」

「ふ、ふふ……所詮人間！我の魔法の前では無力……ごほっ！？」

眼下の青年が消える。次の瞬間、ベリアル腹部に強烈な衝撃が走る。瞬時に距離を詰めた青年からの攻撃。まるで変態が目的の物を見つけそれを奪取する時の驚くべき戦闘能力並みに彼らは強くなっていた。

「魔法？そんな物がどうした魔法使いなんてな接近戦でフルぼっこにすれば即死フラグは免れないんだよ！」

「だが、神力の力ならばどうだ！」

ベリアルを囲う様に光の剣が出現する。無数の剣は、迷わず青年を撃破しようと飛来する。

だが、相手が悪い。三人の力を足している彼を倒すことこそ愚の骨頂なのだ。

「ハハハハ！！効かないぜ！寧ろ、気持ちいいぐらいだ！！！！」

彼の中の志々雄が雄たけびを上げる。それと同時に謎のパワーが蓄積されていく。

「そういえば、このカス野郎は幻想郷の住人に傷を負わせてくれたな……更には俺たちをだまし……俺の姿でレミリアを傷つけた……許さん！！このロリコン神の従僕【真・ロリコン】が止めを刺してやるわ！！！！」

弘樹が叫ぶ！

体内から魔力があふれ出てくる。青年の周りには黒と白の混ざりあったオーラが噴出している。恐らくだが魔力と未知なるロリコンパワーの結晶なのだろう。

「いや、面倒なのは勘弁だ。だが、今は……八雲紫様がいる……つまり、ゆかりんがいる。今の俺はスーパー紳士モードだ！さあ、お前は何処を壊して欲しい？言って見る！！何処から決りたい！」

誠輝が発狂する。スーパー紳士型誠輝は、通常のやる気の無さを覆すほどの覇気を放ち驚くべき身体能力を発揮するのだ。

「……と言っ訳だ。てめえは俺達になす術もなくやられて消えるのだ！」「」

彼が先行する。顎に向かつての掌底、防御の暇なくベリアルはまともに攻撃を喰らいのけぞる。

「ぐっ、この我が眩暈……だと？」

掌底は、主に正拳と違い内部に直接ダメージを与える技。衝撃を強く受けたベリアルの脳を刺激し昏倒するほどの衝撃を当てたのである。

「更に行くぜ！」

「かはっ！？」

拳を突きだすのではなく振り下ろす。功の部分ではなく小指の側の部位をぶつける鉄槌。顔面に鉄槌を打ちつけられ急速に力なく浮かぶベリアル。

「ふう、もう一つおまけに貰っとけ！！」

今度は、身体をその場で捻り旋回。そして遠心力を加えた振り下ろし、バックハンドブローを躊躇なく叩き込む。

「げはっ……くくく」

既に満身創痕のベリアルは、勝ち誇った様な表情になり笑う。その笑いが青年の癍に触ったのかベリアルの胸倉をつかみ睨みつける。

「てめえ、何が可笑しい」

「いやはや……忘れていないかい。我がお前らの探し人の命を握っている事をだ……取引をしよう」

誇らしげにうすら寒い笑みを浮かべるベリアル。

が、色々二人には温度差があったのが今回の撃破の要因になったのだと八雲紫は後に語る。

「何をいつてやがる！！様はてめえをブッ飛ばせば探し物も見つかると言っ通りよ！！！！」

「な、なんだと！？バカかお前らは、人質だぞ！どうなってもいいの……ギャパラ！」

「うだうだ喧しいんだよ！さっさと地に伏せるか、観念しやがれ！！！！」

「ぐほっ！？ほぐっ！？めるば！！！！……は、話し合いを」

「だが断る！！！！」

この地獄の様な風景は、ベリアルが戦闘不能になるまで続いたと言
う。

その状況を幻想郷の住人は、気の毒な人を見る様な表情で観戦して
いた。

「ねえ、紫。あいつらに任せたの間違った選択だったのかもね」

血祭りの状況を見ていた霊夢がうんざりした顔で愚痴を隣の紫に唱
えると彼女は、くすりと笑い否定した。

「そうでもないわ。長沢誠輝の残虐性、千里志々雄の耐久性、水無
月弘樹の魔力吸収性……意外性あり過ぎな彼らは、丁度良い具合に
幻想郷に吉報を運んでくれるのよ。一つ不思議な事があるのよ、彼
らはどうやって此処まで来たのか……」

「あら？今回も貴女が彼らを呼んだのでわ？」

咲夜は、疑問に思った事を口にする。紫は否定の意を表して首を横

に振る。

「じゃあ、あの人間たちは自力で幻想郷に入ってきた……又は、幻想郷に招かれた……とでも言うのかしら？ 全く、途中で出てきたくせに目立つなんて妬ましい」

「そうだったらいいのよ、だけど……違う。彼らには家族や友人がいる」

「そうだね、それなら……ひっく、幻想の存在になることなんてない。まだ分からない事があるのかい八雲紫」

萃香は、いつの間にか出来あっていた。自分の持ってきていた瓢箪の酒を霊夢の消毒薬の代わりに使っていた内にチョコチョコ飲んで酔っぱらったのだろう。

「そうね、それは追々説明するわ。今は、影に吞まれている二人の救出ね……スキマオープン」

扇子を縦に振る紫。するとその場にスキマが出現する……そして中から見覚えのあるメンツが飛び出てくる。二つの小さな羽を広げている紅い吸血鬼、十二単を着こみ美しい黒の長髪を蓄えている姫。紅魔館の主、レミリアスカーレットと永遠亭の姫君、蓬莱山 輝夜である。

「いたた……油断したわ。まさか気配から雰囲気まで一緒だとは思わなかったもの」

「お嬢様！よくぞ、御無事でいらっしやいました」

「ええ、大丈夫よ。あのぐらいの傷で私は死なないわ……一日もあれば再生するわよ。寧ろ、誠輝の攻撃の方が痛かったくらいよ」

ぴんぴんしているレミリア。主犯であるベリアルを思うがままにぶん殴っている青年を見つけて開いた口がふさがらないとばかりに啞然。

「あら？あれは……志々雄と他の二人ね。なんだか私たちが捕まっている間に色々あったみたいね」

平然と理解する輝夜。まさに大丈夫だ、問題ない。

「何あれ……異常なのは知ってたけど……此処までとは聞いてない。あの魔力と靈力に妖力が混ざった人間と呼べない生物はなに？」

「お嬢様、規格外な皆さまです」

「知ってるわよ……頭痛の種がまた増えた……」

ため息をつきレミリアは観念したように諦めた。

「まあ何はともあれ……異変解決ね　さて、帰りましょうか？」

「そうね、傷も治療してもらわないといけないし……アンタら帰るわよー！」

「「「おう！あつ、レミリアと姫（輝夜）が戻って来ている……！」」」

「やれやれ……面白い人間だね。今度手合わせでも願おうかな？」

「やめた方がいいわ。あいつら変態だから」

「さあ、お嬢様帰りましょう」

「そうね、嗚呼……フランを外に出しているのがとてつもなく心配だわ」

こうして灼熱地獄を騒がせた異変は幕を閉じた。

場所不明

とある場所で一人の男が博麗大結界を見上げていた。目の前に見えるのはただの木々だが、彼の眼には確かに映っている幻想郷を覆う結界が。

「やれやれ、大賢者様に頼まれちゃ断れねえな。しかも御丁寧に俺が表舞台に立たない様な仕事をくれるとは……まあいい。これで修

復は済んだ……藍、これでしめえだ」

「ああ、助かった。それでは、報酬は後に……協力感謝する……K殿」

八雲藍、幻想郷の賢者と呼ばれている紫の式神。九尾であり相当の実力を持つ妖獣。紫と同じく数学の分野にかなり強くよく暇を見つけては色々と計算しているらしい。

人里にひっそりとすむKは、色々と事情があり記憶が飛んでいたりする。しかし、何故だか陰陽師としての力があり裏方の仕事を引き受けていた。

「さあゝて、俺はさつさと帰って店を開けねえとな……これ以上閉めていたら永久に閉める事になりかねん」

本当に心配しているのか疑わしい言い回しでKは人里のある方向へと歩き出す。

- - - - -

【???side】

「はあ、今回はどうにか部外者の侵入を防げた。全く幻想郷は色々
と取り込み過ぎなんだ……神話の神やら天使やら……さて、次は…
…まだ面倒な問題があるな」

僕は、そう愚痴をもらすと周りの気配を感じながらも次の問題を
解決する為にその場を後にした。

三位一体とは何とも言えぬな【後編】（後書き）

誠輝

「フル」

志々雄

「ぼっこ」

弘樹

「time!」

次回予告

異変後の宴編始まります！

次回予告

木曜かな？

治療が住むまで休む事を激しく推奨致します（前書き）

あらずじ

・異変が解決

・最後の方がブラッドカーニバル状態

・とりあえず、終わりが良ければすべてよし

タグ

『神は言っている妹萌えで何が悪いと！』

『サヨナラ僕の腕』

『クロスビジョン』

治療が住むまで休む事を激しく推奨致します

地のそこでの戦いから約一日。

異変を解決に導いた彼らは、永遠亭にて休憩を兼ねた治療を受けていた。

「いっただい！！やべえ、骨が治ったと思って油断していた」

「バカね、これはもう複雑骨折状態よ……どれだけ無理したのかしら？」

瞳に涙を溜めながら永琳の治療を受けているのは、誠輝である。紅魔館の騒ぎで骨を折ったのだが謎の力により完治したように見えていたがどうやら痛みを和らげる効果しかなかったようだ。

結局、更に負傷を悪化させただけだった。

「いやゝ、よかったよかった……レミリアが死んだと聞いた時には

世界でも滅ぼしてやろうかと思っただぐらいだぜ」

「大げさよ、それに妖怪何だから消し炭にされても何日かしたら復活するわよ。そんじょそこらの雑魚妖怪と一緒にしないでくれる？」

「ですが、私も過度の心配をしておりました。我ながらあんな安い挑発に乗るとは……まだまだ修行が足りないようですわ」

軽傷ですんだ弘樹と咲夜は、レミリアの元他愛のない談笑を楽しんでいた。ちなみに当本人のレミリアは、殆どの傷がふさがっており治療の必要はないそうだ。

「シオは本当に一途ね。私を助ける為に歩いて地獄まで来るなんて騎士の鏡ね！」

「姫様を助ける為なら……どんな茨の道すら歩いて見せますよ。寧ろ、歩かせてください、茨の絨毯を」

「うわっ、さりげなく自分の性癖を暴露してるウサ」

「ねえ、それより私の影が薄くなってる気がするんだけど？ 気のせいよね……」

こちらは永遠亭の姫に志々雄が傳く（かしず）という信託を受けた

騎士の様な名場面をぶち壊している最中であつた。何処にいてもハ
ードボイルドとドM精神は忘れない志々雄に敬礼。

「あはははは！……これは傑作だぜ！博麗の巫女ともあろう霊夢が
隙を突かれてこれってやつか！」

「魔理沙、あんた……傷が治ったら一番最初に叩きのめしてやるわ」

ベットに安静に寝かされている霊夢に向かって魔理沙が大爆笑。霊
夢のイライラは今日も加速しております。

「おーい、お見舞いに来たぞ！」

すると玄関辺りから元気な声が聞こえてくる。間もなくして入って
きたのが萃香であつた。

その後ろから地霊殿のさとり、お空ともう一人赤毛の少女がいた。

「むっ、そっちにいるのは火車の火焰猫 燐じゃないか？」

「あら？そっちの帽子のお兄さんは私の事を知ってるのかい？」

志々雄がふとお燐を見つける。一応、誠輝、弘樹、志々雄は幻想郷の住人の名前と能力や生い立ちなどがある程度知っているが暴露はしない。何故ならその方がカッコいいから！

「いちち、おっ……本当だ。もしかしてあそこでくたばったら運ばれていた感じがするぜ」

「そうだね、そっちのお兄さんは腕がボロボロだけど……死ななかつたんだ」

「さらりと怖い事いうのやめよう。主に俺のテンションの為に」

「はあ、異変を解決した本人たちだというのに……何と情けない」

さとりは、溜息をついているが表情は和やかだ。恐らく、異変が解決してすっきりしたのだろう。そこで誠輝は違和感を感じた。いる筈なのにいないような気配がする。

「弘樹……気付いてるだろう？」

「ああ、幼女の反応がある……こいつは、妹キャラの！」

誠輝と弘樹が同時に一点を集中する。さとの右斜め後ろ、そこにいる人物。シンプルなデザインの帽子をかぶりひらひらとしている服を着ている幼女もとい少女。さとりと同様に第三の目があるのだがその目は開く事なく閉じている。

「あれ？可笑しいな、無意識の能力でお兄さんたちには私の姿は見えない筈なんだけどな」

「こ、こいし！何時の間に……というか着いてきたの！」

さとりが驚きを隠せない表情で背後の妹、古明地 こいしを見つける。

「ふん、俺のローリンセンサーはだませない！」

「そうだな、俺の妹萌えの力は無意識の内に発動するから無意識が相殺されただろうな」

「誠輝、妹萌えだったんだな……」

「まあな……フランとか萌えだ」

「分かる分かる」

この時だけ、弘樹と誠輝の心がクロスフュージョンしていたとかどうとか。

治療が住むまで休む事を激しく推奨致します（後書き）

誠輝

「妹と殺伐としたデートがしたい」

弘樹

「ロリ萌えた」

志々雄

「ん？お隣……にゃんこ？」

次回予告

色々続きます。

更新

土曜日！

一つの事にこだわる少年（前書き）

あらずじ

・休憩します

・こいしちゃん
の存在をよみ取る事が出来る外来人
・妹萌えバースト

タグ

『饒舌な妹萌え』

一つの事にこだわる少年

「全くあれだけ忠告したというのに着いてくるなんて」

「えへへ、だって外の世界を見たかったんだもの。ずっと地底に閉じこもってばかりじゃ面白くないから」

「まあまあ、良いじゃないか。来てしまった物は仕方ないだな、弘樹軍曹！」

「YES、ボス！」

反省の色を見せないこいしにさとりは眉間にしわを寄せる。それを見ていた誠輝と弘樹が軍隊コントをしながらフォローを入れる。

「……それもそうですね。して、長沢誠輝さん……貴方の頭の中には妹萌えという理解不可能な単語ばかりが埋め尽くされていますが、妹萌えとは一体どんな言葉なのですか？」

さとりが誠輝の潜在意識の中にある『ココロ』を読み取り疑問を口にした。しかし、それが自分が犯した失態だと気付くのはもう少し後の話となる。

「妹萌えを知らないか……ならば、俺が簡単に尚且つ簡潔に教えて

やる！いいか、妹萌えと言うのはまず、妹という言葉から始まる。妹と言うのはだな、血のつながった姉妹または兄妹という家族構成にあてはめられるが！ある時、偉大な人類は気付いた。あまりに自分の妹が可愛すぎて食べてしまいたいと『食べてしまいたいぐらい可愛い』という言語もこの様な場面で使用される。つまり、あるうことが自らの妹を恋愛対象と見てしまった兄から始まったのが『妹萌え』のジャンルだと俺は思っている。で、此処からが本番なのだが、よくロリ萌えと妹萌えを勘違いする奴がいるから簡単に説明する。妹は家系図的に兄の下につく女なのであつて幼女もいればそれ以上の少女や女性という年齢に至ったとしても妹であるのは変わらない。つまりは、妹＝ロリの法則はあり得ないのである。さて、路線が外れたから立て直そう妹と愛くるしい部分の幻想を人は妹萌えという。ちなみに大体の妹は何時しか兄を離れて反抗的になると言うがそれでも中々可愛い所もある、俺はそんな妹も好きだ。更に言うなら『義妹』というジャンルも存在する読んで字のごとく『血のつながり合いがない兄妹』の事を指し示す。まあ、大体は反感を喰らったりするらしいがまあめでたくつついたという実例もある。それより、妹萌えについての最大点だが……（以下永遠に続く）」

「……………あの……………」

喋る喋る。誠輝は、教授の授業の様なスピードで長々と妹萌えについて話を続けて行く。勿論、周りの女性陣は若干後退。弘樹と志々雄は『なんだ何時も通りの誠輝だ』と納得して喋り続ける誠輝を暖かい目で見守っていた。

「ちよつと……………」

「それでな……（ry）」

止めようと何度か努力しているさとりだが誠輝の饒舌と心を読む能力からのダブルパンチで動きが取れなくなり何とも言えない力オスなフィールドに取り残されている。

他のメンツは、さとりをサクリファイス（犠牲）にして治療所から退散。誠輝の特急レベルの妹萌え口論から逃げ切ったのだ。

- - - - -

「あー、まさか誠輝があそこまで変人だとは思わなかったぜ」

「魔理沙、あんたの目は節穴どころかフィルターでも掛かってんじやないの？」

霊夢が魔理沙の発言を訂正。そうだ、誠輝は変人域を超えた超越者の一人なのだ。だから変人と言うレベルで収まる器ではない。

「誠輝……内のフランには近づけるのよそうかしら？」

「よく分りませんが、誠輝様なら問題ない気がします」

「何でそう思うの？」

「とても生き生きと話していらつしゃったからです。普段の長沢様は、瞳に意思を持つてない如く沈んでおります。しかし、興味をもちになる事には命が危険になるうとも無鉄砲に突っ込み平然と還つて来る……弘樹様も志々雄様も同じく」

レミリアは、咲夜の意見を言われて初めて気付く。

（そうじゃない、この外来人たちは……結果的に紅魔館を破壊したけどフランを止める為に命をかけて戦った。それだけでも評価に値するわ、なのに駄目ね。紅魔館の主たる私が性格や変態性だけで人を判断するなんて……よし！）

レミリアは一つ決心した。紅魔館が無いま、自分たちには過す場所が無い事が。そして運良くも誠輝たちが家を建てようとしている

事の運命を見ていたレミリアは褒美として一つの提案を出した。

「弘樹、お前らが家を建てようとしているだろう？」

「まあな、誠輝が言いだしたんだ。確かに住居は必要だからな」

「だから、その家が完成したら私たち紅魔館組はそちらに移ることにした。紅魔館を破壊したの責任は私たちもあるがそちらにもある建設する時の手伝いはしてやるから……で、うわ！？」

「ありがとうございます！ありがとうございます！！！」

レミリアは見た。弘樹が淹の様に涙を流している場面をまるで神を祈る様に手を合わせて激しく身を震わせている事を……人生で一番幸福なのではないかと弘樹はこの時思ったそうな。

「そ、そういうことだから誠輝の骨折が治り次第こちらが全面サポートするは、紅魔館の方は大工にでも頼むとして……で、いい加減拝むな！」

「俺、今から悪魔崇拝者になって一生レミリアに使えるんだ！」

「うわっ！？凄まじく嫌な勢いで契約がなされようとしてる！！！」

「よかったですねお嬢様。従僕が増えますよ?」

「よくないゝ!!!」

レミリアは吠えた。世界の無情な意志に反逆するように……

「姫様、軽いですね。もつと栄養のある物食べた方がいいんじゃないですか?」

「そう?運動しないからこの頃、体重が増加してる傾向が合ったんだけど……まあ、シオがいいって言っなら問題ないわね!」

志々雄は、輝夜を背に乗せ筋トレを行っていた。日々、精進する事は男を磨くことにもつながると彼は信じている。故に肉体の強化も忘れずにやっておくのが志々雄クオリティ。

「あらあら、これは大変個人的な趣味をもった子たちが集まったわね」

「師匠、和んでる場合ですか?いつの間にか永遠亭が乗っ取られつつあるような気がします」

「そうね、でも面白そうだからいいんじゃない？治療が終わったから私は実験に戻るわ、うどんげ……くれぐれもお客さま方に失礼のないようになさい」

「え、師匠！あゝ、もう……これどうやって掌握すればいいのよ！！」

嘆く鈴仙。しかし、嘆く暇も今はない。

「どうでもいいけど……その弟子。のどが渴いたからお茶でも持ってきて」

「お、私にもお願いするぜ。ついでにお茶菓子も忘れずに！」

「はあ……てゐ、手伝……いない!？」

自分の横にいた筈のチビ兎が居なくなっていた事に鈴仙は愕然とした。勿論、永遠亭一すばしっこいてゐは面倒事が起こるのをいち早く察知し逃げていた。

「よしやああ！……テンションあがってきた！……！」

「妹がゝあれで、あれがこれで!?!もう無理」

「さとり様！……！」

「ありやく、さとり様が目を回してる」

「お兄さん、どんな内容のお話をしてたの？」

「妹萌えに着いて話していたらいつの間にか猥談になっていた。で、思ったよりもそっちの事に耐性のないさとりがノックダウンした」

あっけらかんという誠輝。どうやらこれが完全たちではない模様。三人の中で一番の危険人物はこの人なのかもしれない。この時、地霊殿組の四人はそう思ったとかどうか。

「おつ、そういえば……紫が宴会開くから後日、博麗神社に集まれだとき」

「マジで！宴会とか大好物です！」

「やったな弘樹。お前の歌で幻想郷をシャウトさせてやるがいい！」

「俺の歌は超音波なみ！？」

さつきから酒ばかり飲んでいた萃香が思い出したのか周りの全員に報告する。

「また、家なのね。はあ、誠輝、弘樹、シオ……片づけはやってくれないと祟るわよ」

「「「yes、ママ」」」

後日行われるであろう宴会の為に霊夢がまた頭を悩ますことになるのは見ての通り一目瞭然であった。こんな平和な日常が続いてくれと誰もが願った。

そして今日も月が夜の竹林を照らすのであった。

この様子を盗み見ていた一人の妖怪。八雲紫は、願いたいと思いが
からも無駄だと分かっているながらもどちらの感情も見せずにただ傍
観した。

「貴方の出番よ。行きなさい、ケイタ」

「了解しました。幻想郷の為に居場所の為にも行ってまいります」

黒ずきんに似合わぬウサ耳を生やした小柄な人物は、闇夜に舞う。
ただ、この幻想郷の為に自らのいるべき場所の為に行動を開始した。

一つの事にこだわる少年（後書き）

誠輝

「妹……燃ええええ……！」

弘樹

「燃えている！！東方は紅く燃えているうううう……！！！」

志々雄

「うむ、やはり姫様の側が一番だな」

更新

出来れば明日明後日、無理なら火曜になります

次回予告

宴会本編が始まります……！！

追伸

宴会に出して欲しい東方キャラを一応募集しますが皆さまリクエストなどはありませんか？次の更新か又はその次の更新までにお知らせいただければ追加いたします。

来たれ！宴会の風（前書き）

あらずじ

- ・前回なんてない！あつたのは全壊のみ！
- ・妹萌えは、妹を燃やしそうな勢い
- ・霊夢の苦悩が増える

タグ

- 『生きるって素晴らしい！』
- 『そう、ヘブンズドアは貴方の前に』
- 『氷の彫像は何よりもふつくしい』

来たれ！宴会の風

辺りが闇夜に染まる時間、博麗神社は多数の人物で溢れかえっていた。辺りにはメイド長や亡霊の庭師が作ったと思われる料理が運ばれてくる。

「えー、異変を解決した祝いとして毎度毎度の宴会を始めたいと思います。もうめんどくさいわね、とりあえず異変に携わった外来人を紹介するわ」

永遠亭の治療から三日、全員の傷はそこそこ癒え動けるほどになったという理由で宴会が予定通りに博麗神社で開かれる事になった。

霊夢が幹事を取り仕切り始まりを迎えようとしていた。

志々雄、弘樹は霊夢の横に紹介されるのを待っていたが誠輝が見当たらない。

「まずは、水無月弘樹。文の新聞で知ってると思うけど奇人三人の一人よ。なんだか知らないけどレミリアと同等と戦える力を持っているみたい」

「ちわゝ」

軽く手を振る。直後、その場に氷の塊が降り注ぐ。

「ぎゃばら!?!」

「フッフ! 此处で会ったが100年目! あたいと勝負しな!」

「チルノちゃんゝ、危ないよ!」

「まったく、宴会で弾幕ごっこするんじゃない! 折角、用意した会場が台無しになるでしょ! 弘樹を拾って他でやってなさい」

「分かった! さあ、行くよ!!!」

「分かった……分かったから氷を解いてくれ」

「あははは……」

チルノが弘樹を引きずりながらと言つか氷の摩擦で滑らせながら場所を移動していく。その後ろを大妖精が苦笑いを浮かべながら着いて行く。

「次、千里志々雄！何だか知らないけど永遠亭で強化されたらしく色々と便利！」

「扱いが微妙な気がするんだが？まあいいや、それじゃあ一つ！夏なんで打ち上げ花火でも上げるか！」

突如、上空にぱつと花が咲く。これが宴会の開催を知らせるように何度も炸裂。

「はは、やるじゃないかい。風流だね」

「確かにそうだね。萃香、面白い外来人がきたみたいじゃないか」

伊吹萃香と星熊勇儀は既に出来上がっており酒を豪快に飲み干しながら打ち上げられる花火を観戦。他の地霊組、紅魔組、白玉楼組、永遠亭組も花火を眺めながら観賞している。

そこまで数量はなかったので何発か打ち終わると静かになる会場。

「さて、次に最後……長沢誠輝なんだけど、本人が不在なのよね」

「あれ？宴会の準備時間からいたんじゃないのか？」

霊夢が忌々しそうに声を漏らすと魔理沙が反応する。

「そうなんだけど……いつの間にかいなくなっただけね」

「いなくなったと言えば……フランもいないわ!？」

「そつえば、こいしも!？」

前回の談議を聞いていたレミリアとさとりに戦慄が走る。

ざわ……ざわ……

ドカーン

直後、爆発音と激しい揺れが辺りを襲う。

「ん？あっちの方からだぜ！」

魔理沙が指し示す方向には、紅い光と桃色の光がちらほら見えている。そして、小さな何かがこちらに飛んでくるのが見えた。

「藍しゃま、あれなんでしょう？」

「ん？人の様だな……凄い速度で落ちてくるぞ！」

九尾である藍の式神である橙が上空から落ちてくる何かを見つけると同時にそれは急降下を始めた。

「あゝ」

気の抜けた声と共にその人物は、宴会会場へと墜落した。

落ちる瞬間、どうにか踏ん張り何メートルか勢いを消せずに後退したがやがて止まる。

「ぜえぜえ……ただいま」

「誠輝……アンタ、何でそんなにボロボロなのよ」

突然落ちてきたのは誠輝であった。一同が咄然となるなか霊夢は流血や衣服がボロボロな誠輝を半場呆れ気味に見つめている。

「ああ、その心配全快お姉様の妹様に弾幕ごっこをせがまれて……
…どうにか凌いだ。生きてるよね、俺？」

「ええ、此処は博麗神社。少なくとも冥界や彼岸じゃないわ」

「そうか、生きるって素晴らしい」

「ごめんね、強く打ち過ぎちゃった」

「大丈夫だった？お兄様」

誠輝が愛刀を松葉杖のようにして立っているとこいしとフランが帰って来た。

「こいし！今まで何処に？」

「フラン！？勝手に何処かに行ってはいけないとあれほど……てか、お兄様」！？」

派手に驚く姉陣。

「大丈夫だ……ただ、目の前に心を洗われるような綺麗な扉が見えるんだ」

「おいしい！？それへブンズドア！！！！永琳先生！！ヘルプ！！」

瞳の色が消え、虚ろに夜空を覗く誠輝の目は真っ暗だったとか。

志々雄が直ぐに永琳を呼び三日前の繰り返しが始まった。

「貴方はバカなのかしら？治りきつてない身体で殺伐シスターズと戦うなんて」

「ははは……断りきれませんでした」

「そんな状態で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

その一言を申した後、誠輝は意識を手放した。

「ちょ、大丈夫じゃない！大問題だ！！弘樹、手をかせ！誠輝を……」

誠輝を蘇生もとい復活させるための儀式を開始する為に弘樹を呼ぼうとしてある物を目にした志々雄は絶句。

「あはははは、氷漬けになってんの！」

「あわわ、チルノちゃん！速く溶かさないと！」

その一角には巨大な氷が張っていた。その中心には、弘樹がいた。まるでこの世の全てから解放された様な悦に入った満面の笑顔で……

「いやいや……主役二人が満身創痍で始まる宴会って」

内心、大問題だろうが！と叫びたい志々雄だったがどうかその言葉を飲み込み、弘樹の解凍作業に入った。

ちなみに……博麗神社の台所から今の状況を眺めていた人物二人。一人は、紅魔館が誇る瀟洒なメイド長十六夜咲夜。もう一人は、銀のおかつぱ頭の上下緑色の服装の魂魄妖夢。

「す、凄い……あれが外の世界の剣士……」

「妖夢、貴女本気で言ってる？」

少女の目には本気の光しか映ってなかったとかどうとか。

来たれ！宴会の風（後書き）

誠輝

「妹の為に命をかける男、スパイダーマッ！？」

弘樹

「私は世界から開放されたのです」

志々雄

「この二人をどうにかしないと」

更新

木曜

次回予告

宴会が続きます

何より愉快的連中（前書き）

あらずじ

- ・爆風にまみれた死体予備軍
- ・氷に包まれた性者の昇天
- ・天からの迎えはまだだ

タゲ

『この小説は健全？です』

何より愉快的連中

一時間ほどして博麗神社内で誠輝と弘樹は宴会に参加できるまで回復していた。

「あー、滅茶苦茶頭痛い」

「そりゃそうだ。フランとこいしの弾幕を宴会ギリギリの時間までさけたりグレイズしてるからだろ」

「……何だろう、風邪でも引いたのか？ 凄く寒い、夏の筈なのに」

「それは、氷漬けになってたからだろう」

誠輝、弘樹はそれぞれよく分らないと言わんばかりに寝惚け眼をこすった。永琳の薬の投与が速かったために直ぐに目を覚ました誠輝は凍っている悪友一人を起こす為に志々雄と共に氷を化石を掘る様に丁寧に分解後、解凍。

よって、二人は介抱されているのである。 志々雄にな。

「何故だろう、凄く損した気分だ」

「嗚呼、それ分かる。何でこんなに女性率が高いのにも関わらずな
んで志々雄が看病してんの？」

「皆、メンドクサイって」

「酷くね？一応、俺ら異変を解決したんだぜ？」

「どうした、何故泣く弘樹」

「空しくなんかない！これは心の雨だ！」

「全くバカめが。俺らは自分の意志と共に行動して気に食わない奴
をブツ潰したただけだろうが！それとも何か？見返りを求めて行動し
たと言うのか！」

「見くびるなよ！俺は、幼女の為に戦ったまでだ！！見返りなど考
えてない！！！」

大胆に断言する。弘樹、ただ目線を泳がせていなければもっとカッ
コヨかっただろう。

「……本音は？」

「少し……下心ありました」

「大丈夫だ、問題ない。俺たちもさ」

「……まあ、団子の為だったしな」

円陣を組む三人。熱い談議がこの後展開されたのは言うまでもない。

「あら？もう起きていいの？」

「おっ、アリス・マーガトロイドでいいよな？」

「ええ、あつてるわ。可笑しな外来人三人組さんたち」

間もなくして境内に入ってきたのはアリスだった。ブロンドの頭髮に人形の様な容姿が特徴的である。周りには同じ様なドレスを着せている上海人形が浮かんでいる。

「うおっ！？アリスキタコレ！！！」

「いやほおおおお！！！！」

「大魔法『ダ・マレ』カストモ」

テンションが上がっていた二人を誠輝がハリセンで沈める。

「アホ共め、クールになれ！俺たちは紳士だろうが！」

「そ、そうだった。あぶねえ、これじゃあハードボイルドじゃなくてただの変態だったぜ」

「はっ、何かの意思が俺を操っていた！」

「思った通り本当に可笑しいのね。表でバカ騒ぎしている奴らが呼んでるわよ……私は、少し疲れたから境内にいるわ」

「そうか、行くぞ弘樹、シオ。宴会はまだ終わってない、始まったばかりだろ？」

「よっしゃあ！？盛り上げて行こうぜ！！！」

「ふふ、俺の本気見てみるか！」

そんな訳で誠輝、弘樹、志々雄は宴会会場へ繰り出した。

「お、誠輝じゃないか。飲み比べといこうじゃないか！」

勇儀に呼びとめられた誠輝は、現状を把握して眉をひそめた。

「ん、萃香と勇儀に魔理沙……霊夢が死んでいるのは何故だ？」

「ああ、霊夢は酒を飲み比べしてたら倒れた」

「急性アルコール中毒にならなければいいのだが。まあ、風邪をひく可能性もあるしコートでも着せとくか」

「おや、もしかして誠輝は霊夢にほの字かい？」

にやにやとした笑みを浮かべる萃香に『何言ってるのこいつ』みたいな目線を向ける誠輝。そういえば、この鬼は異変でも操られていた時の理由が酷かったな。

「やれやれ、アル中が……そんな事より酒で勝負するんだろっ？」

「そうだったね。さあ、酒を飲んでも飲まれるな！」

「よし、私も全力を出すんだぜ！」

「いいね、そうでなければ張り合いがないってもんだよ！」

アル中どもに感化された誠輝は、近場の樽ごと酒を飲み始めた。

「あー、割れてるな。俺の頭がジャスティス過ぎたのか……大丈夫だ。これぐらいなら直せる」

「本当ですか？ぶつかってしまったのに桶まで直してくださってありがとうございます」

「いやー、本当にごめん。キスメを投げたらまさか人に当たるなんて思わなかったんだよね」

桶と志々雄の側にいる少女はキスメ。よく、地霊殿で落ちてくる事に定評があるらしい。そのばに謝っているのが黒谷ヤマメである。

事の発端は、酔った勢いでヤマメがキスメを桶ごとストライクしたのが原因で吹き飛んだキスメが何となく散歩していた志々雄に撃沈したと言っ経緯である。

「はは、何も気にすることは無い。俺にとっては、このぐらいの痛

み何ともないのだからな」

「あはは、凄い外来人が来たって聞いたけど本当に凄いね。あれ、明らかに人間の首が吹き飛ぶぐらいの勢いで投げただけだ」

「……そんな勢いで私を投げないでよ」

「元気が合つてよろしい！じゃ、治ったし俺は行くぜ。宴会が俺を呼んでいる……！」

「あー、早速中心に向かっていつちやたよ」

「そうだね」

志々雄は、何かとにぎやかな中心に向かって歩き出す。自ら仕えて
いる主の下へと辿り着く為に……

「ドナードナー」

一人寂れている男がいた。弘樹は、宴会を見て回ったが……肝心の
幼女たちは泥酔中につき起こせない状況で騒ぐのを断念していた。
そして一人さびしく月に向かって『ドナー』と何処かの歌詞をこぼ

していた。

「はあ、見てられないわね。そんな所で暇してないで、私達とお茶でもしない？」

「お、レミリアと咲やん……それに美鈴やパチュリーまでもいるのか」

「咲やん？愛称ですか、光荣です」

律儀に返事をする咲夜といつの間にか用意された洋物のテーブルを囲ってパチュリー達とお茶を満喫していた。どうやら、どんちゃん騒ぎは休憩中らしい。

「死にそんな顔をしていたから誘ったのよ？どうしたの、来るの？来ないの？」

「全力を持って参加させていただきます」

レミリアと向かい合う様に座る弘樹。直ぐに咲夜によって紅茶が注がれる。

それに口をつけ弘樹は上空に浮かぶ月を見続ける。

「月は美しいわね。特に紅い月……でも、幻想郷じゃ本物の月は滅多に見られたものじゃないけど」

「ああ、何となく分かった」

「そうね……何時かは月に行って見るのも悪くない」

「その時は協力するぞ？」

「では、手伝って貰おうか」

そんな談笑をしながら弘樹は夜の祭りに感謝しつつ月を眺めた。

何より愉快的連中（後書き）

誠輝

「酒を飲め！」

志々雄

「さてと…ぐーや姫は」

弘樹

「月がふつくしい！」

設定にかんして

一応報告します。この小説の時間軸は一応、東方望月抄の前の話です。そして地味に星蓮船の前でもありますので宜しく願います。

次回更新

土日！

予告

夜は着々と過ぎて……死屍累々

夢って怖いよな…（前書き）

あらずじ

- ・ 待遇が良かった初めての話
- ・ 月に行く……これは勝利のフラグだ！
- ・ 続く宴会

タグ

『なにこれ怖い！』

『夢オチでお願いします』

『スプラッター』

『魔王：死因【ツッコミ】』

『ゆっくりして逝ってね』

夢って怖いよな…

「あゝ、だるい」

「そりゃそうだな。私も頭がふらふらしてきたぜ」

誠輝と魔理沙は、二日酔いのおっさんの様に神社の境内で倒れ伏せていた。二人の顔は赤く染まっており完全に出来上がっている。

あれから三時間、誠輝と萃香、勇儀、魔理沙の飲み比べは続いた。しかし、勝負が着くか否かの所で勝負元である酒が残量切れという呆気ない終わり方をしまい、鬼は爆睡、人間は酔いどれ状態と死屍累々。

「マジでこれは、ヤバいな……流石に寝る」

「そうか、私も瞼がやけに重く感じて来たんだぜ」

誠輝たちは睡魔に襲われ、何の抵抗もなしにまどろみに落ちて行った。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「ああ……？」

誠輝は、何もない空間で目を覚ました。真白な空間、広々としており地平線や先が全くと言うほどに見えない。そんな広すぎる世界にたった一人、誠輝は立っていた。

「なにこれ？ああ、夢だな……無駄に現実感のある夢だな。というか、夢って自覚できるのか」

一人、自問自答をしていると不意に声がかかった。

「ハハハハハ！……やあ、誠輝君！ようこそ、愉快な世界へ」

「さあ、此処が何処か分からないから説明しよう！」

「……うわっ」

誠輝の目の前に二人の男女が現れた。一人は、禪をしめ宙に浮く眼鏡の男、ただ森近霖之助に凄く似ている。もう一人は、九尾の金髪の美女、しかしまたもや八雲藍に似ているが……何故か全裸である。細かい部分はモザイクの様に朦朧としているのは夢ならではの規制なのかもしれない。

「私の名前は、スーパーてんこ！こよなく全裸を愛する妖獣だ！世界の平和を乱す輩を許さない！様があれば呼んでくれ！直ぐに駆けつけよう！」

「僕の名前は、こーりん！何時もは森の妖精として活動している、森に迷った時は気にせず呼んでくれ！直ぐに駆けつけよう！」

「今すぐ、助けてくれ。てか、俺の目の前から消えてくれ。という
か完全消滅してくれ」

もう、世界を護るとか森の妖精とかそれ以前の問題でアウトだろう
がお前らというツツコミを剥奪し、誠輝は毒舌で応戦。

「ふふ、君が何故此处に呼ばれているか教えてやろう！」

スッパ―てんこと名乗る女性が高々に宣言する。いや、スルーかよ
！という誠輝の魂の叫びは心の金庫に大事に納められた。

「ズバリ！君には此处で幻想生物【ゆっくり】と戦って貰う！」

「何でゆっくり！？夢も此处まで来たらクレイジーレベルだな、お
い！」

「さあ、カモン！ゆっくり！」

「無視かアアア！！！」

スッパ―てんこが指を鳴らすと地面から饅頭の様な柔らかな材質で

あろう生首が出現。通称、ゆつくりとは何か和むような気がするという概念で幻想郷の住民をアレンジしたような饅頭だ。

「うわあ、マジでゆつくり軍団だ。何かうぜえ」

但し、このゆつくりに和む者は多いとは言えない。各言つ、誠輝はゆつくりに対して苛立ちを感じるタイプらしい。

「さあ、誠輝君。君の武器を受け取れ！」

「うおっ！？……………て、此処でもまたハリセンかあああ！！！！！」

こーりんから受け取ったのは金属製のハリセン。七色の光沢を放つそれは何となくだが伝説の武器や神の武具と同じ様な雰囲気を感じていた。

「こ、このハリセン。金属でありながら羽の様に軽い」

「そうだ！そのハリセンは、伝説の金属オリハルコンをふんだんと使って作られたものなのだ！」

「伝説上の金属をツツコミ武器に集中して造り過ぎだろ！これで魔王とか倒しにいったら仮に勝ちでもしたら……魔王：死因【ツツコミ】

て、なっちまうだろうがああ！！！！」

そう言いながらも誠輝は、ハリセンを片手に持ち愛刀の様に構える。その間にもゆっくりの軍団はそろそろと数を増やしていき二十は超えたであろう。

「げえ、流石に多いって……しかし、こいつでぶん殴っても大丈夫なのか？」

「心配ない！大丈夫だ！そのハリセンを信じるのだ！！！」

スーパーてんこが吼える。仕方ないので誠輝は、ハリセンを持ち前進。前方に位置する、霊夢によく似たゆっくりへハリセンを叩きつける。

「ゆ〜」

ぐしゃ

「ぎゃあああああ！！！！潰れたあああ！！！！？？凄く嫌な音と感触がっああああ！！！！出てはいけない様なモノが頭から出てきてやがる！！！」

「凄いだろっ？そのハリセンで砕けぬ者は無い！！！」

「砕いてどうするんだよ！！ハリセンは、主に突っ込みでボケを輝かせる役目だろうが！それがボケ殺してどうするんだよ！」

「ちなみにそのゆっくり達は君を獲物と思ってるから腕とか普通に食いちぎられるから宜しく」

「デットオアグロテスクかよ！嫌な夢だ……早く覚めろ！！！」

と叫びながらハリセンを振りかざし敵陣に突っ込む誠輝。

「おおきめえきめえ」

「何このきめえまる。削除だな」

人を最大限にイラつかせる表情をしているゆっくりを誠輝が足で踏みつぶし捻る。饅頭から泥へランクダウン。

「ゆ、ゆ、ゆ」

「ゆ〜」

「ちっ、今度は紫様と幽々子様だと！？……攻撃できる訳がない……何て言うと思ったかああああ！！！！てめえらは所詮、ゆっくりなんだよ！俺が敬愛するおふた方はお前らじゃねえエ！！！！」

ぐじゃ、ぐじゃ

某ゆっくり賢者とゆっくり亡霊がログアウトしました。

「えー、今度は弘樹とシオか……なんだかむかつくな。日頃の恨みじゃあああ！！！！」

「ギヤアアアアア」

人に近い悲鳴を上げる友人に似たゆっくりを何度も踏みつけ大地へ還した。

「今度はスカーレット姉妹か。ゆっくりになっても二人は可愛い気がする……まあいいか、とりあえずレミリアのゆっくりから地獄送りじゃアアア」

「ゆ〜!!!」

ゆっくりレミリアをサッカーボールの様にシュート。無残にも空中で爆発を起こし爆殺。

「まあ、妹ゆっくりは後に回そう」

何気に此处でも妹萌えが発動する誠輝。

その後も誠輝は数々のゆっくりを倒し遂に……全てのゆっくりを粉砕した。

「はあはあ、糞が……俺に妹のゆっくりを砕かせたのは許せん！おかげで良心がズタボロだ」

「中々、良い戦いだっただ。さあ、最後の試練だ！私たちを倒してみろ！」

「行き成りだな。何となくは分かってたが」

「そして、もうひとつ付け加えるよ。僕たちに勝てない場合はこの夢から永遠に抜けだすことはない！」

「なっ！？糞っ、ガチで戦わないと無理ってか！！もう一度言っ、夢なら覚める！！！」

半場ヤケクソになりながらも誠輝は、持つすべての技術を導入して二人の変態と戦った。

激しい戦いだった。近距離においてのこーりんのダイナミックな筋肉パフォーマンスや後衛からのスッパてんこからのゆっくり弾幕は誠輝を圧倒した。

だが、誠輝は諦めなかった。主にこんな変態どもと一緒にの空間に一生居続けるという悪夢から逃れる為に……

激戦の末、勝敗を決したのは誠輝だった。

「ぜえぜえ……なんで夢でもこんなに疲れないといけないんだ」

「ごぶっ、よくやった……これで誠輝君のツッコミは更に輝く筈だ」

「ああ、これで私たちの役目が終わる」

「お前ら……最初からその為に」

「嗚呼、そのハリセンは君与えるよ……さあ、お戻り君の居場所に」

「また会おう……ッッ」戦士よ」

段々と意識が薄らいでいくのを感じた。誠輝は、睡魔に似た感覚の中思った。

『二度と会いたくないわ!』

そうして誠輝の意識はぶつたりと途絶えた。

夢って怖いよな…（後書き）

誠輝

「得体のしれない夢だった」

次回予告

弘樹の夢

更新

月、火のどちらか

夢って怖いよな…？（前書き）

あらすじ

- ・ブレイカーキャラ
- ・ツツコミは伝説へ
- ・ゆっくり戦記

タグ

- 『世にもダンディな物語』
- 『筋肉フィステイバル』
- 『精神崩壊に注意』
- 『これは森近霖之助ではありません』
- 『森の妖精は年中無休』

夢って怖いよな……？

「ああ？……何処だ此処？」

弘樹は、目をさすりながら起き上るとそこは鬱葱とする森林だった。周りを見渡せども木々ばかりで他には何も無い。

何この状況？

今だボーっとしている弘樹は、周りの風景を見回す。何処となく魔法の森と似た様な風景だが森と言う森は対して違いが大きく出ない為に広い場所や細かく検索してみないと何処かなどは分からない。

「可笑しいな。俺はレミリアと夢の様なお茶会をしていたんだが……もしやこれは夢か！なら、覚めろ！今すぐだ！？俺が寝ていると言う事はレミリアが暇している可能性がある！」

近くにあった大木に弘樹は、頭を叩きつける。何度も何度も叩きつけている内に樹が若干曲がり始める。

「はああああ！！！！フェニックスヘッドオオオオオオ！！！！！」

ゴスン

巨大な破壊音と共に大木が激しく揺れる。が、次の瞬間……

バキバキ

「あ……倒れる」

あれほど立派に育った樹が弘樹の頭突きにより倒壊した。当の本人はというと外傷などはなくびんびんしている。

「やべえ、本格的に夢なのは分かったが……なんだか現実味を帯びた夢だな。そういえば、夢で死んでしまったら起床できるって言うていたが……試す勇氣は無い」

仕方がないので目が覚めるまで森林浴を楽しもうと思った弘樹が振り返る。

「やあ、僕はこーりん。森の妖精さ！」

背後には

森の妖精

いたりけり

by 弘樹魂の俳句

「ぎゃあああああああああ！！！！ガチムチのナイスガイがいるううう！！！！！！！！」

驚いた。振り返った先には先ほど誠輝の夢にも登場した禪一枚のこーりんがサイドチェストポーズで君臨していた。

ちなみにサイドチェストとは、ボディビルダーが横から見た胸チェストの厚

みを強調することから、この名前となっている。胸の厚み、腕の太さ、脚の太さなど、体の厚みを強調します。

「まあ落ちついたまえ。君は、前の異変において魔力切れを起こしてダウンした事で悩んでいるね」

びしつと弘樹に指を指し華麗に某ジヨジヨ立ちをするこーりん。すかさず眼鏡を指でくいと上げるのも忘れない。

「な、なんでそれを……てか、ボディビルすぎるぜ」

「そんな悩みを抱えた青少年を助けるのも森の妖精の宿命さ！」

「そ、そうなのか……大変なんだな森の妖精って」

「分かってくれるかい？今なら森の妖精になってみようキャンペーン中なんだけど」

何処からか白い禪を取りだすこーりん。

「全身全霊を持って拒否します」

「それは残念だ。では、試練を始めよう！失敗すれば、この世界からは脱出が出来なくなる……しかし成功すれば魔力を制する力を手に入れるだろう……！」

「成程な。ハイリスクハイリターンか！乗った！燃えるシチュエーションは俺のモットーだぜ！」

やる気をだした弘樹は、拳を握りしめる。

「良い表情だ。惚れてしまいそうだよ」

「おうえええ」

嘔吐しそうになる感触をどうにか回避。追加効果、やる気値の減退。

弘樹のやる気度……20%

「さあ、最初の試練だ！今から来る敵の集団を魔力を上手く使って蹴散らすのだ！」

「よし、来い……！」

一番手に現れたのは、カエルだった。全長は普通のカエルを遙かに超越し人間の童子ぐらいの大きさだった。それならば、倒すことは容易いと思ったがよく見ると……

「何故に手足がボデイビル？」

出てきたカエルの手足は、膨張しており血管が浮き出る程に筋肉質なのだ。

「こいつは、マッスルフロッガー。カエル妖怪の中でも希少種で手足を鍛える事に没頭したカエルの最終形態さ！」

「嫌な最終形態だな。まあいい！見せてやるぜ、俺の実力を……！！」

帰ったらレミリアを撫でるんだ！と心の中で叫びつつ弘樹はマッスルフロッガーへと突っ込むのであった。

- - - - -

【博麗神社】

「姫様、そんなにお酒を飲んで大丈夫ですか？」

「らいじょうぶよ、問題ないわぁ」

「……大丈夫な顔じゃありませんけど？」

志々雄は、輝夜の横に片膝をついた状態で待機しており不死VS不死の酒飲み大会を見学していた。輝夜の顔は酒の摂取しすぎで真っ赤に染まっておりおぼつかない足取りで妹紅と対峙していた。

対する妹紅も酔っ払いの親父の様にふらついており付き添いの慧音に支えてもらえないと倒れてしまいそうだった。

「はんっ！かぐや、今日は此処までにおいてやる……」

「いいわよ、今日は引き分けねえ」

「全く、二人とも酒の飲み過ぎだぞ。過剰な摂取は身体を壊すと言うのに」

「まあまあ、暇なんでしょう。永遠と言うのは……それだけ無限大の時間を所持している様なモノ……娯楽がなければ生きてはいけないと思うんだ。先生はどう思う？」

「うむ、確かにそうかもしれないが……それが酒を飲む理由にはならないぞ？」

「流石に先生は手厳しい」

「志々雄殿は、永遠亭の姫君にはお優しい事だな」

「はは、それだけの想いがあるって事ですよ」

「それは、殊勝な心構えだな」

「殊勝でしょ？」

「そのようだ」

慧音と志々雄は、保護者の会話に類似した談話をしていると輝夜のコールがかかる。

「こちら、シオ。さつさと来なさい！」

「おやおや、家の姫様が呼んでますのでそれでは」

「うむ、私は妹紅の介抱をしてくる」

「あゝ、次は勝つからなああ」

そそくさと志々雄は、その場を退避して姫の場所まで移動する。

「様ですか？」

「そうなのよゝ、たまには褒美を与えないといけない気がしてねえ」

「はあ？（褒美は何時も貰っている気がするんだがな）」

唐突な展開に志々雄は、僅かに混乱するがどうせいつも通りの急な思い付きだろうと自分を制す。

「はい」

「はいつといますと?」

自分の膝をぼんと叩く輝夜。意味が分からず戸惑うばかりの志々雄だが痺れを切らした輝夜が腕をひっぱり無理やり膝の上に引きづり込む。

所謂、【膝枕】状態である。

「……………はあ?」

「どう?たまにはいいかなと思って…………あれ?」

「ぐふっ（ククククク、クールなれ!!!志々雄おおお!!!!!!俺は紳士だああああ!!!!!!れ、れれれれれ冷静になるんだ!!!!!!あばばばば、膝枕とは何たる至高の状態よお!!!!!!こ、これが夢にまで見たアルカディアなのかああああ!!!!!!俺は、今…………最高に幸せだアアアア!!!!!!!!!!!!」

「ちょ、志々雄!魂出てる!!!!」

志々雄の身体から輝かんばかりの靈魂が抜けだし酔いが一気に冷める輝夜。今までに見た事のないほど志々雄（靈魂）の顔は穏やかで全てに包まれた様な菩薩の表情で上昇して逝く。

「あらあら、亡霊になるなら歓迎するわよ」

「幽々子様！？冗談言っていないでどうかしてくださいよー!!」

慌てる妖夢とは裏腹に幽々子は仲間が増えると思って「機嫌の模様。

「た、たすけて永琳」

「はいはい、姫様。一体今度は何をやらかして……脱魂!!!!」

（俺は幸せだアアアア!!!!!!）

志々雄の魂は今までにないぐらい輝き宴会会場を照らしたと言う。

夢って怖いよな…？（後書き）

誠輝

「ああ、ゆっくりが」

弘樹

「筋肉があ」

志々雄

「あははは、とても身体が軽いんだア！」

次回予告

弘樹ドリームエピソード2！

志々雄、生還

更新

早ければ明日、そうでなければ明後日

夢って怖いよな…？（前書き）

あらずじ

・肉々しい

・夢って怖い

・昇天する

タグ

『肉体美』

『成程！分からん！』

『マッソウ！ワールド！』

『oh、卑猥卑猥』

夢って怖いよな……？

「ぜえはあ……また、お前も強敵^{とも}だった」

カンカーン

何処かでゴングが鳴った。

弘樹は、息を荒げながら天に向かって腕を上げており勝利の余韻に浸っていた。

目の前に倒れているのは、マッスルフロッガー。至る場所に打撃痕が残されている。

「大体分かってきた気がするぜ。魔力は発散させるばかりではなく集中させて使う事も出来ると言う事だな！」

「そう言う事だよ！中々分かって来たじゃないか！よし、次だ！第二の試練は……！」

こーりんが手をかざすと空の彼方がきらりと光る。

「えっ？ちよ、なんか落ちてくるし！！！」

辺りを吹き飛ばすように巨大な物体が投下された。大木を幾つものなぎ倒しそいつは、出現したのだ。

「なんだこれ………牛と人の融合物か？」

「彼は、ミノタウロス。神話の世界から呼んでおいたのさ！さあ、彼を魔力の乗った拳で吹き飛ばした前！」

「無理ゲーと言つか何と言つか……魔力や体力が回復しているのは、夢のおかげなのか？」

先ほどまでの疲労感がすっかりなくなっている事に気付く。よく見ればマッスルフロッガーと戦闘した時の傷も癒えていた。

「ブモオオッオオオオオオオオ！！！！！」

巨大な身体を持つミノタウロスは、まるで肉体を見せびらかすように胸を張っている。鋼鉄級の肉体が文字通り弘樹の壁となって道を遮る。

腰には、ボロ布を纏っており腰みの状態。上半身は、見事な肉体があらわになっていた。

「腕に魔力を供給するように……うりゃああああ……！」

ガツンと鈍い音がするがミノタウロスはびくともしない。

「勝てる気がしねえな。………どうにか急所を突く事が出来るなら倒せるかもしれないが」

「ふっ、困ってるようだ！ヒントを与えよう！集中するんだ！感じるのだ！敵の弱点を……！」

「なるほど……！分からん……！」

弘樹は考えた。そうだ、心の目を使えばいいのだ！

早速実行に移す為に瞳を閉じる弘樹。

「おお！何か見えてきそうだ！」

「ブモオオオオオオ！！！！」

「メガンテ！？」

フルスイングでミノタウロスに吹き飛ばされる弘樹。木々を大量に貫通した後に起動停止。

「超痛いじゃないか！何だよ！！！！誰だ！夢の中で死んだら起きるとぬかした奴わ！」

「ちなみに悪夢で死ぬと現実でも死ぬらしいけどね」

「ぎゃあああ！！！！これ悪夢だああ！！！！」

「ブモオオオオオオ！！！！！！」

折れた大木を振り回すミノタウロス。寸前の所で回避しつつ弘樹は走りまわる。目標が小さい為にミノタウロスは中々攻撃を対象に当てる事が出来ないようだ。

「集中……腕……否！右の拳に全魔力を集中……そして、敵の弱点

を見切る！」

渦巻く魔力の線を全て拳に練り込む。襲い来るミノタウロスは、危機感を感じ取ったのか後ずさりを始めるがそれを見逃す弘樹ではない。

「命取ったらアアアア！！！！！」

敵の弱点を射抜く為に拳を突き出す。肋骨おほいりほねの下の僅かな隙間だけが肉質が柔らかい事を見抜いた弘樹はもう突進。

「フィニッシュ！！！！……とお！？」

だが、此処でハプニングが起こる。周りに散らばっていた木々の残骸が弘樹の足をすくう。態勢が崩れた弘樹の拳は当初より打ち込む筈だった場所よりも下段に位置する場所まで移動した。

つまり、男性で言う『紳士』の部位であり非常に必要不可欠な部位である。

「……………！！！！！！……」

「うわああああ！！！！股間の紳士が崩壊してしまったああああ
！！！！」

ミノタウロスの下半身は死んだ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

朝日が指し始めたころ…

「はっ!？」

「うわあああ!?!？」

誠輝と弘樹は、同時に目を覚ました。

辺りには酒瓶やゴミなどが散乱しており足の踏み場もなかった。

更に注目するならレミリア、フラン、幽々子、妖夢などの夜型の妖怪や幽霊たちはいつの間にかいなくなっていた。

レミリア達に関しては、博麗神社のすぐ横にある『臨時紅魔館』と提示されている小さな小屋見たいなモノに入って寝ているのだろう。

その他の妖怪は、皆寝こけている。

うつすらと明るくなってきた神社を見回した二人は、互いに起きた事を確認しどうせ暇だからという理由でゴミ掃除や爆睡、熟睡している妖怪たちを片づけることにした。

「なあ、弘樹……」

「ん？何にさ」

「夢って怖いな」

「ああ、それは激しく同意するよ。てか、そのハリセン何なんだ？」

「なっ！？……何だと！？何時の間に……あれは夢だった筈なのに」

「あれ？何か魔力の周りが上手くできるように……夢だった筈だよな？」

互いに顔を合わせ思わず苦笑いの後に……

夢って怖いよな…？（後書き）

誠輝

「夢って怖い」

弘樹

「東方筋肉祭」うほっ　と男だらけの筋肉黒歴史」

志々雄

「出番なんていらない！姫様の膝枕で昇天したいんだああ！！！！」

次回予告

どうやら妖怪の事をよく思っていない奴らが居るようだ。

どこの世界にもそういう奴はいるさ。一方の意見ともう片方の意見が合わないなんてこのご時世幾らでもある……さて、どうなるやら

更新

土曜！

何だかんだで日常が一番楽しい(前書き)

あらずじ

- ・夢が現実で、現実には時に厳しく事実を突き付ける
- ・新たなツツコミと進化するペド野郎
- ・宴会終わったぜ

タグ

『よし、そうだ！釣りをしよう！』

『言いかえる必要性の無さ』

『？は餌で釣れる』

何だかんだで日常が一番楽しい

志々雄 side

宴会から数日が経ったある日…俺たちは何時もの悪友三人で霧の湖に釣りをする為に移動している。どういう訳かパルスィまで着いてきた。

本人曰く『偶然暇だった所を見かけたから着いてきただけよ、妬ましい』らしいがどう見ても……脈ありと考えた方が賢明だ。

「よし！今日は、大量に魚を釣り上げて売りさばく！」

「そしてレミリアハウス（仮）を造る為に材料を調達するんだ！」

「相変わらず元気ね。その元気が消えるなんてことはないのかしら、妬ましい」

奮起している誠輝と弘樹。どうやら、この数日で色々と進展した事がある。誠輝は正式に香霖堂で働く事になったらしく基本的には配達や買い出しをしてるみたいなんだな。

弘樹の方は、美鈴との格闘対決でお互いの利害が一致して暇な時に修行してるみたいだ。

「それじゃあ、釣りを始め……何やってるんだ弘樹」

「あん？みての通り……ダイビングだ」

上着とズボンを脱ぎ捨てた弘樹が銚子を片手に立っていた。燦々と降り注ぐ日に照らされたその肉体は、バカらしく……失礼。アホらしく見えた。

「弘樹は相変わらず馬鹿だな。そんな昔の戦法でやってたら日が暮れちまうよ！男ならこれ一つで勝負だ！」

と言って対戦車用ロケットランチャーを抱える誠輝。

可笑しいな？俺の常識だと魚を釣るっていう単語には竿などで釣るって意味合いがあった気がするんだけどな。この頃、辞書を見てなかったから改変されたのかもしれない。

せめて誠輝が一般常識をギリギリ保ってますように……

「誠輝、それでどうするつもりなんだ？」

「シオ、これがあるならやることは一つ！ぶっ放して魚を採取するんだよ」

「ごめん、君に常識を期待した俺が間違ってた」

「何か謝られた！」

常識という儚く脆いものは直ぐに決壊するみたいだ。

「駄目よ、そんな大量虐殺兵器を打ち込んだら魚を捕る以前に碎け散るわよ」

流石パルスィだ。常識を心得ている。

「それもそうだな。しかし、どうすれば？」

「やっぱり素潜りだな」

「何言ってるのよ。此处は弾幕で水しぶきを上げて魚を岸に打ち上げれば万事解決よ」

どうやら妖怪と人間の間では、常識というものに若干たりとも誤差みたいな物があるらしい。

とりあえず、全員に釣り竿を配った時点でどうにか納得してもらえた。

「あゝ釣れねええ」

「まあ、じっくり待つもんだろこついうの」

俺と弘樹はゆつくりと釣ってるんだけどパルスィと誠輝は、効果的に魚を集める方法を探すために二人で頭をひねっている。

「やっぱりアレで行くしかないな」

「……妬ましいほどに良い案だわ」

ん？何かよさそうな考えが浮かんだらしい。一体どんな作戦なのだろうか？

「行け！パルスィ！！！」

「妬符【グリーンアイドモンスター】」

突如放たれるパルスィの弾幕、見事に湖の表面に着弾した。

大きな水柱が幾つも立って行く。一体何がしたいのかよく分らないんだけど……はっ！？あれは、魚がフライングしているじゃないか！

よく見れば、爆風にまかれて上空に次々と川魚達が跳びあがって行く。

「さて、次は俺だな！唸れ！俺のテクニクッ！！！！」

「な、なにいいいい！！！！この状況で釣り竿を振るだとおおお！！？」

弘樹が大げさに驚く。

特にネタだと思つので放置の方向で

「はっ！？一直線に釣り針とばすことによって魚を空中でキャプチャーするというのか！」

「なるほど、水中で警戒心の高い魚を待つよりも水面に上げて頂こうという作戦か。しかし、簡単に空中であれほどの小さな標的を捉えられるのか？」

「よく見ろ、弘樹……誠輝は、捉えるなんて事はしないんだ」

「何！？だつたらなんで釣り竿を……」

もつともな疑問だ。どれだけ魚をFlyさせた所でひっかけなければ意味がない。前々から思っていたんだが針が刺さった魚は痛々しいと思っていた。

だが、誠輝はそんなレベルではすまないのをすっかり失念していたよ。

「おりゃああああ!!!!」

「っ、貫いただとおおおお!!!!」

そう、誠輝は魚を空中でひっかける事を実行しなかった。だが、代わりに魚の胴体を針で貫いて何匹も一気にゲットするという達人技を見せてくれたのだ。

「おっ、大量だ。五匹か、一回でこれだけ取れるなら直ぐに目標には届きそうだな」

「そうね、サクッと終わらせるわ」

釣り竿に五匹の魚が身体を痙攣させるように動きながらつりさげられている。よく見れば、釣り竿の先についているのは釣り針ではなく誠輝が何時も使っているクナイだった。

そんな感じで俺たちが茫然と見守る中、誠輝たちは大量虐殺（魚の）

成功させ一時間で持ってきた魚籠ぶくろがいっぱいになってしまった。

「ふう、大量だな。鮮度が落ちる前に届けてくるわ！」

「魚を狙って妖怪が出るかもしれないから私も行くわ。丁度、人里には用があるし」

と言って走り去る二人を見送りながら俺は思った。

釣りってこんなに派手でバイオレンスだっけ？

「シオ、俺らは暇だし今日の晩飯用の魚でも釣るか？」

「それが良いと思う。主に静かに釣ろう」

「だな」

騒がしい二人がいなくなったことで俺たちの平穏な時間が始まった。

数分もしない内に弘樹の竿に当たりが来る。それを慎重にかつ大胆に引き上げると……

「ひいたい！？」

「ええ……」

「まさかの？が釣れるとは予想外だ」

何故か知らないが氷の妖精が釣れた。

「まだ痛い。それよりもあんた達こんな所で何してんの？」

湖の中を検索していた所に釣り針があったらしく魚たちが突いてきたからという理由で無謀にも魚の餌に食いついたらしい。

頬を抑えているチルノが俺たちが持っている竿に興味を示していた。

「釣りだけど？」

「つり？」

「簡単にいうとこの竿と針で魚を捕まえるんだよ」

「なるほど！あたかもやりたい！」

「ほら、使いな」

「よし！大物を釣り上げるぞおお！！！！！」

弘樹から竿を貰い意気揚々と釣り竿を受け取り釣りを始めるチルノ。

ま、直ぐに飽きるのは目に見えているだが。

「おっ！？何か引いてるよ！」

「ば、バナナ！？まさかの当たりを軽く引きやがった！」

「落ちつけ、俺も予想外で反応に困ってるんだよ」

まさか糸を垂らして数秒で当たりが来るとかどういことだよ。あれだけ騒いだ後に魚がやって来る事態で可笑しいと思うんだけど……
ああ、此処の魚は皆ドM何だろうか？

「よし、チルノ！引くんだ！」

「よし！せいやあああ……！」

力任せに竿を引くチルノ。すると水面からかなりの大きさの影が……

「あれ？ミスチーだ」

「うおおおいいい……！今度はミスチーが釣れたんかい！」

「今日は、魚以外がたくさん釣れる日何だろうな」

強制的に納得してしまうのは気にしたら負けだというハードボイルド道の教えにある。

ぐったりしたミスチーの服の襟に釣り針が刺さっていた。どうやら漂流中に偶然チルノの垂らした針が引つ掛かったんだろっな。

「げほ……うっ、此処は」

「あ、目を覚ました。大丈夫か？」

ここぞとばかりに手を差し伸べる弘樹。うん、お前は紳士だよ。

「あ、貴方は空にいと喧嘩していた」

「あー、そうだな。水無月弘樹だ、あっちが千里志々雄」

「それよりどうしてこうなったとしか聞けないんだけど？なんで湖に沈んでたんだい？」

「はっ！？そうだった！慧音先生に知らせなきゃ！」

「知らせる？何を知らせるんだい？」

詳しい事を聞こうとした瞬間、湖からもう一人上がってきた。

「げげほっ！？ミスチー、無事だった！」

緑髪の美少年ぽい女の子、リグル「ナイトバグが湖から這い上がって来た。」

「リグル！無事だったみたいね、そうよ！速く此処から離れないと」

最早、話がかみ合っていないね。

その時、リグルの時とは比べ物にならないぐらいの水しぶきが上がる。一瞬視界を奪われるが直ぐにそれと俺たちは対面した。

ぎょろりとした白い膜のはった瞳、大きなヒレに魚類の特徴である鱗、更には二足歩行で歩くという珍妙な魚。

俺と弘樹は、こいつにとてもよく似ているモノをゲームでみた事があった。

「ガノ トスキタコレ！！！」

そう、魚竜種である亜空間殺法の使い手のあの方だ。似ているだけでちゃんと違う場所もある。何か顎がしゃくれてらっしゃる。

「あれだな、名付けてアゴトスだな」

「それで行こう」

「そんなことしてる場合じゃないです！こいつは、普通の妖怪じゃ相手に出来ないぐらいの強さを持ってるんです！」

懸命にアゴトス（次回から略称としてアゴス）の強さについて語るうとするが俺たちは、一つだけ分かっている事があった。

こいつをのさばらせては人里や他の妖怪の環境を破壊する可能性がある。

「やれやれ、弘樹……殺ろうぜ」

「そうだな、見せてやろう。新たなる兆しの力を！」

ガンブレードを構えアゴスと対峙する。弘樹もモーゼルを構えて魔力を溜めこむ。

さて、此処で言い忘れがあった事に気付く。

この際だから言っておこう。

弘樹、服を着ろ。

何だかんだで日常が一番楽しい(後書き)

誠輝

「魚をさばきに行ってきます」

弘樹

「行くぜ！」

志々雄

「さてと魚料理には材料が粗悪だな」

次回予告

アゴス討伐日記

更新

火曜？

俺の狩猟法は108式まであったりしなかったりする(前書き)

牛すじ(荒い筋)

・釣れた!?

・釣れた!ミスチー

・釣れたあああ!?!?アゴス!

タグ

『リアルハンター』

俺の狩猟法は108式までであったりしなかったりする

【誠輝side】in 人里

「よし、売れた売れた！」

「案外早く売り切れたわね。まあ、時間帯が良かったのかもしれないわね」

「そうだな、昼から夕方にかけては主婦が待っている家族に夕飯の材料を買いだしに行くという定理があつてだな……まあ、その方程式に従えばずっと売れる」

弘樹たちと別れた後、俺とパルスイは何事もなく人里に到着し魚の販売を始めた。勿論、人里を護っている慧音先生には許可をとった。売り場は、他の商売人の邪魔にならなければいいと言われたので民家が密集している場所で魚のたたき売りを始めた所、近所のおばさんたちが集結。

一瞬で売れて行った。

ちなみに自分たちの夕飯分は取ってある。その辺りは、ちゃっかり

しているのは俺クオリティ。

「すみません、長沢誠輝さんですよね」

「ん、ああ。そういう君は、白玉楼の魂魄妖夢だね」

目の前にいたのは、魂魄妖夢。彼女は確か白玉楼の庭師と兼任して剣の指南をしていた気がする。緑色の上下の服を着ておりスカートは短めだ。

「はい、少々伺いたいのですが……此処に安いお魚を売っている人がいると聞いたんですが。見かけてませんか？」

十中八九俺たちの事だろう。ある意味穴場ですからな。

「あー、それ俺たちだわ」

「えっ！？そうなんですか、その格好からして売り切れですね」

がくりと肩を下げる妖夢。うむ、なんだか可哀そうだ。察するに幽

々子さんの夕飯（大量）を買いに来たんだろう。

「まあなんだ。売り物じゃないが10匹ほどストックがあるからやるよ」

「よ、よいのですか？売り物でなければ今晚のおかずなどではないのでしょうか？」

「まあ気にすんな。どうせ、シオと弘樹が釣ってるだろう」

魚籠を手渡す。どうせ、シオが造ったものだから元手はただなので気にしない。

横でパルスィが妬ましいオーラを三割増しぐらいにしているのが感じ取れるが気にしない方向で進むしよう。下手に刺激すると抹殺されかねない。

「所でこれは、霧の湖で釣って来たんですか？」

「そうだが？何か問題でもあったか？慧音先生にもその他の団体にも許可はとってある」

「いえ、そうではなく。あそこには数日前から現れた謎の妖怪魚の縄張りらしいので」

スカートのポケットから一枚の畳まれた紙を取り出し俺に手渡す妖夢。

よく分らないまま、紙を広げてみる。

そこに写っていたのは、驚くべき巨体、魚の様な膜が貼られている目玉、大きく開いたエラやヒレなど、そして……何より屈強そうな顎。

みるモノを引きつける魔力でもあるのだろうか？特にこの顎はヤバい。近寄ったら速攻で潰されてプギャーされそうだ。

てか、何てガノ トス？モン ンからワープしてきたのか。

「なんてアゴトス？」

「新手の妖怪なんでしょうか？霊夢も動かない所からみてあまり害にはなりそうもないんですが、縄張りに入って来た妖精などを襲うらしんで気になってしまいました」

ん？縄張り…霧の湖…シオと弘樹は何処に？

「やべっ、その話が真実ならシオと弘樹が危なくないか？」

「そうね、でもあの二人なら逆に倒してしまいそうよ」

「否！？アゴトスモといアゴスは、強力な水の波動と顎による強襲を仕掛けてくる凶悪モンスターだ！！！（主に攻撃力がSランクだしな）」

「大変じゃないですか！直ぐに助けにいかないと」

「二人は、此処に残ってくれ。無駄にまきこむ訳にはいかんからな」

そんな発言したらパルスィに首を絞められました。

妖怪の握力は世界一！！！！！首絞めどころか、首が飛ぶかと思いました！

「馬鹿ね、今更まきこむまきこまれない以前の問題よ。本当に気がつかない辺りが妬ましい」

「ごほごほっ、よく分らないが助けけると有り難い」

「最初からそういえばいいのよ。庭師、ついてくるんでしょう？とばすけどついて来られるかしら？」

「はい！これでも足には自信があります」

そんな訳で俺は、パルスィに半場引きずられるように空へとtake
offさせられた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

【弘樹side】in 霧の湖

「うほっ!？」

「シオ!？くそ、何て強力な水圧プレス。ハンターはこれを喰らって生きていられるなんて化け物だろ!」

俺の目の前でシオがアゴスから発射された水のレーザーを喰らって吹き飛ばされる。気のせいか悦に入っただ様な表情をして吹き飛んでいたが……まあ、目の錯覚だろうな。

「あたいの縄張りで好き勝手して……アンタいい加減にしなさい！
！！氷符【アイシクルマシンガン】」

「ちょ、死亡フラグ！」

チルノが氷の弾幕【アイシクルマシンガン】を放つ。アイシクルフォールの集束版で前方につらら状の弾幕が飛ぶんだが……個体値と体格差があり過ぎて爪楊枝でベルリンの壁を壊そうとしているようにしか見えないんだがな。

まあ、そこがチルノ（？）の愛らしくも可愛らしい部分だな。

「ゴギヤアアアアア……！」

「喚くな、デカ物！」

チルノを補足したアゴスが水圧ブレスのモーションに入った瞬間、俺は地を蹴って飛翔。アッパーカットで射出口の角度を変える。

ちっ、これじゃあ。拉致が開かない、さっきからこればかりだ。幼女がアゴスを攻撃しては俺がそのフォロー。

別に苦には感じないが、寧ろ最高の奉仕だが……決定打がない。

………何だが、デカ物相手だと誠輝が非常に有利な気がするな。よし、どうせ帰って来るだろうし三人がそろうまで粘るか。

「ゴギヤアアアアア……！」

「喧しいわ！よし、お前ら！誠輝が帰って来るまで粘るぞ！弾幕乱射だ……！」

「はい！」

「ふふん！あたいの弾幕で氷漬けよ！」

「よし、これならいけるかもしれない」

とりあえず考えるのは後回しだ。さて、L e t · s p a r t y ! !

俺の狩猟法は108式まであったりしなかったりする（後書き）

誠輝

「くつ、待ってるよ！今すぐ行くからな（主に出番の為に）」

弘樹

「間に合ってくれよ（主に俺が活躍する為の踏み台の為に）」

志々雄

「あれ？なんだか二人の裏が読めるんだが？」

次回予告

激突アゴス！奇妙なモンスターの真相とは！

更新

木曜……いな、金曜かもしれない

理由

『テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー3』が発売するから』

テイルズは非常に面白いので興味のある人は手を出してみてもいいかもしれませんね

以上宣伝＋報告でした

力の入れ方次第で地球が崩壊するでしょう（前書き）

あらずじ

・商いは飽きないようです

・みよん合流

・A G O T U E E E ! ! ! !

タグ

『アゴスターハンター』

『奇跡の集合率』

力の入れ方次第で地球が崩壊するでしょう

「ゴシャアアアア」

「うおっと!？」

アゴスの突進。直進上に二足歩行で突っ込んでくる。

安易な行動だからあっさり避けれる。これはゲームの世界じゃないから亜空間殺法なんていうチート臭いモノは無い筈だ。

「と言うかシオは何処までぶっ飛んだんだよ!帰ってこないし!」

「また、ブレスが来るよ!？」

ミスチーが悲鳴の様な声をあげて忠告する。

背後を振り向くと器用にターンしたアゴスがブレスを発射しようと身構えている!

ぬかった！？予備動作があるから大丈夫だと安心しきっていた。

プレスの方角は……俺じゃない！この方向は、リグルだ！？

水圧を利用したプレスだけあつて発射距離から考えると回避は不可能。ならば、最善の行動に移るのみ！

「リグル！危ない！！！」

「わっ！？」

リグルを突きとばしすかさず腕をクロスさせ防御態勢。直後、激しい激流が襲い来る！

そのまま俺は吹き飛ばされて地面を転がるハメになった。

「いててて、くそ……腕が」

「大丈夫！？なんて無茶するのさ！！」

「はっ、愚問だ！無茶しなきゃ男じゃない！」

「私は、妖怪なんだ。だから多少の傷は直ぐに治るのにどうして？」

「妖怪……関係ないな。護りたい者を護るのに理由はいらねえよ！
！！俺は、子供を護るために全力を尽くす！そう誓ったんだよ！」

立ちあがる。目の前にのっそりと立ちふさがるアゴス。ミスチーの鳥目もチルノの氷も効果は薄い。しまいには俺の腕はさっきの衝撃で両方とも骨折したみたいだ。

自分の腕じゃないみたいないな感覚とんでもなく痛い。脂汗が先ほどから止まらないんだよなこれが！！！！

「そうさ、腕が砕けようが足が千切れようが！俺の子供（幼女）を護るためのソウルは誰にも消し去ることはできない！！！！」

もう一度、拳に力を入れる為に立ち上がる。膝をついている場合じゃない。

「よく言った！……それでこそ、俺の悪友の一人だああ！……！」

上空から声がした。声の主は、よく知ってる。むちゃくちゃな行動力と無駄な知識ばかり偏る先輩野郎だ！

「そうだぜ、俺たちは迷わず人を助けるんだ。困ってる奴がいたら手を差し伸べる……それが妖怪であろうが宇宙人であろうが関係ないのさ」

近場の木に寄りかかるハードボイルドな悪友。ドMだが人一倍優しい性格の頼れる野郎だ！

「初対面で悪いが、潔く散ってくれ。ステインガーミサイル、ファイヤー……！」

空中からの攻撃、アゴスは俺たちを狙っていた為に回避を満足に行えなく弾に当たり爆発する。

その巨体が黒い煙をあげて揺らぐ。

効いてるようだな！流石だ！アメリカの科学力は世界一いいいいいい！！！！

「凄い威力ですね。あれが外の兵器……恐ろしいモノだ」

「全くよ。アンナモノ地底でとばされて良い迷惑だったわ」

むっ！？あれは、麗しの剣士みよんじゃないか！！！！あ、それと嫉妬の妖怪パルスィだ。

「なんだか今、貴方をブツ飛ばしてもお咎めを受けない気がするんだけど？」

「き、気のせいだろ？それより、何で二人が此処に来たんだ？誠輝は兎も角、妖夢はどうしてだ？」

「ま、事の成り行き上でね。まあ、まずはあの食欲が減退しそうな

グロイ魚を調理して帰るわよ」

「そうだな、行くぜえっ！？いだだだだだだ！！！！！」

そういえば、腕が折れてたんだっけか？畜生、俺とした事が不甲斐ない。

「ぶぶつ、腕の骨折ったのか？災難だな、帰りに永遠亭にでも寄るかな。さて、病人は木陰で休んでろ。リグル「ナイトバグ、弘樹を誘導してミスチーと共に治療に当たってくれ」

「えっ！？わ、分かったよ！」

「そうね、今の私たちじゃどうにもなりそうもないもの」

そう言って俺は、ミスチーとリグルに引きずられ戦線離脱した。

あのバツキャローは何してんだ。大方、幼女は俺が護る！とか言つて格好をつけて負傷したんだろ言つな。

ふん、中々カッコいいシチュエーションじゃないか。相手が紫さんや幽々子様なら命をかけて凶弾から救つて見せる自信と覚悟はあるが……まあ他はそこそこに助けるぐらいの気合はある。

まあ、気合だけな。

それよりもだ。あのアゴス野郎は、対戦車用ミサイルを喰らつて表面の鱗が散つただけとは恐れ入つたぜ。

「此処は：チルノ！出番だ、お前が幻想郷最強なら出来る筈だ！俺の作戦を聞いてくれ」

「分かつたわ！最強のあたにかかればどんな作戦だっていちころよ！」

「はは、すげえな」

流石、？だ。最強の言葉だけで此処まで簡単に動いてくれるとは、それに作戦をイチコロにしてどうするつもりなのか？自爆特攻でもかける気か？

「シオ、人間大砲生産！」

「ふつ、準備はばっちりだ。ほら、三人入っても大丈夫な設計だ」

「流石だな、しかし三人も入る必要はないんだがな」

俺の目の前に巨大な大砲が出現する。よく大規模なサーカスとかで見かける奴だ。この目でまじまじと見るのは初めてだな。後ろの弾（人間）を入れる穴が開いておりちゃんと蓋も厳重に締める事が出来るタイプだ。

「さあ、チルノ！この中で待機だ！合図を出したら全力で相手に目掛けて発射する。名付けて【最凶弾―チルノVERSION】だ」

「カッコいいわね！最強弾！！」

恐らく字面は違っただなこれが……

「みよん…これも外の武器なんですか？」

「いや、これは人やモノを飛ばすモノであって兵器的にはちょっと違う」

「忌々しいわ、あの魚初手のダメージが回復したみたいよ」

パルスィの言葉でアゴスを見ていると鱗は焦げているモノの起き上がり元気よく飛び跳ねている。何だろつかあの顎を見ていると衝動的に粉々にしてやりたくなるんだが？

「とまあそんな訳でパルスィは陽動してくれ。俺はチルノを装填したら撃ちだす」

「分かったわ」

「私も弱卒ながら援護します」

パルスィと妖夢がアゴスに突撃をかましている間にこちらもちルノを詰め込むか。

「さあ、入るんだ。顎野郎にチルノの最強を見せてやるっぜ」

「当たり前よ！あたいは最強何だから！！！」

「こっいつ子供は扱いやすいから好きだな。」

さてと蛇が出るか鬼がでるか……まあ、8割鬼が出そうだな。

力の入れ方次第で地球が崩壊するでしょう（後書き）

誠輝

「ふう」

弘樹

「嗚呼、回復する」

志々雄

「みなぎってきたWWW!!」

次回予告

何か星になるんじゃないのだろうか？

アゴスターハンター2ndG

更新

火曜？

轟け！最凶弾！！……まあ、使い捨てだがな（前書き）

あらずじ

- ・ G O T O H E A V E N（弘樹的な意味合いで）
- ・ アゴトスの本気
- ・ チルノ最強説（笑）

タグ

- 『妖精砲弾は最凶なりいいいい！！』
- 『やっぱり鬼畜は鬼畜でしかない』
- 『ロリコンは妖怪』
- 『人は人だからこそ怖いモノ』
- 『星になった命』

備考

・ 更新遅れてすみません、理由は活動報告にあつたようにMHP3のデータが吹き飛んだ事にあります。

まさか、『ウラガン亜種とかちよろいぜ！』とか調子に乗って戦った後にセーブできませんの嵐……他のPSPで確認した所、データ破損状態（笑）

一応、対処する為のソフトを使ってみました但不可能と断定されてしまい。結局、現在進行形で下位からやり直してます。

……メモリーステック（サンデックス製品）から変えようかな？何か、この頃ロードが度々出来ませんか出るんですが？

サンデックス、貴様は俺を怒らせた。

轟け！最凶弾！！……まあ、使い捨てだがな

「シオは、右翼に展開！パルスィは左翼、妖夢は中央突破を目指してくれ！」

「了解した！行くぜ、夕飯までには狩りつくす」

「分かったわよ。早く終わらせて帰りたいわ」

「分かりました！魂魄妖夢、参ります！」

各自、指示通りに展開。かく乱は成功だろう、次はチルノを打ち込む事だが…それ以前に後ろの弘樹から出ている幸せオーラがイラッとくる。何故だろう、人の幸せは見ていると破壊したくなるんだ。

「弘樹！添え木でもして戦いに参加しろ、弾幕を打ち込めば勝てる」

「だが断る！」

「なら死ね！」

「ちょ、おまつ！？ぎゃあああああ！！！！」

あまりにむかついたのでRPG-7をぶち込んでやった。爆風で吹き飛ば、弘樹がとも面白かったのは確かだ。ちなみに器用にコントロールできるのでリグルとミスチーには当たらないと言う好都合な攻撃何だなこれが。

消炎と爆炎にまみれた弘樹が必死にミスチーとリグルを護る様は、漢だ！なんて思わない俺は、とりあえずの理由でもう一発お見舞い。

「ほぎやああああ！！！」

「はははははは、良い悲鳴を上げてくれる。さて、こっちも削除できたしアゴスも倒す。あつ、弘樹の遺体は回収してくれリグルとミスチー」

「えっ！？死んだと決まった訳じゃないのに！？」

「リグル。あれは、人だったら簡単に死んじやうと思うんだ」

「我……屈せず。命の灯がかき消されるまで立ち続けるわ！」

黒こげ肉になった弘樹が生還。なんていう生命力、恐らくだがこれは口リに対しての感情だけで立っている気がする。いや、違うな…

…九割ロリ根性で一割渴望だな。

「無事だったんだ。凄い生命力だね、弘樹って妖怪なの？」

「ふふ、俺は」

「嗚呼、こいつは外の世界に突如現れた『ロリコン』という種族不明の妖怪なんだ」

「ちょ!？」

何か弘樹が訴えようとしているがスルーの方向に持って行く。

「ロリコンってどんな妖怪なの？」

「疑問は御尤も……まあ、子供（主に幼女）を狙う趣向を持つ奴らだ」

「……なあ、明らかに身構えられてるから止そうよその発言」

「だが、安心しろ。弘樹は、ロリコンでありながら子供を護るために目覚めた異端児だ」

「そつなんだ……ちょっと安心かな」

このぐらいのフォローは入れとくか。俺も鬼じゃない、優しさ溢れる感情で全てを包み込みます。えっ？なら、一々人を吹き飛ばすのをやめろ？無理無理、それは俺の趣味だから。

「お前って奴わ……行動の鬼畜性が無くなればいい奴なのにな！？」

「喧しい。面白可笑しくブツ飛ばすのは俺の心情だから変えようもない」

さて、弘樹の評価が上がったり下がったりした所で本格的にチルノ砲撃をかますか。

「添え木になりそうなモノ見つけたわ。これならそう簡単に折れそうもないわ」

何故か丁度よさげな四角形の鉄棒を幾つかミステリアが拾ってきた。何故、こんな所に鉄棒があるんだ？まさかと思つてちらりとシオを見ると『こんな事もあるうかと置いておきました』的な顔でドヤつと満足げにこちらを見ている。サムズアップで返さずにはいられない。

「私は、丈夫な蔓を見つけた。これで……最低限度の動きは出来るはずだよ」

「おしゃああああ！！俺の時代がキタコレ！」

「なら、逝って来い。弘樹は、チルノが発射されたと同時にアゴスに接近、顎を重点的に狙い撃て！」

「顎は脅威で事か…部位破壊を狙うぜ！」

特にこれと言ってアゴス自体に恨みは無いが、あの出っ張りである顎だけが赦すことが出来ない。何故だろうか、前世の記憶？

「用意は出来た！チルノ、発射用意！」

「あたいは何時でもOKよ！」

多人数全員で動く事により、アゴスの注意を逸らしチルノを発射する為の準備をする。まあ、それらしき工程は全くなかったがな。

「最凶弾、発射！！！」

備え付けのレバーを力任せに引く、ドンという衝撃の後に大砲の先から青い物体が飛び出す。目で追えなかったがチルノだろう。

それはアゴスに向かって一直線……

そして、天へ向かって星になった。

「あらま、失敗か。誰だよ、近場に大穴あけた奴……おかげで標準がずれてやがる」

よく見れば、近場に何か爆発物を起爆した様な痕跡がある。多分、これで大砲の向きが若干変わったみたいだ。

「……………」

残ったのは沈黙と啞然とした他六名だった。

轟け！最凶弾！！……まあ、使い捨てだがな（後書き）

誠輝

「チルノは明日には帰って来るさ」

弘樹

「いやいや…お前」

志々雄

「テラヤバス、作戦変更が必要だな」

次回予告

アゴス討伐！もう小細工より全力でたたいた方が速い！

更新

この頃、体調がよろしくないので更新が不定期になります。恐らく一週間に一回は更新できると思います。

楽しみに待っていてくれる方々、体調管理し直してくるので少々お待ちください

火力が足りればどうとでもなったの巻き！（前書き）

あらずじ

・チルノは星になった

・鬼畜伝道師誠輝

・ボロボロの性なるロリコン（種族）

タグ

『ウサ耳忍者視点』

『ボケが支配する世界』

火力が足りればどうとでもなったの巻き！

【不明side】in 茂み

「畜生おおお！！てめえ、よくもチルノをやりやがったなあああ
！！！！」

とおおらかに叫ぶ髪の毛を逆立てている少年。勿論、幻想郷で暴れている規格外の外来人の内の一人…長沢誠輝だ。

氷の妖精、チルノを大砲に詰め込み発射したまでは良いが水無月弘樹に八つ当たりした時の反動で地面がえぐれ砲台が傾いたための自爆だと思っただが……ツツコミを入れたいがこれは隠密任務の為にそれが行えない。

歯がゆいが仕方がないのだろう。

「おい、皆！ぼさつとしている暇があれば集中砲火だ！」

「お、おう。てか、今さっきのチルノは」

「バキヤロウ！」

「ふがつ！？な、何するんだ！」

誠輝が弘樹を殴り飛ばす。御丁寧にメリケンサックまで着用して、当然弘樹の顔は『見せられないよ！』みたいなモザイクがかかる一歩手前の状態に……一発であれか、未恐ろしい腕力だ。

「チルノはなあ！俺たちがアゴスを倒す為の礎になったんだよ！」

「な、なるほど！ならば、チルノはどういったヒントを残して飛んで逝ったんだ！」

「……………うん、あれだね。真つ向勝負は不利だったことだ」

見事に言葉を濁したね。ハッキリいうなればあれは犬死の分類に入るからね。まあ、妖精は生と滅を繰り返す存在故に死と言う概念は無いけど。

「ミスチー、あれどうみても犬死だよね？前、慧音先生が言ってたやつ」

「そうだけど……あの二人は聞いてないみたいね」

リグル・ナイトバグとミスティア・ローレイの二人はツツコミが弱すぎる。カオスな状況に認知が追いついてないのか、はたまた関わりを持ちたくないのか……俄然、後者な気がするけどね。

この人たちの会話を真に受けているとフラストレーションが以上に上昇する。

「ふう、さてこのポーズはどうだろうか？」

「くう、憎たらしいほど良いわ！妬ましい、その才能が妬ましい」

いやいや、何で千里志々雄と水橋パルスィは志々雄のポーシングの評価会を開いているんだ？意味が分からない、誰かこのボケの飽和状態を解いてくれる人材はいないのか！

頼みの綱である誠輝は、ワザとボケを流しているらしくツツコミを入れる気配なし。

こうまでして齒がゆいのか……ッッコミとボケが両立しないと言う状況下は！

『くはははは、無様だな。低能な人間と下級妖怪の束ではわらわは倒せまい！』

と高らかに笑うアゴス。てか、喋れたんですね。

「うわっ！？喋りやがった！」

「きめえ、きめえ！！！！」

「奴め、言語を喋れてのか！」

「ふーん、なんだか偉そうで妬ましいわ」

「はっ、中ボスレベルの野郎が喋れたぐらいで騒ぐんじゃないぜ。要するに奴の弱点を把握し一点集中で潰せばいいだけ……そうだろう、誠輝」

とニヒルな笑みを浮かべる志々雄。だが、何故台詞一つ一つ言うのに腕を組み、木にもたれかかる必要があるのだろうか？確か、ハーポイルド道がどうか言っていた様な気がするが忘れた。

「流石だな。シオ、カッコいいぜ」

「だな。さて、弱点は……顎だな！」

「ナンセンスだ。弘樹、顎が弱点とか弱点さらけ出し過ぎだろ！明らかに無いって！」

「そうよ、仮にあれが弱点だとしても強力な結界が何かで護っている筈よ」

『何っ！？何故ばれた！わらわの弱点をこつも簡単に見抜くとは貴様やるな！この部位だけは、どうしても護りきれんのだ！』

弱点さらけ出し過ぎてました。このアゴスは、ゲームやアニメのボスキャラみたいに自分の弱点を態々発言している。バカなのか天然なのかのどちらかだろう。

「よしやあ！」

ガッツポーズする弘樹。この頃、彼は魔力関係もだが見切る事に対しては異常な成長能力を見せる。もしや、能力開花の片鱗なのだろうか？

「サノバビッチ！！！！（約：畜生が！！！！）なんで安直な弱点か！しかも、鍛えられてもないんかい！」

「妬ましいわ。堂々と弱点をさらけ出すだけじゃなく護れないなんて……余程自信があるとみたわ」

誠輝とパルスイの目に危険な色の光が灯った気がした。彼は、通称鬼畜軍師だが意外と優しさも持ち合わせている。特に妹キャラについてのがやかしっぷりは尋常じゃない。能力の片鱗はまだない、あるのは馬鹿力と憑いている妖怪の力ぐらいだ。

「弱点理解なう。さてと攻撃に移りますかね」

拳を固め弾幕をチャージする志々雄。彼は、三人の中で一番先に弾幕を使えるようになった存在だ。バトルセンスもあり月の技術が加わった事により更なる進化を遂げた。勿論、バカみたいな方向に……

どんなに傷だらけになっても直ぐに復帰する力を持つ。先ほどのブレスを喰らった時もほんの数秒間倒れただけで無傷だった。

これは性癖が強化されているのか、はたまた能力開花なのか迷う所だ。

「よし、弱点は分かった！リグルウウウ！！」

「は、はい！？」

誠輝が叫ぶ。行き成り呼びつけられた為か身体をびくつかせているリグル。

「お前の必殺技『リグルキック』で奴を葬るんだ！」

「ないよ！そんな必殺技！？」

突然の無茶ぶりに戸惑うリグル。まあ、普通の反応だ。

「頑張ればデキルトオモウヨ」

「目を見て言つてよ！？何で逸らそうとするの！！！」

「それ以前にこれ以上、ロリを犠牲にする訳にはいかない！」

「まあそうだな。じゃあ誰が砲弾になるんだ？」

「どうして砲弾チヨイスなのよ！もっと他の作戦があるでしょ！」

『わらわを無視する出ない！！』

アゴスから放たれる水圧レーザー。皆それぞれひよいひよい避けて行く……ただ一人を除いて

「うひよおおおお、キタコレ！気持ちいいいい！！！」

「マツハだ！シオがマツハGOGOで社会的抹殺対象に！」

「よし、丁度いい！ペド野郎ごと消毒してやるぜ！！汚物は消毒
「！」

「やめっ！？RPG構えるの待てエエ！！！」

こいつら真面目に戦つ気はあるのだろうか？

【誠輝 side】 in 霧の湖

うーん、ステインガーミサイルで倒れないほどの奴をどうやって倒すか。

その課題は既に終わっている。

予め、霖之助店長から貰い受けた【妖怪に効果的にダメージを与える弾丸】を作成してもらっておいたからな。

コートの影に隠れている大型の銃器を取り出す。たった一発のみ弾が装転してある、だが妖怪に効くバレットらしく霖之助店長でも造るのは簡単じゃないらしい。自分が半妖だから作成途中に具合が悪くなったり下手すれば大けがをするほどの緻密な作業内容らしいが興味ないから聞いてない。

さてチルノはネタで吹き飛ばしたが今回ばかりは、ネタじゃ済まなそうだ。真面目に打ち込みますか。

さて、我が家来一、二よ。精々、俺の華やかな活躍の為に頑張ってくれたまえ、ふはははは。

「弘樹、シオ。他数名、よく聞け！香霖堂の店主から貰った最終兵器を使う……今度は外さない」

「最終兵器……一体どんな核兵器を使う気なんだ」

「きつと誠輝の事だ。地球の表面を五回ぐらい焼き払えるレベルの

ミサイルに違いないぜ」

おい、馬鹿二名。その考えからすると俺とお前らも死ぬところか、幻想郷が滅びて此処に來た意味がなくなるだろうが！

「何故、他数名……妬ましいわ」

「なるほど……最後の切り札は持っている、尚且つ冷静さを失わないのが武士ですか」

いや、妖夢。俺、武士違うから、仮に武士だとしても大盤振る舞い侍だから！

「よしやああ……腕が折れたが問題わない！ロリの介抱で第三段階まで覚醒！ふはははは、みせてやらあ！本当の地獄はこれからだ……！」

変なオーラを出した弘樹がガッツポーズをとっている。ヤバい、思ったより危険分子だなこいつ。

「ふ、こいつを倒して姫様の献上品として持って帰ればもう一度天

昇出来る筈だ！（ピンク色的な意味で）」

救急車ああ！！！！何処かに精神科はありませんかああ！！！！此処に変態が二人いますよおお！！！！

神様、神様。己が造り出した人間がこれほどまでに俗物に染まるなんて考えてなかったんでしょ？もし、此処まで人が色々と超えてはいけないモノを超えると知ってたらサタンを断固、アダムとエバ（又はイヴ）に近づけなかったでしょうな。

「全くこの二人は変人を通り越した変態じゃないか。常識人は俺だけか」

「「えっ！？」」

何だそのあり得ないモノを見つけた様な目で俺を見るな。

「いいから逝け！」

「何か死んでこい見たいな意味合いに取れるんだが？」

「気のせいだ」

「お前の場合どちらの意味でも帰ってこれそうにないからまたこれが怖すぎるんだぜ」

「良いか逝け、デスって来い」

「「やっぱり死亡フラグじゃないかあああ！！」」

泣きながら突進していく二人。何だ？どうしたと言っただ？まあいい、奴らが泣いた所で現状は変わらない。

『くくく、わらわを倒そうなどとは片腹痛いわ！』

魚が吠えやがる。てか、昔の姫さん口調でしゃべるのやめてほしい。

「アゴス！勝負だ！愛と勇気のハイパーショルダーアタック！！！」

弘樹の特攻。その名の通り、ラグビー選手のような形で体当たりをか

ましに行きやがった。馬鹿な、体格差があり過ぎだろ！だからもう少し物事を考えると教えてやっただろうが脳筋め！

『ぐああああー！！』

「嘘だ！？全長20メートルぐらいの巨体をたかが男子平均レベルの身長が浮かせるほどのシオルダーアタックが出来る筈がない！！」

思いつきり叫んだ。突っ込まずにはいられない、可笑しい。この頃、周りの友人が強化されている。地味に嫌な方向にだ。

673

「続いて！行くぜエエ！！！極限のナンパ師直伝愛と哀の最凶技！！ファイナルプ イヤーアア！！！！」

『ガババババババ』

上空に飛びあがったシオがおもむろに大の字に身体を広げ……そこから極太のレーザーを発射した！！！！

レーザーで焼き魚に早変わりするアゴス。地味にお前ら強すぎるだろ！この数日で何があつたんだよ！

「んな馬鹿な！！あれは、デイスティニー2のもてないナンパ師兄貴の秘奥義じゃねえか！！！てか、使えるなら最初から使えよ！！俺の出番なくて良いからさ！！」

「さあ、止めだ！誠輝」

「何気に止めに対しての派手な要求を突き付けられている気がするんだけどおお！！！」

あんな派手な技決められた後に一発かませと言われてもね……

「指先一つで十分だ！」

すぐさま銃身をアゴスのウィークポイント（顎）に合わせ銃弾をトリガーを引く。少しの反動で弾丸が発射されアゴスに一直線、よしこれなら外れない！

ドス

何かが刺さるような音の後に僅かな沈黙。

「お、お前はもう死んでいる……」

何となく言ってみたかった台詞。流石に秘孔をついたりはお出来ないから何となくここぞって時に言ってみたかったんだよね。これで死ななかったら恥ずかしすぎるがな。

『何と言って……うつ！？グボロバロスウウウウ』

「「ぎゃあああ……！！顎が破裂したあああ……！！グロテスク注意イイイイ……！！」」

三人同時に叫ぶ。きめえ、顎が突然吹き飛び四散する止めろよ、気

持ち悪いじゃねえか！！！！

てか店長よ。流石にこれは効き過ぎてると思うよ？顔の部分がもう『グロ注意』的なモザイク掛かりそうなほどグロイ事になってるから。

まあ、でもこれで一応退治した事になるんだろうか？だったら謝礼とか貰えるんだろうか？今は金より食い物が欲しいがな。

ただ一言……

今後一切魚料理を食べれる気がしない。

火力が足りればどうとでもなったの巻き！（後書き）

誠輝

「下僕一、二頑張れ」

弘樹

「家来から下僕にランクダウンした！」

志々雄

「俺は、ぐーやの奴隷だあああ！！！」

誠輝・弘樹

「「ねえーよ」「」

次回予告

初めてのお使い！フランドール編

更新

不定期

初めてのお使いって見守る側の方が大変なんだな（前書き）

あらずじ

- ・アゴス撃破！
- ・新妖怪『ロリコン』
- ・初めから見えよ！

補足

今回の話は、ストーリー的には関係のない話で祝50話を記念して造った短編として扱います。

タグ

- 『祝50話！』
- 『フランドールの初めてのお使い』
- 『変態現る』
- 『ポジティブシンキングなロリコン』
- 『キングオブシスコンハート』

初めてのお使いって見守る側の方が大変なんだな

【O U T s i d e】i n 森林

「遂に此処まで来たな。にとり、準備は万端か？」

「勿論だよ、盟友」

誠輝、にとり、レミリア、咲夜は狭い個室の中にいた。周囲には幻想郷では珍しい機器が並んでおりその中央にモニターが配備されており人々の行き交う場面が映し出されている。

「画像よし、こちら総本部。P F、D M 応答せよ。オーバー」

誠輝は、頭部に装着されているインカムに手を当て喋り掛ける。すると直ぐに返答が帰って来る。

『オライイ、P Fだ。フランの背後、ストーキングは完璧だ。オー

バー』

『YES sir、こちらDM。任務進行中、屋根からフラン讓に近づく不届きモノを監視中。オーバー』

どちらとも聞き覚えがある声だ。

PFと呼ばれる男は、童女に対してだけ無敵を誇っていた人材だったが何時しか他の妖怪とも渡り合えるほどの戦力を持った兵だ。つわもの

DMと名付けられた人物は、全ての攻撃を自らの力として変えてしまうと言う異端の力を持っている、更に月の技術者による肉体改造の成果で飛躍的に進化したハードボイルドである。

「よし、ならソラニンどうだ？オーバー」

『ああ、大丈夫だ。周りの馬鹿どもは鉄拳制裁した。オーバー、しかしこれは言わないといけないのか？』

「そうだ、オーバー」

いつかの子供に対しては優しく振舞うナイスガイの青年の声が聞こえる。子供（男女問わず）を護るのが自らの義務であり本望だと確信している彼は、童子に手を出す輩を決して逃さず許さない。得意の拳による攻撃で全てを地面に埋めるという能力を持っている。

『ああ！？何でてめえがいるんだよ！！オーバーあああ』

『当たり前だ。子供が初めてのお使いというのなら隠れて見守るが俺の役目だ！オーバー』

犬猿の仲たるPFとソラニンは良い争いになっているがちゃんと規則を護って「オーバー」と着けている所は律儀だと思う。

「喧嘩するな、今重要な事は……妹様の安全第一だろ馬鹿ども！！」

「そうよ、我が妹に何かあったら……」

「「処刑だ！！！！」」

見事に声が八もる誠輝とレミリア。二人の背後から謎のオーラが立ち上る。

それを離れている所で見ている咲夜にとりは色々と考えていた。

「あれが、所謂『シスコン魂』という奴なのでしょうか？」

「外の言葉は分からないんだ。けど…当たってる様な気がするんだよね」

シスコンオーラ全快放出中の二人を目にしたにとりと咲夜は驚きと呆れていた。

【O U T s i d e】 i n 人里

所変わって人里。今日もにぎやかな市場が立っており人ごみで溢れている。その中には、人間や妖怪、稀に妖精すら紛れている。

これは一種の共存の表れでもある。

その中に一人、日傘を差した少女が歩いていた。

「ふーん、此処が人里なんだ。本当に人間がいっぱいいる」

ガラス細工をつるしたような羽を携え上下真っ赤に染めた様な服を着こなしている。

レミリアスカーレットの妹、別名悪魔の妹。

フランドールスカーレットである。

本日の彼女は、とある理由で外出が許可されている。無論、レミリアがただで情緒不安定なフランドールを一人歩きさせる筈がない。

時は、一日前に遡る。

「流石は萃香だな。速攻で家が完成するとはな」

目の前には、小屋と表現できるがそれよりも一回り大きい住居には持つての来いの民家がそびえ立っていた。ちなみに大きさは、誠輝が偶々香霖堂で発見したログハウスの構築図解の本で設定された4LDKである（但し水道電気はないしダイニングキッチンもないが）。

「こんなの朝飯前さ。何処かの使えない吸血鬼じゃないんだしね」

「ほほう、鬼。お前は、私に喧嘩を売っているのか？ いいだろう、覚悟しろ」

一色即発状態になるレミリアと萃香。互いに一步も怯まず妖力があふれ出ている。が、拉致が開かないので誠輝は弘樹に合図を送る。

「まあ、おふた方落ちつけて」

弘樹が紳士的に間を取り持とうとするが…

「「喧しい!」」

「ふぎやつす!」?

文字通り一蹴。溢れんばかりの幼女からの回し蹴りを喰らい地に伏せる弘樹。

「……バカス。さて、どうでもいいが強硬手段に移るぞ? お前らの決闘で出来たての家が崩壊してしまつたら意味がなくなる」

誠輝は、不意に懷からハリセンを取り出す。ただのハリセンではないのは明確だ、金属製であるが何処となく神々しさを感ぜさせる。通称、オリハルコンで加工されたボケ殺し。物理的な意味合いを込めてゝである。

「ハリセン一つで止める? これは滑稽だ事だ」

「そんなぴらぴらの鉄板で何をしようというのさ」

「こっするんだよ！」

レミリア目がけて一閃。永遠に幼き紅い月と称された紅い悪魔は、余裕の表情で腕を組んでいたが誠輝の鬼には劣るものの剛腕から放たれる威力とオリハルコン製のハリセンが上手く重なり合いトンデモナイ威力へと昇華させる。

「ぶぎゃー!？」

「おー、飛んだ飛んだ」

「今のはお嬢様が悪かったと言え手加減はしてくださいね？私の主でありますから」

「ハイよ」

少々言葉に怒気が混じっている咲夜をしり目にレミリアは、木々と言つ木を吹き飛ばし紅い弾丸となって吹き飛んでいった。

「……嘘お？何だってそんな威力があるんだ」

「これは伝説の芸人が使っていたと言われる武器だからな。さて、喧嘩両成敗……意味合いは分かるよな？」

「いや、まあ……あれだよ、鬼と吸血鬼は仲たがいしてるのさ」

後ずさる萃香。しかし、誠輝は容赦しない。

「そうだな。だから仲良くする為に一緒に吹っ飛んでこいや」

「え、ちょっと待って　　ぎゃふん!？」

レミリアと同じ方向に吹き飛んでいく萃香。同時に弘樹が目覚めたのか起き上がる。

「いてて、全く二人して思いっきり蹴りいれるなっのに…ま、そこも萌えるけどね」

「大魔法【オ・マエ・モ・イツケエ】」

「グスタフツ!？」

誠輝の放つ超高速の素振りから繰り出される強打で弘樹はまたしても飛ばされた二人を追う様にシュートされた。

「別に水無月様を吹き飛ばさなくても良かったのでは?。」

「いいのいいの、その場のノリだから」

三人が戻ってきたのは、それから五分後の事だったそう。

「で、本題だが。フ란の事についてだ」

「…………ふむ、言ってみろ」

レミリアの雰囲気がいとも違い少しピリピリしている。それを感じた弘樹や誠輝は少しならず緊張を覚えた。

「このまま、封印し続けるのか。それとも新しいステップに踏み出すかだ」

「それは、フ란を地下から出せという解釈としてとっていいのかな」

「そうだな、フ란の能力は強力で10割中10割畏怖の対象になれるだろう。そして、何よりフ란自身も少々不安定な部分が存在

するしな」

「なおさらだな。その状態で外に出れば、一目瞭然。悲しみが深まるばかりだ」

レミリアの表情に影が差す。場の雰囲気は通夜の様に重苦しい。

「だが、それではフラン自体が成長しない。抑制すれば確かに被害は無いが……それだけじゃ駄目だ」

「知った口をきくな！確かにそうだ！外に出さなければ成長もしない、何も学べる事も少ない！しかし、そうしなければフランが……」

怒りを発散するようにレミリアは声のトーンを上げる。

「傷付くだろう？でも、何事も学ぶ事だと思っぜ。俺は学んでもすっかり忘れるがな」

さらりと弘樹が口を出す。学んだ事を一瞬で忘れる頭脳は神をも凌駕する。

「確かにそうだ。正論だが……私には運命が見えたのよ」

「運命ねえ、レミリアの能力は凄いやな。とんでもなく凄い」

「そうね、ほぼ100%当たるわ。それが幸福であろっが悲劇であろっが」

「ま、それに縛られている様な気もするがな」

誠輝はふとつぶやきをこぼす。レミリアは、思い返す。運命を操る能力を持って一度も外した事のない現実を……どれだけそれを拒もうと見えた結果は必ずしもやってきた事を知っている。

「フランを外に出せば、悲劇を生む事になる……だから、出せない」

「ふーん、あつそ」

「へえ、凄い凄い」

「軽いっ!？」

誠輝と弘樹はまるでやる気のない魔眼の持ち主の如くレミリアの話に興味を持っていなかった。

「まずは、本人の意思を尊重したらどうだ？」

「フラン……」

「お姉様」

薄く開いた扉の向こう側から現れたのは、フランドールスカーレットだった。気まずそうにリビングに入ってくる。

そして、重い沈黙が訪れる。

弘樹は、腰かけながら椅子をゆらゆらと揺らしている。誠輝は、機を見るように目をつぶって口を閉じたまま喋らない。レミリアはフランをじつと見つめ何かを考えている。フランはよく分らずおどおどしながら立ちすくんでいた。

「フラン……」

「何？お姉様」

意を決したようにレミリアは口を開いた。

「外に出たいの？」

「……………うん、外がどんな所かは知らないけど見てみたい」

「そう。誠輝、弘樹……あれだけ豪語したんだから何か策でもあるのよね？」

「もちのろんだ。弘樹、例の作戦を始動させる時が来たようだ」

「ふふふ、来たな。よし、じゃあ決行しようじゃないか！名付けて『フランドール・お使い大作戦』だっあ！」

「はっ！？」

「お使い？」

シリアスな雰囲気吹き飛び辺りが別の意味で沈黙する。

「説明するより準備した方が速いな。にとり！カモン！！」

「もう来てるよ、盟友！」

フランの後ろから入って来る水陸両用の服装に身を包んだ河童、河城にとりである。短いツインテールとリュックが目印の最新鋭の技術を欲しがる妖怪である。

「さあ、始めようか！」

「そうだ！！始めよう、フランの初めてのお使いをなあああ！！！！」

テンションが異常に高い二人を置いてスカレット姉妹は鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になっていた。

かくしてフランの初めてのお使いが始まった。

初めてのお使いって見守る側の方が大変なんだな（後書き）

誠輝

「さて準備は万端」

弘樹

「がつつりいこうか」

志々雄

「キタコレ！」

次回予告

フランのお使い本編入ります！

フランクのお使い！ part HEAVEN！（前書き）

あらすじ

・祝五十話

・にとりの技術力は世界一いいいい！！
・始まるお使い

タグ

『おい！戦隊ヒーローは基本、ただのリンチだ！』

『長そうだがそうでもなかった』

『ハゲに厳しい人種達』

フランのお使い！ part HEAVEN！

本日、フランドール・スカーレットに言い渡されたお使いは三つ。

一、寺子屋にパチュリーが必要としている教材を貰って来る事

二、夕飯の買い出しとして八百屋、魚屋、肉屋を訪れる

三、思いっきり外の世界を学んでくる事

と言う訳でフランは現在、寺子屋を目指して人里を渡り歩いている。
簡易的な地図とお使いの代金を貰いきよきよと周りを見ている。

初めてのお使いだけあって一人での外出（他数名紳士が待機してい

るが）は当然初めてである。

「わあ、外って広いし色々な物があるね……太陽がなければもっといんだけど。あ、今度お姉様と夜に散歩でもしてみようかな」

笑顔を振りまきながら独り言も無論、紳士or淑女たち一同に一方通行な訳で

『フラン、貴女の成長がまぶしいわ』

『うおお、こんな可愛い妹が欲しかった』

『なあ、誠輝。暇なんだが』

『喧しいシオ。ただ今、感動中だ。暇なら弘樹でも撃つとけ』

『ラジャ』

『了解するなよ！？てか、本名出していいのかよ！！』

『全くゴッサムが！この幻想郷で通信を出来るのは此処か永琳の所だけだろうが！よって、必要ない』

『意味ねえ！！！徹夜してまで考えたコードネームの意味が今消えうせたよ！！！てか、ゴッサムって何の略語だ！！』

『ごっついサム＝ウィルソンの略だが？』

『最早、誰！？』

こんな馬鹿らしいコントがあつたがフランは知る由もない。

「あつ、此処が寺子屋かな？わあ、人間の子供がいっぱいいる、学校って楽しいのかな？」

そんな馬鹿コントを繰り広げている内にフランは寺子屋の前まで来ていた。窓枠からこっそりと中の様子を覗いて興味津津といった通りに目を輝かせていた。

中では、児童が慧音による事業を受けて各々の反応を示している。

真剣に授業内容を聞いている子供もいれば適当に授業をさぼる生徒もいる。中には、人間ではなく妖怪や妖精も混ざっている事がフランの興味を引いた。

「そういえば、お姉様が人里は人を護るための場所だって言ってたけど妖怪も入れるんだね……ま、いつか。今は居るのはまずいのかな？お勉強しているみたいだし、ちょっと待ってみよ」

その頃、フランドール大好きクラブもとい監視隊本部では……

「こちら、本部。フランが入ろうか入らまいか戸惑っている。誰かフォローを入れる！さりげなくだ、絶対にこちらの存在をフランに気付かれるな！」

『了解、幼女のエスコートなら任せろ。オーバー』

「大いに不安なんだけど」

「……否定できん」

大分不安が積もるが軽い気持ちで誠輝は、弘樹をフォローに行かせてみる事にした。

間もなくして弘樹が動く、勿論タオルを頭に巻いてサングラスをかけるといふ不審者丸出しの格好で接近する。この時代ではまだ怪しいと言いか可笑しいの分類に入るだろうと思う。そう思いたい。

「こちら二カメラ……一カメラのあいつは大丈夫なのか？」

『ソラニンか、弘樹はあれで少女の扱いには長けていると自称していたから……大丈夫だろうと思うよ恐らく、多分』

「なんだか不安になってきた。スタンバイしておく」

『ラジャ、シオ。ねえ、お前のアンチマテリアルライフルならば、弘樹の頭蓋骨を貫く事も可能だ』

「OK、任せろ。必ず仕留めるよ」

「言いたい放題だな、畜生。絶対、華麗でエレガントなフォローをしてやる！」

いつの間にか弘樹をハントするような会話になっているが本人たちは気にしていないもよう。強は、寺子屋の角に周り辺りを警戒する。志々雄は、離れた住居の屋根からスコープを覗き指示を待っている。

『弘樹、逝け』

「……ああ」

誠輝の言葉に若干不安を覚えつつ弘樹は自分の中で模索した秘策を使う事にした。フランがすんなり寺子屋に入れてよければ友人の一人や二人ぐらいを作れるぐらいの作戦を

「お譲さん」

「えっ？」

弘樹の声掛けにフランが反応する。この時、志々雄は感じていた何年物間腐れ縁で一緒だった悪友が何をしでかすのかを確信を持って予知していた。

「ステンバイ……ステンバイ」

アンチマテリアルのスコープを覗き意識を集中させる志々雄。そし

て弘樹は最善の策を繰り出す為に言葉を紡ぐ。

「ヤラナイカ……ぎゃぼっ!？」

「わ!？」

それと同時にライフルから放たれた非殺傷ゴム弾が弘樹の頭部を陥没させる勢いで殴打する。無論、その威力は凄まじい。脳出血で軽く死ねるぐらいの威力は持ち合わせているそれを喰らった弘樹は地面を何度も転がりながら動かなくなるまで吹き飛んだ。

『ビューティフォーだ。ソラニン、死体を回収後フォローを入れてくれ、オーバー』

「了解だ。しかし、お前の中のあだ名は既に毒素で決定しているんだな、オーバー」

『大丈夫だ。その毒素込みで愛してくれる人がいるはずだから、オーバー』

「いや、別にそんな話をしているのではないのだが……まあいいか、てかそろそろやめないか？このオーバーて奴」

『確かに面倒だな』

雑談を終えた強はすぐさま、フランの前に躍り出る。

「やあ、失礼。寺子屋に入りたいのかな？」

「え、そつだよ。でも、今は授業中みたい」

「大丈夫さ、此処の先生は優しくてな、君みたいな困っている子の相談ぐらいはのってくれるさ」

「本当？」

「本当さ、俺はアレを回収するから。君は自分の目的を果たせばいい」

颯爽と強は、フ란の前から去り弘樹を回収後そそくさと定位置に戻った。

「……うん、行って見よ！」

フ란は意を決して寺子屋の中へと入って行った。それを見届けた観察者二名と死体一名＋指令部は満足げに頷くのであった。

『さて、弘樹。死ぬ準備は出来たか？』

「いや、あれだよ。凄まじいフ란の萌えオーラに感化されてマトモな考えがキングクリムゾンしてしまった訳で、いやーフ란たんマジかわゆす」

『なら仕方ないな、フ란の魔性の可愛さは万国共通、老若男女問わずに狂わせるからな』

『そうね、私の妹だもの。死刑は、撤回してあげる』

フランという餌に弱い二人。強とシオは内心呆れかえっていたが口には出さないのが最低限度のマナーである。

「てか、あの可愛さをアピールすれば余裕で友達とかできるんじゃないか？」

処罰目標だった弘樹も成功するとは思わず半場ふざけてそんな提案をすると

『そうか！何故考え付かなかったんだ！！』『フレンドールを愛でる会』を作れば万事解決じゃないか！』

弘樹の主張に誠輝が異常に反応。

『それは一体どういうモノなの？』

『名の通り、フランを影から支えて行く団体だ。フランの可愛さをアピールしつつフォローする……これなら友達100人どころか地球の皆が友達だ!』

『それよ! 咲夜、早急に誠輝と案を練り行動に移しなさい! さあ行きなさい誠輝! …! 我が妹の幸福を護るために! …! 指示は私とこの河童が出すわ』

『了解! そうときまれば行くぜ! …!』

『承知いたしました』

その後通信は、途絶えた。色々とただ漏れだったが恐らくテンションが可笑しくなりカオスな空間が出来ていると想像できる。それを聞いていた強は微笑をこぼす。

「お前らの周りは騒がしいな。俺は、ひっそりと暮らしていた方がいいからな」

「中々騒がしい方がいいぜ? 俺らは、どんなに喧しくても五月蠅くても皆が笑顔で入れるならそれでいいんだからな」

「ま、そうだな。笑顔が素敵な美少女ならまたしかり」

「ただの変態集団かと思えばマトモな目標を持つてるのか……こりや、騒がしくなりそうだな」

「ただでさえ、騒がしいのにこれ以上は騒がしくならんたる……多分」

それから数分してから

「やったあ！これで一つめの課題が終わったよ！」

上機嫌のフランが何冊かの本を腋に抱えて出てきた。その結果を見届けた一同は、安堵の息を漏らした。

ちなみに誠輝と咲夜は何処かへ行ったきり帰って来ていない。

「目標が移動するぜ。どうする、追つか？」

弘樹がインカムに向かって次の指令を促す。答えはすぐに返って来た。

『当たり前よ。河童、フランを絶対に見失うなよ。しくじったら此処で処刑だ』

『分かってますよ……………うう、おいて行った事を恨むぞ盟友』

にとりの愚痴が聞こえた気がしたが受信側の一同は、「何か聞こえ

た気がしたがそうでもなかった」と心の中でフィルターをかけた。

その後のフランは順調に事をなした。八百屋では目的の大根を言われた数だけ購入し店主との会話も成立した。

魚屋でも同様に買い物を終了させ、八百屋の店主がサービスしてくれた買い物籠（木製）の中に材料が溜まっていった。

問題があるとすれば、肉屋を出た後の出来事だけだった。

「おい、此処は何時から妖怪がはびこる様になったんだ？」

「妖怪なんてもんがいるから人間がこんな狭っ苦しい場所では生きられねえんだよ」

「……………」

現状を確認するとすれば、何人かのごろつきがフランを囲んで言いたい放題自己主張している。勿論、それを見守る傍観者達が平気な訳はない。

しかし、此処でおおごとを起こせば人里での問題となりフランの立場が危うくなるという不安要素がある所為で見守り隊はふつつとわきあがる感情を殺していた。

『へえ、妖怪相手にこれだけ愚直に慣れる奴らがまだいたのね』

「こういう奴らは何処の世界でもいるモノだ、レミリア。我慢しろよ、此処で動けば全てが台無しだ」

『ええ、志々雄。分かってるわ……だから弘樹をちゃんと止めなさいよ』

「ああ、強が説得兼防壁役を買って出てくれた。まあ、本人もイライラしているようだがな」

ごろつきがフランの周りを取り囲み始めた頃から弘樹は「あいつら死刑ですね分かります」とつぶやきをこぼし飛んで行きそうな所を志々雄の説得と強の物理的防壁により難を逃れているがそれほど

持ちそうもない。

「妖怪の穢ちゃんが買物か？」

「無理に決まってるだろ？妖怪が人間の定めた方法に従う訳がない！」

「わ、私はちゃんとお姉様達に教えてもらった通りに……」

「は！どうせ妖怪のだろうが！そんな奴に教わった方法なんて外道に近い非道なものにちがいねえ！！」

「っ！？」

その発言を聞いた瞬間、フランの中で何かが動いた。決して動いてはいけない何か。フランは、心の中で自問自答を始める。

この人間の汚い発言を黙らせるにはどうすればいいだろうか？

お姉様を侮辱した汚い人間

黙らせるにはどうすればいい？

コワシテシマエバイイ

フランの瞳が狂気に染まる、そう思われた瞬間。

ゴッ！

鈍い音と共に目の前のゴロツキが一人倒れる。我に返ったフランは、直ぐにその状況を確認した。倒れた男の額にはひし形の金属と銀のナイフが刺さっていた。刃引きしてある様だが深々とその男の頭蓋骨に刺さっている。

「だ、誰だ！こんなひでえことしやるやつわ！-」

剥けたごろつきが三流悪役の様な台詞を吐く。すると近くの物陰か

ら二人の人物が現れる。

その人物は、幻想郷では珍しい形のズボンに夏場では絶対着ない様なロングコートを着用している。

もう片方は、これはまた幻想郷では殆ど絶滅危惧種のメイド姿の少女。

ただし、何故か二人とも般若の仮面をかぶっていた。

「ふん、外道め。幼き外見の妖怪をいびり倒そうとするとかあれですか？あんなら弱そうな妖怪にしか絡めないタイプの小心者の集まりか？」

「見た所そうですわ。肝が小さい男だけでしょう」

するとリーダー格の大柄な男が前に出てくる。表情から察するに侮辱された事が腹立たしかったのだろう。

「見た所、ガキと女じゃねえか！変な被り者しやがってブッ飛ばされたくなけりゃ、とっと失せやがれ！」

「おっとこいつはとんだ小物だな。なあ、お前ら」

般若面を被った少年と思しき人物は何処から出したのか同じ般若面を三つ誰かが居そうな場所へと放り投げた。すると……

「ああそつだ。ましてや幼女を、脅すような輩は極刑に処すべし……くせえ！こいつはゲロ以下の臭いがぷんぷんしやがる！！」

「全くだ。子供を傷つけるのは、宜しくない。寧ろ、導くのが大人の使命の筈だ。それをないがしろにするとは言語道断」

「今の発言で俺の中の感情がエクストリームしたぜ！」

般若面を被った戦士が三人ほど追加された。

「奇怪な格好の連中め、お前らも人間なら妖怪なんてもんにくみせず……『じきやー！』」

世紀末ヘヤーの男に凄く尖った岩が投石され顔面を撃ちぬくと同時に意識を刈り取った。

「お前らに発言権を与えた覚えはない。だが、俺たちが誰かを冥土の土産に教えてやろう！！！」

五人の般若が一斉に立ち位置に着くとコートの般若もとい誠輝が魂の叫びと共に…

「血なまぐさいの戦場で駆け巡る男！レッド般若！！」

あらぶる鷹のポーズを取る誠輝。

「メイド・イン・ヘブン状態！シルバー般若！！」

腕を組み、もたれかかる様にしてその場で停止する咲夜。

「全てを拳において肅清するモノ！ブルー般若！！」

拳を力強く突き出す強。

「野を超え山を砕き天の道をつかさどるハードボイルド！ブラック般若！！！」

重厚なガングレイドを担ぐ志々雄。

[illegible]

空を仰ぎ悪役の様な笑い声をあげる弘樹。何故か彼の般若面だけが虹色に輝き後光が神々しさを發揮した。

「俺達（私たち）、五人そろって怒髪天戦隊『ハンニャンダー』」

彼らの背後が爆発……したような気がした。

賑わっていた筈の人里が一瞬にして凍結。静寂の世界が訪れる、聞こえるのは木々のざわめきと小鳥のさえずりぐらいである。

数ある中の頂点に君臨する神様は思いました。

『どげんかせんにゃあかん』

「ハッ！？て、てめえらふざけた事しやがって……お前らやつちまえ……？」

ごろつきの頭はこの時、初めて気付いた。戦いはもう始まっていた事に……

「去ねやハゲエエエエ！！！」

「ぐぼっ！？」

誠輝の回し蹴りがハゲた男の鳩尾にヒットする。

「くたばれやハゲエエエエエ！！！」

「げふっ！？」

弘樹のシングルアクションアーミーが連続で弾を排出する。恐らく弾幕仕様なので死にません……多分。

「なんだか分からんが悔い改めろ！ハゲた奴」

「もうやめえ……げはっ！？」

強の何よりも思い拳がハゲを頭から地面に突き刺す。更にとばかりに志々雄が出力を最大限にまで引き上げたガンブレイドの矛先をハゲに向ける。

「姫様の艶々なロングには夢と希望と男のロマンが宿っているんだ
AAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

巨大な爆発と共に砂煙が立ちこめる。それが晴れる頃にはハゲの姿は、どこにもなかった。推測だが彼は悪い事をした事を悔いて神様に会いに行ったんだろうと誰もが思った。そう、ハゲはお星様になったんだ。これを聞いている皆、日の出に上がる太陽の光があいつなんだと思ってくれと誠輝たちは想いを馳せたのだった。

「いやいやいや!!!!?てめえら人の子分を増分にブツ飛ばしておいて聖人君主みたいな慈愛の眼差しで天を仰ぐのを止めるおおおお!!!!!!」

「なんだ、熊みたいに巨体を持ちながらいざとなったら役に立たないリーダー格だと思われる男A」

「長いわ!畜生、てめえらの流れに乘せられたら殺られる!だがな、こいつをみる!!!!!!」

「きゃっ!?!」

太腕で未だ自体を飲み込めていないフランを抱き寄せ、喉元に太めのナイフを突き付ける。困った悪役が一番確立の高い行動であるが今回は分が悪すぎた。

「「「……………」」」

黙りこむレッド、ブルー、レインボー。

「やっちゃったな」

「見たいね、例の先生に人里を隠してもらっ様に言って来るわ」

ブラックとシルバーはこれから始まる事を経験を生かした把握能力で打開策を投じた。

「な、何がしたいんだてめえらわ！！！」

事情を理解できない熊男は怒号を飛ばすが前方にいる三人は、虚ろな目で一点を集中している。熊男が持っているナイフとそこに捕まっている人質を

「やれやれだわ、慧音が頭の切れる先生で助かりましたわ。状況を今一理解していなくても行動に移してくれました」

「やったな、これで人里にダメージは無い」

瞬時に消えたシルバーが直ぐに戻って来る。同時に周りの風景が一変、賑わっていた人里が消えうせそこには広野が広がっているだけだった。そして訳の分からない事が多く起こり脳の整理が出来なくなった熊男は周りをきよろきよろと子分達と見回していた。

「はあ、全く自分のした最大の過ちに気付いていませんわね、これだけは言えます。」

「貴方は、選択肢を間違えた」

直後、熊男の周りにいた子分がまるで見えない風にさらわれるように吹き飛んだ。理解力の要領を超えた状況に脳がオーバーヒートした熊男はただ茫然とその成り行きを見守るしか出来ない。当の本人であるフランはというと全くとも動じず見なれた格好の般若達を見つめていた。

「我、怒り……頂点に至り」

誠輝がメリケンサックを懐から取り出し右拳に装着する。

「汝、我らが乙女に牙をむけるか」

静かなる怒りをあらわにする強。

「愚かなる行為を……死して悔いるがいい！！！」

辛辣な怒声と共に謎の波動にて衝撃波を放つ弘樹。

三人の瞳に怒り、憎悪の眼光が灯る。そして彼らは動き出すのだ。

「ヒィハアアアアア！！！！！！この糞ボケがあああ！！！！全国の妹ファンの皆さまを敵に回したぞこらああ！！！！」

マグナム級のストレートが熊男の顔面に炸裂。あまりの威力に男の拘束が外れる。初めからスタンバイしていたシルバーがフランを抱きかかえ戦線離脱を行う。

「にしてもおおおお！！お前、フランを抱きかかえていたなあああ！！！！肌に触れていたなあああ！！！！柔らかかったか？すべすべしたかああ？良い匂いでもしましたかああああああ！！！！！！！！！！ががががががががべべべべべべべ！！！！」

フルスロットル全開のレッドは、人間と言う身体の限界を超越しきった乱打を熊男の身体にうちつける。無論、一撃一撃の威力は神をも屠る。一発ずつの威力が高い所為で熊男の身体がめりめりと音を立てながら地面に陥没して行く。

「いや、お前それは全部私怨だろう？」

冷静にツツコミを入れるブラックだが勿論、怒れる（イカレテル）レッドには届かなかった。

『うんうん、そうだね。て、レミリア嬢！？無言で壁をぶち抜くのは止めて……！』

『黙れ河童！私だってフランに触った事が数えるほどしかないのだぞ……！』

「やれやれだな。あっちでもこっちでもやっていることは五十歩百歩か」

「ブルウウウウ……！！パスだアアアア……！！！！」

「任せろ、貴様は妖怪とはいえ幼き子供に牙をむいた。それだけで罪は重いとしれ！」

勢いよく地面から熊男を持ちあげるレッドが巨体をまるでサッカーボールのように蹴り飛ばしブルーがそれを片手で止める。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「!!」

普段、さわやかな雰囲気を持つ強だがここぞとばかりに拳と足技を使つて相手が丁度倒れない様に調整しひたすら殴りけり続ける。

「最後の処遇はお前に任せるぞ」

「当り前だこん畜生!!今の俺はなああ、非常に頭に来ているんだよ!そしてこのナイフはああ、うおおお!このナイフはッ!!このナイフはお前がフランに突きたてようとしたナイフだあ!!!!」

落ちて行つたナイフを、拾い上げまるでシュレッダーに入れた用紙のように粉々に砕いてしまう。この状況下で偶然にも引き起こされた弘樹の新たなスタイル『断罪者モード』である。発動条件は、他の三つとは違い、ロリに対しての接触はほぼ皆無。熊男がとつた愚行により弘樹の怒りが有頂天に至つた為に起こつた状況。純粹な怒りがロリへの想いと混合されて初めてなれる最凶モードである。

「いえええあああががががぼろくそがしねくごがががががががぎこ！！！！！」

奇声をあげる弘樹は、乱舞している強と交代し熊男にむかつて下段から胸部に一直線に蹴りを入れるとともに華麗に宙返りを決め込む、所謂サマーソルトである。だが、弘樹はこのモーションの中にもう一つ技を兼ねている。地面の土を踏む前に空中で身体を反転させた弘樹はそのまま熊男の顔に…

「貴様の処遇を言い渡す！！判決

死刑！！！！」

踵をねじ込んだのである。通称、ネリチャギ。ブーツなどの踵で顔を強打する。つまりかかと落としである。幸か不幸なのか熊男の意識は既に無い為に痛みを感じることは無かった。

「お前はロリと言うのなの穢れ無き少女に触れた。それはこの世のどんな罪よりも重い」

人体が受けきることのできないダメージを負った熊男はその巨体を地に伏せたのであった。顔を血に染め粗悪だが揃っていた歯は殆ど抜け落ち原型をとどめていない服装。外の世界で言えば、病院送りレベルの重症だった。

「カッコいい感じでしめているがカッコ悪いな」

ブラックより冷静なツツコミが入るがお構いなし。

「まあそれよりも、フラじゃなかったお譲ちゃん怪我はないか？」

締めくくらんばかりに誠輝が他人を装ってフランと接する。

「え、うん。大丈夫だったよ、でもあのぐらいの人間なら助けられなくても……」

「追い払えた？確かにブツ飛ばせばよかった。しかし、此処は人里。人間通しのいざこざなら兎も角、さっきの様な妖怪を宜しく思わない輩だったら悪評を流すだろうな」

「そうですね。人の噂はとても怖いモノです。根も葉もないことを流されれば近くにある紅魔館（大破してますが）などにも人間が攻めてくる可能性が出てきます」

その言葉に息をのむフラン。姉の事をバカにされた時に自分がやろうとした事を思い出した。

コワシテシマエバイイ

「心当たりがあるようですな」

不安げなフランの頭をなでる誠輝。すると志々雄が寄って来て

「いいか？大いなる力にはそれだけの代償がつきものだ。君にはまだ、頼れる家族が居るはずだろう？君を受け入れてくれる家族が居る筈だ」

「うん、いるよ……」

「だったら頼るんだ。自分の力に溺れぬように一緒に強くなればいい」

「……で、でもお姉様は手伝ってくれるかな？」

「きっと大丈夫さ、君が思う以上にお姉さんは君の事を大切に想ってくれている」

「本当？」

「本当さ、俺は嘘はつかない。ま、偶にデタラメは教えるけど……これだけは言えるんだ。絆ってもんは、見えないからこそ強く結ばれてるんだ」

「じゃ、じゃあ！お姉様は、私と一緒に遊んでくれるかな？力になってくれるかな！」

「勿論だとも……だろ？」

遠くの方で聞いている姉に向かってひっそりと呟く。聞こえたのか聞こえてないのかレミリアからの返信は無い。

「ここでのやり残しはないかい？」

「うん！でも、何んで貴方達は私を助けてくれたの？」

「それはな、俺たちがヒーローだからさ！ヒーローは、万国共通よ
い子の味方なんだからな！」

サムズアップする志々雄。こうしてフランの初めてのお使い大作戦
は幕を閉じるのであった。

ちなみに以下、フランが帰った後の会話

「おい、シオ！さりと出てきたから突っ込めなかったが、何で前が綺麗にまとめてんだよ！」

「そうだそうだ！！ロリは俺の配分だろうが！！！！」

「喧しい！妹は俺のもんだ！！！渡す訳にはいかねえ、故に決着をつけようじゃねえか！」

「いいだろう、誠輝。決着がつかなかったあの日の再戦だな」

「かかって来いよ！武器何か捨ててかかって来い！！！」

「RPG構えている奴が言う台詞じゃねえだろうが！！唸れ、俺のリボルバーああああ！！！！」

「おいおい、戦闘が始まっちゃったぞ」

「強、気にする事はない。奴らは互いの存続をかけて戦っている訳でもないんだ。死人はでないさ、多分」

「見逃せない語尾が浮上しましたが？妹様がログハウス（紅魔館・仮）に着きましたわ」

「じゃあそろそろ、人里も戻るだろうし帰りますか？」

「あの二人はどうする？」

「十二分に気が済むまでやらせるのがいい。意地があんだよ……男

の子には!」

「成程な、ああやって切磋琢磨する訳か」

「殿方の趣向は分かりかねませんね」

「さあてね、理屈じゃ動かないのさ俺らは……今日もいい天気だよ、平和ボケには丁度いい」

何だかんだで幻想郷は、何時も通り平和だったそうなの。

フランのお使い！part HEAVEN！（後書き）

誠輝

「お詫び申し上げます」

弘樹

「三か月も放置して」

志々雄

「すみまあああああせんでした！！！」

上海ニート

「社会人って疲れるね。引きこもっていいですか？」

誠輝・弘樹・志々雄

「「「数ある中で引きこもりはいるが、ただし貴様は駄目だ！！！」」

」

商いは難しい！芸術は爆発ぜよ！！（前書き）

心労により可笑しくなりつつある上海ニートです。

PCのモニタが謎の赤いノイズを発して画面が映らなかった為に死んでました。

PS：アーモンドチョコは凶器です。むやみやたらに丸のみすると作者みたいに喉に詰まらせて窒息まがいの状況に陥ります。用法と常識範疇を護って楽しく食べましょう

あらすじ

- ・フランちゃんふひひ
- ・怒髪天戦隊
- ・ひたすら地獄コンボ

タグ

『星蓮船編が始まるよ』

『ファイナル！』

『ざる蕎麦！！』

『アゲルファンタスティック！！！！』

商いは難しい！芸術は爆発ぜよ！！

【誠輝 side】 in 人里

「ふい、ざっとこんなもんか」

「ざるそば一丁！！！」

「熱っ！？シオ、熱湯飛んでる！！！」

やあ、世界の淑女紳士諸君こんにちは。紳士こと誠輝だ。今現在、悪友二人と蕎麦屋にバイトもとい短期に雇って貰っている。一応香霖堂で働く俺だが、前の紅魔館破壊事件により色々と出費が加算され更には『フランドールを愛でる会』を作るにあたって資金が不足した。

「ファイナル！」「ざる蕎麦！！！」

「「アゲールファンタスティック！！！！！」」

ファイナルざる蕎麦アゲールファンタスティックとは、名の通りた

だ蕎麦をむやみやたらに上げ下げするだけの行為。無駄に等しく熱湯から上げ下げする為に周りに熱いお湯の粒が四散して迷惑極まりない技である。

と、それでもいい。現在の状況を報告しなければ……つまり、決定的な資金不足を補うために適当な場所で働き金を稼ぎフランの為に使う……と言う訳だ。

おい、誰だ。フランに貢いでるだろとか余計なツツコミを入れた愚かものわ……！

「うおおおお……！ライジング水切りチョップうううう……！熱い……！ヒリヒリする……！気持ちいいの三拍子がそろった最強究極奥義だあああああ……！」

「ザ・ロリータワールド……！萌えは加速する……！！」

ライジング水切りチョップとは、どMだけが使えると言われている50度を超える湯の中に盛大にチョップをかまし水を切るという荒技である。と言うか、俺に熱湯がかかって熱いんだが？

で、弘樹の『ザ・ロリータワールド』とはまあ……ロリータバースト状態を腕のみに集中させて放つと言うロリコン技の一つで盛大な名前の割には範囲が腕のみという残念さが目立つ。効果は、強靱で力のある拳を作りだすことが出来る……ロリ容姿を持つ女の子を見かけたときだけだ。しかし、勢いよく拳を鍋の中に突っ込むから俺に湯が降って来て熱い。

「俺たちの拳が真つ赤に燃える！！！」「蕎麦を上げると轟き叫ぶ
うううう！！！」

「ばああああくねっ！！！！ゴチユウモンハコチラノソバデス
カ、イラツシャイマセエエエ破あああああ！！！！！！！」

馬鹿が謎のオーラを発して拳を鍋にぶつけるモノだから鍋が爆発し
てお湯が飛び散り周りの調理器具が飛び散る。しかも、不幸な事に
大半の調理器具や熱湯は俺に命中すると言う鬼才もびっくりなイベ
ントが発生する。

勿論、普通の人間である俺は勢いよく飛んできた中華鍋を頭部に食
らった訳で悶絶。

ぶちっ

何やら切れてはいけない様なモノが切れた様な気がするがさっきま
での痛みが一変、馬鹿二人に殺意が何倍にも膨れ上がる代わりに痛
覚が無くなったかのように頭部の痛みが消え去ったのだ。

「こんのおおお、馬鹿どもがああああ！……！……バルザック
オルティブギブレイズ！……！！」

「ぎゃあああ……！！」

「いてえええ……！！でも、癖になる……！！」

バルザックオルティブギブレイズとは、人体では不可能な方向に
両腕を曲げ、更に追い打ちに地面に顔面をこすりつけ何メートルか
引きずりまわすと言うサディステックをある程度極めたものしか使
えないドS技である。

追伸、今の攻撃で蕎麦屋の床が抜けた。

結果、バイトをたったの五分で首になった。

世知辛いね、というか殆ど馬鹿二名の所為だが気にしない。こんな細かいこと気にしているようなら禿げるだろう。もれなく五年後に禿げるな、弘樹。何故、弘樹をピックアップしたかって？あいつの親類の男性がほぼハゲで構成されているからである。南無……『ああ、時の流れは残酷だ』と言っているロリコンの顔が目につく。

「あー、バイト首になる最短記録更新だな。馬鹿二名のおかげで大惨事だぜ」

「えー、最後は誠輝の所為だろ？床ぶち壊したのお前じゃん！」

「もう一度鎮静させようか？大丈夫だ、今度はドMになるほどの衝撃ではった押すから」

「全力で遠慮するわ、しかし……ロリが多いな、流石人里……vi
va!!」

そんな訳で当て所もなく狭いようで意外と広い人里を練り歩く。何だかんだで幻想郷の人（？）達には助けてもらっている為にたまにはお礼をしなければならぬ気がする様でない様な……まあ人道的にはお礼はする方向で考えている。

おい、誰だ！！改心したのかとか余計なツツコミを心に秘めている奴は！！てめえの家にステインガーミサイル打ち込んでホームレスにするぞ！！

「お、こいつは珍しいな。誠輝たちがそろそろ歩いてるなんて」

「ん？ああ、魔理沙か」

「おいーす！」

「お久しぶりと言っておこうか」

声をかけてきたのは、普通の魔法使いこと魔理沙だった。人里にいる所から推測するに何か探し物でもしていたのかもしれない。

「こんな所で何をやってるんだ？」

「まあ、賃金を稼いでも言っておこう。今しがた解雇されたがね」

「あれは仕方がなかったんや」

「は、はは……また何か破壊したのか？」

「「「そのとおりでございます」「」「」

他愛のない話を続けていると魔理沙の口から色々と情報が得られた。この頃、霊夢が金欠故に宝を探しに行ったらしい。で、御丁寧に丁度古ぼけた船が飛んでいると言う噂があるとかどうとか。

これらを通して俺らが審議した所、一つの仮定が産まれた。

『宝船とか……星蓮船きたこれ！！！』

「よし、魔理沙！その古ぼけた船を捜しに行くぞ！！もしかしたら、

珍しい宝とかを収容しているかもしれない!!」

「珍しい宝か、面白そうなモノとかあるかもしれないな。行ってみる価値はありそうだぜ」

「だろ！よし、そうと決まれば行動あるのみ！！宝船が俺を呼んでるぜ！！！！」

「待てゐ！！！」

「ぐべっ！？く、首が……」

テンションが高くなったシオを制御する為に襟首を掴むと思ったよりも首にシャツが食い込んだようだ。しかし、何となくだが薄笑いが出てる所でDMが発動していると思える。

「シオ、空飛ぶ船を飛べない俺らがどうやって探すんだ？」

「大丈夫だ！俺は飛べるから！！！」

「人間やめたなこん畜生！！！」

「ぶげらっ！？」

空を飛べるようになったシオを腰のひねりと体重を乗せた右フックで地面にたたき込み打開策を講じる。飛べそうなのは、シオと魔理沙。弘樹に関しては、ロリ関係以外ではあまり期待できない。俺は、変な妖怪に寄生されているがベースは人間だから飛ぶなんて無理だ。

「というか一々飛んでる船に乗り込むより落としてから潜入した方が速くないか？まじ、合理的」

「悪魔か！そんな事したらナズーリンとかナズーリンとかナズーリンとかナズーリンとかが怪我するだろうが……！」

「他は良いのか、他の乗員は……まあこれは最後の手段としてとっておく」

「物騒な話だな。でも、話によれば宝船って奴は巨大な船と聞いたぜ？どうやって撃ち落とすんだ？私のマスタースパークでなら落ちそうだが……さっきから気になってたんだが、その背中の機械みたいなものはなんなんだぜ？」

「あ、これ？霖之助店長とにとりによる合作兵器『魔力探知型ジャベリン』だ。対空兵器やら装甲車を破壊するジャベリンだが……幻想郷では無意味に等しいので魔力や異質なオーラなどをサーチ出来るように改造してもらったのさ」

背中にある筒状の破壊兵器に目を向ける。シオと弘樹が『またそん

な物騒な武器を作りやがって』と非難がましい視線をぶつけてくるが基本的に無視。質問してきた当の本人はと言うと、凄く興味深そうにジャベリンを見ていた。欲しいとか言いださないよな？あげないぞ？

「なあ、アレ見てみな。噂をすればなんとやらだぜ。鴨がネギをしょってきたとも言ってたか？何にせよ、標的発見だぜ！」

魔理沙が声をあげ、指を指し示す。その方角には、何処かオンボロでまるでおとし話に出てきそうな古い木製の船が浮かんでいた。俺は、すぐさまジャベリンを肩に担ぎサーチした。勿論、撃ち落とすつもりはない。サーチする事によりそれが本当に宝船なのかを知るためのさ。

ピピ！という機械音の後、ジャベリンに搭載されているモニターに宝船がロックされ赤い枠で覆われる。待ちがいなく異質なオーラ又は魔力を帯びている物体。

「ああ、魔理沙。本物の様だが……どうやって行く？」

「それは、私が筈で……」

「」「俺らは？」「」

「……………頑張ればいつか辿り着くと思っぜ」

「『投げやりだ！！！！』」

シオは兎も角、俺と弘樹を乗せて飛ぶのは重量オーバーらしく目を逸らす魔理沙。うむ、仕方がない……早くも最終手段に出よう。

「ファイヤー
発射」

「『ええっ！！！！？』」

ぼしゅーっと煙をあげミサイルが直角に飛びあがり宝船目掛けて飛んで行く。撃ち落とさないとはいったが撃たないとは誰も言っていない。

ドン

まあ見事に直撃した。黒煙をあげ若干、高度が下がる宝船。船倉にぶち当たったのかふらふらと危なげな動きをしている。目の錯覚なのか、直後に赤と白の人物と緑と白の人物が船に乗り込んだ気がするが……恐らくマ　オトル　ージだと思う。

「さて、シオ。俺を乗せてfly high!しろ」

「あ、ああ!!分かったぜ、S I S I O……出る!!」

黄金の翼を背中から発生させたシオに飛び乗る。いつの間にか魔理沙は、箒に乗り飛ばうとしていたが下から弘樹が負けじと乗り込み柄の部分で懸垂をするという地味に凄いパフォーマンスを見せてくれた。

さて……今回も面白い事が起こりそうだ。

半場過ぎ去りし夏の空を俺たちは、思うがままに駆けるのであった。

商いは難しい！芸術は爆発せよ！！（後書き）

誠輝

「fly……high……！！」

弘樹

「1に懸垂、2に懸垂……3、4がなくとも5でロリータバースト
！！！！」

志々雄

「雄々しく飛ぶのが勇者の役目だ！！！！」

おいでませ、星蓮船（前書き）

・星蓮船編突入

タゲ

『何時にもましてテンション割高』

『俺がガンダ だあああ！！！！』

大変長らくお待たせしました。心の病気（怠け）からどうにか復帰した上海ニートです。どうにか続けて行こうと思うので生温かく見守ってください。ただし志々雄には絶対零度の視線をお願いします

おいでませ、星蓮船

【魔理沙 side】 in 星蓮船付近の空

参ったぜ、まさか例の宝船の話をしてたら実物とぶつかるとは思わなかったぜ。噂をすればなんとやらとはこの事に違いないぜ。

実際の所は、霊夢にも内緒で行こうと思ってたんだが何となくだがお宝の臭いがするんだぜ。

まあ、ミスと言えばこの変人三人組と行動を共にする事になった事だな。

仕方なくだが弘樹を運ぶことは了承したんだが、何でこいつは懸垂してるんだよ？ 箒が揺れてバランスが取りにくいからやめてほしいんだぜ。しかし、何故か真剣そのものだからやめてほしいと言いつらいんだ。

「おっ、なんだあれ？ネズミか」

「ん、あれは！？ナズーリンじゃないか！！！！イヤホオオオオオオオ！！！！テンション上がりまくりだああああああ！！！！」

「喧しい奴だな。なんか偉く怒ってる気がするんだが？」

前方から来るネズミはやけに苛立っているようで不機嫌そうな顔つきで私達の前で止まる。

「君達かい、うちの船に問答無用で攻撃を仕掛けてきた人間たちわ
！」

「達じゃないぜ、攻撃を仕掛けたのはこいつだ」

さつと誠輝に向かって指を向けると張本人は顔ごと目を逸らした。
あざとい奴だな。

「ま、あれは本気で撃ち落とすつもりはない攻撃だからな。強いて
言うなら威嚇射撃だな」

「威嚇なら当てないだろ！！おかげで墜落しかけたんだぞ！！もし墜落していたらどうするつもりだったのさ！！！」

「だから言っただろ？威嚇レベルだと……俺が本気ならあの船は跡形もなくなるさ。そう！！紅魔館の二の舞にな！！！」

「紅魔館を破壊したのはお前らだったのな。ま、こっちはおかげで図書館の本を借りたい放題できるから感謝してるぜ」

「良いつて事よ」

「いやー本当に助かるぜ。あのメイドと門番がレミリアとフランに付きっ切りになるおかげで大図書館にはパチュリーと小悪魔しかいないからいつもよりさつと借りれるぜ。」

「勿論返すつもりだぜ？ただし、死ぬまで借りるがな。」

「くそつ、まるでこっちの話が通じてないみたいじゃないか。人間は、昔から何一つ変わらないね。あの時だってこちら話を一切聞かなかった。もういい、私の子鼠は食欲を抑えきれない様でね、悪いけど餌食になってもらうよ」

「ふむ、何か訳ありの様だが……こんな所で終わる霧雨魔理沙様じゃないぜ！！！」

高らかに宣言し私は、八卦炉を取りだす。片手で箒でぶら下がりながら弘樹も自前の拳銃と言う外の武器を取りだす。本人に確認したところ、弾は入っていないから危害を加えることはできないが弾幕を撃てるようになってからかなり多用しているとの事だ。

うーむ、弾幕を撃てる武器か……ちょっとばかり借りて調べられないか聞いてみるのもありかもしれない。

「よし、シオ。此処は、魔理沙& a m p・弘樹に任せて俺たちは100歩先を行こうか」

「ふつ、そうだな。我が永遠のライバルよ!!!俺たちは先に船へと向かう……この程度の敵を前に戦死など滑稽な結末だけにはなってくれるなよ!!! H A H A H A H A H A」

「シオ、何かやたらテンションが可笑しくねえか？」

「ふふ、実は……昨日姫様に罵ってもらったんだ」

きらりと舌を出しながら笑う志々雄。うん、何だ？この場にいる志々雄以外の心に連帯感と共鳴が産まれた気がするぜ。なので私は全力で叫ぶ事にしたのさ。

「「「へ、変態だあああああああああ！！！！！！」
「「「」

あろうことか、敵であるネズミからも指摘を受ける志々雄だが喜々としてネズミの妖怪を通り過ぎて行く。

……………？

「もしかしてこれは、出し抜かれたという奴ではないのだろうか？」

「そうだな。恐らく誠輝の策略だろうなあ……………どうする？この口リッ娘を倒すのは凄く心が痛むが……………足手まといにだけはなりたくないしな」

「ふん、選択肢は一択しかないぜ。全力で吹き飛ばして遅れた分を取り返すのさ」

「結構簡単に言ってくれるね。それでも妖怪の端くれ……………ただの人間に勝ち目はないよ」

とこの妖怪は偉そうな口を叩くが、まあこの頃出てきた新参者だし

な。奇人変態三人組の一人である弘樹の実力を知る術は無いか。ま、私の実力も負けては無いぜ。

「行くぜ！！恋符【マスタースパーク】」

「悪いが全力で通らせて貰う！大丈夫だ、看病は付きっ切りで24時間、トウエンティーフォーでオールタイムサービスしてやるわ！！！」

【志々雄side】in 星蓮船付近

「やれやれ、出し抜いたのは良いがまさか……スンド使いに出くわすとはな」

「全くだ。これもそれもシオ、お前がスタド使いだからだろ？」

「いや、俺は科学者隊の一員だ」

「おい、ガツチャンはタツノコにお戻りください」

魔理沙と弘樹を追い抜いたのはいいが、どうやら星蓮船の負傷により各地で色々と飛宝を集めていたメンバーが帰ってきたみたいだ。

「スンド使いと言うのが何か知りませんが……私はそんな特殊な存在ではありません。それにあの船を狙うモノが人間であろうと妖精であろうと妖怪であっても賊には変わりなし！！問答無用で叩き潰します」

背後に現れる巨大な雲、ただ特例として拳を握った様な形の雲だ。
まあ、これはキャラクターを知っている俺達に言わせれば単純明白
なのだが。

雲居一輪と雲山……フードというか頭巾をかぶっている女性が一輪、
で見えにくい雲で出来ている頑固一徹親父が雲山。雲山は、入道
という妖怪に分類されるから掴みどころがないというか普通の人間
には見えないのかもしれない。

「ああ、めんどい。あの雲のおっさんの方は気体だから爆撃出来な
いから……いたしかたないからしょうがないよな？あちらの女性を
狙っても」

「うわ、誠輝。その台詞を気持ち悪い笑顔で言われても説得力に欠
けるぜ」

俺の背中に捕まっている誠輝は、心底楽しそうであってまるで悪魔
のように不気味に頬を釣り上げていた。どうしようか、俺も大概だ
と言われるがこの友人もヤバイ。

「ああ、そうだ。誠輝、此処に来るまでに拾ったこのUFOを見せ
れば、通してもらえるんじゃないのか？」

「ああ！？それじゃ、俺が戦闘を楽しめないだろうが……！」

「それが本音な。だが、俺が浮いていられる時間は残り……五分ぐらいだな」

「はぁ！？何でそんなに消費してんだよ！！もっと頑張れよ！！
！お前男だろ？」

「この身体がな、永琳の改造手術に間に合ってなくてな。性能を100%出しきれないのさ、それに姫様いないしな」

「ちつ、なら殺す（ばら）しかないな。俺のとおき出来れば温存しておきたかったが……」

といい誠輝は腰に差している虎徹に手を伸ばす。確かあれば、真剣だったな……此処が元の世界なら銃刀法違反で捕まるだろうが幻想郷はそんな悪事も含めて受け入れるそうだ。

「ふふ、虎徹……否、地底の一件で頂いた鬼の角を合成し新しくなった我が最強の一振りをとくとみよ！！！」

鞘から刀身を振り抜いた瞬間、眩しい光が貫ける。誠輝が抜いたそれは、何時もの虎徹とは違い、白銀の刃は青々と輝いており……そう、蒼色に等しい色合いを醸し出している。

それと同時に刀身と同色のパルスが迸る。なんだろうか、某クライミングが得意な電気男を思い出してしまった。

「ふははははは、最高にhighって奴だアアアア！！！！ナズーリンは、人間が変わっていないと言っていたがそれは違うぞ！！人間は変わったのだ！！！！より邪悪な方へとなああああ」

「お前もつ、暗黒面に堕ちた黒い仮面騎士でよくね？主人公よりラスボスの方が似合いそうだ」

「人間の身でありながら妖怪の力すら使う。成程、確かに人間は進化したようですが……それでも此処を通す訳にはいきません！！！！さあ、かかって来なさい」

「やれやれだぜ、悪いがお譲さん。俺たちは此処を進まないといかないんでな、悪いが通してもらっぜ」

そうやって【ガンブレード】を装備する。今の俺は、ただ一つの事だけに集中することにしたよ。ハードボイルド道を突き通すことああああ！！！！

「S I S I O……出る！！俺がガン ムだああああああ！！
！！」

「見せてやるよ新型の実力を！！虎徹改め蒼天剣の実力をなああ
あ！！！！！！これが俺とシオの厨二病の結束力だあああ！！！！
！！」

おいでませ、星蓮船（後書き）

誠輝

「悪・即・爆！！！」

弘樹

「ごめんよ、ナズーリン。僕かあもう……衝動を止められないんだ
ああああ」

志々雄

「いざ！新世界を求めて挑み続ける事が全てさ！！！！」

久々の投稿になります。この頃、新作のゲームやらなんやらが出過ぎたおかげで全くできませんでした。それ＋PCの不調＋配線仕事でやたら復帰に時間がかかってしまったんです。

さて良い訳は置いとして更新をとぎらせ内容に一週間に最低一回、良くて二回のペースで始めてみますね。守れるかは別として

右よし左よし……安全圏無しと、ヤバクネ？（前書き）

あらずじ

- ・星蓮船編突入し宝船崩壊近し
- ・ナズーリン可愛いよ
- ・雲山はスンド

タグ

『人外ルート一直線』

『時間は俺の物だ！！！！』

『ガンダム？いいえ、ハードボイルドです』

右よし左よし……安全圏無しと、ヤバクネ？

【志々雄side】in 星蓮船付近

「うおおおおお、滅びのバースト トリーム!!!!!!!!!!」

「粉碎 玉碎 大喝采!!!!!!!!!!」

「この人間強い！」

誠輝の雷撃と俺のハードボイルド砲（姫様の愛120%増量中）が一輪の弾幕を蹴散らして突き進む。弾幕ごっこ（？）を初めてから早二分弱、俺の飛行できる時間はごくわずか……元々、永琳に改造されたのは肉体ではあるが構築は殆ど人間と同じだ。その中に一部だけギミックを入れ込む事により俺は人智を凌駕するほどの力を発揮できるエネルギー源は姫様の愛。

飛行ユニットと攻撃ユニットは、別々のエネルギータンクを使っているからどれだけ攻撃しようが行き成り落ちたりはしない。蓄えてある輝夜love and 俺DMエネルギー（次からLAMと略す）は、loveエネルギーを攻撃へ、ダメージエネルギーを身体

能力強化に回しているのだ。

飛行は、エネルギーを常時放出状態にする為ダメージを受けないと直ぐに空っぽになるが俺の背には腐れ縁だが友人が乗っているが故に下手な攻撃を喰らう事は出来ない。

「シオ、限界まだ後何分だ！」

「もって後三分だぜ。次の一撃で決めるか誠輝を星蓮船に移すかしないと彼女を傷つけるだけになる。それは俺にとって最悪の状況だぜ」

「……………船まで肉眼で見積もっても200メートル弱か。飛んで行かない限り不可能だな」

「焦ってるな。表情が硬いぜ」

「はっ！男と心中なんて嫌だからな、それに計画始動の為俺たちは負けれない」

時間がない為か誠輝の表情が険しい。珍しく焦っているのか脂汗が滴り落ちる……この炎天下の中、テンションをあげすぎて予想以上に体力を消耗したな。

「雲山、撃って出ますよ」

「シオ！スタ ド攻撃来るぞ！！！」

「俺の回避性能を舐めるな！！！トラ ザム」

強大な拳が目の前を通り過ぎる。だが飛行スピードの方が雲山の拳よりも勝っている、これなら避けれるな。

「シオ、雲山の攻撃が済み次第、星蓮船へ全速力だ。100メートルを切った所で俺を投げろ、流石にこれ以上お荷物なのはごめんだ」

「気付いてたのか、動力源のシステムに」

「何年、馬鹿していると思っている！お前の原動力は、輝夜愛かマゾヒズムしかないだろ」

これは素直に喜ぶべきなのか変態として罵倒されたと取るべきか迷うが、まあ前者にして置くぜ。と言う間に雲仙の攻撃がぴたりとやむ。俺と誠輝は目を合わせタイミングを計った。

そして

「全速 前進DA!!!」

「唸れえええ!!!!!!」

「くっ、特攻!? 雲山!」

弾幕を作り俺たちを落とそうとする。敵から見れば特攻を仕掛けているようにしか見えない、だが本当の目論見は違う。特攻と見せかけた起死回生策、俺は傷付けば傷付くほどにエネルギーと気力がたまる。後は、ご覧の通り……脇を抜けて素通りさ。

「逃げた?……まさか!？」

「おしっ! シオ、殺れ!!!! じゃない投げる!!!!」

「そおiiiiiiii!!!!!!」

背中に乗っている誠輝を力の限りぶん投げる。これが俺たちの策だ、誠輝お前にお宝は任せる！此処は俺に任せて行つて来い！！！！

「ぎゃふう！？」

「えー」

「…………アカン、後で殺されるぜよ」

力の限りを尽くしたのは良いが…………案の定力の制御を見余ったのか誠輝は、星蓮船のマスト部分に激突。そのまま、甲板に落下するという事態になってしまったぜ。マジで逝くとは思わなんだ。

…………やり過ぎちゃったんだＺＥ

「ま、まあポジティブシンキングだ。下に落ちて落下しするよりはマシだと思ってくれるし万が一処刑されそうになっても痛みは友達！！怖くないの精神で行こうじゃないか！！！」

どうにか自分を納得させる。

「最早、恐れるモノなど何もない！！！」

「気配が強まった！信じられない、此処まで人間が進化していたなんて……封印される前の時代にいた人間なんて比べ物にならないくらいに強い！」

ぶっちゃけると自分が時々人間枠を通り越しているのは理解している。人間と言うには微妙な所だがこの志々雄、そんな小さな事にはこだわらない。

なぜならば、己が決めた道を真っ直ぐ歩くのがハードボイルドだからさ！

「ふつ、今ならアンタら以外誰も見ていない。好都合か、秘密裏に開発したこのシステム！いざ！！！！clock！！！！up！！！！うううう！！！！！！！！」

瞬間、時が止まる。雲山と一輪も全く微動だにしない、そして下にある森の木々や小鳥たちさえ俺の目には止まって見える。今の俺ならショットガンを至近距離で撃たれても弾の後ろへ回り込む自身があるぜ。

「十分実用性はあるそうだ。さて、残り三十秒……一気に終わらせる」

切り札と風のメモリをベルトに装着。色々とごっちゃ混ぜになっているが男なら気にしない。

「うおおおおおおお！！！！！！テンション上がってきた
あああああ！！！！！！LAMエネルギーフルスロットル！！
！！超！エキサイティング弾幕バトオオオオオオオオオ！！
！！！！」

弾幕を大量に放出し黒と緑のコントラストが一輪たちの周りを取り
囲む。最早、彼女たちは籠の鳥同然だ。

「俺は、早く行かなければならない。姫様に面白みのある話を届け
る為にな、数千年以上過されている彼女に俺は今を献上する……た
だそれだけだ。clock over」

台詞を言い終えると同時に凍結していた時が動き出す。弘樹なら絶
対言つであろつ台詞を呟いておこつか。

「そして時は動き出す」

「なっ!？」

彼女たちには急に弾幕が現れたようにしか見えなだろう。意外とこの時間操作はエネルギーを消費する、更に弾幕を全開で出したんだもつすっからかんさ。帰ったら姫様といちゃこらして補充せねば、主に椅子となつてな!!!

PPPPPPPPPPピチューン!!!!!!

「あらまあ、全弾命中か。意外と動きがとろいんだな……さて行きますか」

一輪と雲山が落ちて行くのを確認した俺は、殺されるかもしれないと思いながらもその運命と対面する為に星蓮船へと全速力で飛んだ。目を覚まさない内に辿り着いて適当に記憶を改ざんする為に……

【弘樹 side】 in 上空

「搜符【レアメタルディテクター】」

「ちい！レーザー状の弾幕か……！魔理沙、回避……！バックステッポで全力回避いい……！！」

「騒がなくても分かってるぜ。全く動きづらいのはお前のせいでもあるんだぜ？」

「分かってるわ！！だからいつも以上に張り切ってます」

はああ、ナズーリン可愛いよ！じゃねえ、小柄でロリーな体型の割には一端の妖怪だけあって強いわ。くくく、だがな！！！！俺にはスperlカードがあるんだよ、まだ白紙だが人は危機に瀕した時に異常に成長すると聞く。幾らか八雲さんちのBBA長から頂いたのさ。ふふふ、悪いなシオ、誠輝俺は次の段階へ進むのだ！！！！

「へぶしっ！？」

「なんだあ？隙間から弾幕が弘樹の顔面へ……………紫の奴何を考えてるんだ」

ごふっ、心の声までしつかりと伝わったようだ。次から気をつけねば、実際何処で聞いているか分かったもんじゃないしな。

「行くぜ、スペカを使う」

「弘樹、お前スペルカード持ってたのか？」

「ちょっと八雲さんちから頂きました」

全力で焼き土下座したなんていえない。

「今考えた！スペル！！！！」

スペルカードを宣言。スペルの素だった白い紙には、模様と文字が記載される。

避符【紙一重の極み】

「弾幕は見切れ！！！」

「弾幕を撃ち消してるだって！」

俺のモーゼルから放たれる小型弾幕がナズーリンの弾幕を消し去って行く。上手い具合に自機狙いの弾幕だけが消えてくれる辺りがボムっぱいな。

「中々面白みのあるスペルだぜ！！悪いが急いでるんだ、速攻で退場してもらっぜ！！！！星符【ドラゴンメテオ】」

「しまった！？」

前方がガラ空きになっている分、魔理沙のドラゴンメテオの星型弾幕がナズーリンに直撃コース。大丈夫だ、ナズーリン……もしピチューンしても俺が全力で介抱してやるだけだ！！！！

ピチューン！

「さて、倒した事だしさっさと行くぜ！」

「待てっ！介抱をだなああああああ……！！！！」

俺の後半の台詞は、魔理沙のスピードによりほぼ遮断されてしまった。俺は、幻想郷に来て初めて泣いた。

ナズーリン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!介抱出来なくてごめんよおおお
おおおっおおお!!!!!!!!!!

【誠輝side】in 星蓮船甲板

「いつ、何で俺は星蓮船の甲板で倒れてるんだ？確か一輪と戦っていたような、途中からの記憶が欠如してやがる」

頭をさすりながら起床した所、そこは星蓮船と思わしき船の甲板だった。愛刀である蒼天剣は、真横に転がっていたのでさっさと回収

して鞘に納める。

「とう！志々雄参上！！！！誠輝無事か！！！！お前は、一輪との戦闘で雲山ナツコウ！を喰らって星蓮船のマストまで吹き飛ばされてしまったんだ！」

「おう、シオ。多少身体に痛みはあるが無事だ……………しかし何で唐突な説明口調？」

「き、気にしたらままま負けだぜ！べべべべべ、別に何もない！！！！ないんだからな！！！！」

「あ、ああ」

何だかシオが必死に話を打ち切ろうとしている気がするが……………暑苦しい＋キモイが交わってカオスが出来上がっているのでこれ以上の追及は遠慮する、というかしたくない。

どかーん！

「あん？爆音だと……俺以外に爆薬使いがいたか？」

「否、これは弾幕だな。S I S I Oサーチによれば萌えランク10以上の人物が四人この船にいる、その中で霊夢と早苗は確認済みだ」

「やっぱり見間違いないじゃなかったか。マリオとルイージに先を越されたみたいだな、追いついて傍観（暴漢）でもしけ込むか」

「チョイ待ち、何か含みのある笑みが怖い！」

「気のせいだ」

ヤバいな、気付かれる所だった。ぶっちゃけ、全員吹き飛ばして魔界にGOしたいところだな。俺の目的は現在聖白蓮に会う事だからな。好きな幻想郷キャラベスト4に入るぐらいだからな、かなり会いたい。

ちなみに一位は、フランとこいし。二位は紫様、三位は幽々子様だ。

「誠輝、弘樹と魔理沙が凄い速度で追って来ている」

「何処だ？見えんぞ」

「SISIOアイの視力は、望遠鏡を超えている！マサイ族なんぞ目じゃないぜ！！！」

「どんだけ」

この頃、友人が人外ルートをマツハ3で走り去ってるんだが？大丈夫か？大丈夫だ、問題ない！

「しかし何故か弘樹が号泣しながら箸にぶら下がってるんだが？」

「なにそれ、きもい」

「ですよ」

他愛のない会話しながら船の内部に入る事にした。さて、ガンガン行こうぜ！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2201o/>

東方奇人伝～三人の変人が幻想入り～

2011年11月17日17時35分発行